
ココロストライク

獅子舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロストライク

【Nコード】

N3481T

【作者名】

獅子舞

【あらすじ】

心の強さが、そのまま力になる世界。

人々は心を力に換える術を【心力】と総称し、【心力】を用いた武器【心器】を開発していた。

人の心を蝕み、その血肉を漁る人類の天敵【心蝕獣】と戦うために。そんな世界のある所に、閃羽心皇学園という私立学園があった。

その学園に半月遅れで入学してきた生徒、御神霊（みかみくしび）。彼はFランク——社会不適応者、人間の失敗作、弱い心の持ち主

——の烙印を押された落ち零れだった。

だが彼にはそんなこと関係無い。約束のため、霊はゴミと呼ばれようが戦い続ける。
大切な人を守るために……。

第1話【遅れて来た新人生】

一人の少年と、一人の少女と、一人の老人。

少年を中心に、両隣にすわる少女と老人。

都市を一望できる時計台に、その三人は並んで座り、夕陽を眺めていた。

『おじいちゃん』

『なんじゃね？』

少年が夕日を眺めながら、老人に話しかける。

『僕の心は、ゴミなんだって。今日の検査で、そう言われた』

なんでもない事のように、少年は告げた。

隣に座る少女が、少年の腕をぎゅっ、と抱いた。

その表情は今にも泣きそうで、少年は少女の頭に手をおいてあやした。

『悔しいなあ……おじいちゃんと一緒に戦って、守りたかったのになあ……』

わずか5歳の少年は、この歳で力を渴望していた。

それは、隣に座る少女を守ると、約束したため。

少年にとってこの約束は絶対であり、その約束を守るために検査を

受けた。

そしてその検査で、彼はその約束を守れないと知らされた。

『のう、レイよ……』

『なあに？』

『力が、欲しいかの？』

レイ、と呼ばれた少年が、勢いよく老人の方へ振り向いた。

『その子を守るために、約束を守るために、力が欲しいかの？』

『欲しいよ。でも僕の心はゴミだって言われた』

『じゃが、その子を守りたいのじゃろ？』

『できるの？』

『出来るかどうかではない。やるか、やらないかじゃ。レイは約束を守る気があるかの？』

『ある』

短い言葉。

だが少年は迷いなく答えた。

偽りの無い言葉

飾りの無い言葉。

真っ直ぐな言葉。

老人が渴望する、素直な言葉だった。

『よかろう。儂と一緒に来れば、神さえ殺せる力を、レイ……おまえに教えてやろう』

『っ！』

神さえ殺せる力。

それは少女を守る、これ以上ないほど圧倒的な力。
約束を守るための力。

『儂と一緒に来い。儂のすべての技術を、レイに教えてやろうのお』
『行く！ 僕は行くよ！ おじいちゃん！！』

少年は立ち上がり、熱の籠った声と視線で老人に宣言する。

『レイくん……どこかに行くの？ やだよお……行っちゃやだあ……』

だがそんな少年に縋る、小さな手があった。

全体重をかけて逃がすまいと、レイの腕に抱き付き引き止めようとする。

『……ねえ、おじいちゃん。一緒には連れて行けないの？』

『ダメじゃの。儂らは都市の外に行く。危険じゃ』

都市の外。その境界は、都市を囲む巨大で長大な外縁防壁。

その外縁防壁の外は、【外の世界】と呼ばれるほど、人間にとって危険な場所。

世界は人間にとって、とても危険で、死に満ち溢れているのだ。

『そっか……。あ、外に行ってる間に、どうやって守ればいいんだろ？』

『なあに、心配せんでもええよ。この都市にいる限り、外の世界よりは安全じゃ。』

それに、ずっとお別れという訳でもない。そうじゃのお……10年
ちよっとしたら、またここに戻ってこられるじやろう。強くなって、
またここに戻ってこようのお』

強く……。

当然だ。神さえ殺せる力とは、絶対的な強さを意味する。

外の世界に出ても、神さえ殺せる力があれば、生きていける。死に
怯えることもない。

『必ず強くなって戻ってくるよ。約束は、ちゃんと守るから』

出発の日。

少年は泣き続ける少女に別れを告げる。

しかし、今生の別れではない。それを強く、固く、約束した。

『ひっ、くっ……約束、だよ……絶対戻って、きてね……』

『うん。絶対。そして、守るよ』

『うん……うん……レイくんが戻ってきて、約束を守ってくれたら、
わたし——』

世界は人に優しくない。

それでも人は世界で生きる。そこでしか生きられないから。
だったら強くなるしかない。

何ものにも負けない、強さ。死に満ちた世界でさえ生きていける強
さ。その究極の強さは、神さえ殺せる力。



この世界では、心の強さが、そのまま力の強さになる。

何故そうなるのかは分かっていない。

ただ、心に反応し、それを物理的なエネルギーに換える様々な物質が存在している。

人々は心を力に換える術を【心力】と総称し、【心力】を用いた武器【心器】を開発していた。

なぜそんなものを開発したのか？

簡単なことだ。

敵が、いるからだ。

この世界の食物連鎖の頂点に立ち、人の心を喰らい、さらに血肉をも喰らう化け物。

——心蝕獣——

人々が巨大な外縁防壁を築き、その内側という限定された空間でしか生きられない原因だ。

防壁の外は心蝕獣が横行し、人を見つけてはその心を蝕み弱らせ、血肉を漁る。

世界は人に優しくない。

それでも人は、この世界で生きていく。そこでしか生きていけない

から。

だから心蝕獣に対抗できる【心器】を開発した。

心の強さを力に換える【心器】を用いて、心を蝕む心蝕獣と戦う。

それが、この世界の人々の、宿命だった。

【ココロストライク】

大防壁都市・閃羽^{せんば}。

人口およそ25万人。

心蝕獣の脅威から人々を守る巨大な外縁防壁に囲まれた、閉鎖された都市。

空は、都市の中心に建つ巨大な時計塔から発せられる、半透明の膜状エネルギーバリアで覆われ、飛行型心蝕獣の侵入を防いでいる。

農業や工業のほぼすべてが都市内で賄われており、それぞれが一定の区画ごとに仕切られている。

その区画の一つに、閃羽^{せんば}心皇学園という学校がある。
閃羽でもっとも名の知れた私立学園。

通称・心皇学園。

対心蝕獣用の兵士【心兵】を育成する戦闘学科や、【心器】の技術

を学ぶ心理工学科など、主に【心力】に関係した学科で構成されている。

この学園は7年制であり、15歳から入学が許可され、年数の長さに比例して在校生も多い。

4月……入学式のシーズンも半ばに入った中旬の日の昼休み。

心皇学園の裏庭を、一人の少女が走っていた。

歳の頃は15歳前後……つまり新一年生。腰まで届くような長い黒髪を揺らし、まるで何かから逃げるように走りまわっていた。

「はぁ……どうして、こうなっちゃったのかな……」

辺りに誰もいないことを確認し、少女……純愛^{じゅんない}こころは、足を止めて一息ついた。

こころは戦闘学科に所属している。

心蝕獣を倒すための訓練と戦術を学ぶ学科だ。

ゆえに、同じクラス内の数人でチームを作り、期末考査などの担当教官から与えられる試験に挑む、という仕組みになっている。

が、こころはこのチーム制が原因で走りまわることになっていた。

「あ、いた!」

「純愛さん! オレと、オレとチームを組んでくれっ!!」

一人が声を上げると、途端に集まるクラスメイト達。

簡単に言えば、こころと同じチームになろうと、クラスメイトの大半が躍起になって追いかけてきているのだ。

だからこころは逃げ回っている。

こころは特殊なタイプの【心器】を使う。同じチームになれば上位の成績を狙えるほどの。

しかしそんな特殊性を霞ませてしまうほどの美貌を、こころは持っていた。

整った顔立ちに、誰にでも優しい控え目な性格。他人を気遣える優しさを持っているとも言い換えられるだろう。

男子は言わずもがな、女子までも虜にするほど、こころは魅力的な少女だった。

だから、こころ争奪戦が勃発しようとしている。
だから、逃げる。

単純にクラスメイト達の勢いが怖い、ということもあるが、こころを取り合う過程で暴動のような争奪戦が勃発してしまったら、怪我人が現われかねない。そのため、こころは被害が出ないように逃げ回っているのだった。

「え、ごめんなさい……わたし……」

か細い声で断わりの言葉を紡ぐが、クラスメイト達の方が騒がしいため掻き消されている。

説得は無理と判断したこころは、また逃げるハメに。

校舎の角を曲がり、そのまま直進しようとしたところで、気付く。
この先にも、クラスメイトがいる……。

「ど、どうしよう……」

万事休す。

そう思ったとき、突然こちらの体が宙に舞った。

「へえっ?!」

何か、糸のような細いものが体に絡み付き、ここを引っ張り上げている。

混乱するところは、辛うじてスカートの裾を抑えることしか出来ない。

しかしすぐに、こちらの体はやりわりと着地する。

着場所は……屋上。

4階建ての校舎の屋上まで、ここは引っ張り上げられていた。

「大丈夫？ もうすぐお昼休みが終わるから、時間は稼げらと思うけど」

ここを屋上まで、糸のようなもので引っ張り上げた人物が、居た。

学年を示す胸元のワッペンにはここと同学年であることを示す赤色。しかし知らない男子生徒だった。

入学して半月ほどしか経っていないのだから大半は知らなくて当然だが、それにしても見覚えがなさすぎる。

ここはもの覚えが良い。人の顔も覚えるのに苦労しない。

そのこちらの記憶に引っ掛からないほど、件の男子生徒には特徴が無かった。

どこにでもいそうな、ありきたりな黒髪と大人しめの、長くも短くも無い髪型。

背は……低いほうだろう。

身長158cmのころより、僅かばかり高いくらい。
特筆するほど顔の造詣が整っているわけでもない、悪くない、程度
の顔立ち。

ただ……無理矢理特徴を上げるとするなら、一つだけ。それも、気
付くかどうか、という程度。

それは、同年代の男子生徒より、落ち着いた雰囲気がある、という
こと。

先程までこころを追いかけていた生徒達と比べようもないほど、達
観した雰囲気を持っていた。

「あ、あの……ありがとうございます……？」

「どういたしまして？」

若干疑問形でお礼を言ったところに対し、件の男子生徒も疑問形で
返した。

苦笑しながら、だったが。

ちなみに、先程までここに絡み付いていた糸のようなものは、無
くなっていた。いつの間にか。

「ああ、さっき引っ張り上げたのは、これだよ」

自分の体を見回すところを見て、見当がついたのだろう。

彼は前方に手を翳す。

すると右手を青い光が覆い、その指先から極細の光る糸が伸びた。

「っ!？」

【心器】も無しに、【心力】を使えるんですか……?!」

「ん？ うん……珍しいかな？」

珍しい、どころの話ではない。

【心力】……心の力は、それを物理エネルギーに変換する【心器】無くして出力することができない。

今、彼がやっていることは、砲弾を、大砲を使わずに腕の力で何十kmも先に飛ばすという、極めて効率の悪いやり方だ。

つまり、普通は効率が悪過ぎて出来ないこと。

それを苦も無くやっているとは、どういうことか。

少なくともこの心皇学園や、閃羽全体にも居ない。聞いたことも無い。

「そっか……珍しいんだ。あ、それより昼休みが終わるよ。ぼくはもう行くね」

こころの驚きを軽く受け流し、腕時計を見てその場を後にする。

「あ、あの！ 助けてくれてありがとうございました！！」

今度は疑問形では無い。

はつきりとした口調でお礼を言った。

「どういたしまして。それじゃあまた後で」

「え？」

疑問の声が出るより先に、件の男子生徒は屋上から去っていた。



昼休みは終了。

午後の授業に備えて慌ただしく教室へ戻る生徒達。

さすがにもう、こころとチームを組もうとする輩はいない。

とはいえ、例外はある。

「こころ」

「あ、すさの守鎖乃くん」

もうすぐ教室、というところで声を掛けられた。

おおわすさの
大和守鎖乃。

背は高く、顔の造詣も整っていて好青年に見える。所謂、イケメンに分類されるであろう男子だ。

こころの幼馴染であり、15歳にして心蝕獣と戦えるほどの【心力】を持つ、現役の正規【心兵】だ。

その証拠に、本来は校内での携帯が禁止されているはずの【心器】を、特別に持っている。

守鎖乃の【心器】は両刃剣。腰に携帯しているそれは、光に当てれば眩しい白色を持っていた。

「大変だったな。というか、オレとチームを組めば、あんな騒ぎになることもなかったろうに」

「そうなんだけど……」

「篤情教官あつじょうもいい加減だな。チームくらい自分達で決めろと言って、さっさと出ていく始末だ」

自主的に決めるのは当然だが、優秀な人材を巡って争奪戦になることは間々ある。

そのため担当教官が間に入り、適宜調整していくのだが、こころ達の教官はそのところは無頓着だった。

まあ、実力は都市のなかでも有数であるため、何かしら目的がある、と噂されているが。

「次の休み時間に、オレの所に来い。そうすれば騒動は起こらないさ」

「う、うん……」

戸惑いがちに応えるこころ。

守鎖乃はすでに、他数名とチームを組んでいる。だがまだ上限に達していない。

こころを迎え入れる準備は整っている。

だが、こころは少々事情があって、守鎖乃のチームに入りたくなかった。

ランク……というものがある。

【心力】の強さを現す指標的なものであり、一番上をSとしてAから順にFまで下がっていく。

守鎖乃はSランクであり、他のメンバーもSランクで固めているため、新入生でトップクラスのチームになるだろうことは容易に想像が付く。

ではこころはというと、彼女もSランクだ。

守鎖乃が率いるチームに入ったとしても、決して劣ることはない。

「でも私、友達とチームを組みたいから……」

守鎖乃の誘いに乗り気でないのは、仲の良い友達と組みたいから。

しかし……。

「こころ。この心皇学園では、付き合う友達を選んだ方が良い。そりゃあ、あの二人は良い子達だが、Aランク。こころはSランクだろう？ 自分よりランクの低い人間と組めば、命を落としかねない。ここはそういう所だ」

対心蝕獣用の【心兵】を育成する戦闘学科。

実際にその心蝕獣と戦うこともある。その場合はもちろん、正規兵が付き添うが。

だから、同じランクの者同士で組んだ方が良い、と守鎖乃は言っているのだ。

曖昧な答えのまま、こころと守鎖乃は自分達の教室……Aランク以上の人間で占められる1年1組の教室に入った。

そわそわとした視線が、こころに憑き纏う。

もしかしたら守鎖乃と……？ そんな声が囁かれていた。

「おゝし者共お、席に着けえゝ。授業を始めるぞおゝ」

間延びした声で指示するのは、1組の担当教官。

あつじょうちくば
篤情竹馬。

髪はボッサボサで、いつも眠たそうな顔をしている、本当にこんな人が教官で大丈夫なのかと疑いたくなるような大人だった。

「さくてと……その様子だとチームは決まっていようだな。申請があるのは数人……大和のところだけか。それも上限に達して無いから、事実上決まっていなくても同然、ねえ……。幼稚園児じゃねえんだから、さっさと決めろよ15歳」

欠伸を一つ掻き、心底面倒臭そうに言う篤情教官。

「んじゃあオレが残りの奴ら適当に組ませるか。あくその前に、みんな、転校生……まだ4月だから新入生か？」

まあ、遅れてやってきた新入生でいいか。そいつの紹介を先にやって、それからチームを決める。

おい、入ってきてくれ」

篤情教官に呼ばれ、一人の男子生徒が入って来た。

「あ……？」

控えめながらも思わず、こころは声をあげた。

昼休みに、自分を屋上まで引っ張り上げて、助けてくれた生徒だった。

篤情教官が黒板に名前を書く。

『御神霊』

「?!」

霊……レイ……れい。

その瞬間、こころは心臓を鷲掴みにされたかの如く、息が詰まった。

（もしかして……レイくん？）

幼い頃、守鎖乃よりもずっと前に出会っていた少年。

しかし少年は、祖父に連れられ都市の外へ出て行ってしまった。
いつか帰ってくると言っていた。

だから、もしかしたら、あの男子生徒が、レイ？
そう思った。期待した。

「御神霊^{みかみくしび}です。霊^{れい}と書いて、くしびと読みます。

諸事情により入学が遅れ、本日から就学することになりました。どうぞよろしく」

（……え？）

レイ、ではなく、くしび。

彼は自分の名前を、そう紹介した。

（そっか……レイくんじゃ、ないんだ……）

膨らんだ期待は一瞬で萎み、彼の所為でないと分かっているにも失望感を隠せない。

誰にも気付かれないよう溜め息を付くのが、精一杯だった。

第1話【遅れて来た新入生】（後書き）

事実上の第二作目。

感想・評価等をお待ちしております。

第2話【異質なゴミ】

「それじゃあさっさとチームを決めるか。オレが適当に出席番号を言うから、その通りにしろよ！」

クラスの雰囲気、必死になにかを祈るようなもの変わる。

全員、こころと同じチームになれるよう祈っているのだ。

「3とか……8とか？　あと18、14、20……で、とりあえず一組だ」

そのなかに、こころは該当していない。

番号を呼ばれた生徒は絶望に身を沈めた。

そんな調子で篤情教官が番号を呼び、そしてこころは呼ばれず、呼ばれた生徒は次々と死屍累々の屍となっていた。

「残るは4と、1、12……おお？　3人になっちゃった……ああそうだ。おい御神。おまえ、この第7チームに入れ」

「わかりました」

こころの出席番号は、4。

しかも、1と12は仲の良い友達。

そこに、あの男子生徒……御神霊が入る。

「「「なぜだあああああ！！！？」」「」」

「あゝあゝあゝうっせえよっ。適当に決めただから別にいいだろうがよ。」

先に申請していた大和のチームはそのままだし、さっさと決めねえ
テメェらが悪いんだ。

んじゃあ今日はこれまで。授業が本格化すんのは明日からだ。自主
練でもなんでも、ここの施設を見て回って、各自精進しておくよう
に」

しっしっ、と詰め寄る生徒達を追い払う篤情教官。

しかし生徒たちも諦めきれないのか、しっこく、しっこくく、
教官に抗議。

そんな騒動を無視し、霊は空いている席に着く。
一番うしろ……ここの後ろの席だった。

「あ、あの……」

「ん？」

「さっきはありがとうございました。改めてお礼を言いたくて……。
それと、これから同じチームだから、よろしくお願いします」

「わざわざありがとう。こちらこそよろしく」

ここから差し出された手を握り、握手を交わす。

「こころちくん！ 私たちも一緒なの忘れないでよ……！」

と、そこで握手を交わす二人に声が掛かる。

「朗^{ほがら}ちゃん。槍^{そうぎ}姫ちゃん」

やって来たのは二人の女子生徒だった。

一人はこころより背が低く、もう一人はこころより背が高い。とい
うか、霊より高い。

「この人達が1番さんと、12番さん？」

「はいはい！ 出席番号1番！ 戯陽朗あじやらびほがらです！ よろしくう！」

霊の質問に勢いよく答えたのは、背の低い女子の方。

あじやらびほがら
戯陽朗。

横髪を左右に縛った、ショートツインテールの髪型。そして底抜けに明るい笑顔が特徴的だった。

「12番の針村はりむらそうき槍姫だ。私達はこころの友人だね。よろしく」

朗とは対照的に、やや凜とした雰囲気で自己紹介したのは、背の高い方。

はりむらそうき
針村槍姫。

こちらは腰まで届きそうな長い髪を後ろに縛った、ロングツインテールが特徴の女子だった。

「よろしく。御神霊みかみくしびです」

朗と槍姫とも握手を交わす。

「半月遅れの入学って珍しいよねー！」

「そうだね。この近くに引っ越して来たんだけど、ちょっと色々と問題がおきちゃって。それで今日に……」

「どこに引っ越して来たんだい？」

「この心皇学園から、歩いて……10分くらいのところかな？ ちよつと斜面を登ったところにある……」

「あ！ もしかして最近建てられた、あの新しい高層マンション！？」

思い当たった朗が、霊の言葉を遮って発言。

遮られた本人は、しかし特に気分を害した様子も無く肯定する。

「正解。でも、最近建てられたのは知らなかったよ」

「？ この辺にはあまり来たことがないのかい？」

いくら広いと言っても、外縁防壁に囲まれた都市内でのことだ。

何か真新しい建物や話題が発見されれば、瞬く間に広がる。霊が知らないのを、槍姫が少しだけ疑問に思うのも無理からぬことだった。

「うん、そう。だからこの辺のことはあまり詳しくないんだ」

「じゃあ、御神くんはこの区域の案内をしないといけませんね」

「あっ！ ところちんナイスアイディア！ ついでに美味しいケーキのあるお店に連れて行こう！」

とはいえ、そういう事もあるのだろう。

他意の無い霊の答えに違和感などあるはずもなく、4人はすぐに打ち解けた。

そんな第7チームを見て、険しい視線を向けるクラスメイト一同。

これ幸いとばかりに、篤情教官は教室の隅っこに退避した。

「誤解しているようだが、まだ完全に決まった訳じゃない」

「？ 守鎖^{のりす}乃くん？」

クラス中の視線を受ける第7チームに声が掛けられる。

数名の生徒を引き連れた守鎖之がそこにいた。

「御神、とか言ったか……キミ、ランクは？」

守鎖乃が引き連れているのは、同じチームメンバー。

つまり、全員Sランク。

よく見れば、全員が自信満々な態度であり、仁王立ちする守鎖乃に対し、座って話す霊を文字通り、見下していた。

もしこれで霊がSランクでなかったら、きっと何か因縁をつけるつもりだろう。

そして正しく、その予想は当たった。

「ぼくですか？ Fランクですけど？」

瞬間、教室が静まり返った。

「……………はっはっはっ……おいおい？」

ここは最低でもAランク以上のものが集まる1組だ。冗談にしては、性質が悪いな」

「とは言っても、本当にぼくはFランクなんだけど……」

困ったように言う霊に、他意は無い。

どうやら、本当のようだ。彼がFランクであるというのは。最低ランクであるというのは。

「はっ……ゴミが」

しんっ、と静まり返った教室に、守鎖乃の言葉が冷たく響いた。

「守鎖乃くん！ そんな言い方っ……」

「こころ。さっきも言ったはずだ。付き合う友達は選んだほうが良

い、と。その二人なら、まあ、まだ許せる。

しかしFランクという、最低最悪の卑しい心しか持てないゴミとチームを組むなど、オレは絶対許容できない」

心の強さ、【心力】の強さを表わす【ランク】。

そのなかでもFランクは最底辺。ある意味での特異ケース。

Fランクの人間は総じて心が弱く、社会不適応者と呼ばれる人種が数多く該当する。

ゆえに、ゴミ。

戦いでは役に立たない、まともな日常生活も送れない、捨て石以外に使いようの無い、という意味での、ゴミ。

「はあ……篤情教官。なんでゴミが我が1組に？ 何かの手違いですか？」

「いんや。確かに学園長から『Fランクの御神霊は1組に編成』と聞いたが？」

教室の隅で成り行きを見ていた篤情教官が、ダルそうに答えた。

嘘は……言っていない。

「Fランクと知っていて、1組に編成した？ 冗談じゃない。百歩譲って1組だとしても、ここらと同じチームに編成など、オレは、オレが認めない」

「でも、もう決まっちゃったことだけど……」

霊が遠慮がちに、困ったように言う。

その表情に怯えや卑屈などと言ったものはなく、苦笑だけが張り付いていた。

それが、守鎖乃の感に触った。

「いい気になるなよFランクっ。」

あんな適当な決め方があってたまるか。おまえはこころとチームを組むのに相応しくない。分を弁えろっ」

「守鎖乃くん！ それは言い過ぎっ——御神くん？」

守鎖乃に詰め寄ろうとしたところを、霊が間に入って制止する。

「相応しくないとして、どうするの？」

「として、じゃない。相応しくないんだ。こころは俺のチームに入る」

「ちょっと待ってよっ！ こころちゃんは私達のチームでもあるんだよ？！ 今さら変更なんてズルイよ！！」

朗が猛抗議。

せっかく親友と一緒にのチームになれたのに、あんまりな言い分に憤慨した。

「黙れよAランク。Sランク同士が組むのは当然のことだ。その方が危険も少ない。」

知らない訳じゃないだろ？ この心皇学園には、【心蝕獣】との実戦訓練もあると。

……こころを危険な目に合わせたいのか？」

「そ、それは……」

確かに、高ランク同士の者が組めば危険は減る。

こころもSランクなのだが、自分と組むよりは、Sランクのチームと組んだ方が良いかもしれない。

そう、朗が思った直後だった。

「それじゃあ、ぼくが君より強ければ、文句は無いんだね？」

霊が、そんなことを言ったのは。

「……もう一度言う。分を弁えろ。ゴミ以下の心しか持てない、――落ち零れがっ!!」

殴り掛かる守鎖乃。

正規兵として訓練を受けたその拳は、一般の生徒が避けられるようなものではない。

そう……一般の生徒であれば。

殴り殺す、そのつもりですらいた拳は、空を切るだけだった。

「っ?!」

紙一重で、霊は避けた。

首をずらしただけ。大仰な動きは一切ない。見えているのだ。正規兵の拳が。

「ちょっとここは狭いかな。みんなを巻き込んでしまうから」

自然な流れで守鎖乃の腕を掴み、そのまま押し返す。

第7チームから離れるために、ずいっと守鎖乃を押し、教室の半ばまで移動する。

「っ??!　ゴミが気易く触るなっ!!!」

一呼吸遅れて、霊の腕を振り解く。

そんな守鎖乃の、今さっきまで掴んでいた腕を指さす、霊。

「?　なんだ?」

「今ので……切り落とされてたよ?　普通だったら」

「っ!?!　調子に乗り過ぎだ、Fランク」

腰に携帯していた、両刃剣の【心器】を抜刀する守鎖乃。
白色の剣が、鈍く光る。

「す、守鎖乃くん!　いくらなんでも【心器】なんて——!!」
「こころちん!　危ないよっ!!」

守鎖乃を止めようとするところを、朗が腕を掴んで止める。

「……校内での【心器】の持ち込みは、禁止のはずじゃ?」

「残念だったな。オレはSランクであり、そして【ナイトクラス】
の【精鋭心兵】だ。特例で携帯が認められている」

ランクとは別に、総合的な実力を表わす指標。

それが、【クラス】。

これは人間、【心蝕獣】ともに共通であり、下からポーン、ルーク、
ビショップ、ナイト、と上がっていく。

ポーンは……云わば雑兵。もっとも数が多く、強さも一般兵と同じ。

対して、ナイトクラスは守鎖乃が言う通り精鋭兵。

閃羽でも彼を含めて5人しかない、エリート中のエリート。

ゆえに、様々な特権を持ち、校内での【心器】の携帯も認められているのだ。

「そっか……君が5人しかないナイトクラスなんだ」

「今さら理解したか？ オレとキミの、格の違いというものを。これでここをオレのチームに入れるのに、反対は無いな？」

剣の切っ先を霊に向け、そう宣言する守鎖乃。

だが霊に動じた様子は一切なかった。

「君の言いたいことはよくわかったよ。それで？ どうしたら相應しいと認めてくれるのかな？」

「……おまえは、本当にゴミだな。オレの言っていることを、オレと言う【格上の存在】を理解していないのか？」

「格上かどうかはともかく、君がナイトクラスであることは分かったよ。説明だけで十分。ハツタリだなんて言うつもりはないから安心して」

苦笑する、霊。

嫌味が含まれていない。ただ事実を言っているだけ。

守鎖乃がナイトクラスであることも、ハツタリではないことも、彼は理解している。

格上でないことも、だ。

「っ！！ 心で理解できないのなら、身体に教えてやろう」

徐に、剣を振り上げる守鎖乃。

息を呑むクラスメイト建ち。

「やめてっ！ 守鎖乃くんっ！！」

こころの悲鳴と同時に振り下ろされる、守鎖乃の剣。

だが空を斬るだけ。

霊は身体を逸らして避けた。

「っ！？ このっ——！！」

続けて斬り掛かる守鎖乃。

苦も無く避け続ける霊。

斬り上げ、斬り落とし、袈裟斬り、横薙ぎ、突き。

ありとあらゆる斬撃が霊を襲い、そしてその全てをかわしていた。

ちなみに、一連の動きは他の生徒には見えていない。

右に左にゆらゆらとブレる霊。

剣を持つ守鎖乃の腕が、一瞬消えては現われる。

動体視力の追いつかない生徒たちには、子細がわからずただ呆然と見ているしかできない。

「……さすが」

だが、教室の隅っこで見ている篤情教官だけは、すべて見えている

が。

篤情教官もナイトクラスだ。

有事の際は正規兵とともに【心蝕獣】と戦い、都市を防衛する。
しかも……ナイトクラスのNo. 2。守鎖乃よりも、強い。

「確かにナイトクラスだね。ナイトクラスの【心蝕獣】と、ギリギリ互角くらいは戦えそうだ」

「っ?! わかったふうな事をつ」

霊から離れ、距離を取る守鎖乃。

そして剣に【心力】を集中。

白色の剣を白いオーラが覆う。

「バツ……さすがにそれは見過ごせねえぞ」

ここにきて、初めて狼狽の色を見せる篤情教官。

守鎖乃は、【心力】を纏わせた斬撃を、文字通り飛ばすつもりだ。

——— 斬撃波 ———

【心力】を剣撃として飛ばす、中距離用の【心技】。

「……」

その標的となっている霊は、一瞬だけ後ろを振り返った。

（っ?! 御神くん、避けるつもりがないの?! 避けたら私達に
当たるから?!）

守鎖乃の射線上には、こころ達第7チームがいる。

霊は守鎖乃に向き直った。

受けて立つ気だ。

「っ！？　だめっ！！　御神くんっ！！」

「白和一刀流心剣術——斬撃波っ！！」

振り下ろす守鎖乃。白い斬撃が霊を襲う。

霊は……避けようとする。

その代わり、右腕を前に突き出し、掌を相手に見せるように開く。

すると、霊の全身から青い光が揺らめいた。いや、噴出した。

（っ！？　さっき、私に見せてくれた、【心器】なしの【心力】？
！　全身から？！）

白い斬撃が、霊の青い光とぶつかる。

激しい火花が散り、やがて——

「……ふっ！！」

短く息を吐き、気合を入れて白い斬撃を掻き消した。

「……ば、馬鹿なッ！！」

動揺する守鎖乃。

目の前の相手は、確かに【心器】もなしに【心力】を使った。それ

も、全身から【心力】が溢れ出ていた。

【心力】を全身に纏う術はある。

しかしそれとて、【心器】の派生である【心装】……【心力】を纏わせるためのバトルスーツがなければ、到底出来ることではない。

「技が効かないから動揺する。気持ちはわかるけど、【心蝕獣】にはそういうのが沢山いるから、命取りになるよ？」

「なっ……ふざけるなっ!! おまえ、【心器】を隠し持ってるな?！ 馬鹿がっ! これでお前は牢獄行き——」

ごちんっ。

喚く守鎖乃の脳天に、篤情教官の拳骨が落ちた。

「バカはお前だ大バカ者。【心器】の携帯は許されていても、殺人までは許されてねえよ」

「……教官。ぼくはまだ生きてますけど？」

「アホ垂れ。おまえ【だから】死ななかったけどな、普通はそうじゃないんだよ」

「はぁ……そうなんですか？」

「そうなのっ。おら、ちょっと来い。生徒指導室でみっちり扱いてやるよ」

守鎖乃の髪をむしり掴み、引っ張り上げる篤情教官。

毛根が強いのか、髪は守鎖乃の身体を引っ張っていった。

「は、離せっ! Aランクがオレにこんなこととしていいと思ってるのか?!」

「ばゝか。ナイトクラスで一番の下っ端が吠えるな。」

あ、そうそう。他の奴はオレが戻るまで自習！ 全員、この教室から一步も出るなよ？」

篤情教官により、守鎖乃は教師から退去。
喚き散らす声がどんどん遠ざかる。

「ふう……初日から問題起こしちゃったな。普通って、難しいなあ……」

手をパンパン、とはたきながら呟く霊。

「み、御神くん！ 大丈夫ですか？！」

こころが慌てて駆け寄り、霊の右手を取って看る。

守鎖乃の斬撃波を受け止めたはずの右手には、傷一つ無かった。

「【心力】を纏っていたから大丈夫だよ。見えてたでしょ？」

「で、でも……御神くん、私たちが後ろにいたから、避けられなかったんですよね？ ごめんなさい……」

消え入りそうな声で謝るこころ。

今の騒動は自分が原因。その所為で霊が危険な目にあった。

それがこころを苛む。

しかし、そんなこころの心情とは裏腹に、霊は穏やかに答えた。

「気にしないで。それに、守るって約束したからね」

「……え？」

「戻ってくるのに、本当に10年もかけちゃったけど、今なら約束を守るから」

「え……あ……まさか……っ?!」

守るという約束。

10年という月日。

これらのキーワードは、こころにとって大切な意味を持つ。こころだけの、大切な意味。

その意味を持つ言葉が、霊の口から出来た。それが意味する事は一つ。

「ほ、本当に……レイ、くん？」

霊は、レイ。

10年前に都市の外へ出ていった、自分を守るという約束をした、あの少年だ。

「あははっ……その呼び方、懐かしいね……」

「あっ……レ、レイ……レイくんっ!!」

目から涙が溢れ、感極まったこころは、霊に抱き付いた。

レイ。その名を何度も呼ぶ。

何度も、何度も、何度も。

そこにいることを、確かめるように……。

第3話【言えない名前】

『おまえバツカじゃねえの？ 都市の外に出て、生きていけるハズねえじゃん！』

『つていうか知ってるぜ！ あいつFランクなんだってよ！ お母さんが言ってた！ ゴミ人間だって！』

こころが幼いころ……霊が祖父とともに閃羽を出ていったあと。

心無い言葉で、霊の生存を否定する近所の男の子達がいた。

『そ、そんなこと無いもん！ レイくんは帰ってくるって言っただもん！！ 約束したもん！！』

必死で否定するこころ。

それは、信じているから。信じたいから。信じ続けたいから。

だが、世間は無情だった。

こころが霊の生還を訴えれば訴えるほど、周囲は否定の言葉を強くする。

とくに、霊がFランクである、という要素がネックだった。

Fランクと診断された人間の心は弱く、まともな人格を持たない事が多いという。

社会不適合者。お荷物。人間の失敗作。

『違う！ 違うもん！！ レイくんは強いもん！！ 私を守ってく

れたもん!!」』

やがて時が経ち、こころには二人目の幼馴染や、親友と呼べる友達も出来た。

それでも、霊のことは忘れられない。

口に出す事は無くなっていたが、信じ続けていた。

もう……死んでしまったかもしれない。

そんな思いに囚われることがあっても、信じることをやめず、待ち続けた。

そして、10年。

彼は……こころの前に現われた。



「れ、……レイ、くん……レイ、くんっ……!!」

「ちよっ……こころ? どうしたの? そんな、泣かなくなっ……」

……

自分にしがみ付いて離れないこころを、優しく抱き止めてあやす霊。

「はぁ……こころは変わらないね。泣いてばかりなところとか、さ……」

「だってっ……みんな、な、が……レイくんはもう……もう死んじやって、るって……言うんだもんっ……」

「そりゃあ……まあ、そうだろうね。外の世界は心蝕獣だらけ。ぼくは5歳ですでにFランク……ゴミの烙印を押されてたしさ」

ぽん、ところこの頭に手を置く。

昔も、こころが泣き止まないときはこうしていた。どうやらそれは今も変わらないらしい。

嬉しいやら、呆れるやら……でもやっぱり嬉しい思いが強い気がする。

それが霊の、正直な感想だった。

「でも、帰ってきたよ？ 約束通り」

「うん……うんっ……」

少し落ち着いて来たのか、こころの震えは治まって来た。

まだ泣いているが、それも直に止まるだろう。

そう思って、気付いた。

クラス中の視線が、自分達に注がれていることに。

「……ほら、こころ。泣いてばかりだから皆が見てる。そろそろ泣き止もうよ?」

「う、うん……ごめんなさい……」

とりあえず、こころを席に座らせる。

その際、こころは霊の袖を掴んで離さなかったが、席が後ろなので特に不自由なく、自身も席に着いた。

「えーっと、御神く〜ん……お取り込み中のところ悪いんだけど、説明お願いしていい？」

今まで黙って見ていた、同じ第7チームの戯陽朗が、遠慮がちに言う。

横には同じく第7チームの針村槍姫はりむらそうきも居て、霊に視線をやっていた。

「ああ、えっと。ぼくは10年前まで、この閃羽に居たんだ」

「ふむ？ この区域に居た、ではないということだな。つまり、君は都市の外……この閃羽から外の世界へ出ていった、ということかい？」

「うん。針村さんの言う通り、僕は10年前、ぼくの祖父と一緒にこの都市を出ていった。そして世界中を旅してまわったんだ。

ほら、こころ……涙を拭いて」

ハンカチを取り出し、槍姫の問いに答えながら、こころの涙を拭いていく。

「よく無事だったね〜〜！ 外の世界って、心蝕獣がウヨウヨ居るんでしょ？」

「うん……でも、アリの通る隙間も無いくらいに、ってほど心蝕獣で埋め尽くされている訳じゃないよ？ 動物と同じ。奴等にも縄張りがあって、都市に攻めてくるのはエサが足りなくなったときなんだよ」

心蝕獣は度々、人類の住まう都市にやってきて襲ってくる。

人類は籠城戦に持ち込みなんとか撃退するが、そのまま心蝕獣に食い荒らされ滅んでしまう都市も、少なくない。

「それでそれで！ こころちゃんと御神くんはどういう関係？」

「幼馴染……で、いいのかな？ 昔はよく一緒に遊んでたんだ」
「ほう……こころの幼馴染は^{おおわ}大和だけだと思っていたが……」

槍姫の出した名前に、しばし考え込む霊。
やがて、思い当たった。

「大和……？ もしかして、さっきの？ ええっと……^{すの}守鎖乃、とか呼ばれていた人？」

こころが名前を呼んでいたのは覚えている。
しかし、名も名乗らずにいきなり襲われたので、苗字で言われて一瞬誰のことだか分からなかったのだ。

「そうそう！！ だってね、こころちゃんは御神くんのこと、全然話したことなかったんだよ？！
私達、小学校からの付き合いだけど、御神くんことは全然知らなかったんだから！」

手近にあった椅子を持ってきて座り、興奮したように話したす朗。
槍姫も近くの適当な椅子に座り、霊との話に交ざっていく。

そんな第7チームの様子を見つめるクラスメイト達。
おもに霊に対し、嫉妬全開の視線を放つ。
が、霊に泣き継るころろがいるため、雰囲気的に茶々を入れられず、結局黙って睨みつけるしかできなかった。

そんなクラスメイト達の様子を気にすることも無く、第7チームの雑談は続く。

「ぐすっ……そ、それは……レイくんのことを、みんなが死んでる

っっていうから……」

大分落ち着いたところも話に参加する。

とはいえ、霊の裾を掴んで離さなかったが。

「っっていうかこころちん、なんで御神くんのこと、【レイ】って呼ぶのかな？ 確かに字面は【れい】だけどさあゝゝゝ」

「ああ、それはね……」

「れ、レイくんっ！！ 言っちゃだめですっ！！」

泣いていた様子から一転、慌てて霊の口を抑えにかかるこころ。

顔も真っ赤。泣き腫らしていた理由とは、また別の意味で赤かった。

「はいはゝい！ こころちんは大人しくしていようねゝゝゝ！！」

こころの後ろに回り込み、羽交い絞めにする朗。

さすがは【心兵】を育成する機関に入学しただけあり、自身より背の高いこころを易々と捕らえた。

「やっ……！ 離して！ 朗ちゃんっ？！」

「それでそれで？！ どうして御神くんはレイくん、なんて呼ばれてるのかな？」

「言っちゃだめですっ！ レイくんっ！」

「けほっ……別に、恥ずかしがる理由じゃないと思うけど……」

苦笑しながら態勢を立て直す霊。

必死に言わないで、と訴えるこころを、微笑ましく見ているようだった。

「幼い頃なら、言えなくて当然だと思うけど……」

「む？　つまりはこういうことかい？　こころは、キミの名前……くしび、と発音出来なかったという事かい？」

何となくだろう。

槍姫が当たりを付けて霊に聞いた。

瞬間、こころの顔が一層赤味を増す。

「うん。ほら、【くじ引き】ってあるでしょ？　【くじびき】って言えても、【くしび】が言えなくてさ……最初の頃は【ぐじび】だったんだよ」

「きゃあああああ！！　どうして言っちゃうんですか！！」
「いや～～～ん！！　こころちゃん可愛い～～～！！」

こころがジタバタと暴れるが、朗に羽交い絞めにされている所為で動けない。

「ほうほう。それで、【レイくん】という訳かい？」

「そう。ぼくのおじいちゃんが、^{くしび}霊は^{れい}霊とも読むから、レイと呼べばいいって教えてさ……それがすぐに言えたものだから、こころは【レイ】が気に入っちゃって……たぶん、ぼくの本当の名字が【くしび】ってことも忘れちゃってるでしょ？」

「うっ……でも！　い、今はちゃんと言えます！！　くじびくんって……はっ!？」

言えなかった。【くしび】ではなく【くじび】になっていた。まあそれでも、濁点が一つ減ったが。

なんせ昔は、全部濁点……【ぐじび】だったのだから。

「ち、違うんですっ……い、今のは、慌ててたからでっ」

「もう~~~~！ ホンッところちんったら可愛い~~~~！！」

「無理しなくていいよ。昔みたいに【レイ】でいいからさ」

「ううう……言えます。言えるんです……でも囁んじやったんです……」

こころの顔は真っ赤。

俯き、力無く朗の膝の上にぺたんと座る。

「しかし……外の世界には、君のように【心器】なしで【心力】を使える人間がたくさんいるのかい？」

朗と共にこころをなだめながら、槍姫が霊に聞く。

先程の、守鎖乃との戦い。

守鎖乃はナイトクラス。それも、この閃羽に5人しかいないうちの一人だ。

その守鎖乃を、苦も無く退けた霊。

これから心蝕獣との戦い方を学ぼうとする者として、興味がある。

「うーん……ぼくに戦い方を教えてくれたおじいちゃんや、そのほかの人達は全員できてたけど……それ以外で見たことは無い気がする……。こころが言うには、【心器】も使わずに【心力】を全身に纏えるのは珍しいって話だけれど……」

「珍しいどころの話では無いな。はつきりいって有り得ない。

【心力】は【心器】を通して初めて出力できるもの。銃を使わずに銃弾を飛ばし、銃以上の威力を持たせる。

君が守鎖乃を退けたというのは、そういうことだ」

つまり、そんなこと有り得ないはず、ということ。

「そうなんだ……やっぱり、普通って難しい……」

苦笑し、そしてガクッと項垂れる霊。

「で、でもそんな霊くんはすごいと思います。強いってことじゃないですか」

「おお！　こころちん、ちゃんと御神くんの名前言えた！　えらいえらい！！」

こころの頭をなでなでする朗。

朗の背がこころより低いため、膝の上に乗せている構図は随分シュールだった。

「ほ、朗ちゃん……子供扱いしないで……」

こころが身をよじって抗議する。

が、つい先程、子供扱いされても仕方の無い失態をやらかしたので強くは言えない。

そうしていると、守鎖乃を生徒指導室に連れて行った担任の篤情教あつじょう官が戻ってきた。

「おゝし者共おゝゝゝ、とつとと席に着けゝゝゝ」

相変わらず、やる気なさそうな声。

「さてと、チームも決まったんでこれで終わりとしたいんだがな。実はもう一つ決めなきゃならんことがある」

がしがし、と頭を掻いて、手元の資料を見ながら告げる。

「この学園の査定は試験……チームごとに挑んでもらって決めるわけだが。

それに伴い、各チームのリーダーを今日中に決めておけ。連絡はリーダーにするからな。

査定はリーダーの役割が重要になってくる場面もある。よく考えて決めておけよ？」

あとで職員室に報告に来るように、と言って篤情教官は教室を出て行った。

教室が喧騒に包まれる。

もう、こころをチームに引き入れようとする輩はいなかった。

それはそうだろう。

なんせ、都市に5人しかいないナイトクラスの一人、そして心皇学園でただ一人のナイトクラス、大和守鎖乃。

そんな彼を軽くあしらった生徒がこころのチームメンバーなのだ。

多少気にしつつも、あからさまな敵意を向けて来る生徒はいなかった。

「さて。私たちは早速、篤情教官に報告しに行くのでしょうか」

槍姫が立ち上がり、そんなことを行った。

「え？ チームリーダーは誰にするの？」

「決まってるよー！ 御神くん、君しかないって！！」

「は？！」

寝耳に水とはまさにこのこと。
というか、いつ決まったんだ？　という顔でここに助けを求める
霊。

「こ、こころ？　これはどういうこと？」

「だって、霊くんは守鎖乃くんを倒したんですよ？」

「いや倒してないから」

守鎖乃の【心技・斬撃波】を掻き消したただけだ。

「だから、霊くんがこの心皇学園で一番強いということになります」

「だから御神くんがリーダー決定！！　いや……私達って運が良
いねえ……」

霊の抗議は華麗にスルー。

ここも朗も、槍姫までもが霊のリーダー就任を決定事項として捉
えていた。

「ま、待ってよ……みんなは良いの？　Fランクがリーダーなんて
なったら、何か言われるんじゃない……」

霊としては、自分がFランクであることに不都合は無い。

だが、Fランクがリーダーになることで、こころ達に危害が及ばな
いかが心配だ。

「別に構わないさ。それに、私たちがランクに拘るようなら、キミ
をチームメンバーとして認めない」

「そうそう！　それにね、私達、ランクなんて別にどうでもいいっ
て思ってるんだよ？」

「霊くん。槍姫ちゃんのお父さんは、ナイトクラスなんです。Cラ

ンクでありながら」

朗、槍姫に続き、こころが教えてくれる。

基本、ランクが高ければクラスも高くなる、というのが通説。

しかし槍姫の父親はその通説を真っ向から否定するような存在だ。

まあ、それを言ったら霊という存在そのものが異常ということになるのだが。

「御神くん、だから私たちはランクに拘らない。努力次第で強くなれることを、私たちは知っている。

いや……これは君の方が実感しているだろうな」

そう締めくくり、槍姫は立ち上がって教室を出た。

篤情教官に、チームリーダーの決定を伝えるに行くのだろう。

「槍姫ちゃんは、ランクのことで色々辛い思いをしていますから……」

「だってね！　だってね！　槍姫ちゃんはAランクなのに、お父さんはCランクでしょ？　だから本当の娘じゃないんじゃないかって、小さい頃は言われてたんだよ！！」

ぶんすか、と怒る朗。

それは、このクラスメイト達全員に怒っているかのようで、殊更に声を大きくしていた。

「ランクは強さに関係ないもん！　それは槍姫ちゃんのお父さん……そして御神くんが証明してるもんね！！」

その言葉に、クラスの雰囲気は少しだけ変わった。
相変わらずリーダー決めの話し合いをしているようだが、どこか気
まずい雰囲気の流れていた。

そもそも、親が高ランクだと子共も高ランクであることがほとんど。
親の【心力】を受け継ぐと考えられている。

だがこころや朗、槍姫は知っている。それが必ずしも当てはまる訳
ではないと。

「そうだね……【心力】は、心の強さは、育った環境によって左右
される。甘やかされて育てば、逆境に立ち向かえない人間に育つこ
とがほとんどだしね」

そして霊も知っている。実感している。

Fランクという、最低の心を持って生まれた霊は、しかしナイトク
ラスを軽くあしらう程の【心力】を持つ。

「やっぱり、外の世界は辛いところだったんですか？」

「うん……おじいちゃんが居てくれたから良かったけど、たぶんぼ
く一人だけだったら死んでたかも。」

でもそういう環境で育ったから、一人で世界を回って、一人でこの
都市に帰ってこれたんだと思う」

「一人……？ あ、の、霊くん……おじい様は？」

霊は祖父と一緒に都市を出て行った。

それは、見送ったところが一番よく知っている。

「ああ……2年前に老衰でね。最後は眠る様に死んじゃった。
嘘じゃないよ？ 心蝕獣に食べられた訳じゃないから、ちゃんとお

墓も作ったし」

「そう……だったんですか。じゃ、じゃあ、霊くんはそのあと、一人……？」

「うん。2年間はずっと一人で世界を回ってたよ。といっても、閃羽に帰ってくるためだったんだけどね。おじいちゃんも帰れって言ってくれたし。ちょうどヨーロッパのあたりに居たから、帰ってくるのが遅れちゃってさ」

「はーい質問！！ 御神くん！ 【ようろば】 ってなに？」

朗が無邪気に聞く。

知らないのも無理は無い。世界は心蝕獣によって分断されており、都市間の交流はあっても、世界的な交流は絶たれている。

心蝕獣の発生は、およそ200年前と文献には記されており、それ以前は、人類が世界の頂点に立ち、大地を自由に行き来していたそうだ。

「えっと、ヨーロッパね。この閃羽がある列島の、ずっと西にある大陸の地名」

「ふーん……全然わかんないや♪」

まあ、実際に行ったこともなければ、今や文献でしか知ることのできない世界の事情だ。

七つの海があるとか、ユーラシア大陸があるとか言っても、一般人には通じない。

「まあ、とにかくすごく遠い所に居たってこと」

「おお！ なるほどなるほど！ ヨーロッパはすごく遠い所にあるんだね！！」

納得する朗。

うん、そうだよ、と微笑ましく朗を見る霊。

「もう……朗ちゃんったら……」

適当な納得をする朗と、大してツツコミもしない霊を見て、こころは苦笑するしかなかった。

かくして、1年1組第7チームのリーダーは、御神霊と決まった。

御神霊を筆頭に、純愛^{じゅんない}こころ、戲陽朗、針村槍姫、の4人。

Fランクが1人に、Sランクが1人、そしてAランクが2人。

「って、ちょっと待って!! ぼく、リーダーになるなんて一言も言っていないよ!？」

すでに後の祭りだったそうなの。

第4話【○○○なリーダー？】

心皇学園は広い。

【心力】を操る兵士……【心兵】を育てるのだから、それ
相応の施設が必要になる。

今、第7チームのいる建物もその施設の一つだ。

実戦訓練を行う専用の施設。

このような施設は複数あり、連日向上心の旺盛な生徒たちが利用している。

無論、実戦訓練なので建物は頑丈にできている。
具体的には、対心蝕獣用の装甲である外縁防壁と同じ素材、同じ強度。

施設の中は闘技場のようになっていて、中央のステージで戦う。
広さはテニスコート4面分と広く、かなり動き回って戦うことができそうだった。

端っこには、訓練経過を観察するためのモニター設備もあり、そこで各種データを採取できるようになっている。

その施設で、霊率いる第7チームは、実戦形式での対戦を行おうと
していた。

赤い槍を持つ、針村槍姫^{はりむらそうぎ}。

黒のバトルスーツ……【心装】を纏い、矛先を目標に向けて構えている。

その隣には、同じく黒い【心装】を着こんだ戲陽朗。あじやらほがら
ひし形の紅い盾とガトリングガンを一体化した【心器】、シールド
ガトリングガンを構えている。

「……………」

二人の前には、御神靈みかみくしびが立っている。

その出で立ちは、丸腰。

武器……【心器】を持たず、【心装】も身に付けていない。学園指定の制服姿だ。

「いくよっ!!」

朗がガトリングガンの銃口を霊に向け、連射。

無数の弾丸が霊に降り注ぐ。

しかしそのすべてを、霊は縦横無尽に走り、または跳んでかわす。

その弾丸が、一瞬途切れる。

霊に襲いかかる、赤い流星。

槍型【心器】を使う槍姫が、【心力】を纏わせ霊を貫こうとしているのだ。

（途切れるタイミングには完璧に合わせた……でも50点。弾幕と同時に来なきや意味が無い）

心のなかでそう採点し、迫る槍姫を真正面に迎える。

間合いに入ると同時に、鋭い突きが放たれた。

その突きも、易々と避ける霊。

「はああああああ!!」

避けられても間を置かず、引いて、そしてまた突き。

連続的に放たれる一突き一突きが、正確に霊の眉間を狙う。だが寸前でかわされる。かわされ続ける。

「うう……霊くん、大丈夫かなあ……」

施設の隅っこで3人の戦いを見守るころ。

いくら霊が強いとはいえ、朗も槍姫も入学前から訓練を積んでいる。だから霊が怪我をしないか心配だった。

もつとも、そんなこころの心配を余所に、霊は2人の戦い方に点数を付けている訳だが。

「っ!」

しばらくして、霊が素手で槍を払う。

「なっ?!」

高速で走るトラックにでもぶつかったかのような衝撃が、槍を持つ腕に響く。

思わず呻いた槍姫に、霊が肉薄。

「くっ!!」

「意識を逸らしちゃ駄目だ」

霊の掌底が、槍姫の胸部に打ち込まれる。

無論、素手とはいえ【心力】が纏われているのだ。その威力は【心器】で攻撃されたのと同じ。

「うあっ!!」

抗うこともできずに吹き飛ぶ槍姫。

その先には……朗がいた。

「うええ?! ちょっ——」

受け止めるべきか否かを迷い……結果、吹っ飛んで来た槍姫に巻き込まれる形で、朗も一緒に吹っ飛んだ。

「うにゃあああ?!」

「がはっっ!!」

討議施設の壁にぶつかり、轟音を上げる。

そして折り重なるようにして地面に落ち、土煙を巻き上げた。

「イタ~~~~イ……」

「ぐっ……【心器】もないのに……さすがは^{おおわ}大和を退けただけあるっ……」

二人とも、絡まるように倒れていて、なんとか起き上がろうとする。

朗は目を回しながら、槍姫は槍を杖代わりにしてなんとか……と思ったところで力尽きた。

「針村さん、槍の扱い方は随分上手だと思う。でも【心器】に【心力】を注ぎ切れていない。

ちゃんと注いでいれば、掠るだけでも相手の皮膚くらいは挟まれるよ?」

2人に手を貸しながら立たせる霊。

今の戦いを批評しながら、さらっと怖い事を、何でも無いことのようと言う。

特にこころは、『挟れる』という言葉に反応。もし本当にそうなっていたら、霊の顔の皮膚が挟れるということだ。

そんな光景……こころはもう【二度と】見たくなかった。

ところで、そもそも【心器】とは何か。

それは、【CMP (コンバート・メンタル・into・フィジカル) コア】と呼ばれる機関が、使用者の心の力を【心力】として、物理的なエネルギーに変換する、というものである。

コアによって心の力を物理エネルギーに変換された【心力】は、【心経回路】によってエネルギーを伝達され、剣なら剣としての【切断力】を、槍なら槍としての【貫通力】を高める。

簡単に、大雑把に言ってしまうえば、武器としての威力と特性を強める。そのエネルギーを【心力】と呼んでいるのだ

銃タイプの【心器】だと、この工程が少し異なる。

【心力】をいったん圧縮し、弾丸として発射する機構が追加される。圧縮率が高ければ威力は増加し、射程も伸びる。が、連射がでなくなるので、スナイパーライフル等に向いている。

逆に、圧縮率が低いと連射性は増すが、威力も射程距離も減衰して

しまう。

朗の使っているガトリングタイプや、拳銃などには低圧縮が向いている。

「それと戲陽さん……針村さんは【心装】を装備しているんだから、シールドで受け止めてあげないと。」

【心力】で衝撃を相殺できるんだからさ」

そして【心器】の派生である【心装】。

バトルスーツに小型化したコアを埋め込み、そこから【心経回路】を繋いで全身に織り込んだ服を【心装】と呼ぶ。

【心器】が攻撃ならば、【心装】は防御。

スーツの耐久性を上げ、外部からの衝撃を緩和、あるいは相殺する。

しかも、身体の活性も同時に行うため、【心装】を纏った人間は超人的な動きが可能となる。

それでも無論、全ての衝撃から守れる訳ではない。限度がある。

装着者の【心力】を上回る威力の攻撃を受ければ、その分だけダメージが貫通する。

現に、霊の掌底は槍姫の【心装】の防御力を上回り、吹っ飛ばした。

そしてその先に朗がいた。

シールドガトリングガンの盾で受け止めれば、ぶつかる衝撃を無効化し、槍姫を受け止めることが出来たはず。

霊としてはそれを期待し、わざと朗の方へ吹っ飛ばしたのだが……。

「ふえゝゝん……そんな事言われても無理だよゝゝ。第一、槍姫ちゃんが怪我をしたら――」

「シールド……【心装】の役目はあくまでも、衝撃の緩和、または

相殺。カウンターの発動する【心装】もあるにはあるけれど、戲陽さんのシールドガトリングガンにそんな機能、付いてないでしょ？」
「あ、そうなんだあゝゝゝ。ふむふむ、御神くんは物知りだねえゝゝゝ」

「……朗、本当に知らなかったのかい？ 私はてっきり知っているものだ……」

呆れを含んだ目で親友を見る槍姫。

もし受け止めてくれれば、もう少し勝負ができたものを、と惜しんでいた。

「それに、【心装】にも【心力】を注ぐように。じゃないと、防御力も上がらない」

「うえゝゝゝ……御神くん、意外にスパルタだよゝゝゝ」

「……そうなのかな？ でも、【心装】に意識を集中してみても、違いが分かるはずだから」

言われて2人は、【心装】に意識を集中し【心力】を注ぐ。

すると、黒いバトルスーツに赤く光るラインが浮かび上がる。血液のように全身を駆け巡り、同時に身体が軽くなった。

【心装】に十分な【心力】が注がれている証拠だった。

「2人ともわかる？ その状態を維持しながら、【心器】にも【心力】を注ぐ。

どちらか一方に、っていうのは、最後の手段。相手と力の差があるときだけだ」

ならある意味、さっきの自分達は正しかったのではないか？ と思

う朗と槍姫。

【心器】も【心装】も使わず、あれだけの【心力】を使えるのだから。

「次はこころだね。どう？　ちゃんと12方向から僕らの戦い、同時追跡できた？」

「あ、はい……たぶん、大丈夫だと思います……」

そう言ってこころは、自身の周囲に【心器】を戻した。

それは、浮遊するひし形の砲塔……無線遠隔操作タイプの【ビット】だった。

しかもこれらは複数あり、一つ一つが、あるいはいくつかのビットを繋げて、シールドとすることもできる。

いわば、こころの【心器】は【シールドビット】なのである。

さらに【シールドビット】はこころの右腕に集まり、盾の形を形成する。

これが装着状態であり、ビットでありながらそのまま盾として使える。

右腕には黄色く丸い水晶体のようなもの……コアを取り付けた腕輪があり、その周りを正ひし形のビット4機が合体。さらにそのまわりを、もう12機のビットが合体。

計16機のビットが合体した盾……それがこころの【心器】である。

ちなみに、4機のビットで形成された状態でも、伸ばした腕を隠して余りある大きさだ。

そのため、基本は外側の12機を攻撃や仲間の防衛に使い、残りの4機は純粋な盾、あるいは予備のビットとして待機させておく。

「それじゃあ皆で見てもようか」

モニター設備に移動し、各種操作を行う。

まず【シールドビット】とモニターをケーブルで繋ぎ、画面を12分割して表示させる。

すると、さきほどの霊たちの戦いが映る。

それも、12方向から。

「……うん。ちゃんと全部のビットをコントロールできてるね」

さて、ここで少し、こころが使うビットタイプの【心器】について説明しておこう。

ビットはそれ自体が攻撃兵器であり、また【心力】を受信する機能を備えているため、無線式誘導兵器となる。

【コア】によって物理エネルギーに変換された【心力】と同じものでしか操作を受け付けないため、他人の【心力】による妨害・誤動作は基本的に受け付けない。

このためビットは、使用者と五感情報を共有する。つまり、ビットは攻撃兵器であると同時に偵察機の役目も果たし、離れた位置に存在する敵や、建物等に隠れた相手を見つけ出すことが可能なのだ。使用者の【心力】にもよるが、操作距離は広く、一つ一つのビットを中継点にすれば、数十km先の場所を索敵したり、目標を攻撃することも可能だ。

だが、これには複雑で高度な情報処理能力を要求される。故に使える人間は少なく、先天的な才能が無ければまともに扱うこともできない。

このように、【心力】を電波のように使い、無線式誘導兵器のような【心器】を操る人間を、【感応者】と呼ぶ。

「16機のビットを一度にコントロールできるのは、閃羽ではこころだけ。これほど心強い味方は居ないな」

「そんな……槍姫ちゃんは言い過ぎだよ……」

「言い過ぎじゃないよ……！ クラスの皆がこころちんをチームにとって、奪い合いに発展しただけのことはあるんだからね！！」

この能力は貴重。しかもこころは閃羽で最多の操作ビット数を誇る。偵察、情報収集、攻撃に防御。複数の役割を同時にこなすこの【心器】と能力は、心蝕獣と戦うなら喉から手が出るほど欲しい力なのだ。

「こころ、一つのビットでどれくらいの範囲をカバーできるの？」

「あ、えっと……確か、半径10kmは大丈夫だと思います。」

ちなみに、【感応者】の平均的なカバー範囲は、1機につき3~5kmと言われている。

こころは通常の倍以上の操作範囲を持つということだ。

「なるほど。なら野外訓練も大丈夫そうだね」

確かに、こころの力は特殊。希少で強力なものだ。

だが……霊に驚いている様子はない。かといって失望している訳でもない。

まるで予想通り。もしくはその程度は当たり前、というような態度だ。

「っ……」

こころには、それが面白くなかった。

別に自分が特別な人間だと思いがっている訳ではない。SランクでありながらAランクの朗や槍姫と一緒にいるのだから、彼女がそんな人間でないことは明白だ。

では何が面白くないのか。

霊は強い【心力】を持っている。そして自分は希少な能力を持つ。だから霊の役に立てると思った。霊に頼られると思った。だが、実際はどうだ？

扱いは朗や槍姫と一緒に。

特に驚くでもなく、頼ってくれるでもなく、普通の反応。

自分はいくらでも霊の【心力】に驚き、頼もしく思ったというのに……。

驚いてくれない ↓ 頼ってくれない ↓ 特別扱いしてくれない
↓ かまってくれない、という構図がこころの中で出来あがってしまった。

「むう……」

「ん？ どうしたの？ こころ？」

モヤモヤした気持ちがあるところの心情をささくれ立たせる。
その所為か、モニターに映ったとある場面が目についた。それも、決定的に嫌な場面だ。

「霊くん……女の子の胸に攻撃するなんて……えっちです」
「へ？」

件の場面とは、霊が槍姫に掌底を打ちこんだところだ。それも胸部に。

バトルスーツは、【心力】を纏って防御能力を強化する、というのが前提の防護服。

しかし、胸部などの急所を保護するところは、防弾チョッキのように分厚くされている。

だからそんなものに打ち込んだ霊は、特に何も感じなかったのだが、そんなもの乙女には関係ない。

言われて気付いた槍姫が胸元を両手で隠し、顔を赤くした。

「エッチって……だって訓練だし……」

「訓練なら、霊くんは女の子の胸を平気で触るんですか?！」

「いや、そうじゃなくて……相手を倒すことを目的にしているんだから、心臓を狙うのは当然でしょ?」

困惑気味に、かつ控えめに言う霊。

だが内容とはんでもない。強力な【心力】を【心器】なしで出力できる人間が言くと、シャレにならない。

その証拠に、槍姫は一層胸元を両手で隠しつつ、今度は顔を青くした。

真っ青だ。

「ちゃんと手加減はしてるんだけど……。それに、殺すつもりなら首だよ。首を跳ね飛ばせばそれでほとんど終わり。心蝕獣が相手の

ときは、頭も潰しとかなきゃいけないけれど」

さすが10年も外の世界を放浪していただけはある。
言葉の重みが違う。

都市育ちの乙女三人には、どん引き、かつ説得力のあるものだった。

「むう……」

とはいえ、こころだけは全てに納得したわけでは無かったが。

「まあまあこころちん。大丈夫だよ。槍姫ちゃんより断然大きいんだから、チャンスがあれば――」

「煽るな朗」

ゴツうんっ！

朗の脳天に落ちる、槍姫の怒りの拳骨。

怒りが入っているのは、どうしようもない事実を突きつけられたから。

「イタイ……胸の話になると槍姫ちゃんは怖くなるよ……」

ちなみにこの三人の順位は、こころ＞朗＞槍姫の順。

サイズは……槍姫のプライドを尊重して機密扱いと致します。

「もっと怖くなってやろうか？」

「うう……もういいよお。ところで、御神くんはどんな【心器】を使うのかな？」

幼馴染であるがゆえに、槍姫のボルテージがどんどん上がっていく

のがわかる。

だからちようど、朗は疑問に思っていたことを霊に聞き、話を変えた。

「糸を使うんだけど……ちようど、こんなふうに」

霊は指先に【心力】を集中。

昼休みに、こころの前で見せたように、青く光る糸を指先から垂らした。

「学園の心器カタログを見せてもらったんだけど、糸を使う【心器】は無いみたいで……」

入学時に配られる心器カタログ。

生徒はそのなかから、自分にあった【心器】を用意してもらい、訓練に望む。

特注もできるが、基本的にはカタログに記載されているものと同型のものしか作れない。

設計データがあれば別だが、一から【心器】を作るのは、技術的な面や資金的な問題から難しいのだ。

「確かに糸を使う【心器】など、聞いたことがないな……」

「槍姫ちゃんが知らないんじゃない、私もわからないかなあ……。こころちゃんはどう？」

「私も聞いたことないかな……。あ、でも霊くんのおじい様は、糸を武器にしましたよね？」

幼い頃の記憶。

霊の祖父は、糸を使った遊びを、自分達にしてくれた。

人形を糸で操ったり、体を持ち上げたり、何万本も束ねて遊具を作ったり……。

まさに変幻自在。霊とこころは一日中、糸で作られた遊びに明け暮れていた。

「うん。でもあれはこの都市で作ったものじゃないから」

「御神くんが糸を使うのは、おじいちゃんが戦い方を教えてくれたからってこと？」

「そうだよ。でもまあ、糸じゃなきゃいけないってことはないし、代わりの【心器】を選ぼうかなって、考えてるけれど……何にしようかな……」

モニターに心器カタログのデータを呼び出し、次々と画面をスクロールしていく。

剣や銃、ガントレット。

槍姫が使うようなランスタイプも映される。

「御神くんは近接型なのかい？」

「いや……距離は選ばないよ。近く中距離が多いけれど、糸は伸ばそうと思えば、数十キロ先まで伸ばせるから」

「……常識外れにも程があると思うが？」

そんな便利な【心器】があることも驚きだが、それを操れるという霊にも驚く。

【心器】の性能は基本、【心力】に左右される。

ある程度【心器】の方で補助されるとはいえ、高性能であればあるほど、膨大で強力な【心力】が必要になる。

霊の言うような万能型ともなれば、必要な【心力】は如何程のものか……想像もつかない。

「……とりあえず、これでいいかな」

「なっ……これは――」

霊が選んだ【心器】。

それを見た槍姫が何か言おうとしたとき……。

「Fランク！ 御神霊はいるのか?!」

施設の扉を乱暴に開け、大和守鎖乃おおわすさのが白い剣を携えてやってきた。

その後ろには、彼と同じチームメンバー。さらに数人の生徒達がいるた。

全員、S及びAランクで構成される、1組の生徒だ。

「守鎖乃くん?! どうしたの……?」

「……おまえは俺と一緒にのチームになるべきだっ。そこのFランクを決闘で倒し、証明しようと思ってな」

「まだ諦めてなかったのか。大和は……」

大和守鎖乃おおわすさの。

ここらにとって二人目の幼馴染であり、閃羽で5人しかいないナイトクラスの一人。

ここらで自分のチームに入れようとするが、担当教官の篤情竹馬あつじょうちくばの適当な割り振りによって、その狙いは外れた。

そしてFランクである霊がここらと同じチームになった事に、猛反対している。

「御神霊。Fランクに生まれ、卑しい心しか持たないおまえなど、本来俺と決闘することすらおこがましい事なんだがな。学園を納得させるために、特別に相手をしてやろう」

「お断りします」

「なっ——」

間髪入れずの返答。静まり返る守鎖乃とその取り巻きたち。

霊は黙々と【心器】の注文を申請し、学園側に電子メールで送付。モニター画面をシャットダウンし、機材の片付けに入った。

「おい、貴様っ——」

「戦う理由がないので」

「はっ。結局、俺に勝てないから逃げようという腹積もりか。卑しい心しか持たないFランクらしいな」

「いえ、さっきの騒動で君の実力は把握しました。君はぼくの敵じゃない」

眼中に無い。

霊は冷めた視線でそう告げた。

「ナイトクラスの实力を持っているのなら、実感したはずだ。君はそこまで無能じゃない」

「……調子に乗るなよ、Fランク。さっきは【心器】の調整が不十分だったからだ」

腰に携えていた白金の剣を抜き放ち、霊に切っ先を向ける。

「再調整し、完璧に仕上げたこの【守鎖乃専用心器】。Fランクを屠る事など造作も無い」

「……経験不足なのかな。そういう事じゃないんだけど」

一人呟き、さらにため息を一つ。

そしてゆっくりと、守鎖乃の正面に立つ。

「【心理工学科】に【心器】の注文をしました。君がナイトクラスとして掛け合ってくれば、すぐにでも【心器】が用意され、納得のいく形で決闘できると思うよ」

「ふん……自分から敗北の瞬間を早めるとはな。Fランクにしては潔いぞ？ はははっ」

見下した態度を隠そうともしない、守鎖乃の高笑い。

彼の取り巻きたちも、一様に霊を見て嘲っていた。

彼らは確信している。守鎖乃の勝利を。Fランクが、Sランクに勝つことは不可能だと。

「っ……」

そんな彼らを、こころは激しい嫌悪感を秘めた眼で見っていた。

第4話【○○○なりダー?】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戯陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こころの幼馴染。

第5話【ゴミ掃除】

これから祭りでも始まるのか？

そう問いたくなるほど、霊は大勢の生徒たちの視線に晒されていた。

霊たちは屋内型訓練施設から場所を移し、コロシウム型の訓練施設に移動。

訓練施設というより闘技場と言った方がしっくりくる場所で、周囲には観客席もある。

その観客席はほぼ満員。

その目当ては、閃羽で5人しかいないナイトクラスの一人、大和守おおわす鎖乃さのの姿である。

最年少ナイトクラス・大和守鎖之の決闘。

これを見ようと集まったのは、何も学園の生徒や教師たちだけではない。

閃羽防衛軍の関係者も、時間の空いている者が観戦にやってきていた。

その軍関係者は二人の男女。

「大和くんは注目されていますね。しかし相手はFランクの子だという話ですが……」

一人は四角いフレームのメガネを掛けた理知的な女性。

黒いビジネススーツを纏い、鋭く細められた目はどこか秘書然とし

た雰囲気醸し出していた。

閃羽心衛軍のNo. 4ナイトクラス、さえずみ りちこ冴澄理知子中尉。

「ただのFランクではない。彼は……霊くんはげんさい弦斎さんのお孫さんだ」

もう一人は屈強な身体と厳しい顔つきを持つ壮年の男性。

連れの女性以上に鋭い視線は、一般の人間であれば緊張で閉口してしまうほどだろう。

こちらの男性もビジネススーツだが、肩幅が広い所為か軍人という雰囲気が滲み出ていた。

閃羽心衛軍のNo. 1ナイトクラス、じゅんないまいと純愛誠。こころの父親である。

「弦斎様の?! しかしFランクでは、大和くんの相手にはならないでしょう……」

「逆だな」

理知子の言葉を否定。

否定された彼女は何を根拠に……と言いたげな目でチラッと誠の方に視線を向けた。

「もし霊くんが弦斎さんから【継承】を済ませているのであれば、大和ていどでは嘯ませ犬にすらならん」

「Fランクでありながら、弦斎様のような強大な力を継承している、と?」

「冴澄中尉はランクに拘り過ぎだな。それではいつか痛い目を見るぞ?」

そうだな……良いことを教えてやる。弦斎さんのランクはな……霊

くんと同じFランクだ」

「っ?! そんな……あの方が？ 嘘でしょう……Fランクの人間があんな力を持つなど、聞いたことがありませんよ」

「上層部は隠したいことが山積みなのさ。そしてもし、霊くんが本当に【継承】を済ませてここに帰ってきたとすれば……お偉方は失禁どころの話ではなくなるだろうなあ」

誠はどこか楽しそうに、しかし人目を憚るように静かに笑った。



「証人は多ければ多いほど良い。Fランクの卑しい人間が、Sランクとチームを組むことの愚かしさを、大勢の人間の前でわからせてやろう」

数千人を収容できる観客席がほぼ満杯。

これだけの人数、呼び込まなければ集まることはない。つまり、呼び込んだのだ。

霊が【心器】を注文し、守鎖乃が掛け合いすぐにも手元に届くよう計らった。

守鎖乃が霊と決闘するためである、という理由を説明し、全校生徒に広めるようにもしたのだ。

本来【心器】は入学前に注文しておくもの。

しかし霊は入学が遅れたうえに、自分が慣れ親しんだ【心器】と同

型のものが見つからなかったため、今日まで注文していなかった。とりあえずということで頼んだ【心器】も手続き諸々を含めれば、手元に届くのに一週間はかかる。

だがナイトクラスである守鎖乃の計らいにより、先刻注文したにも関わらず【心器】が届けられた。

「はあっ、はあっ、遅れてごめんなんだなあ」

人一人が抱えるような鉄製の箱。

それを乗せた荷台を押す生徒が、大急ぎで霊のもとへやってくる。

【心器】を運んできたのは【心理工学科】の生徒。

彼はダナン・デナン。【心理工学科】の3年生。とてもふくよかな体系、いわゆるポツチャリ系で、言葉も随分のんびりした口調。

胸部のボタンがはち切れんばかりに伸びた若草色のツナギと、ゴーグルを額に付けた工学系の男子生徒だった。

「待ちくたびれたぞ。一人分の【心器】くらい、もっと早く用意できるはずだが？」

「スペアはあっても個人設定を済ませなきゃ、危なくて渡せないんだなあ。それに今日入学してきたばかりの生徒だから、本当は検査とかしなきゃいけないんだなあ」

上級生に対してぞんざいな口調の守鎖乃。

しかしダナンは気に障った様子も無く、手早く鉄製の箱を開封。そのなかには数振りの刀がいくつか保管されていた。

「とりあえず色々持ってきたんだなあ。【心力】を通して感触を試して欲しいんだなあ」

「ありがとうございます。えっと……」

「僕は【心理工学科】の3年生で、ダナン・デナンっていうんだなあ」

「ダナン先輩ですね。自分は御神霊みかみくしびです。すみません、急な無理を聞いてもらって……」

無理強いしたのが守鎖乃とはいえ、原因は自分であると考えているので霊は謝罪の言葉を述べる。

「気にしないで欲しいんだなあ。こういうことは、割と良くあることなんだなあ」

霊の謝罪を笑って受けるダナン。

人を和ませる雰囲気広がったように感じたのは、ポツチャリ系ゆえか……。

「ですが重ねて、ありがとうございます。早速触っても？」

「もちろん。でも、急なことで個人設定がまったくされてないから、使い勝手は悪く感じるかもしれないんだなあ」

【心器】は心の力に反応する。

心の力は十人十色。人によって当然異なるので、個人用の設定をしなければ十分な性能が発揮されない。

【心力】が上手く通らなかったり、最悪の場合は性能が低下する事態も起こりうる。

ダナンが気にしているのはそこだった。

「……これが良さそうですね」

箱の中から一振りの刀を手取る。

青い柄に、美しい波紋を広げる刀身。それ以外の外装は至ってシンプルだが、このなかで霊の目に止まった刀はこの一振りだけだった。

「あ、それは僕が製作した【心器】なんだなあ」

「すごいですね……他の【心器】とは一線を画していると思いますよ」

「褒めてくれて嬉しいんだなあ」

軽く振って刀の感触を確かめる。

悪くない……【心理工学科】のレベルが高いのかとも思ったが、霊はすぐにそれを否定。他の【心器】を見る限り、ダナンが作ったというこの刀は抜きん出た完成度を誇っている。

それはつまり、ダナンが優秀な技術者だということだ。

「Fランク、【心器】は決まったか？ ん……？」

霊の選んだ【心器】を見て、守鎖之が怪訝な顔をする。

しかし次の瞬間、口の端を釣り上げて見下した笑みを霊に向けた。

「おいおい、いくら勝ち目がないからといって、刀を選ぶか？」

守鎖之の言葉に、その取り巻きたちが一瞬静まり返る。

しかし彼と同じく、すぐに霊を嘲笑った。

「刀型の【心器】は【心力】を通しにくいんだ。そんなことも知らないのか？ やはりFランクだな」

理由は定かではないが、剣に比べて刀の【心器】は【心力】と相性が悪いとされている。

刃物系に【心力】を通せば切断力が増すが、刀だけはそれが上手く
いかなことが多い。それでも刀剣類としては最上級の性能を誇る
ため、武器としては申し分ない威力を誇るのだが……。

「この都市で刀の【心器】を十分使える人間は少ない。おまえ如き
が……使えるわけがない」

それでも【心力】を纏わせ【心器】として十分に使う人間は存在す
る。非常に希少な存在だが。

「使えようが使えまいが、君には関係無いことだと思うけど？」

「……そうだな。まともな抵抗もできず、無様に地面に這い蹲れば
いい」

一々癪に障る言い方だが、守鎖之はすでに諦めていた。

所詮はFランク。最低で卑しい心しか持たない下等な人間相手に激
昂するのも面倒。

どうせこの決闘は自分の勝利で終わる。それを守鎖之は確信してい
る。何故なら相手は、使えるかどうかともわからない刀型の【心器】
を使おうとしているのだから。

勝負にすらならないと思っていた。

「ね！　ね！　御神くん大丈夫かな？！　刀型ってすごい難しい【
心器】のはずだよね？！」

闘技場の離れたところ……チームメンバーが控えるための場所とし
て設けられたベンチでは、第7チームのメンバーが行く末を見守っ
ていた。

「ああ……【心力】を纏わせ辛いらしいな。だがこちらの父上……純愛誠大佐は使えるんだったな？」

朗の疑問に答える形で槍姫が解説をし、次いでここに話題を振る。

「うん……慣れと練習が必要で、あと才能もいるって聞いてるけど……」

「使い慣れていないタイプの【心器】……よりにもよって、などと思ったが……」

「でもでも！ 御神くんならあっさり使っちゃいそうじゃない？」

「そうだな……色々と規格外だというのは先ほど理解したし、心配する必要はないのかもしれない」

やがて場内が騒がしくなりだす。

今回の決闘を仕切る審判員がやってきたのだ

「そんじゃ始めるぞ？ 一応決闘だからな。オレが審判を務める」

そう言ってやって来たのは、篤情教官。

正式な決闘は審判立ち会いのもとで行わなければならない。

心皇学園では私的な戦闘は御法度なのだ。

「相手を戦闘不能にするか、もしくは気絶させたら勝ちだ。降参は認める。」

それと注意事項として、この心皇学園において、審判立ち会いのもとでの決闘で相手を殺したりしても、罪にはならない。それが戦闘学科たる所以でもある。とはいえ、なるべく殺すなよ？ おまえらまだ学生なんだからな」

通常はそうなる前に、審判が止める。

いくら【心兵】という兵士を養成する学校とはいえ、学生にそんな真似はできるだけさせない。

なら決闘を容認するなと言いたいだろうが、力を持て余しがちなガキを抑えつけるのは骨が折れる。だから決闘で解消させなければならぬのだ。

「それでは、一年一組、大和守鎖之。おなじく御神霊。両者の決闘を篤情竹馬あつじょうちくばが取り仕切る。

両者、準備はいいな？ ……はじめっ!!」

篤情教官の合図で、守鎖之が前へ跳び出す。

白い両刃剣型の【心器】に白い【心力】を纏わせ、霊に切りかかる。

「一撃で終わりだなっ!!」

霊の脳天めがけて振り下ろされる、白い剣。

「……っ」

霊も刀を構えて迎え撃つ態勢をとる。

振り下ろされる守鎖之の剣に対し、刀を振り上げる。しかも、片手で軽く。

剣と刀の衝突によって甲高い音が響き、同時に火花が散った。

「なっ?! 【心力】も纏っていないのに、なぜ弾かれる?!」

狼狽する守鎖之。

本来であれば、霊はその隙だらけの振る舞いを攻める。しかしそれをしない。

この男は単純な力比べに負けないとわからない。理解しない。できない。

「くそっ！！ Fランクのくせにっ！！」

だから、正面からぶつかり合う。

白い【心力】を纏う剣のことごとくを、青い刀で弾いていく。

「す、すごいすごい！ 【心力】も纏わせていないのに互角に戦ってるよ！？」

「あの【心器】に何か秘密があるのか？ いや、それはないか。今日手に取ったばかりで個人設定もされていないだろうし……」

「違う……霊くんは、ちゃんと【心力】を纏わせてる……」

「「え？」」

あれこれと思索する朗と檜姫の会話に、こころが静かに否定する。その瞳は、視線は、霊を凝視していた。

一方の守鎖之はさすがに焦っていた。焦りが焦りを呼び、そして疑念を生みだす。

「っ！！ おい工学科の男！ あの【心器】に何か細工でもしているのかっ？！ そうなんだろう？！」

【心力】を纏わせていない【心器】に弾かれる。決闘中だというのに、ありえない事態に守鎖之の思考は熱くなっていた。

「何を言ってるんだなあ。ちゃあゝんと御神くんの刀を見ていれば、【心器】に【心力】が纏われていることが分かるはずなんだなあ。」

「馬鹿なっ！ オレが見逃しているとでもいうのか？！」

「その通りなんだなあ。」

「ダナン先輩。先輩の無実を証明するためなら、事実を説明してくださって結構ですよ」

自分に対して呆れるほど無防備かつ隙だらけな守鎖之。しかし霊は攻めることはない。

先述したように、正面から力で圧倒しなければ彼は納得しないからだ。

とはいえこのままでは勝っても納得しないだろうという事で、理不尽に責められているダナンに助け船を出した。

「んゝ本当は決闘に口を挟むのはいけないんだけどなあ。御神くんが良いって言うなら、説明するんだなあ。」

御神くんは剣戟の瞬間、大和くんの剣を弾く瞬間だけ、【心力】を一瞬だけ纏わせているんだなあ。」

「……は？　なんでそんなことをする必要がある？」

「それは知らないんだなあ。【心力】の節約か、あるいは瞬間的にしか纏わせられないのか……」

「そんなバカな話があるか！！　おいフランク！！　どういうことだっ！！」

ダナンの緩い話し方にイラついた守鎖之は、直接本人に問い質す。

だが問われた霊の反応は淡白だった。

「……幸せ者だね。そうやって質問したら、実際に戦う【心蝕獣】が答えてくれると思ってる？」

「っ！？」 調子に乗るなと言ったがな？ 分を弁えろとも言ったがな！？」

「……もう覚えてない」

呆れかえってまともに返答することすら億劫になってきた。

そんな心情を態度で丸出しにし、ため息とともに守鎖之を迎え撃つ霊だった。



場所は観客席の二人に戻る。

誠はダナンの説明を聞いて顔を綻ばせていた。

「ほほう……あのぼっちゃりした生徒、なかなかの観察力じゃないか。将来有望だな」

「た、大佐……ど、どうしてそんな笑っていられるのですか……」

理知子の方は誠と対極。

その顔は青褪めており、全身がガタガタと震えている。

「か、彼の【心力】は異常です……一瞬であんな高密度の【心力】を出すなんて……人間じゃありません」

両腕で自分を抱きしめるようにし、必死で震えを抑えようとしている。

が、霊が瞬間的に【心力】を出力すると恐れるように身体が撥ねていた。

「弦斎さんもあれくらいは出来ていたがな。いや、霊くんの【心力】はそれ以上……間違いない」

誠の目が霊を食入る様に見つめる。

「霊くんは弦斎さんから【殺神者】としての力を【継承】している。上層部にとっては死神の再来だな」

確信を持って言う誠。

知っているからこそ、そして体験したことがあるからこそ、霊のことを理解していた。

「しかし……普通の【心器】では霊くんの【心力】には耐えられんだろう。このままではオーバーヒートするぞ」

霊の持つ刀の【心器】に異常が発生したのは、誠が呟いた直後だった。



守鎖之の激しい剣戟を捌きつつ、霊は手に馴染む刀型の【心器】に

感心していた。

（久しぶりに普通の【心器】を手にとったけど、ダナン先輩のはよく出来てる……）

この学園の三年生といえば17歳〜18歳。

その歳でナイトクラス専用にフルカスタマイズされたという守鎖之の【心器】とやりあえる。

驚嘆すべき技術力だ。

現に、守鎖之の両刃剣型の【心器】は刃こぼれしてきている。

では霊が使っている刀型の【心器】はというと……ほぼ無傷。

ダナンが指摘したように、剣戟の瞬間だけ【心力】を纏わせ【心器】を強化。

それに加え、霊の【心力】は膨大かつ高密度。つまり【心力】の量・質ともに常人の……ひいては守鎖之のそれを遥かに超えている。

【心器】の性能では劣っていても、纏わせる【心力】で圧倒しているため、両者が使う【心器】の状態に大きな差が出ているのだ。

（でも、あと数手が限界かな……）

強大な【心力】ゆえに、普通の【心器】では処理し切れないほどの負荷が掛かる。

普通はそんな状態は起こらないのだが、霊は普通ではないため【心器】に過負荷が掛かり、そのうち使い物にならなくしてしまう。

やがて、刀から煙が上がり始めた。

「霊くん?!」

「【心器】の故障かな?!」

「個人設定がされていないんだ……当然と言えば当然だが……」

異常事態に三人娘が腰を上げ、心配そうに霊を見守る。

そして霊と戦っている守鎖之はというと、煙を上げ始めた【心器】を見て口の端を釣り上げるようにして笑った。

「くっくくっ……クハハハッ……。そうかそうか、そういうことか」

「……」

「Fランク。おまえ、一瞬の間しか【心力】を纏わせられないんだろ? だから【心器】に負荷が掛かる。そんな不安定で雑な使い方をすれば、【心器】も故障を起こすだろうよ」

守鎖之は、霊が歪な使い方をするから【心器】が故障したのだと考えた。

Fランクの人間が、扱いの難しい刀型の【心器】を満足に使いこなせるはずがないという、偏見と先入観に満ちた結論。

自分の圧倒的優位性は、実は覆っていなかった。慢心と自尊心が守鎖之を満たし、勢いを付けさせた。

その勢いの所為かどうかはわからない。
が、次の一撃が刀を破壊した。

「っ?! 霊くんっ?!」

異常をきたしていた刀は脆くなり、とうとう折れてしまったのだ。

「これで終わりだなっ！ Fランク！！」

「だめっ！ 守鎖之くんっ！！ やめてええええええ！！」

霊に迫る白い斬線。

闘技場に響き渡るこころの絶叫。

次の瞬間……闘技場は静まり返った。

第5話【ゴミ掃除】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛こころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戯陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こころの幼馴染。
- 篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のN.O. 2ナイトクラス。
- ダナン・デナン——心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

第6話【ぼくが許さないっ】

ダナン自ら製作した【心器】の状態を計測する専用モニターは、異常な数値を瞬間的に記録していた。

守鎖之の剣が、霊の刀とぶつかる。

その瞬間だけ、【心器】に出力された【心力】の値が計測不能になる。

計測機が自作品とはいえ、ナイトクラス5人の【心力】を合わせてもまだ計測できる性能を持つ。

つまり霊は、少なくともナイトクラス5人以上の【心力】を持っていることになる。

「す、凄過ぎて悪夢なんだな……これじゃあ、【心器】がもたないんだな……」

事実、【心器】の状態を示すステータスは、すべてが異常を訴えていた。

膨大【心力】を処理しきれないために、【コア】が異常加熱。

【心力】を刀身に伝達するための【心経回路】も同様。

たった一瞬……十数手すべてを合わせても5秒に満たないわずかな時間だけで、霊の【心器】はボロボロの状態だった。

そしてとうとう……霊の【心器】は大破。

異常な【心力】の過負荷を掛けられ、ガタが来ていたところに守鎖之の一撃。

受け止めきれずに折れたのだ。

「これで終わりだなっ！ Fランク！！」

勝利を確信しているが故の、宣言。

「だめっ！ 守鎖之くんっ！！ やめてえええええ！！」

こころの悲鳴が響き渡る。

決闘で相手を殺しても罪にはならない。

だからこそ守鎖之は霊を殺す気でいた。

なにより、愛しい幼馴染の前で自らの力を誇示すれば、必ずその心を自分のものにできると信じているからだ。

もつとも、それは妄想で終わることになるのだが。

「す、すごいんだなあ……真剣白刃取りなんて初めて見たんだなあ……」

ダナンの呟きが、すべての結果を言い表していた。

振り下ろされた守鎖之の剣は、霊の両手に挟まれて止められていた。その両手は青い【心力】を纏っており、守鎖之の剣が纏っていた白い【心力】を完全に散らしている。

青い光は霊の【心力】。膨大かつ高密度の【心力】が、守鎖之の【心力】を押し退けているのだ。

「そ、そんなバカな……」

守鎖之は自分の心の力が……【心力】が強いものだと自負している。だからこそ最年少ナイトクラスとして閃羽に君臨しているのだし、それをランクが裏付けしていると考えていた。

だから信じられなかった。Fランクの卑しい心に、自分の精強なる心が負けているなどと。

「君は……一体何がしたいの？」

霊に止められている剣は、まったく微動だにしない。そんななかで、霊は静かに問う。

「な、何を言って……」

「こころは、仲のいい友達とチームを組めて喜んでる。なのに彼女たちを離してどうするつもり？」

「はっ。低ランクの人間と組んでも、こころが危険に晒されるだけだ。Fランクのおまえとなら、尚更だろ」

「そのFランクの【心力】に負けている君の心は……なんなのかな？」

霊に表情はない。無表情。

しかし守鎖之は、霊が嘲笑しているように見えた。ゴミにゴミとして見られている。

それが守鎖之の自尊心を大いに傷つけた。

「っ！！ ふざけるのもいい加減にしろよ？ おまえはこころに相応しくないっ」

そもそも守鎖之は納得できなかった。

なぜ彼女はこんな卑しい心しか持たない人間のクズと、チームを組めるのか。

それ以上に、なぜこんなクズを庇おうとするのか。

彼女に相応しい人間はこんなFランクのクズじゃない。彼女に相応しい唯一無二の人間は……自分。

「こころはオレと組むべき女だ。こころは——オレのものだっ！
」

場内の人間に聞こえるよう、守鎖之は高らかと宣言した。

言えば、言葉にすれば、それが現実となる。事実、霊の【心器】は守鎖之による鶴の一声ですぐに用意された。

だから今回も……しかしと言うべきか、やはりと言うべきか、それは虚しい妄想に終わる。

「こころは……人間だっ」

カタカタ……と霊が震える。

穏やかな声音のはずなのに、その声の雰囲気が場内を静まり返らせた。

やがて霊の【心力】が剣を受け止めている腕だけでなく、全身からも放出される。

「こころはモノじゃないっ。一人の人間だっ。こころをモノ扱いするなら——」

そして守鎖之の白い剣が……砕けた。
霊の両手の圧力で圧壊したのだ。

「ぼくが許さないっ」

「うお————」

剣を砕くと同時に放たれた、霊の蹴り。

【心力】を纏っていた蹴りは容易く守鎖之を吹き飛ばし、そのまま観客席へと突入。

激突音と観客の悲鳴が木霊する。

砕けた建材が粉塵となって舞い上がり、吹き飛ばされた守鎖之やその周りの観客席を覆った。

「あゝゝゝ……御神？ 殺したのか？」

審判を務めていた篤情教官が恐る恐る口にした。

「いいえ。殺すつもりは最初からありません。ただ……許せなかっただけです」

「……大人しい顔して中身はとんだ鬼子じゃねえか」

「そんなことは……それより教官。大和は気絶しているはずですよ判断を」

「ん。そうだな」

篤情教官は吹っ飛ばされた守鎖之のもとへ歩き出し、彼の容態を診る。

さすがはナイトクラスとも呼ぶべきか、それとも霊の力加減が絶妙

だったのか、観客席に激突しても生きてはいた。
蹴られた衝撃で血を吐きだしたらしく、口の周りには血が付着していた。

「こりゃ決まりだな。大和守鎖之、戦闘続行不可能とみなし、この決闘の勝者を御神霊とする!!」

場内がしんと静まり返る。

勝者を称える歓喜の叫びはなく、誰も彼もが信じられないという面持ちで呆然としていた。

敗者はエリートであり、勝者はゴミにも等しい落ちこぼれ。

「霊くんっ!!」

しかしその落ちこぼれを祝福する女神がいた。

彼女は霊に駆け寄り、その抱擁をもって祝福。
続いて第7チームのメンバー二人も駆け寄り、勝利を称えたのだった。

「霊くん! 大丈夫ですか?! 手が……」

「ん? ああ……さすがに【心力】を纏っていても、素手で刃物を壊すといくらか切れるね」

こころは霊の両手を取り、その手の平を見て絶句した。

砕けた剣の破片が霊の手の平に突き刺さっており、ダラダラと出血している。

あわててハンカチを宛がって血を拭こうとするが、霊は手を引いて

止めさせた。

「だめだよこころ。汚れちゃう」

「何を言ってるんですか!! 止血しないと……ああ、それより破片を取り除かないと……早く医務室へ!!」

「わわっ?! ちょ、ちょっと待ってよこころ!!」

両腕を抱きかかえられ、霊はこころに引き摺られるようにしてその場を去った。

「わぁお。こころちんったら大胆」

朗は興奮気味に呟いた。

何しろ、こころは霊の両腕を抱えているのである。

霊の慌てたような表情は若干赤みが差しており、どうやらこころの女性の象徴部分をご堪能のようだ。

「さっそく迫ってるねえ。御神くんは私の言ったことが本当であると実感してるよ……きつと」

「ほう。何を言ったんだ?」

「そりゃもちろん、槍姫ちゃんよりこころちんの方が断然大きいって……って、イタタタタ?!」

冗談! 冗談だよ槍姫ちゃん……! ぐりぐりはやめてえええええ!!」

コンプレックスを刺激された槍姫は、朗の両こめかみをグーで挟み、あらん限りの力で圧迫した。



守鎖之の剣が霊の真剣白刃取りによって止められた。

そればかりか守鎖之が【心器】に纏わせていた自身の【心力】が、
霊の【心力】によって散らされた。

「守鎖之くんの【心力】が【心蝕】……いえ、掃われている?!」
「それほどに圧倒的だということだ。霊くんの心の力……【心力】
はな」

理知子にとってそれは信じ難い現象だった。

閃羽のナイトクラスに選ばれるということは、最高にして至高なる
心の強さを持っていると認められたということだ。

いくら守鎖之が一番下っ端のNO.5ナイトクラスだとしても、心
の強さで負けるなどあり得ないはず。

少なくとも、最低で卑しい人間のゴミとまで呼ばれる心の弱さを持
つFランクの人間に負けるはずがない。

「純愛大佐……上層部が隠していることってなんですか? Fラン
クがSランクに勝ってしまうことと、何か関係が……?」

「ふむ……そうだな……それを教える前に、霊くんの人と成りを知
って欲しいと思う」

「え?」

「ふっ……その話はまた後日だ。決まるぞ」

誠の言葉通り、霊が守鎖之を蹴り飛ばし、場外へ吹っ飛ばした。

観客席へと衝突し、煙が巻き上がる。

「っ?! まさか……死んだ……?」

「いいや。冴澄中尉には見えなかったか? 霊くんは蹴りを入れたあと、吹っ飛んで離れる刹那の瞬間に自らの【心力】を大和に纏わせて保護していた。ダメージは霊くんの蹴り以外に与えられていないだろうよ」

全身に【心力】を纏わせた霊の蹴り。

蹴りを入れ、吹っ飛ぶ守鎖之。その吹っ飛ぶ間際、霊は己の【心力】を守鎖之に纏わせ、観客席へ激突するダメージを無効化させた。

つまり守鎖之は、霊に蹴り飛ばされた時点ですでに気絶していたのだ。

「そ、そんな……自分のみならず、他人にも【心力】を纏わせるなんて……」

信じられない出来事を立て続けに見せられ、理知子は戦々恐々という心理に追い込まれた。

もし彼が敵に回ったら……? 考えるだけで震えが止まらない。

「彼は……彼の目的はなんでしょうか? ここに帰って来たという目的は……」

「中尉、心配せずとも彼は、この都市の不利益になるようなことはしない」

確信を持っているかのように、誠は言いきった。

「何故、そのようなことを断言できるのですか……?」

「私は彼の目的を知っているからだ。それ故に喜ばしく、そしてお

もしろくない、といった心境でな」

「え？」

見ると、誠の視線がある一点を凝視している。

つられて自分もその方向を見ると、一人の女子生徒が……純愛大佐の娘、純愛ところが霊を抱擁しているところだった。

「えっと……まさか？ 彼は、大佐の娘さんと……？」

「そういうことだ。まあ、どこの馬の骨ともしれない奴よりはマシだがな」

やがてところが霊の両腕を抱え退場……おそらく怪我をしたのだろう。医療室のある方へと連れ出していた。

それを見届ける誠の目がさらに陰しくなったのを、理知子は見逃さなかった。

「娘は、外の世界へ旅立った霊くんが帰ってくるのを、口には出していなかったが待ち続けていた。

互いに憎からず思っている間柄……しかしなあ、こころはまだ15歳……父親としては寂しいぞ？」

「……親馬鹿だったんですね。大佐は」

普段規律に厳しい歴戦の猛者といった風格を表していた上司の、意外過ぎる一面を知った理知子だった。



医療室へ連れて行かれる間、霊はどうにも落ち着けなかった。

両腕をここに抱えられ、歩き辛かったのもある。

だがそれ以上に、両腕に押しつけられる二つの柔らかい膨らみが気になって仕方が無かった。

抵抗したり逃げ出そうとしたりすると、余計に押しつけられるので諦めた。

そりゃあ、【心力】を全身に纏えばころを振り切ることは簡単だ。しかし強過ぎる力はころを傷つけかねない。それが怖くて、霊は【心力】を纏えなかった。

「ね、ねえ……こころ。逃げやしないから、そろそろ離してくれないかな？」

「だめです！　そういつて霊くんは、昔っから無理をして傷を悪化させていたじゃないですか！！」

「子供のころの話だよ……。今はちゃんと――」

「非常識な人が何を言っても、説得力ありません！！」

「っ――――」

非常識、と言われて心をへし折られた霊。

何気に普通を装うことを努力していた彼にとって、その一言はあまりにも痛かったのだ。

第6話【ぼくが許さないっ】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こころの幼馴染。
- 篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のN.O. 2ナイトクラス。
- ダナン・デナン——心理工学科のぼっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。
- 純愛誠——閃羽のN.O. 1ナイトクラス。こころの父親。
- 冴澄理知子——閃羽のN.O. 4ナイトクラス。秘書然としたメガネの女性。

第7話【思い出す必要のない思い出】

ここに連れられ、霊は医療室に到着した。

ノックをしつつも返事を聞かないうちにこころが霊を連れて中へ。

だが医療室には誰もいない。少し外に出ているだけなのか、書きかけの資料がデスクの上に散乱していた。

ちなみに、心皇学園の医療室は一般の保健室と見た目はさほど変わらない。

当直医のデスクや、具合が悪くなった生徒を休めるためのベッドが4つほど。そのほか身長計や体重計なども2つほど置かれていた。

ただ、【心兵】を養成する機関だけあって、医療設備が病院並みに整っており、奥の方には緊急用の手術室がある。そのため保健室というよりは医療室という方が適当で、保健室という呼ばれ方はされていないのだ。

「いないみたいだね……」

「でも治療はします。霊くんはそのベッドへ座ってください」

霊をベッドへ促すと、こころは慣れた手つきで医療品棚から道具を引っ張り出した。

「よく物のある場所がわかるね」

「入学早々、朗ちゃんが怪我をしてここへ……その時に先生が出す

ところを見て覚えていました」

人の顔を覚えるのに苦労しないところは、こういった記憶力も相当なものだ。

「まずは破片を取りましょう」

そういつてピンセットを取りだすところ。銀ボウルの桶を持って霊の手を取る。

「あ、それなら大丈夫だよ。こうして……」

徐に、手のひらに力を込める霊。

すると手が震えだし、血管が浮き出てきて血が流れ出す。その影響で破片が押し出され、銀ボウルの中に血液とともに落ちていった。

「……………」

「あとは止血すれば大丈夫かな……ん？　　こころ？　　どうしたの？」

「……だから、どうして、余計に、血を、流すような、ことを、するんです、か？」

一言一言わざわざ区切り、そのたびに霊に顔を近づけるこころ。

顔は笑っているが、こめかみがひくひくと引き攣っていてとても怖かった。

「え?!　こ、こころ？　　なんか怒ってる？」

「傷を悪化させるつもりですか？」

「いや……だって、破片が中に入っちゃう方が危険でしょ？　目に見えないくらい小さな破片はピンセットで取れないし、それにこれくらいの出血量なら大事ないよ」

霊の言ううとおり、ピンセットで破片をすべて取り除くことは難しい。

それなら多少無理をしても押し出した方が早い。

ただし、つまむなりして押し出すのはかえって破片を中に入れてしまう恐れがあるので、普通なら悪手だ。

しかし霊は手のひらの筋肉を使って押し出し、しかも無理矢理血を流したので破片は身体の中に入りようが無かったので悪手ではなかった。

「でも、なるべく失血しないほうがいいに決まっています」

「大丈夫だよ。これでも血は流し慣れてるしね。外の世界ではこんな、日常茶飯事」

にこっ、と優しく笑いかける。

霊としては外の世界の事実を交えつつ、心配掛けまいとの気遣いだった。

だが難しい顔をされてしまったので、気遣いは無駄となったようだが。

「とにかく、止血しましょう。手を……」

こころは霊の片手を取り、静かに目をつぶる。

するとこころの手から【心力】が流されるのを、霊は感じた。

「こころ？ これってもしかして……【感応心療】？」

「そうです……だから心配しないで、受け入れてくださいね」

【感応心療】——【心力】を他人に流し、身体を活性化させて傷を治療する方法。

【心力】を電波のようにして使える【感応者】のなかには、他人に【心力】を分け与えることのできる者がいる。

だがこれは【心力】の波長を合わせる必要がある。人によって波長は異なるので、同調という技術が必要になるのだが……これはかなり繊細な作業が必要だ。

それは、相手の気持ちを理解し受け入れる、というくらいに難しい。ある程度苦楽を共にしたチームメンバー相手なら比較的簡単だが、それでも傷を治療できるほど同調させるのは至難の業。

だがこころは人の気持ちに敏感だ。

そして相手を思いやれる優しい心を持っている。

だから相手と一言二言会話すれば【心力】を分け与えるのに苦労しない程度には、同調できるのである。

「こころのこと、拒む訳ないよ」

それと【感応心療】は【心力】を受け取る側の心理状態も重要だ。

【感応者】がいくら理解しようとしても、拒まれてしまえば同調は不可能。

相互の理解があってはじめて、【心力】の受け渡しが成されるのだ。やがて霊の手のひらの出血が止まり、傷口も徐々に塞がっていった。

「右手は終わりました。次は左手ですね」

「いや、大丈夫だよ。自分の傷なら、自分の【心力】で治せるから

ね」

そういうと霊は、左手に【心力】を集中。

青い光が左手を覆い、今こころがやってくれた【感応心療】のように傷が治っていった。

「【心力】で身体を活性化させるということは、治癒能力も活性化させるってことだからね。さすがにこころみたいに、相手に【心力】を渡すことはできないけれど」

「え？ でも、さっき守鎖之くんは【心力】を纏わせていましたよね？」

守鎖之を蹴り飛ばし、直後に纏わせたのは霊自身の【心力】。その纏わせた【心力】のおかげで、守鎖之は観客席に激突しても死ななかったのだ。

「あれは纏わせただけ。活性化させるほどではないよ。それにぼくは、大和くんには嫌われてるしね」

「……守鎖之くんは、ランクに拘らなければ良い人なんです。けど……あそこまで酷いなんて思わなかった」

こころが幼いころ、霊がFランクであることを理由に生存を否定していた近所の悪ガキたち。

今の守鎖之と幼少時の忌まわしき記憶が、同じに思えて仕方が無かった。

「でも、私はランクのことなんて気にしません！ 霊くんは霊くんです！ だって霊くんは私を守ってくれました！」

それは、忌まわしき記憶よりももっと古い記憶。

昔、【心蝕獣】が閃羽に侵入してきたことがあった。運の悪いことに、幼い霊とそころはその場に居合わせ、侵入してきた【心蝕獣】に狙われてしまった。

周りの大人たちが我先にと逃げ出すなか、霊はこころの手を引いて逃げ出し、襲ってきた【心蝕獣】から身を呈して庇ったのだ。

「霊くんは卑しくなんかないです！ 弱くなんかないです！ だって私がいま生きているのだって、あの時霊くんが————痛っ！！」

「こころ?!」

突如、頭を抑えて苦しむこころ。

瞳孔が大きく開き、酸欠しているかのように口を大きく開く。

「あの、時……レイくんは、レイくん……違うの……だって、今こうして生きてる……」

あの時のことを思い出そうとすると、なぜか脳裏に亀裂が奔る。そしてノイズが混じるかのように記憶が消え、その影響なのか激しい頭痛が襲ってくる。

「こころ……思い出さなくていいんだ。それは思い出す必要のない思い出だよ?」

「レイ……くん……」

「僕の間を見て、こころ」

霊がこころの顔を覗き込むようにして視線を合わせる。

黒い瞳に【心力】を集中しているのか、その目は薄っすらと青い光を放っていた

「壊れちゃうからって、おじいちゃんがこちらの記憶に封印を掛けたんだ……けど、外れかかってるみたいだね。ごめん……ぼくがそばにいるから思い出しやすくなってるんだよね？　忘れて。忘れるんだところ」

「レイくん……私……」

「忘れるんだ……【ぼくが殺されたこと】なんて」

精神的な暗示をかけ、その一言で再度封印を掛ける。

一種の催眠術だが、【心力】を併用することでより強力に……こそ洗脳に近いレベルとなる。

「……あ。あれ……霊くん？」

そして強力な封印を掛けられたことで、こころは平静を取り戻した。

「傷の治療は終わったよこころ。わざわざありがとね」

そっと、優しく。

霊は包み込むようにこころを抱きしめる。

意識を取り戻した矢先の、不意打ちの抱擁にこころは顔を赤くして慌てた。

「え、ええ？！　ああああ、あの！　レイくん？！」

「クスっ……慌てると昔の呼び名になるよね。こころはさ」

ぽんぽん、と優しく背中を叩く霊。

そうされるととても落ち着き、次第にこころも霊を抱きしめ返すこ

とができた。

心臓は変わらず早鐘のように鼓動を繰り返しているが。

「レイくんと……霊くん……どっちがいいですか？」

「いいよどっちでも。こちらの呼びやすい名前で呼んで？ どっちで呼んでも、ぼくは振り返るし、助けに行くから」

「……はい」

短い間だったような気もするし、長い間だったような気もする。とにかく二人はそのままでいた……。

いや、いたかったという方が正しいか。

「君たち、保健室でしっぽりするのとは定番だがな、せめて人が来ないようにカギを掛けたらどうなんだい？」

ばっ、と離れるところ。

対して霊は、声を掛けて来た人物がいることを知っていたかのように、冷静に話しかけた。

「しっぽり？ って、なんですか？」

「そりゃ決まってる。若い男と女がb——」

「わああああ！！ く、霊くんは知らなくていいことです！！ それと私たち、まだそんなことしてません！！」

「ほほう……まだ、か」

「あああああ！！ ま、まだというか、なんというか……って、保ほ住先生！ いづずみつからそこに！？」

「ちょうど今だ。なんかいい雰囲気だったが、もうすぐここに運ばれてくる生徒がいるから邪魔をさせてもらったよ」

医療室のドアに寄りかかり、人の悪い笑みを浮かべながら入ってくる女性。

はずみたてこ
保住建子。

保健室で言うところの、保健の先生。この心皇学園・医療室の専属外科医で、負傷した生徒の治療を専門にしている。

長い髪を後ろで一つのお団子にして纏めており、長身の身体を常に白衣で覆っているメガネ女性。

男装させたら様になるであろう、クールに笑う麗人だ。

「おや？ 君はさっき大和と決闘していた……」

「はい。みかみくしび御神霊です。怪我の治療をしてもらってました」

「ああ……純愛の【感応心療】か。ちゃんと治ったかい？」

「ええ。手のひらの怪我だったんですが、この通りです」

傷痕が一切残っていない右手を見せる霊。

握ったり開いたりして、問題が無いことを確認している。

「純愛の治療なら安心だな。それでそれで？ お礼にしっかりと
う訳かい？」

「はあ……お礼はもちろんですけど……しつぽりって……」

「だからっ！！ 霊くんは知らなくていいんです！！ 保住先生も、
生徒に何を吹き込むつもりですか！！」

「はっはっはっ。ちょっとした冗談だ。それより、そろそろ来たな」

保住が医療室の中へ入ると、担架が運ばれてきた。

その担架で運ばれているのは、さっきまで霊と戦っていた守鎖之。

すでに目覚めており、霊に蹴られた腹を押さえて苦しんでいた。

「手術の必要はないんだが、大事を取ってここで休ませることにな
ってね」

大和をベッドに移すよう指示し、聴診器を取りだして容態を確認す
る保住。

霊とこちらも保住の後ろに立ち、様子を見守ることにした。が、大
和が保住の後ろに立つ霊を見つけ、声を荒げた。

「Fランクっ……おまえ、薬か何か使って【心力】を増大させてい
るな?！　そこまでしてところが欲しいか!？」

【心力】を増大させる薬、というのは実在する。

一種の興奮剤でもあり飛躍的に【心力】を高めるが、体内のホルモ
ンバランスを崩す副作用が強いため、使用や生産は厳しく規制され
ている。

「騒ぐな大和。御神といったか、ちよいとこれを口に含め」
「んぐっ」

保住は胸ポケットから白く細い紙を取り出し、霊の口に突っ込む。
数秒して口から離し、その紙を見つめる。

唾液から薬物の有無を調べる、簡易検査紙だ。

「薬物反応なし。残念だったな大和。負けたのは実力だ」

「そんな訳があるかっ……オレが、Sランクのオレが！　Fランク
のゴミに負けるなどっ——」

「騒ぐなと言っただろバカ者」

大和の腹を軽く押す。霊に蹴られたところだ。当然激痛が走って呻く。

「ぐうつ!？」

「まったく……男らしくないぞ？」

「く、薬を使うような奴に比べたら……」

「だから、薬物反応なしだと言ってるだろうに……はあ。先に治療だな。ちやうど純愛もいるし、【感応心療】で治してもらった方が早い。できるか？ 純愛」

ため息を吐きつつ、こころに向き直って聞く。

一応こころと守鎖之が幼馴染だということを知っている保住は、それで【感応心療】に必要な同調が比較的容易だろうということ勧めたのだが……こころはあまり乗り気な様子ではなかった。

「条件が……あります」

「条件？」

珍しい、と保住は思った。

無条件で他人に優しさを施すところが、条件を出してくるのは意外だった。

「守鎖之くん、霊くんに謝って。そしたら、治療してあげる」

「なっ!？ 何を言ってるんだこころ……何故オレが謝らなきゃいけないんだっ」

「守鎖之くんこそ、どうして霊くんに突っかかるの？ 霊くんは何も悪いことなんかしてないのに……」

「ゴミの分際でおまえに近づき、オレに盾突いた！ これ以上にふざけた話があるか?!」

「……」

保住は、本人を前にしてよく言えるな……と呆れた。

が、それ以上にこちらの視線が険しくなったことに気が付いた。こりゃ駄目だな、と早々にこちらの【感応心療】を諦める。

「もういい。行きましょう、霊くん」

「え？ う、うん……」

てっきり【感応心療】を施すものだと思っていた霊は、こちらの硬質な声音に一瞬反応が遅れた。

が、手を握られ引っ張られるように歩かされるので、遅れることなくここに付いてく。

「ま、待てところ！ 【感応心療】はしてくれないのか？ オレ達、

たった二人きりの幼馴染だろ……」

「……私にとって幼馴染は、守鎖之くんだけじゃないの」

振り返ることも止まることもなく、霊を連れて医療室を去るころ。守鎖之はそれを、ただ黙って見送ることしかできない。

「な、ぜ……何故だ、ころ……」

「はあ……大和、おまえ格好悪すぎだ。もう少し乙女心を理解してやらんと、幼馴染という優位性は役に立たんぞ？ それじゃあ振り向いてももらえない」

保住の忠告に無反応の守鎖之。

やれやれ、とまた溜息を吐いて、保住は義務としての治療を準備した。

第7話【思い出す必要のない思い出】（後書き）

●御神霊———主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛^{じゅんない}———霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●大和守鎖^{おおわすきの}之———Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。この幼馴染。

●保住^{ほずみ}建子^{たてこ}———閃羽心皇学園の保険医。外科治療専門。ちよつと不良な先生。

第8話【戦時権限】

閃羽にもスラム街というものがある。

規模としては比較的小さいが、そこに住む人々は廃屋や屋外での生活を余儀なくされ、餓死者は出ないものの最底辺の暮らしを日々生きている。

外縁防壁の修復作業という、毎日やらなければならない仕事があるため雇用の問題はほとんどないのだが、それでもあぶれる人間はいるもの。

彼らは自らの意思でここにいるからだ。自らの意思で働かないからだ。

「あゝゝゝ……あゝゝゝ……」

「死ぬんらゝゝゝ……どうせみんな死ぬんらゝゝゝ」

スラム街……そこに住む人間というのは、基本的に心の強さを表す指数がFランクの人間。

彼らは常に弱く、明日に対して希望を見出せない。そして自らの意思で未来を切り開こうとしない。

——社会不適應者……人間の失敗作……弱い心を持つ最底辺の人間——

そのスラム街の一角に、黒いフードに身を包む怪しい男がいた。

その男は、スラム街の人間を人気のない裏路地に連れ込み、暴行を加えていたのだ。

「ゴミが、ゴミが、ゴミが、生きている価値のないゴミがつ!!」

吐き捨てるように叫び、無抵抗な貧民に容赦ない暴行を繰り返す。

「イテえ……イテえよお……」

「ゴミがしゃべるなっ。ゴミのくせにつ、ゴミのくせにつ、あいつはあっ!!」

「ごふっ」

やがて血を吐き出し動かなくなる貧民。

激しい暴行に耐えられなかったのもあるが、もともと彼らは弱く、生きようとする意思が乏しい。

最低限の生存本能に従い痛みを訴えたが、黒フードの男には聞こえていなかった。

「はあっ……はあっ……そうだ、あいつはこいつらと同じゴミなんだ……」

何かを確認するように呟く黒フードの男。その目には狂気しか宿っていないかった。

「そうだ……あれは何かの間違いだ……。Fランクは、ゴミなんだから……」

暗く笑い、肩を震わす黒フードの男。

その腰には真っ白な剣の【心器】が提げられていた……。

翌日。

暴行された形跡のある死体が発見されたが、スラム街ではよくある

こととして処理された。

何より、この後に起こる事件が、この出来事を些事として塗り潰してしまったからだ……。



最年少ナイトクラス・大和守鎖之の敗北は、心皇学園の隅から隅まで広がっていた。

全校生徒のほとんどが、先日行われた決闘を見ていたのだから当然だ。

そこで気になるのが、大和守鎖之と戦った対戦相手。

相手は誰？ どんな奴？ 学年は？ 何組の？ 大和守鎖之と同じか。ランクは？ えっ？！ Fランク？！

簡単に纏めるなら、いまの心皇学園はこの話題の流れ方が一般的だ。最年少ナイトクラスを倒した生徒の名前。

すなわち、その名前の主こそがこの学園最強ということになる。であれば気になるのはその生徒の素性。そしてランク。

このランクに話がいくと、皆一様に何かの間違いではないかと疑う。そして実際に見に来る訳である。

「今日も私たちのチームリーダーは注目の的だねえ……」

霊が率いる第7チームのメンバー、あじやらほがら戯陽朗の一言がすべてを物語る。

廊下側のドアにはひっきりなしに生徒が蠢き、噂の生徒を一目見ようと覗きこんでいた。

まるで珍動物でも見に来たような騒ぎ……当事者である霊は他人事のように思った。

「しかし少々うるさい気もするな。そうは思わんか？ リーダー」

「まあね……でもどうしようもないし、何もしなければみんな飽きて居なくなるんじゃないかな」

朗と同じく第7チームのメンバー、はりむらそうき針村槍姫の問いかけに、これまた他人事のように答える。

霊にとって気にするような出来事でないのは本当だ。

誰かに迷惑がかかるなら別だが、今のところ問題らしい問題も起きてないので放置している。

何かアクションを起こさない限り、この騒ぎはすぐに収束する……そう思っているのだ。

目下のところ、懸案事項は別のところにある。

「霊くん……難しい顔してますね。やっぱり心配ですか？」

3人目のメンバーにして幼馴染の、純愛こころ。

喧騒を無視する……というよりは他のことが気になって仕方が無いという霊の表情を心配していた。

「うん……警戒態勢が敷かれているのに吞気だなんて思って。いつもこんななの？」

「ふむ。大量の【心蝕獣】の発見……それも閃羽に向かっているとの報告。しかしナイトクラスが5人いるからということで、皆安心しきっているんだろうな」

この世界では、基本的に一つの都市で生産から消費のすべてが賄われている。

世界各地に点在する都市と交易をする必要は無く、【心蝕獣】の横行を考えればリスクが大きい。それでも隣接する（数十kmは離れているが）都市間での交易は行われており、互いに技術を交換しあったり、その都市の特産物をやり取りしたりして、発展の停滞を防いでいた。

今回もたらされた、大量の【心蝕獣】の群れの情報。

それは隣接する都市からやってきた行商人たちからのものだった。

これを受け、閃羽の上層部は【閃羽心衛軍】の名の下、警戒態勢を発令。心皇学園の生徒たちには警戒態勢が敷かれ、有事の際には戦線に参戦する可能性が示唆されたのだ。

「過去に何回かあったが、そのいずれもナイトクラスと【閃羽心衛軍】だけで事足りていたからな。現実味が湧かないんだろう」

今まで大丈夫だったから、これからも大丈夫。

その雰囲気は一瞬にして凍りつくこととなった。

教室にやってきた、守鎖之の一言によって。

「みんな聞け！ 【心蝕獣】の群れの中にナイトクラスが数体確認され、ビショップクラスも大量に確認された！

これは閃羽存亡の危機に関わるとして、オレたち学園の生徒にも非常招集が掛けられた！ よって、ナイトクラス・大和守鎖之の権限において、おまえたちはオレの指揮下に入ってもらおう！！」

先ほどとは違うどよめきに包まれる生徒たち。

ナイトクラスの【心蝕獣】に対抗できるのは、ナイトクラスの【心兵】だけ。それが数体も確認された。これは今までに無いほど大規模な群れであることを示している。

「入学したばかりのオレたち一年生は、後方支援にまわされることになる。至急体育館に集まり教官達の指示を仰げ！ オレはナイトクラスとして軍と共に迎撃に出る……。こころ！ おまえはオレと一緒に来てもらう」

「え……」

「まで大和！ なぜこころを連れて行く？」

「分からないのか針村。こころの力は重要な戦力だ。オレと一緒に小隊で戦ってもらおう」

無線式誘導兵器による情報収集と味方の援護。多くの役割を一度にこなせるのが【感応者】だ。

しかもこころは、閃羽の誰よりも優秀な資質を持っている。連れて行く理由としては、分からないでもないが……。

「待ってよ！ こころちゃんはまだ一年生だよ？！ 大和くんと違って実戦経験なんかないんだよ？！」

「安心しろよ戯陽。こころはオレが守る」

「ナイトクラス数体相手に、守れる自信がキミにはあるの？」

静観していた霊が、こころを庇う様にして前に立ち、大和を睨み付ける。

「Fランク……この前の『訓練』に勝ったからといって調子に乗るなよ？」 『訓練』と『実戦』は違う。

おまえは黙って雑用でもやっている」

「決闘じゃなかったんだ」

決闘を無かったことにしようとしている大和に、本当に大丈夫なのかと問いかけたくなる。

負け惜しみにしか聞こえないが、ここで議論している時間は無い。

「なら僕も行くよ。キミを倒した『訓練』の成果を見てみたいんじゃない？」

「ハッ。【心器】もまともに使えない奴を同行させられるものか。足手まといだな」

語弊があるが、概ね間違っていない。

普通の【心器】では霊の膨大な【心力】に耐え切れず、オーバーヒートしてしまうのだ。

戦闘中にそのような事態を招けば、巻き添えを出しかねない。

「ナイトクラスとして命令する。御神霊……おまえは待機だ。命令違反は禁固刑。破ってくれるなよ？」

「守鎖乃くんっ！ そんなこと——」

「オレは実戦経験がある。訓練ごときでいい気になってるFランクとは違う。それに、ここはオレが守るしな」

チームリーダーとはいえ、一介の高校生と然して変わらない霊に、戦時権限を持つ守鎖乃の命令に抗う術は無い。

それは槍姫や朗、そしてここも同じ。

霊は守鎖乃に連れて行かれるところを、黙って見送るしか出来なかった。



心蝕獣の種類はそれほど多くはない。

その理由は不明だが、クラスによって姿形が決まっており、ある程度外見で【心蝕獣】の強さを判断できる。

一番下のポーンクラスは、異形の生物。

バスケットボールほどの大きさの目玉に、複数の触手が生えているという姿が特徴。

空を飛び、目から光線を放ち、触手で獲物の体液を吸う。

通称・アイズ。

ある程度訓練された【心兵】なら撃退は可能だが、数が多く物量で押し込まれやすい。

次にルーククラス。

基本的に野生の動物……特に四足動物の外見をしており、側頭部に三対六つの複眼を持つのが特徴。

狼型、猫型、狐型、牛型など、ポーンクラスに比べれば種類は多い。四足歩行ゆえに素早く、鋭い牙で獲物の肉を食い千切る。

一般の【心兵】数人掛かりで挑むのが定石だが、ルーククラスも何体かの群れを形成していることが多いので厄介なのだ。

ビショップクラスは恐竜……特にティラノサウルスに似た姿を取っている。

ルーククラスと同じく三対六つの複眼を持ち、大きさは人間より一回り大きいくらいで、大昔に生息していたといわれる恐竜ほど巨大ではない。

しかし発達した四肢と牙で獲物を蹂躪し、一体だけでも一つの都市に多大な損害を与えられる戦闘能力を持つ。

そしてナイトクラス。

その外見は中身の無い甲冑。強固な鎧に剣や弓などの、人間が持つ武器を使うタイプだ。

緑色に発光しているのが特徴で、エネルギーの刃を放出して遠方の敵を切り裂くといった事もできる。

守鎖乃が霊に対して放った【斬撃波】に近いだろう。威力も高く、一体だけで都市を滅ぼしかねない存在だ。

しかし数は多くなく、基本的に一体で行動している姿が目撃されている。ナイトクラスが都市を襲う頻度は高くない。

このクラスがそのまま強さの序列を表しており、人間にも適用される。

ナイトクラスが閃羽に5人いるということの凄さがわかるだろうか。大抵の都市では1人いれば安心されるほうで、多くはポーンとルーク相当、たまにビショップが混じっているくらいの【心兵】で構成されているものなのだ。

以上のような説明で分かる通り、複数のクラスが一度に群れを成して攻めて来ることは危機的な状況である。

しかもナイトクラスが数体。ビショップクラスも十数体。

都市を数回滅ぼして余りある脅威が、閃羽に迫っているのだ。

「守鎖乃くん、やっぱり霊くんの力は必要だと思うの。あんな数……」

都市を囲む外縁防壁の外に出た、守鎖乃の率いる【閃羽心衛軍】の
小隊。

ナイトクラスを筆頭に5つのグループに分かれ、それぞれ【心蝕獣】
の群れを撃退するつもりだ。

皆、戦闘用のフルフェイスメットに、黒いバトルスーツ【心装】を
着込んでいる。この【心装】に【心力】を纏わせることで【心蝕獣】
の攻撃から身を守る鎧となるのだ。

準備を整え、岩と砂だらけの荒野の向こうを見渡すと【心蝕獣】の
群れが見える。

「心配しなくていい。先にナイトクラスの【心蝕獣】を倒してしま
えばすぐに終わる。ここはオレの援護だけをしてくれればいいん
だ」

守鎖乃には自信があった。根拠の無い自信があった。

この前のFランクとの『訓練』の結果は何かの間違いで、イカサマ
で負けたに違いないと。おそらく未確認の新しい薬……薬物反応の
出ない薬を使って強化していたのだ、と。

その証拠に、Fランクは【心器】を使いこなせていなかった。

オレは強い。圧倒的に強い。Sランクであり、最年少ナイトクラス
として将来を期待されている優秀な【心兵】だということを、この

戦いで証明する。

そしてこちらの目を覚まさせ、自分のチームに入れる。

守鎖乃の頭にはそれしかなかった。

「行くぞっ！ 【心蝕獣】を掃討する！！ オレに続けえっ！！」

5つのうち一番先に動いたのは、守鎖乃の率いるグループであった。



守鎖乃たちが【心蝕獣】の群れに挑む少し前。

霊、槍姫、朗の三人は未だ教室にいた。

霊は指先に【心力】を集中。目に見えないほど細い糸を出していた。

そんな霊に問いかけたのは、槍姫だった。

「御神くん、どうだい？ 何か情報はつかめたか？」

糸は霊に触覚と聴覚に相当する感覚を伝える。

膨大な【心力】を有する霊は【心力】で作った糸を伸ばし、各方面に寄せられる情報を収集しているのだ。

「【心蝕獣】の数は数百単位って言ってるね。確認できるだけでも

ナイトクラスが12体。ビショップクラスはその3〜4倍。残りはルーククラス以下」

「ナイトクラスが……12体だと？　こちら側ですら5人しか居ないのに、倍以上の戦力差……」

「それだって、ビショップクラスをすぐに倒せるほどじゃないですよ？　戦力差は倍どころか、10倍も20倍もあるよ」

はつきり言って危機的状況という言葉は生ぬるい。

絶望的。絶対絶命。閃羽壊滅。そんな言葉が槍姫と朗の脳裏に浮かぶ。

「ナイトクラスが10体以上……経験からして、あの群れを統括している親玉がいる……」

「どういふことかな？」

「あの群れは一体の【心蝕獣】を頂点として、人間でいえば命令系統を作っている。その頂点にいる【心蝕獣】は、ナイトクラス5人が束になっても敵わないってこと」

「待ってくれ御神くん！　それではナイトクラスより上があるような言い方じゃないか」

あの群れだけでも絶望的な戦力差だというのに、さらに脅威があるなど信じられない。信じたくない。

だが無情にも、霊は真実を告げた。

「ナイトクラスの上……ジェネラルクラス。

一体だけで都市を消滅させる力を持った【心蝕獣】だよ」

「しょ、消滅……だと？」

「うん。文字通りね。ナイトクラスは精々壊滅ていど……都市の原型は残る。けれどジェネラルクラスは、その気になれば消し飛ばす

勢いで襲ってくる。それをしないのはエサが無くなるから。だから群れを、軍隊を作って襲わせ、都市丸ごと食らい尽くすんだ」

「そ、そんな……間違いないのか？」

「経験予測……残念だけど、たぶん間違いない」

絶句する槍姫。

それは朗も同じだ。いつも明るい彼女の笑顔もこの時ばかりは凍りついていた。

二人が絶句するなか、突然霊は立ちあがり教室の外へ歩き出した。

「御神くん、どこ行くの?!」

「ダナン先輩のところ」

短く返し廊下へ出る。

慌てて槍姫と朗も付いてきた。

「どうするつもりだ、御神くん」

「先輩に【心器】を作ってもらおう」

「もしかして、糸を使う【心器】かな? でも、今からじゃ間に合わないんじゃないかな?!」

霊は胸ポケットから黒い棒状のデータ端末体を出し、言葉が続けた。

「大丈夫。設計データがあればすぐにでも作れるから。問題なのは……」

指先に集中していた【心力】を収め、歩く速度を速める。

「普通の【心器】で、どこまで戦えるかってこと」

こんどは全身に【心力】を纏わせ身体能力を強化。

直後、槍姫と朗を残し、霊は猛スピードで走って校舎の中庭へ出る。そして屋上へ跳ぶ。

着地し、今度はグラウンドの方へ跳躍。

見降ろすといくつかのテントがグラウンドに張られており、大勢の生徒……【心理工学科】の生徒たちが動き回っていた。

重力に従い落ちていく。見る見る迫る地面。しかし霊は構わず着地態勢に。

激突するように着地し、轟音と共に砂埃が舞う。

「うわあっ?! な、なんだ?!」

「い、今……人が落ちてこなかった?」

砂埃の舞う地点を凝視する生徒たち。

その砂埃の中から走って出てくる霊。彼はまっすぐダナンのところへ向かっていた。

「あゝ、御神くんなんだなあゝ」

「ダナン先輩! お願いがあります」

ぽっちゃりした体型にゆっくりした口調の生徒、【心理工学科】のダナン・デナン。

テントの中で【心器】の整備をしていた彼は、騒動の主が霊だと分かって安堵した。彼ほどの【心力】を持つ人間ならば、何でもあり

だと思っているからだ。

「先輩、今すぐ【心器】を作ってくれませんか？」

「構わないけれど……でもこの前のように、すぐオーバーヒートしてしまうんだなあ」

「いいえ、新しい【心器】を作って欲しいんです。この設計データを、ダナン先輩に託します」

データ端末体を出し、ダナンに渡す。

受け取ったダナンはすぐにデータを引っ張りだし、モニター画面に詳細を表示。

そこには、刀身の無い……柄だけのデザイン画が映し出されていた。

「これは……」

「この前の刀型【心器】を改良すれば、加工機で出来るでしょうか？」

「形だけならできるんだなあ。けれどこのデータの示すスペックは……この閃羽の技術力でも再現不可能なんだなあ」

「そのデータの1／10000でも構いません。最低でも数百本の糸を出力できれば、なんとかなります」

それは【心力】によるエネルギー状の糸を出力する【心器】だった。本来、霊が使っていたタイプの【心器】。刀身の無い刀……柄だけの刀。それが霊の本来の能力を引き出す【心器】なのだ。

「それだったら可能なんだなあ……。機関部分は刀型の【心器】を流用できるから、5分だけ待って欲しいんだなあ」

そういうとダナンは席を立ち、何人かの生徒に声を掛ける。

【心器】は加工機に設計データを入力すれば、よほど大掛かりで歪なものでない限り即座に製造できる。

心の力を【心力】に変換する【CMPコア】と、【心力】のエネルギーを伝達する【心経回路】が機関部となり、そこから外装部……刀ならば刀身……に【心力】を送って武器としての能力を強化する。

霊が依頼した【心器】の場合、【コア】と【心経回路】のみで事足りる（柄の部分を外装とする場合もあるが、武器としての能力には関係ないため割愛する）ので、比較的短い時間で製造できるのだ。

「【心経回路】が複雑になるから、オーバーヒートしやすくなるんだなあ」

「このタイプの【心器】なら使い慣れています。どのくらいの糸を出せますか？」

「うーん……528本……それ以上は保障できないんだなあ」

「十分です」

加工機から出された、刀身のない柄だけの【心器】。

先日の大和との決闘で使った青い刀型【心器】の、柄だけの物。

刀身を収める柄の先……茎なかじと呼ばれる部分から【心力】で作った無数の糸を射出し、相手を貫いたり、拘束したり、絡めて喰い込ませ圧殺したりする……それがこの【心器】の特徴だ。

「御神くん、この【心器】の名称はなんて言うんだなあ？」

「【糸刀しとう】と、僕のおじいちゃんの名づけていました」

「分かったんだなあ。それじゃあこの【糸刀】、もっと研究して改良しておくんだなあ。だから絶対帰ってくるんだなあ」

「はいっ。行ってきます」

【糸刀】を受け取り、ダナンにお辞儀をして礼を言う。

それから再び全身に【心力】を纏わせ身体能力を強化。

校舎の屋上にある手すりに、【糸刀】から数本の糸を射出。絡ませ、自身の身体を引っ張らせて空へ跳び上がる。

「無事でいて……こころっ」

引っ張りの勢いを利用し、都市の上空を覆う半透明の膜上エネルギーバリアを無理矢理突き破る。

そして数km先の外縁防壁の外……戦場へ直接跳び込んだ。

第8話【戦時権限】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こ

ころの幼馴染。

●ダナン・デナン——心理工学科のぼっちゃり系3年生。【心器】
に関する技術はなかなかのもの。

第9話【虐殺の糸】

戦端を切ったのは守鎖之だった。

【心力】を剣に纏わせ斬撃として放つ【斬撃波】で、【心蝕獣】の群れに先制攻撃を仕掛けた。

先頭を浮遊する、バスケットボール大の目玉に複数本の触手が生えたポーンクラスの【心蝕獣】……通称・アイズが、守鎖之の【斬撃波】によって数体纏めて切り裂かれる。

さらに数体の狼型【心蝕獣】のルーククラスも深手を負わされた。

「このまま蹴散らす！」

黒のバトルスーツ【心装】に仕込まれた【コア】と【心経回路】を通して【心力】が全身に行き渡り、身体能力を強化して群れの中に突っ込む。

白色に輝く両刃剣を振るい、ザコのアイズを一刀両断。

続けて襲いかかる二体目も突き刺し、【斬撃波】で振り散らす。

側頭部に三対六つの複眼を持つ狼型【心蝕獣】のルーククラスも、守鎖之の剣によって切られ、後続の【心兵】が止めを刺す。

「こころ！ ナイトクラスの【心蝕獣】はどこだ?!」

遅れてやってきたところに、【シールドビット】で索敵を行わせる。上空から12機のビットが戦場を見降ろし、目当ての敵を見つける。

「居た！ 正面！」

「よし！ 付いて来い、こころー！！」

襲い来る【心蝕獣】を次々と薙ぎ払い、突破口を開いて行く守鎖之。こころも【シールドビット】の何機かを援護にあて、守鎖之の進攻を補佐。

やがて見えてくる人型の甲冑。

剣と丸い盾を構え、緑色に発光して守鎖之を威嚇していた。

「まずはこいつだっ！！ 死ねっ！！」

斬り掛かる守鎖之。

白い【心力】を纏わせた斬撃がナイトクラスの【心蝕獣】に振り下ろされる。

その斬撃を【心蝕獣】は盾で防ぎ、すぐに自身の剣で反撃する。

「ちっ！ 生意気な！！」

剣を振り下ろせば盾で防がれ、反撃される。それを避けてまた再度攻撃。

ナイトクラス……強さの指標でいえば守鎖之と互角であるが故に、ポーンやルーククラスのように簡単には倒せない。

しかも、【心蝕獣】の方が数が多い。

横合いからティラノサウルスに酷似した、一般の成人よりも一回り大きいビショップクラスの【心蝕獣】が、鋭い牙で守鎖之に襲いかかる。

「守鎖之くん、危ない!!」

気付いたところが【シールドビット】2機を守鎖之のそばに向かわせ、盾にする。

そしてさらに2機の【シールドビット】を、【心蝕獣】の真上から攻撃させる。

【シールドビット】から、圧縮された【心力】の弾丸を射出。

黄色に光る弾丸が見事に命中し、ビショップクラスの【心蝕獣】を怯ませた。

「いいぞこころ！ やはりおまえはオレにこそ相応しいんだ!!」

こころとチームを組めず、Fランクのゴミにプライドを傷つけられていた守鎖之は、鬱憤を晴らすかのように激しい攻撃をナイトクラス【心蝕獣】に浴びせる。

だが忘れてはいけなかった。

こころは横合いから襲ってきたビショップクラスの【心蝕獣】を倒した訳ではない。生きている。

絶命していなかった【心蝕獣】は口から光弾を放ち、守鎖之を攻撃。光弾は直撃し、爆炎をあげて守鎖之を吹き飛ばした。

「ぐはあっ!?!」

いくら【心装】によって受けるダメージを減衰させられるといっても、直撃を受ければ当然タダでは済まない。

ましてナイトクラスに次ぐ戦闘能力を持つビショップクラスの攻撃。直撃を受けた守鎖之は為す術もなく地面に叩きつけられた。

「撃てっ、撃てっ！ やらせるな!!」

やられた守鎖之を助けようと、同じ小隊の【心兵】がアサルトライフル型の【心器】で応戦する。

だが効果は今一つ。

ポーンクラス程度なら何とか退けるが、ルーククラス以上になると足止めが精一杯。

守鎖之に追撃を掛けようとするナイトクラスの【心蝕獣】に至っては、銃弾そのものが効いていなかった。

「くっ、くそおっ!! 数が違いすぎるっ」

しかも数が多い。

閃羽の【心兵】側はルーククラスまでを相手にするのが精一杯であり、物量差で圧倒されていた。

そうなれば……瓦解するのはあつという間だ。

一人の【心兵】がポーンクラス・アイズに肉薄され、その触手に貫かれる。

「ぐああああ!! やめろっ! やめてくれええええ!!」

触手から【心兵】の心に干渉し、蝕む。

そして【心力】の源になる心を喰らい、自らのエネルギーにする。

これこそが、【心蝕獣】と呼ばれる由縁。

人の心を蝕み、弱らせ、喰らう。特に複雑な心を持つ人間は、動物と比べて非常に濃厚なエサとなる。

【心蝕獣】にとって人間は、最高の栄養源なのだ。

「あ……あつ……」

心を喰われれば、その人間は生きながらにして屍となる。魂のない人形だ。

エネルギーを満たした次は、その体組織を維持するために血肉も喰らう。

アイズの場合、人間の体液……血を吸収する。人体に侵入させた触手から血液を大量に吸い上げ、たちまち干からびる【心兵】。

血の気が失せ、肌から瑞々しさが失われ、ミイラのように皮と骨だけになる。

ルーククラス以上の【心蝕獣】になればその牙で獲物突き刺し、心と血肉を同時に喰らう。

数人ほどルークやビショップが存在するが、ほとんどはポーン程度の戦闘能力しかない人間側は、ナイトクラスを失えば単独で撃退することは不可能だ。

(どうすれば……どうすればいいの……)

混戦状態になったことで、こころは守鎖之から離されてしまう。

それでも【シールドビット】を駆使して【心蝕獣】を撃退するが、ティラノサウルスタイプのビショップ級【心蝕獣】はなかなか倒せない。

しかもこころの【心力】が上質なものと悟ったのか、ビショップクラス3体に狙われてしまう。

他の【心兵】は唯一の望みである守鎖之を守ろうと応戦。もしくは

喰われているかのどっちなだ。
守られている守鎖之は気絶しているようで、しばらく起きそうもない。

（ビショップが3体……1体あたり4機で応戦すればっ!!）

【シールドビット】の弾雨を浴びせ、ルーク以下の【心蝕獣】を一掃。そして周囲に展開して砲台とし、向かってくるビショップ級【心蝕獣】を迎撃する。

12機の【シールドビット】から放たれる【心力】の弾丸。
黄色く光る弾丸が雨のように降り注ぎ、【心蝕獣】を次々と撃つ。
だが倒せてはいない。近づけないようにしているだけだ。

それでも守鎖之が目覚めるまでの時間稼ぎにはなる……と思っていたが、それは儚い希望だった。

突如、12機の【シールドビット】がすべて爆発。何かの攻撃を受け、撃墜されたのだ。

「え……」

状況を飲み込めていないところに、守鎖之を倒した甲冑が……ナイトクラスの【心蝕獣】が襲いかかる。

「きゃっ——!!」

気付いて、咄嗟に左腕に待機させていた残り4機の【シールドビット】を、そのまま盾にして防ぐ。

しかし威力が予想以上に強く、ナイト級【心蝕獣】の剣を受け止め

るも押し倒されてしまう。

ナイト級【心蝕獣】は、倒れたところに馬乗りになり、逃げられないよう押さえこんだ。

「ひっ—————」

何か蠢くような音がしたかと思うと、面部が上下にスライドして中身から触手が出て来た。

ポーンクラス・アイズと同じ、ナイトクラスも触手で獲物を喰らう。緑色に発光する甲冑とは違い、赤くヌメった触手。それはこころの頬を舐めるように這う。

「いあ……」

嫌悪感と死の恐怖に、心が折れそうになる。

助けを呼びたくても、声が出ない。そもそも助けられるのだろうか。ナイトクラスの守鎖之を倒した【心蝕獣】を、他の【心兵】が倒せるはずがない。

『こころの呼びやすい名前と呼んで？ どっちで呼んでも、ぼくは振り返るし、助けに行くから』

脳裏に浮かんだ、霊との会話。

それを思い出した瞬間、こころの声帯が恐怖を払い、空気を震わせた。

「たすけ、て……レイく、ん……レイくうううんっっ!!」

重みが……消えた。

ここに馬乗りになっていたナイトクラスの【心蝕獣】が、空高く舞い上がっていた。

空中で静止し、カタカタと震えている。まるで何かに抵抗するかのよう。

くギツ、ギギギツ————ギイイイイッツツツ>

奇声を上げ、空中で緑色に発光する甲冑がバラバラになる。

リーダーの断末魔を聞きつけた他の【心蝕獣】が、一斉に振り返った。

その視線の先には、こころが待ち焦がれた人物が……御神霊がこちらに向かって走ってきていた。

「レイ、くんっ……」

霊は、刀身の無い柄だけの【心器】を……名称【糸刀^{しとう}】を持っている。

柄の先端……刀身を収める茎^{なかじ}から無数の青い糸を射出し、その糸が波打つように乱れ舞い、【心蝕獣】を手当たり次第に引き裂いていた。

事態に気付いた多くの【心蝕獣】が、霊に敵意を向ける。

ポーンクラス・アイズは、目から光線を放ち、ルーク以上の【心蝕獣】は口から光弾を発射する。

「レイくん!!」

光線と光弾の嵐が、霊の全方位から迫る。避けられる訳が無い。

そう思った矢先、霊は真上へ跳んだ。

「ここに……手を出すなっ」

【心蝕獣】の群れを見降ろし、吐き捨てるように呟く。

その目にはすべてを憎悪する暗い瞳。大切な人を傷つけようとしたモノを容赦なく虐殺できると主張する、狂気の眼が映っていた。

「心弦曲——しんげんきよく——五月雨さみだれ」

真下に【糸刀】を向け、そこから糸が数百本……高速で吐き出される。

それらの糸は【心蝕獣】を貫く。

貫いた糸は、波打つように目にも止まらぬ速さで引き戻される。そしてまた高速で射出される。

一連の動作が瞬きの間に何度も繰り返され、【心蝕獣】たちはマシンガンの高速弾に蹂躪されたかのように散った。

それだけで、こころの周りにいた【心蝕獣】は全滅。

ナイトクラスを含む対心蝕獣用兵士【心兵】を壊滅に追い込んだ【心蝕獣】が、物の数秒で全滅した。たった一人の少年によって。

それは英雄的行為に聞こえるが、この光景……無数の肉片が散らかる戦場を見れば、大量虐殺が行われた現場に見えるだろう。どれもこれも徹底的に引き裂かれ、散らされ、内蔵物を外部に晒している。

頭部を両断され脳を撒き散らす狼型ルーク級【心蝕獣】……まるで動物虐殺。

四肢を切断され、両目と側頭部の複眼が抉りだされている。細切れにされた目玉らしきものもある。ちよろちよるとはみ出す血管らしきものがさらにおぞましさを際立たせた。

ティラノサウルス型のビショップ級【心蝕獣】……は、さらに酷い。何をどうやったのか鱗と皮をすべて剥がされ、残った肉は細切れにされ荒野にへばり付いている。

そして骨は散らばり血の海に浸っているというあり様。

【心力】で作り出した糸だけで、この惨状を生み出したのだ。御神霊という少年は。

「大丈夫？　　こころ？」

惨状の中心地に着地し、こころに歩み寄って気遣う霊。

これだけの虐殺を行ったにも関わらず、本人に血のりが付着していない。それはそうだろう。噴水のように吹き上がる血しぶきのかからない高みから攻撃していたのだから。

「レイ、くん……？」

「待ってて。すぐに【殺す】から」

特に表情を表している訳ではない。悦に浸っている訳でも、思い悩

んでいる訳でもない。

霊は、当たり前のように【殺す】という言葉を紡いだ。

「残りは128体……か。あれ？ おじさんと篤情教官のところは

ナイトクラスを倒してる……。

これなら528本もいらなかったか……」

眩き、【糸刀】を上に掲げる。

よく見ると、まだ数本の糸が【糸刀】から垂れている。それは四方八方に伸びていて、別の戦闘場所に向かっているようだった。

「心弦曲———竜巻弦」
しんげんきよく りゅうかんげん

突如、戦場のあちこちに竜巻が発生。

【心蝕獣】のみを巻き上げ、竜巻の中でバラバラにされている。

不思議なことに至近距離で戦っていた【心兵】は巻き上がらない。

確実に【心蝕獣】だけを屠っていた。

空高く舞い上がった【心蝕獣】の肉片。

赤い体液が霧状に空を漂い、風に流れていく。やがて竜巻が治まると風の流れが絶たれ、戦場から少し離れた地に赤い雨が降り注いだ。

「レイくん……一体、何を？」

「索敵のために這わせていた糸を使って、【心蝕獣】を殺したんだよ」

霊が【心力】で作り出す糸は、聴覚と触覚に相当する感覚を霊に伝える。

極細の糸は自由に伸ばし、そして動かすことができるので、相手に

気付かれずに触れさせることができる。

その過程で敵の数を把握。

糸を螺旋状に空へ舞い上げ、糸に絡みつかれていた【心蝕獣】は舞い上がる糸に引き摺られ、引き裂かれ、バラバラに散る。

それが【心弦曲・竜巻弦】。広範囲の敵を一掃する霊の【心技】だ。

「それよりこころ。【感応者】のキミが、どうして前線に出ているの？」

「えっ……」

「【感応者】はビットの遠隔操作に集中するから、自身の守りが疎かになってしまう。だから後方で戦場を把握し、味方に戦況を伝え、援護するのが役目。【感応者】も広義では【心兵】だけど、近接戦には到底向かない。これはどんな優秀な【感応者】でも例外は無いんだ」

こころには実戦経験が無い。入学したばかりでまだ戦闘のイロハを知らない。

ある程度訓練を受けているとはいえ、それはビット型【心器】の扱ひ方であって、戦術や戦略を勉強していた訳ではない。

そういう意味ではすでに実践を経験しているはずの守鎖之が、こころにそういった指示を出すべきなのだ。

だが守鎖之は、こころを守れると思いがっていた。

根拠のない自信と、こころの意識を自分に向けてもらいたいがために、【感応者】本来の立ち位置を無視した。

ちなみに、他の小隊では前線に【感応者】を連れているナイトクラス指揮官は一人もいない。

では守鎖之の小隊員が注意をしなかったのかというと、事前に守鎖之が黙らせていたのだ。

弱者に比べて圧倒的な力をもつ守鎖之は、自分の息のかかった【心兵】を、常に手駒としている。

あり得ない話ではない。それだけの特権を持てるのがナイトクラスなのだから。

「ごめん、なさい……」

「……はあ。でもこころが無事でよかった」

「ありがとう……霊くん」

「ううん。約束は守るよ。必ず……だから、ここから早く離れて」
「え？」

問いかけるよりも早く、大地が揺れた。

地震かと思ったが……違う。何かが地面から迫り出すような感じだ。

「随分近くで待機していたんだね……こころ、ちょっとごめんね」
「え？ えっ？」

座り込むところを抱っこし、霊は後方へ……都市の方へ跳んだ。

直後、大地が盛り上がり亀裂が走る。

盛り上がり、崩れる大地から……山が、出て来た。

「く、霊くんっ！ 一体何が?!」

「この群れのボスが出てくるんだ……ナイトクラス以下を束ねる【心蝕獣】……ジェネラルクラスが」

「ジェネラル……」

現れる山……否、巨人。

荒野の大地を身に纏う山の如き巨大な巨人が、閃羽を飲み込まんと姿を現した。

第9話【虐殺の糸】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。このころの幼馴染。

第10話【ジェネラル・ゴーレム】

「あゝ……つたく、マジだりいゝゝゝ」

白銀の刀身を赤い血のりで装飾した小太刀二刀。

それを逆手に持ち、緑色に発光する甲冑姿のナイト級【心蝕獣】を切り裂く。

霊たちの教官にしてNo. 2ナイトクラスあつじょうちくば篤情竹馬は、自身に迫っていた2体のナイト級【心蝕獣】を撃破した。

ボサボサの髪を掻き、ついでにケツまで掻いて駄目人間をアピールする駄目男。

繰り返すが、こんな中でも閃羽のNo. 2ナイトクラスである。

「篤情少佐！ ケツ掻いてないで次へ向かってくださいよ！！」

「もうオレ達んとこのナイトクラスは倒しただろゝ。ってか数の差ありすぎだろダルくてやってらんねえよお」

同じ小隊員がティラノサウルス型のビショップ級【心蝕獣】を銃撃しながら抗議。

しかし竹馬は怠惰な態度を崩さない。

そんなやりとりを隙とみたのか、狼型のルーク級【心蝕獣】が竹馬に襲いかかる。

しかし次の瞬間、ルーク級【心蝕獣】は4つに分割されていた。

「寝むてえゝゝゝ。酒欲しいゝゝゝ。タバコ吸いてえゝゝゝ。あんみつ食いてえゝゝゝ」

「なんで最後が甘味?! ってか真面目に戦ってください——うわっ?!」

律義に突っ込みをする小隊員に、3体のポーン級【心蝕獣】——通称・アイズの触手が迫る。

余所見をしていた所為で反応が遅れた。迎撃できない。

死を覚悟したとき、3体のポーン・アイズは空中で2分割。血しぶきを上げながら地面へ落下した。

「よつと……余所見してんじゃねえよダリいなあゝ」

「誰の所為だと思ってやがりますかね?!」

「え————……オレの所為なの?」

「んがああああ!! なんっつでこの人がナイトクラスなんっつっじゃああああ?!」

「オレだって聞きてえよダリいなゝゝゝ」

地団駄踏む小隊員。

その間にも次々と小太刀二刀の【心器】で【心蝕獣】を斬り伏せる竹馬。

やる気のない態度と反比例するかのよう、その太刀筋はどんどん研ぎ澄まされていく。

竹馬の【心器】は【心力】を通し難い刀型に分類される小太刀二刀。小回りが利き、竹馬のナイト級【心力】の相乗効果で鋭い切れ味を見せる。

「おゝい後方支援。あとどんくらいだ？」

『まだ全体の一割も減ってません』

都市の外縁防壁付近に待機させている【感応者】・さえずみりち冴澄理知子中尉のビットから声が届く。

彼女はNo.4ナイトクラスにして、同クラスで唯一の【感応者】。操作できるビット数は12機。これらを同時に操り戦況を把握。各グループに伝えるのが彼女の役目だ。

『ちなみに、純愛大佐のところは3体のナイトクラスを撃破。一体あたりに掛かる時間は、篤情少佐より24秒早いですよ』

「え？ それって嫌味？ 人がダルい思いして戦ってんのに、劳いの言葉の一つもないの？」

『事実を述べたまでですが何か？』

「……超おゝゝダリいゝゝめゝゝっちゃ惰りいゝゝ」

逆手に持った小太刀で後ろから迫るルーク級【心蝕獣】を一突き。そして頭を掻く。

『それより、大和くんの小隊が芳しくありません』

「ナイトクラスに手こずってんのか？」

『というより、やられそうです』

「ダリいぞこんちくしょう。こっちだって援護に向かわせられないぞ？」

周囲は【心蝕獣】の群れに囲まれ乱戦状態。

ナイトクラスを倒したとしても、この物量差は容易くたやすひっくり返りはしない。

『さらにマズいことに、純愛大佐のご息女が大和くんの小隊に組み

込まれています』

「はっ？ そんなこと聞いてないが？」

『どうやら独断で組み入れたようですね。しかも前線に投入しています』

「……おいおい、あいつ馬鹿か？ 【感応者】を前線に出すなんて何考えて……ちっ。格好付けたいだけかよ。」

「そんで？ 純愛大佐にそのことを報告したのか？」

『するべき、でしょうか……。動揺されたら一気に戦線が崩壊する恐れがあります』

いくらNO.1ナイトクラスといえ、実の娘が知らないうちに戦場に放り込まれているなどと分かったら、どんなことになるかは想像に難くない。

まして理知子は先日の守鎖之と霊の決闘で、誠が親馬鹿であることを知ったのだ。

報告をためらうのも無理はない。

『っ？！ マズいですっ！！ 純愛大佐のご息女がナイト級【心蝕獣】に！！！』

「やべえのか！？」

『え…… 【心蝕獣】が、空中でバラバラに……？ え？！ あの子っ！！！』

「おい、どうした？！ 報告は正確にっ！！」

『御神霊、と言いましたか……彼が次々と【心蝕獣】を殲滅……いえ、これはもう虐殺に近いあり様だわ……』

微かに、理知子の声音が震えているのを、竹馬の耳は捉えた。

「御神が来たのか……。しかしあいつは普通の【心器】じゃまともに戦えねえぞ？」

おい冴澄中尉。御神は何の【心器】を使ってた？」

『わ、わかりません……見たことのない【心器】を使っている模様です。刀身のない、柄だけの……そこから糸のようなものが出ていて、【心蝕獣】を薙ぎ払っていますが……。』

え？ うそ……わずか12秒で37%の【心蝕獣】が殲滅？！
信じられない……何かの間違いよ」

先ほど理知子が報告したように、閃羽の【心兵】が今まで倒した【心蝕獣】は1割にも満たない。

それを霊は、たった12秒で4割近くの【心蝕獣】を倒してしまっただのだ。

戦況を随時把握している理知子からすれば、それは悪夢にも思える所業だ。人知を超えていると言ってもいい。

「糸……あいつ、【殺神器】は持ってきてないって言ってたんだが……設計データから作ったのか？」

糸、と聞いて思い当たる可能性を幾つか呟く竹馬。

しかし考えを整理するまえに、事態は大きく動く。

「ん……？ 風……いや、これは?!」

どんどん強くなる風。

やがてそれらは勢いを増し、砂塵を巻き上げ、そして【心蝕獣】のみを巻き上げる。

「あ、篤情少佐!! 一体何が起きてるんですかあ!!」

「これは、竜巻弦?! おい! 全員へたに動くなよお!! 巻き

込まれたら確実に死ぬぞお!!」

その言葉は理知子のビットを通して全軍に告げられる。

直後、【心兵】以外の【心蝕獣】すべてが竜巻に巻き上げられ、引き裂かれ、バラバラに散る。

空を赤い霧が多い、流れる風が遠くへ運ぶ。

そして竜巻が止まったと同時に、荒野の向こうに赤い雨が降り注ぐこととなった。

「へっ……美味しいとこ全部もっていきやがって。ダリいぞこんちくしょう」

口の端を釣り上げながらニヤリと笑い、お決まりの文句を垂れる竹馬。

しかし、このあとさらに文句を垂れることになる。

大地が揺れ、盛り上がり、巨人が現れたのだから。

「少佐！ あれも【心蝕獣】、でしょうかね？」

山の如き巨人。

岩の人形とでもいうべきその姿形は、ファンタジーに出てくるゴレムを彷彿とさせる。

丸い顔に二つの赤く光る眼。

ずんぐりと太い胴体。そして同じくらい太い両腕。

大地を陥没させる巨大な足。

「おいおいマジでダリいことになってんぞ……。あれは、弦斎のじいさんが言ってたジェネラルじゃね？」

「ジェネラル……？ 少佐、ジェネラル、とは……？」

「ナイトクラス以下を束ねる【心蝕獣】。つまりだな、ナイトよりも上のクラスなんだよ」

「そ、そんな……」

ナイトクラスでさえ厄介なのに、その更に上がいる。

絶望を通り越して思考ができなくなるのを、突っ込み小隊員は感じていた。



こころを抱え、空高く跳躍して後方に下がる霊。

然しもの霊でも、ジェネラルクラスを相手にこころを庇いながら戦うのは難しい。

「ゴーレムタイプ……一番メジャーなタイプだ」

「ゴーレム、ですか？」

「うん……ジェネラルクラスにも幾つかの種類があるんだけど、あれが一番見かけるタイプだよ。」

【大地の岩人ジェネラル・ゴーレム】……その巨体で都市を丸ごと喰いつくす化け物だ」

空中にいる二人に、ジェネラル・ゴーレムが敵意を向ける。

両腕を上に掲げ、その腕に針のように鋭い無数の突起物が浮かび上がった。

そしてその突起物は腕から放たれ、矢のような速さで霊たちに迫る。

「こころ、動かないで」

左手でこころを抱え直し、右手にもつ【糸刀】から糸を射出。

何百本もの糸が、ジェネラル・ゴーレムから放たれた突起物を迎撃するため、鞭打つようにしなる。

だが勢いを殺しきれない。ほとんどは軌道を逸らせたものの、いくつかの突起物は霊たちに向かう。

（出力が足りないっ……でもこれ以上は【心器】が——っ!!）

ここに来て霊の膨大な【心力】が仇となる。

いくら使い慣れたタイプの【心器】とはいえ、普通の【心器】であるが故に膨大な【心力】に耐えられない。

もつとも、この出力で迎撃しきれないのなのならば、どの道結果は同じだが。

「くっ!!」

【心力】を全身に纏い、防御力を強化。
同時にこころを抱きかかえて庇う。

人の身体ほどもある大きさの突起物が、霊を襲う。糸のおかげで狙いが僅かに逸れたのか、串刺しになることは避けられたようで、左肩を抉られただけで済んだ。

「っ！ 霊くん!？」

「大丈夫」

学生服であるため強度に期待を持てるはずもなく、霊の左肩は抉られ血が流れ出していた。

それでも空中でバランスを維持し、閃羽の外縁防壁に着地する。

「霊くん、すぐに怪我の手当てをっ！」

「そんな暇はないよ。こころはここにいて。いいね？」

返事を聞かずに再び跳躍。

【心装】無しで【心力】を全身に纏い、身体能力を強化した霊の跳躍力は膨大な【心力】に比例して凄まじい。

まるで空を飛ぶかのように高い。地平線の向こうにまで跳ぶのでは……そう錯覚する勢いだ。

もつとも、ジェネラル・ゴーレムが地平線までの視界を遮り、霊を叩き落そうと再び攻撃態勢に入る。

「閃羽は、こころが暮らす場所……守ってみせる」

再び突起物を両腕から射出するジェネラル・ゴーレム。

雨のように向かってくる突起物を、【糸刀】から射出する糸で軌道を逸らし、逸らし切れないものは体を捻って足場代わりに。

だが外れた突起物に異変が起こる。

突起物は粘土のように形を変え、鋭利な先端を別方向……過ぎ去っ

た霊に向けて形成し直す。

それは加速のベクトル^{向き}までも変え、一度は外した標的に向かっていく。

（見たことの無い攻撃——更新されている個体か）

実は過去に何度か同じタイプのジェネラルクラスと戦ったことはある。

その攻撃パターンもある程度は予測していた。相手の強さを知っているから、こころを安全な場所へ避難させることを優先した。

だが今回の攻撃は知らない。初めて見る。

かわしたはずの攻撃が直後に反転し、霊を貫こうと縦横無尽に降り注ぐ。

「キリが、ない……」

いずれジリ貧になると悟る。

この嵐から離脱するため、迫る突起物に糸を巻きつけて自身の体を引っ張らせる。

抜け出した霊は形を変えつつある突起物を蹴り、ジェネラル・ゴレムの横合いから攻めようと試みた。

< ブ オ オ オ オ オ ! ! >

雄叫びを挙げながら、霊めがけて巨大な腕を振り下ろすジェネラル・ゴレム。

まるで山が天から落ちてくるような、圧倒的な質量が迫ってくる。

霊は……焦らない。

【糸刀】から伸ばしていた糸のうちの一本に指令をくだす。引っ張れ、と。

その一本は遠く離れた大地に突き刺さっており、空中を跳ぶ霊の動きを変える。

急激にその進路を変え、巨大な腕から離脱。糸を突き刺していた地点に着地した。

「さて……どうやって近付こうかな……」

< ブ オ オ オ オ ! ! >

再び雄叫びを挙げ、殴る姿勢を取るジェネラル・ゴーレム。その際、腕は緑色に発光。すべてを潰す膨大なエネルギーがその巨腕に集中しているのだ。

「クスっ……それは知ってる。見たことあるよ」

直後、その巨体からは考えられないほど速く……それこそ弾丸か何かの勢いで、ジェネラル・ゴーレムの腕が大地を殴った。

陥没する大地。巻き上がる砂塵。大地を舐めるように広がる衝撃波。

「霊、くん……」

巨大な爆発でも起きたかのような光景。遠目から見ても分からないところは、ただ霊の名を呟くことしかできない。

すでに【シールドビット】全機が使い物にならなくなっているからだ。ナイトクラスに12機のビットを破壊され、待機させていた残り4機も盾として使ったときに機能しなくなっていた。

霊の安否を確認したくてもできない。

無力感がこころを飲み込もうとしたとき、ジェネラル・ゴーレムに異変が起きる。

大地を陥没させたのとは逆の腕が動き、そのまま両腕がくつついたのだ。

「……あっ！ 霊くん!!」

思わず声を上げる。

遠目からではわかり辛いのが、ジェネラル・ゴーレムの腕の上を走る霊が見えたのだ。

仕掛けはこうだ。

繰り出された腕に糸を絡め、同時に霊は高く跳躍。衝撃波は絡めていた糸を使って自身を繋いでやり過ごす。

そしてもう片方の腕にも糸を絡ませ、引っ張り、両腕をくっ付けさせた。

糸に手錠のような役割を持たせて動きを封じたという訳だ。

それから霊はジェネラル・ゴーレムの胸元へ跳ぶ。

【糸刀】を左手に持ち替え、右手で拳を作った。

「心拳闘術———瞬破拳!!」
しゅんはけん

右拳に青い光が……【心力】が凝縮される。
その拳でゴーレムの胸元を打ち、膨大なエネルギーを解放。
巨人の胸元に亀裂が走る。

< ブ オ オ オ オ ! ! >

霊の放った拳の威力は如何ほどのものか……。山のごとき巨人が浮き、仰向けに倒れたのだ。

しかも霊は、ゴーレムに取り付いたまま。

右拳を当てたまま、更に【心力】を拳に集中させる。

「ぐっ!!」

だが同時に、挟まれた左肩から噴水のように大量の血液が噴出。

【心力】による身体能力の活性を、すべて攻撃に回している弊害だ。

通常人間の身体は代謝のためにエネルギーを使っているが、重い荷物を運んだり、走ったりしているときに筋肉を効率よく使うため、送るエネルギーの配分をコントロールする。

今の霊は拳に【心力】を集中するため全身の筋肉を超活性。

代わりに生命維持に必要な止血能力などが失われ、しかも筋肉の超活性が原因で血流が加速。

結果、噴水のように血液が噴出するのだ。

「——っ、瞬破拳・連拳」

大量出血を無視し、攻撃を続行。

圧縮した【心力】をピストンのように右拳へ連続輸送。

右拳から攻性の【心力】がジェネラル・ゴーレムに打ち出され、その度に爆発音にも似た衝撃音が響く。

同一箇所にはまじい衝撃を与えられ、胸元の亀裂が広がり、深くなる。

そしてとうとう、ジェネラル・ゴーレムの胸殻が砕けて皮膚が露わになった。

「外殻は、今の僕では壊せないけど……中からなら、どうかな？」

手錠代わりになっていた糸を【糸刀】に回収。跳躍してジェネラル・ゴーレムから距離を取る。

そして砕けた胸部に向けて糸を射出。

その数……264本。

ジェネラル・ゴーレムの内部へ侵入し、血管のように全身へ行き渡らせる。

「心弦曲——」

【糸刀】から垂れている糸の一本一本が、二本に裂けていく。

それはジェネラル・ゴーレムの体内へ侵入している糸にも伝播し、内側から引き裂いてく。

「——百花繚乱」

ジェネラル・ゴーレムの体内から体外へ、264本から528本へ分割・増数された糸が乱れ舞う。

【心弦曲・百花繚乱】。

数百単位の糸で敵を貫き、一本一本を幾つかに裂いてそのまま敵をも引き裂く技。

現状の【糸刀】では528本までが限界なので262本から二本ずつにしか裂けないが、本数が多ければそれだけ敵を細かく裂くことができる恐ろしい技だ。

山のように巨大なジェネラル・ゴーレムは、体内を幾重にも引き裂かれて生命力を失い絶命。

閃羽の危機は何とか回避されたのだった。



「はぁ……はぁ……」

左肩から流れる血が、制服を真っ赤に染め上げる。

心底、こころの避難を優先してよかったと思う霊。

庇いながら戦っていたら、こころに大きな負担を掛けなければならなかった。

何より、怪我を無視して戦うやり方……彼女が許すはずもない。

「霊くんっ!!」

閃羽の方から霊に走って向かってくるころ。

左腕を真っ赤に染め上げる姿を確認して表情を険しくするが、すぐに霊の左肩に手を置こうとする。

「駄目だよころ……手が汚れちゃう」

「言ってる場合ですか!!」　すぐに【感応心療】を―――」

「御神霊っ!!」

怒声にも等しい声音が、こころの手を止めさせた。

何事かと思い振り返ると……何人かの部下に肩を貸してもらって立っている守鎖之がいた。

「す、守鎖之くん……」

「御神霊……貴様がどうしてここにいる？　オレはおまえに待機しているよう命令していたはずだがな？」

【心器】をまともに扱えない。

霊はそういう理由で戦闘への参加を禁じられていた。ナイトクラスである守鎖之の命令を絶対に守らねばならないのが、霊の立場だ。

言い訳のしようもないくらい、完璧な軍令違反。

「待って守鎖之くん！　霊くんは、この【心蝕獣】の群れを殲滅して、しかもあの巨大な【心蝕獣】を倒してくれたんだよ?!」

「ふん……Fランクであるこいつに、そんなことが出来るものか。大方、また何かイカサマでもして他人の手柄を、然も自分がやったように見せかけただけだろうが」

「そんな訳無いじゃない!!　守鎖之くん、おかしいよ!!」

どうにも守鎖之は、霊が絡むと正気を疑うような言動をする。

だがナイトクラスとして……何より至高なる心の持ち主Sランクの人間。

現実の食い違いに戸惑うばかりだった。

「おい、このFランクを拘束しろ」

「はっ！」

守鎖之の部下が霊を取り囲み、乱暴に地面へ組み伏せる。

抵抗するのは簡単だが、厄介な事になるのが分かり切っているので大人しくする霊。

だがこころは霊を助けようと抗議する。

「待って！！ 霊くんは怪我をしているんです！！ やめてください！！ やめてっ！！」

「こころ。ナイトクラスであるオレの命令を無視したんだ。こいつは牢獄行きだ」

「やめてよ守鎖之くん！！ 霊くんのおかげで、私たち助かったんだよ！？ どうして——」

「そんな訳がない！！ Fランクのゴミにそんなこと、まして【心蝕獣】の群れを殲滅するなど、できっこないだろ！！」

「——ダメだよこころ。大和くんの言ってる軍令違反は正しいから」

守鎖之に喰ってかかるこころを、霊の静かな声が静止する。

その霊は手錠を掛けられているところだった。

「そんな……だって……」

「僕は大丈夫だから。それに、戦闘中に気絶していた彼に何を言っても無駄だよ」

「――っ！ ゴミがつー！」

事実を指摘され、それが嘲笑に聞こえる守鎖之。

大量に出血している霊は笑ってもしないのだが、守鎖之は霊の無表情が嘲笑に歪む幻覚を現実として認識した。

そして地面に組み伏せられている霊を、思いつき蹴る。蹴った個所は出血している左肩で、守鎖之の靴に赤い血が付着した。

「う――」

「っ！！ 守鎖之くん、なんてことを！！」

「ふん……ゴミの血か。汚らわしい。おい、早く連れて行け」

靴のつま先を地面に擦りつけて血を払い、部下にそう命令する守鎖之。

「待って！！ せめて怪我の治療をさせて！！ お願いっ！！」

だが無情にも、霊は手荒く連れて行かれてしまう。

ここにそれを止める力は……無かった。

「どうして……どうしてこんな酷いことを……」

その場に泣き崩れるところは、ただ自分の無力さと現実の理不尽……そして守鎖之の横暴を嘆くしかなかった。



閃羽を襲った大量の【心蝕獣】の群れ。
その群れの接近を知らせた行商人のグループにより、【閃羽心衛軍】は早期の迎撃態勢を整えることができた。

件の行商人達は閃羽側からの御礼として宿を無償提供し、彼らは借りた宿の一室に集まって密談を交わしていた。

「おい、話が違うではないか。ジェネラル・ゴーレムを撃退する戦力は、閃羽には無いはずだったろ？」

「くっ……予想外だ。せっかく苦勞して群れをここに呼び寄せたというのに」

「案ずるな。まだ手はある。【匂い袋】はまだ十分にあるからな……次の手でこの閃羽は確実に終わる」

商人の一人が、懷から拳大の水晶玉を取り出した。

僅かながら緑色に発光しており、怪しい存在感を放っている。

「ジェネラル・メーカー。これで閃羽を混乱に招き、我らの目的を遂行する」

「で、獲物の居場所は把握しているのか？」

「ええ。閃羽の人間は上物ばかりですからね……目当ての人間の住所・その他は簡単に掴めましたよ」

別の商人が一冊のファイルを取りだした。

それをパラパラとめくり、何かの印をつけていく。

そのファイルには顔写真が張られており、住所や職業などの個人情報記載されていた。

「お、この女はいいな……高く売れそうだぞ？」

「それ以前に美味そうじゃないか。オレ達で先に喰っちゃっても、値段はかなりのものになるだろう？」

「ああ……【感応者】でもあるらしいからな。処女でなくても高値は期待できる」

商人達が見ている写真には、こころの姿が写っていた……。

第10話【ジェネラル・ゴーレム】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。この幼馴染。

●篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のNO.2ナイトクラス。

●冴澄理知子——閃羽のNO.4ナイトクラス。秘書然としたメガネの女性。

第11話【ジェネラル・メーカー】

「弦斎様のお孫さん……靈くんと言いましたか。彼は私たちの予想を遥かに上回る力を見せてくれましたね」

霊たちの通う心皇学園理事長・おだみやせいな穩宮静奈は、理事長室に備え付けられたプロジェクターに映る【心蝕獣】の群れとの戦闘映像を見て、嬉しそうに述べた。

静奈理事長は小柄な老婦人。いつも笑顔で和やかなおばあちゃんといった印象を持つ人だ。

その理事長の傍らには、この映像を持ってきたあつじょうちくば篤情竹馬教官が控えている。

彼は冴澄中尉がビットで記録していた映像を報告書と一緒に提出してきたのだ。

「ジェネラルクラス……話には聞いていましたが、まさかあれほどとは思いませんでしたよ。御神がいなかったらと思うとゾッとしますね。というか、あんな奴を倒そうなんて、ダル過ぎてやる気起きませんよ」

「あらあら。あなたはいつだってやる気がないじゃありませんか」「オレは普段から気張って疲れないよう調節しているだけっすよ」

もっともらしい理屈を述べて誤魔化す。しかし如何な篤情といえど、この人の前では子供も同じ。

特に反論らしい反論もせず、素直に自分の気質を認める。

「ところで、霊くんは【殺神器】を持ってきていないという話でしたが……」

「どうやら心理工学科の生徒に設計データを渡して用意してもらったようです」

「まあまあ。加工機が自動で製造してくれるとはいえ、【糸刀】は【心経回路】の精密な調整が必要不可欠。とっても優秀な生徒さんなのね」

「3年のダナン・デナンですね。オリジナルには遠く及ばずとも、本来の戦い方に近い実力を御神に出させていました。久しぶりに見ましたよ……心弦曲。鳥肌もんですね」

自分達が一割倒すのもやっとだった【心蝕獣】の群れを、短時間で殲滅した霊の心弦曲。

この技は霊の祖父、御神弦斎みかみげんさいのもの。

10年前、霊を連れて閃羽が出るまで、彼がこの都市で最強の【心兵】だった。その頃の竹馬はまだ学生であったが、見習いの【心兵】として弦斎と共に戦ったこともある。だから心弦曲のことも、ジェネラルクラスのこと、霊のことも知っていた。

「ところで、大和のバカが色々やらかしてくれましたが、どうしますか？」

「そのことなんですけどね……とりあえず早急に霊くんを解放するよう手配しています。弦斎様との【契約】は続いていますし、何より霊くんは【継承】しているのでしょう？」

「直接は聞いていませんが、おそらく」

「では、霊くんにも弦斎様と同じように、相応の地位と権限を与えねばならないでしょう」

「了解です。ったく、なんで上層部の連中は大和をナイトクラスにしたんでしょうねえ。まだ早過ぎると言ったのに……」

「大和くん以外のナイトクラスは、上層部と折り合いが悪いそうですからねえ……飼いや人材が欲しいでしょう」

「……苦勞をお掛けします」

自覚しているだけに、今度はまったく反論できず。

竹馬は頭を下げながら、静奈理事長に感謝の念を送る。

閃羽の上層部……政治屋連中は、自分達に都合のいい手駒をナイトクラスに欲しがっていた。しかしほとんどのナイトクラスはそれを良しとせず、閃羽を守ることだけに集中。

そこで上層部の目に止まったのが、守鎖之だった。彼の【心力】は同年代に比べて遥かに高く、実家が剣術道場の関係で実戦経験もあった。

確かな実績と上層部の推薦により、【閃羽心衛軍】は断れず、守鎖之をナイトクラスとしたのだ。

「うふふ……それでも靈くんが来てくれたのだから、これからは上層部も大人しくなるでしょう。弦斎様がいたころのように、命欲しさに死にもの狂いで働いてくれることを期待します」

物騒なことを言いながら、穏やかに笑う静奈理事長。

その言葉を締めとし、竹馬は理事長室から退出した。



陽が沈み、地平線を覆っていた赤い空が暗くなるころ。

閃羽の一角にある閃羽監獄所。

法令に違反し刑罰に服することとなった者を収容する施設。

基本的にこのような刑事罰を与える施設は、外縁防壁に沿う形で建設されている。有事の際、真っ先に被害を受けるのがこれらの施設であり、犯罪を犯せば危険な場所に留置されるという心理的恐怖による抑止力を狙っている。

もつとも、【心兵】がそれなりに配置されており、しっかりとした避難プログラムも組まれているのだが。

「おい……さっき牢屋に入ったっていう奴、血だらけじゃなかったか？ 手当はしないのかよ？」

「ナイトクラスの大和さんが、軍令違反の罰として放置しとけ、だ」とよ」

「おいおい……一応最低限の生命は保障しなきゃいけないんだろ？」

「ってか、ここで死なれたらオレらにも責任の追及がくるんじゃないのか？」

「だよなあ……でもあいつ、Fランクだそうだから死なれても困りはしない、ってのがホントのところ」

「あ、なんだFランクかよ。そういうのは先に言えよな。あゝ焦った……」

ランクによる差別は、この閃羽では禁止されている。

が、末端まで行きとどいている訳ではなくこのような会話は珍しく

ない。それもFランクの話題になると、差別禁止はあって無きが如く、公的な場所でも平気でなされる。

Fランクとはそれだけ社会にとってマイナスでしかない。

一種の精神異常者と呼ばれていた時代もあったが、彼らは自らの意思で社会の底辺を生き、自らの意思で働かず、そして自らの意思で絶望している。

状況がそうさせるのではない……自らの意思でそのような状況に身を置くのが、Fランクの異常な所なのである。

この監守たちも例に漏れずそんな会話をしていると、一人の男性がやってきて話を止めることになった。

「おい、ちよつとおまえら席を外してくれねえけ？」

「え……は、はりむらそうじゅ針村槍守大尉！？ 何故このようなところへ？！」

監守たちの前に現れたのは、無精ヒゲを伸ばし、頭にねじりハチマキをしている壮年の男性。

閃羽のNo. 3ナイトクラス、はりむらそうき針村槍守大尉。

針村槍姫の父親で、Cランクでありながらナイトクラスに昇り詰め叩き上げの軍人だ。

「ちよいとな、今日収監された奴に話があるんけ、席外せや」

ガラの悪いしゃべり方で、暗に言う事聞けよ、と監守たちを脅す槍守。

ただでさえ様々な特権を持つナイトクラスに逆らうはずもなく、監守の二人は持ち場から離れることになった。

「いいぜ嬢ちゃん。今のうちに入ってきてきな」

槍守が呼びかけると、隠れていた人物が出て来た。
その人物とは……こころ。

「すみません、おじさん。無理を聞いてもらって……」

「なあに気にすることあ無えけ。特権ってえのはこういう時に使うもんけ。早く行ってやり」

監獄のなかに入り、こころは霊の姿を探す。

守鎖之によって、霊が理不尽にも収監された。こころは何とか霊を助け出すべく、守鎖之と同じナイトクラスを父親に持つ槍姫にすべてを話し、それを聞いた槍守がこの監獄所まで連れてきてくれたのだ。

霊は一番奥の牢屋に入れられており、その姿を見たとき、こころは絶句した。

後ろ手に手錠をかけられたまま、仰向けに倒れている。しかも制服の左袖は真っ赤。

まったく手当てをされていないため血だまりらしきものまであった。

「く、霊くん！ 霊くん！！ しっかりしてください！！」

「嬢ちゃん、カギ使って中に入りな！」

槍守がその怪力で、カギの一つを束から引き千切って投げ渡し、こころは急いで牢屋のカギを開けた。

中に入り、霊を抱き起こして呼びかける。

「靈くん！」

「……あれ？　　こころ？　　どうしてこんな所に？」

「靈くんを助けにきました」

「助けについて……今のぼくは違反者で、そんなことしたらこころまで牢屋に入れられちゃうよ」

「……靈くん、一緒に逃げましょう？」

「……は？」

一瞬、こころが何を言っているのか分からなかった。

逃げるって、脱獄でもするつもりなのか。そんなことしたら大事になる。靈は慌てて立ち上がりこころに詰め寄る。

「何を言っているのこころ。そんなのは駄目だ。キミの生活が無茶苦茶になってしま——」

「ダメですよ動いたら！　　靈くん、怪我してるのに！！　　すぐに怪我の手当てを……あれ？」

破れた袖から見える靈の左肩。

血の跡がべっとりと付いているが、そこに傷は無い。

「忘れたの？　　ぼくは【心力】で身体を活性させて、ある程度の傷は治せるんだ。とはいっても、ちよつと血を流しすぎちゃったけどね」

心なしか顔色が悪い。

造血しようにも栄養を補給しなければならいので、いくら【心力】で身体を活性させても失った血の分まで取り戻すことはできなかった。

しかも、靈は戦闘中に筋力を活性させたせいで血流が加速。噴水の

ように左肩の傷口から大量の血液を噴出させてしまった。
明らかに血が足りていないだろう。

「それより、脱獄なんてダメだ。キミをここまで連れて来たその人にも、迷惑がかかるよ?」

こう言えばこころが思いとどまることを、霊は知っている。

他人に犠牲を強いることの出来ない性格だというのは、すでに見抜いていたのだから。

とはいえ、こころ以外の人間がどうなろうと構わない。そう考えているのが霊という人間なのだが、こころは気付いてない。

「でも……こんな酷いことって……霊くんのおかげで私は、この閃羽は助かったのに……」

「大丈夫だよ、こころ。実はね、ぼくは捕まっても、たぶんすぐに出れると思うんだ」

「え?」

「おじいちゃんがね、この閃羽とある【契約】を交わしたんだ。おじいちゃんが亡くなっても、ぼくがすべてを【継承】しているから、今でも有効でさ。だから、こころは戻るんだ。明日になればまた会えるから」

「そんな……霊くん、それはどういう……」

霊の言っている意味を問い直そうとした時。

外から爆発音が響く。

そして牢獄の壁に亀裂が奔り、砕けた。そこから現れたのはティラノサウルス型のビショップ級【心蝕獣】。

壁を突き破り、鉄格子のなかにいる霊とこころ認識すると、鋭利な牙を露わにして威嚇。

「【心蝕獣】?! どうして、こんなところに?!」

こころが動けない霊を守ろうと前に出る。

【心蝕獣】が前に踏み出し、鉄格子に体当たり。飴細工のように簡単に曲げられた鉄格子の隙間を縫い、【心蝕獣】の牙がこころを捕えようと迫る。

「――ふっ!」

霊は短く呼吸し、気合とともに手錠を引き千切る。

そしてすぐに【心力】を纏い身体能力を強化。指先から一本の指につき一本の糸を【心力】で作り出し、【心蝕獣】の口を拘束。

「こころ、下がって!!」

前に出ていたこころを自分の後ろへ。

拘束を解こうとする【心蝕獣】だが、あっという間に霊の糸が絡め取る。

右手5本の指からそれぞれ作り出された合計5本の糸は、ビショップ級【心蝕獣】の動きを完全に封じていた。

「あ、そうだ! 霊くん、【糸刀】をダナン先輩から預かってます!」

「それはあと! このまま殺すっ!」

開いていた右手を徐々に握る。

その動きに合わせて糸が【心蝕獣】に喰い込んでいく。このまま圧殺……しようとしたところで――。

「貫けええええい!!」

【心蝕獣】の頭を、鋭利な槍が貫く。

しばらくビクビクと震えていたが、やがて力尽きた【心蝕獣】は倒れ伏した。

「手え貸す必要はなかったようだが、一応昼間の戦闘で助けてもらった礼代わりだけえ」

入り口で投擲の格好で話しかける槍守。

【心蝕獣】を貫いた赤い槍型の【心器】は、槍守の投げたものだった。

「いいえ、助かりました……。あなたは？」

「針村槍守。娘が世話になってるみたいだけえ。よろしくのお」

「槍姫ちゃんのお父さんです。霊くん」

「そうなんだ。それより……」

【心蝕獣】が砕いた壁から外が見える。

その向こうを見ると、あちこちから爆発が断続的に起きており、戦闘状態であることが分かる。

「……【心蝕獣】が、都市のなかに入ってる」

「え?! ど、どうして……」

「とにかく非常事態なんじゃけ、二人は安全な場所へ避難しろけえの。オレは軍の連中と落ち合うけえよ」

投擲した槍型の【心器】を回収し、二人に避難を促す。

「わかりました。こころ、【糸刀】を」

「あ、はい」

こころから【糸刀】を受け取り、それを見届けた槍守はこの場を去った。

その時、かなり近くで爆発音。

続いて【心蝕獣】の雄叫びが上がる。近くに【心蝕獣】がいて、ここに配属されている【心兵】と戦っているらしい。

そして先ほど壊れた壁から、ポーン・アイズ2体が侵入。二人に向かって触手を伸ばす。

「こころに触るなっ」

【糸刀】から糸を射出。貫き、糸を波打たせて引き裂く。

「こころ、ぼくに掴まって」

「は、はい！」

こころを抱き寄せ、壊れた壁から外へ跳ぶ。

それから監獄所の外壁の上に立ち、爆発の起こっている商業区へ目を向けた。

「一体、どうして【心蝕獣】が都市のなかに……」

「たぶん、だけど……っ!？」

後ろから迫るポーン・アイズに気付き、再び跳躍。

糸で絡め取り圧殺しつつ、爆発の起きている商業区へ進む。

「ごめんね、こころ。キミ一人じゃ危ないから、ぼくと一緒に来て」
「そ、それは構いませんけど……どうするつもりですか？」

「この騒動の原因は、おそらく都市の中にジェネラルクラスの【心蝕獣】が持ち込まれたからだと思う」

「え……都市の中に、持ち込む？」

意味が分からず混乱するこころ。

【心蝕獣】を持ち込むという意味がさっぱり分からない。ジェネラルクラスと言っていたが、昼間に戦ったあの山のように巨大な【心蝕獣】の事だろうか考える。しかし、あんな巨大な怪物をどうやって持ち込むというのだろうか？

こころの疑問を察し、霊は説明を続ける。

「昼間戦ったのとは別のタイプのジェネラルクラスだよ。

【心蝕獣】を生み出す【心蝕獣】……ジェネラル・メーカー。拳大の水晶体で、そこから次々と【心蝕獣】を生み出して都市を奇襲するんだ」

「【心蝕獣】を生み出す……？ でも、持ち込んだって、一体だれが……」

「過去に同じような事件に遭遇したことがある。事件の直前に都市外から来たグループが、その水晶体を持ち込んだんだ」

「事件の直前に都市外から……まさか?!」

該当するグループが、一つだけある。

それは昼間、【心蝕獣】の群れの接近を知らせた、都市外から来た

行商人たちだった。

「でも、どうしてそんなことを?! 自分達だって危険じゃないんですか?!」

「……世の中には、色々な人がいる。【心蝕獣】を使って、金を儲けようとか……ね」

「そんな……一体どうやって……」

「混乱した都市から人がいなくなっても、【心蝕獣】に喰い殺された、で済むからね」

いなくなっても……それは、つまり……。

「人攫い、だろうね。能力のある人間を混乱に乗じて攫い、人身売買をしている他の都市で捌く……」

「そ、そんな……」

「ジェネラル・メーカーは【心蝕獣】を生み出すだけの、ただの置物にしかすぎないから、そういう人間に利用される。だから……」

そう……やることは決まっている。

霊にとって、こころ自身と、彼女の生活する場所を脅かす存在はすべて……。

「ジェネラル・メーカーを持っている人攫い……奴隷商人を探し出し、いっしょに殺すっ!!」

すべて、抹殺対象でしかない。

人類の天敵【心蝕獣】はもちろんのこと、こころを脅かすなら人間も然り。

神でさえも、然り。

第11話【ジェネラル・メーカー】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
 - 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
 - 篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のN O・2ナイトクラス。
 - 穂宮静奈——閃羽心皇学園の理事長。小柄な老婦人。
 - 針村槍守——Cランクにして閃羽のN O・3ナイトクラス。
- 槍姫の父親。

第12話【Fランクの真髄】

夜の商業区に突如出現した【心蝕獣】は、逃げ惑う人々を襲い貪り食っていた。

夕飯時でもあったために飲食店などに通う人が多く、しかも【心兵】が未だ到着していないようだ。その被害は広がるばかり。

そんな光景を眼下に据えつつ、こころを片手で抱きながら夜の商業区の屋根を跳び回る霊。

その過程で糸を放出し、触れた【心蝕獣】を次々と引き裂いていったのは言うまでもない。

というか、ポーン・アイズがほとんどである為に、霊にとって苦勞するような事ではなかった。

「霊くん、10時の方向にも襲われている人が！」
「了解」

霊としてはこころ以外の人間がどうなるうがまったく構わないのだが、彼女が心を痛める事態を放置・増やすのは好ましくない。

言われるまでもなく【心蝕獣】の位置を把握していた霊は、すでに【糸刀】から商業区全域に這わせている【心力】で生成した糸を使ってバラバラに裂いていく。

ここで改めて補足しておくが、【糸刀】から出ている糸は物質系で出来たものではない。

【心力】で生成した、糸の特性を持つエネルギー兵器である。霊の加減次第で物を焼き切らずに掴むことができるので、物質系であると錯覚してしまうだけ。

指先から出す糸も同じである。

こちらは指一本につき一本の糸しか出せないため、【心器】なしでは両手を合わせて10本しか使えない。

膨大な【心力】を持っているといっても、武器は必要なのだ。

ちなみに、ジェネラル・ゴーレムに対して使った心拳闘術は、霊本来の戦闘スタイルではないため【心力】の消耗が著しく、糸ほど応用能力もないので心もとない。

よって【心器】はどうしても必要になる。

（さて……網は仕掛けた。触れるなり声を拾うなりできれば……いた）

索敵に使っていた糸に反応。ジェネラル・メーカーの気配も探知したので間違いない。

方角と場所を特定し、追撃の下準備に入る。

「心弦曲——糸蛇円舞^{しじやえんぶ}」

這わせていた数百本の糸が同時に波打つ。

すでに【心蝕獣】の数と位置を全て把握済み。商業区の人間を襲っていた【心蝕獣】は次々と引き裂かれ、絡め取られ、圧殺され、全滅。

その場に居合わせた人々は、何が起こったのか理解していない。目の前のでいきなりバラバラになったので放心している人すらいた。

【心弦曲・糸蛇円舞】。

竜巻弦とは違い、局所的に狙った獲物だけを静かに殲滅する、隠密活動用の技。

派手な動きを避け、ジェネラル・メーカーを持つ行商人たちに気付かれないようにするため、霊はこの技を選んだ。

「よかった……これでもう大丈夫ですよ？　霊くん」

「まだだよ。ジェネラル・メーカーを殺さないと、後から後から際限なく現れる。でも、もう見つけた」

商業区の建物の上を跳び回り、目標のいる場所へ素早く向かう。

そして人気のない路地裏に、数人のグループがいるの発見。

その中の一人が緑色に発光する拳大の水晶体を持っているのが、こちらの目にも見えた。

霊はこころをしつかりと抱きかかえたまま、5階建てのビルから飛び降りて行商人たちの前に降り立った。

「うお?!　な、なんだ?!」

「上から来たぞ!!」

「【心兵】か?!　もう嗅ぎつけられたのか!?!」

「待て……その娘は、ターゲットの一人だな……」

行商人……否、奴隷商人たちの視線が、こころに集中する。

その視線は、ねっとりした嫌悪感を放つもので、こころは我知らず霊の裾を握った。

「小僧……大人しくその娘を渡せば、命だけは助けてやるぞ?」

「見るがいい。こいつは【心蝕獣】を生み出す【心蝕獣】。抵抗しても無駄だ」

ジェネラル・メーカーを頭上に掲げる、白いローブを纏った男。

直後、発光の度合いが大きくなり、いつの間にか霊とこのころの周囲を緑色に発光する甲冑……ナイトクラスの【心蝕獣】が囲んでいた。その数、およそ10体。

ナイトクラスの人間が閃羽で5人しかいないことを考えると、絶望的な状況である。

「ねえ……こころがターゲットって言うていたけど、どうするつもりですか？」

「ふん。知ったところでどうにもならんだ。さあ、その娘を渡してもらおう。さもなくば……」

じりじり、とにじり寄るナイトクラス達。

まるでこの奴隷商人たちの命令を聞いているかのような動きだ。

「ど、どうして……？ 【心蝕獣】が言う事を聞いている……？」

「【匂い袋】、だね……。【心蝕獣】に自分達を仲間と思いこませる特殊な匂いを放つ物質があるって、聞いたことがある」

霊の話聞いた途端、奴隷商人たちに動揺が走った。

こころを舐めるように見ていた視線が、すべて驚愕という色に変わって霊に集まる。

「こ、小僧……どこでそれを……」

「クスっ……あなた達は、大陸から来た人でしょう？ 知ってるよ」

口の端を上げ、小バカにするように笑う霊。

出自を言い当てられ動揺した奴隷商人たちを見て、霊は自分の予想が当たっていることを確信した。

これなら話は早い。必要な情報だけ取り出してさっさと終わらせよう……。

霊の口の端がさらに吊り上がった。

「小僧……貴様、何者だ……」

「誰でもいいでしょ？ どうせ知ったところで……」

皮肉を込めて、先ほど奴隷商人たちが言った言葉を返す。

「こうなるんだからさ」

霊の意識がジェネラル・メーカーに向き、【糸刀】から動作無しで糸を射出。

一本一本が自立しているかのようにになり、目にも止まらぬ速さで拳大の水晶体を絡め取る。極細の糸に反応できなかったジェネラル・メーカーの持ち主は、あっけなく絡め取られて奪われた。

そして徐々に圧力を加え、緑色に発光する水晶体が軋みを上げる。

「こんなものを持ち込んで、何をやるかと思えば……相変わらずワンプターンだね」

ガラスの割れるような音が響き、ジェネラル・メーカーは砕け散った。

分類でいえば【心蝕獣】だが、それ自体には戦闘能力が無いため然

程脅威ではない。

問題なのは、ジェネラル・メーカーが生み出した【心蝕獣】であり、これ以上数を増やさせないためにも先に壊す必要があった。もつとも、ジェネラルクラスに分類されるだけあってかなりの強度を持っている。霊のような膨大な【心力】を持つ人間でなければ壊すことは不可能だった。

そして奴隷商人たちは霊がどういう人間なのか知らず、ジェネラル・メーカーを破壊された驚きで逃亡の態勢を取った。

「くっ！　おい、【心蝕獣】ども！　そいつを殺せえ！！」

ナイト級【心蝕獣】けしかを嚇け、自分達は逃亡。
緑色に光る甲冑が、霊とところに襲いかかる。

「こころは動かないで」

「はい」

こころは言われた通りに動かない。
霊の力は知っているし、何より信じている。

「心弦曲——」

【糸刀】から糸を一本放出。

自身とこころの周りに、渦を描くように這いまわる一本の糸。

その渦内に【心蝕獣】が侵入して来た時。

「——糸しはくか白渦」

糸から糸が、枝分かれするかのように発生し、侵入してきた【心蝕獣】を貫く。そしてすべての糸が波打ち、這い回り、渦に引き込まれるように【心蝕獣】が周囲を回る。糸に引き摺られる甲冑は、為す術もなくバラバラに引き裂かれていった。

しかし……次の瞬間、霊の持つ【糸刀】が煙を上げる。

「あっ——」

霊の間の抜けた声と共に、【糸刀】が火花を上げて沈黙。

放出していた糸も消え、未だ糸に引き摺られていた【心蝕獣】が地面に落ちた。

「霊くんっ?!」

「出力が強すぎたかな……」

少々、【心力】を強くしすぎたようで、【糸刀】は処理し切れずにオーバーヒート。

幸いなことに、すべてのナイト級【心蝕獣】が息絶えていた。よってこれ以上必要は無いと判断した霊は、早々に【糸刀】を投げ捨てる。

地面に転がる【糸刀】は、建物の壁にぶつかったと同時に、ボンッ、と小気味いい音をたてて爆発した。

（うーん……糸を枝分かれさせるのは、二本までが限界かな……）

もともと一本として出した糸を、途中から強引に増やすという作業は【心器】に多大な負担を掛ける。

これは【心経回路】の構成が普通の【心器】に比べて複雑であることに起因している。

無数の糸をそれぞれ独立して操るために、【糸刀】の【心経回路】は樹形図のように複雑に枝分かれしており、一本につき一つの【心経回路】で【心力】を調整するのだ。

もし一本から二本に分かれさせると、一つの【心経回路】で二本分を賄わなければならない。賄う本数が多くなればなるほど負担は大きくなり、限界を超えると回路が焼き切れてしまうのだ。

「霊くん、大丈夫ですか？」

「うん……それより、あいつらを追わないと」

【心蝕獣】を囚にしてさっさと逃げてしまった奴隷商人たちは、建物群のなかへと姿を消していた。

【糸刀】は壊れてしまったので、もう糸による索敵は使えない。

そう考えたところは、至急応援を頼むべく携帯電話を取りだした。

と同時に、霊が走り出してしまう。

「霊くん?! どこへ行くんですか?!」

「逃げて行った方向が同じだから、まだ追跡できる! こころは【心衛軍】を呼んで、ジェネラル・メーカーの残骸を引き渡して。きつと研究用につて、喜ばれるから!」

言うだけ言つて霊は跳躍。

屋根伝いに商人達を追いかけた。



人を攫い、奴隷として売り捌く。

そんな因果な商売をしている彼ら奴隷商人は、しかしその因果が自分達に返ってくるなどとは考えていない。なぜならこの世界の食物連鎖の頂点に立つ【心蝕獣】を利用できるからだ。

しかし、つい先ほど、利用の要たるジェネラル・メーカーを破壊されてしまった。

彼らの焦燥感は一瞬にしてピークに達していた。

「くそっ！ くそっ！！ くそっタレ！！ 【殺神者】がいるなんて聞いてないぞ！！」

「奴らは中東にいるはずじゃなかったのか？！ なんでこんな島国にいるんだ！！」

「先読みされたのか……しかしそんな動きはなかったはずだ。何故だ……何故なんだ……」

彼らは知っていた。

ジェネラル・メーカーを失った今、自分達は狩られる側に立たされてしまったのだということを。

であれば、閃羽での【仕入れ】を諦め、早々に逃げ出さなくてはならない。

だが、その願望を打ち砕く死神が、奴隷商人達の目の前に降り立った。

「ひっ——ぎゃあ!？」

指先に【心力】を集中させ糸を作り出した霊は、一番近かったからという理由で、一人糸殺した。

「逃がすと思う？ 大陸の奴隷商人さん？」

「ま、待てっ!! 我々はもう、閃羽には手を出さない! だから見逃してくれ!!」

ジェネラル・メーカーを持っていた白ローブの男が、霊に命乞いをする。

この白ローブの男がリーダーなのだろう。

他の奴隷商人たちは彼の後ろで霊に慈悲を乞う視線を向けていた。

「それだけ? この都市にこれだけの被害を撒き散らしたのに？」

「この島国からも手を引こう! それにキミは、【殺神者】なのだろう? 私は【大陸通商連合】の幹部だ! キミたちにも手を出さないと誓う!!」

「あ、それはもういいよ。前に一度、破られてるから信用してないしね」

霊が、一歩踏み出す。

白ローブの男はさらに声高く呼びかけた。

「待ってくれ! 私の呼びかけならば絶対だ!! なんなら、ジェネラル・メーカーと【匂い袋】をキミたちに提供しよう!! 無論、無償でだ!!」

霊の歩みは……止まらない。

「あなた方は、いくつか勘違いをしている」

右手の5本指から、5本の糸が垂れる。それは地面を這いまわり、
奴隷商人達を囲む。

「一つは、ぼくら【殺神者】は神を殺すことが目的なんだ。その使
途たる【心蝕獣】を利用するなんてありえない」

「バカな……【ゴッド】は、人の手に負えるような【心蝕獣】では
ないぞ？ 刺激すれば、世界が滅ぶ!!」

「二つ目——」

男の話を聞いていないかのように、霊は話を続けた。

「【心蝕獣】はぼくらの敵だ。それを利用するなら、あなた方も敵
だ」

手を伸ばせば触れられる距離まで、近づいた。

「お、お願いだ……見逃してくれ……」

「……一つ、質問に答えてくれる？ そうしたら楽にしてあげるよ」

背の関係で、霊は男を見上げている。

それに気付いた奴隷商人たちは、一斉に膝を地に付けた。

「答える！ なんでも答える！ 一つと言わず、知っていること全
てに答えよう!!」

「なら、この島国での拠点はどこ？ それはいつまで維持するの？」

「きよ、拠点は、ここから北北西にある都市【祭和】……その近くにある谷地帯だ。ここ10年ほどはずっとそこを拠点にしている」

「ああ……あそこか」

「知っている、のか……？」

「まあね。行ったことがあるだけだけど」

そう言うと言霊は、奴隷商人たちに背を向けた。

助かった……誰もがそう思ったとき、後ろから……霊から見て奥の方の商人たちから、血しぶきが上がる。

「ぐああ?!」

「ぎゃっ!?!」

「な、何故だ?! 我々は知っている事すべてを話した!! 助け
てくれるのではなかったのか?!」

「そんなこと言ってませんよ。楽にしてあげるとは、言いましたが」

気がつく、白ローブの男以外、全員死んでいた。

首筋を糸で裂かれ、地面に大きな血溜まりを創っている。

「そもそも、あなた方はここを狙っていた。その時点で殺すと決
めていました。今さら、考えを変えようなんて思いませんよ」

霊の手が、白ローブの男の頭に置かれる。

その顔はまったく笑っていない。無表情だ。それが返って多大な恐
怖を男に刻み込む。

だがそれはほんの序章に過ぎない。

男はさらなる恐怖を叩きこまれることになる。

霊の全身を青い光……【心力】が覆い、その背中に集中していく。それは一つの形となって現れ、それを認識した男は、やっこの思いで呟いた。

「そ、その翼……三対六枚の、【心力】の翼……き、キミはまさか、【殺神者】のロードクラス——」

すべてを言い終える前に、霊の手が、男の頭を横方向へ胴体から引き千切った。

噴出し、夜空へ舞い上がる血しぶき。

胴体を蹴り、仰向けに転がる死体へ、鷲掴みにしていた頭部を投げ捨てる。

「祭和みづわか……さて——いつ潰しに行こうかな？」

——いつ買い物に行こうか——

そう聞き間違えそうになるほど穏やかな声。

その表情には愉悦感も、嫌悪感も無い。

血で染められた光景を引き起こした張本人とは思えない態度だ。

背中に、青く光る三対六枚の翼を持った少年は、何事もなかったかのように歩き出した。

きつと、一部始終を見ていた人が居たならば、御神霊がFランクであると納得するだろう。

この惨状は、彼の心に全く響いていないのが、一目でわかるからだ。

「まったく、こんなに殺り散らしやがって……後始末ダリいぞこんちくしょうめ」

そしてこの惨状に新たな人影が現れる。

煙草の紫煙を燻らせながら心底氣だるそうにボヤク、あつじょうちくば篤情竹馬だった。

腰には小太刀二刀の【心器】を帯剣しており、頭とケツを搔きながら霊のもとへやってきた。

「よくここが分かりましたね」

「アホお。あんだけの数の【心蝕獣】が一瞬で殺されてたら、いやでも分かるつつうの。」

しかも、そんな滅茶苦茶凶暴そうな【心力】を纏ってたら、敏感な奴には気付かれるぜ？」

霊が背中に作り出した、三対六枚の青く光る翼を見ながら指摘。見た目は神々しいが、感じ取れる【心力】はあまりにも攻撃的。触れれば一瞬で命を奪われそうな威圧感があった。

その証拠に、竹馬は霊まで数歩の距離を開けて止まった。否、これ以上進めなかった。

本能が激しい警鐘を鳴らしているからだ。近づけば問答無用で殺される、と

「とりあえずそれ、しまえよ」

「わかりました。ところで、どうします?」

【心力】と止めると同時に、三対六枚の翼が消えてなくなる。

それから何事も無かったように話を仕切り直し、竹馬に問いかける。内容は、自身の置かれた状況について。

「一応、脱獄したことになるんでしょっか？」

「いんや。というかな、おまえが軍令違反したこと自体、無かったことになる。明日の会議でそう決まる」

「大和くんが黙ってないんじゃないですか？」

「あいつ以外のナイトクラス全員が、すでに承知してんだよ。もし何か騒いでも、おまえが黙らせろ。そのための権限を弦斎さんと同様、おまえにも与えることになる」

「そうですか……じゃあ僕は明日、普通に登校していいんですね？」

「おう。それから明日、オレと大和はいない。今言った会議に出るからな。ダリいけど」

「あはは……それじゃあまた、学園で」

変わらない竹馬に苦笑しつつ、霊はその場を後にした。

色々重大な事を適当に決めたような感じだが、弦斎……霊の祖父と同じ、という言葉で理解するのに事足りる。

霊は祖父を信奉していたし、何より【継承】したときに全て聞かされていた。

だから、これから与えられるという権限についても知っているし、自分に与えられた役割というものも理解している。

それはこの閃羽に帰ってきた事と密接に関わることであり、何より霊が自分でやると決めたことなのだから。

第12話【Fランクの真髄】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のN

O・2ナイトクラス。

第13話【御招待】

群れの襲撃、そして夜の商業区を急襲された翌日。

竹馬の言葉通り、軍に捕まることもなく、霊は普通に登校していた。

ちなみに、群れの件に霊が関わっていたことは伏せられている。これは霊が望んだことであり、また都民に要らぬ混乱を引き起こさないためである。

学園で知っているのは第7チームの面々と、心理工学科のダナン・デナンのみ。

「へえ……ジェネラル・メーカーねえ……」

その日の昼休み。

事件の一部始終を聞かされた朗は呑気に呟く。

その隣には槍姫もいて、「うちの父親、恥ずかしいことをしてないだろうな」などとぶつぶつ言っていた。

これは霊を助けるために、こころが監獄所への同行をナイトクラスである槍姫の父親、針村槍守に頼んだことに由来する。

都市の中に突如現れた【心蝕獣】による襲撃の影響は、商業区だけにとどまっていた。

影響が皆無という訳ではないが、それでも霊たちの通う心皇学園区（一区画丸ごと学園が管理している）はほぼ平常運営。

午前中は一般教養と理論講習を受けるという、心皇学園の一般的な授業をこなした。

そもそも、一つの区画が麻痺したから全部道連れ、では話にならない。

閃羽に限らずほとんどの都市には行政区や商業区、医療区といったように機能を区画毎に集積している。

だが特化させている訳ではなく、最低限の機能をそれぞれの区画に持たせている。

商業区だから病院がないとか、医療区だから商店がないとか、そういったものはない。だから昨夜の襲撃で商業区が襲撃されたからといって、都市全体の流通が麻痺することはない。（多少の弊害はあるが）

「それで御神くん、こころちんの話だと酷い怪我をしてたって話だけど、大丈夫なのかな？」

「うん。【心力】で活性させれば回復も早くなるしね。でも血だけは作り出せないから、しっかり食べなきゃいけないけど」

そういつて霊は鞆から包みを取り出す。包みの中は保冷機能の付いたタッパー。

男ながらに自炊しているのかあ……などと感心したのも束の間。

タッパーのふたを開けて出て来たのは、ピーマンやキュウリ、トマトといった、調理も何もされていない、ザ・丸ごと野菜。

そして何より目を引くのは、タッパーの中心にどんっと置かれている、生の鳥むね肉だ。

「あ、あれ？ 御神くん、これってなに？ これから料理する、のかな？」

「え？ ううん。料理はしないよ。べつにこのままでも食べられるし」

「た、食べる？ このまま？ 野菜はともかくとして、この生肉も？」

「うん」

そういつて生肉を手に取り、そのまま齧り付く。

瞬間、第7チームの乙女三人は絶句した。

朗は目を点にして口を半開きにしており、槍姫は思いっきり身を引いて引き攣った笑いを見せている。

「へ……へえ……お肉って生でも食べられるんだ……」

「そ、そんな訳ないだろ朗！ 御神が人外過ぎるんだっ！」

朗と槍姫は忘れていた。

普段、のほほん……というか、にへらっ……というか、とにかく人畜無害な顔をしている霊は、決して額面通りの人物ではないということ。

Fランクでありながら【心器】も【心装】も無しで【心力】を自在に操り、Sランクを圧倒し、たった一人で【心蝕獣】の群れを殲滅し、ジェネラルクラスをも倒してしまうような人間。

おまけに10年間、人類の天敵【心蝕獣】が横行するような世界を放浪していた、都市育ちの小童共こわっぱとは一味も二味も違う曲者。

何かと普通を意識しているようだが、まったく出来ていないのがザ・非常識少年こと御神霊なのだ。

「く、霊くん！！ なにを生で食べているんです！？ お腹壊した

らどうするんですか!!」

そして最後の乙女、純愛ところは霊を激しく一喝。
顔を真っ赤にして怒り、霊を怒鳴りつけた。

「え……だ、大丈夫だよこころ。慣れてるし、【心力】で活性させれば問題ないよ」

「栄養のバランスとかあるじゃないですか!! ちゃんと調理してからじゃないと駄目です!!」

「だ、だって結局食べるものは同じなんだから、料理しようがしまいが変わらない……よね?」

またも炸裂、ザ・非常識。

この認識は甘い。人類が築いてきた食の歴史に核戦争を仕掛けるかの如き暴挙だ。

「そんな訳無いじゃないですか!! いいですか——」

料理の意義の一つとして、食物を加工することによって細菌などを除去・殺菌して安定性を得ることがあげられる。もっとも、霊は【心力】で身体機能を活性化させ体内で殺菌してしまうから然程意味は無い。

だが二つ目。

調理することで栄養の消化吸収を補助し、より効率的に栄養を補給することができるようになるのだ。

【心力】で消化機能を強化すれば良い、というのは甘い。身体機能を強化するということは、それだけエネルギーを消費するということでもある。わざわざ大量のエネルギーを消費して栄養を補給する

などバカバカしすぎる。それは補給した分だけエネルギーを浪費するということ、つまり±0になってしまうからだ。

とまあ、以上のようなことを懇切丁寧に説明するところ。

そこで朗は、ふと気になったので霊に質問してみた。

「ねえねえ御神くん。もしかして毎日こんな食事？ 家でも？」

「う、うん……スーパで買ってきて、そのまま食べてるんだけど……」

やっぱり。やっぱり第7チームのリーダーは非常識だ。そう、改めて思った。

「くくくくくく……」

「はっ、はいっ?!」

底冷えのするような低い声で呼ばれ、思わず背筋を伸ばして返事。都市一つを消滅させるジェネラルクラスを倒したはずの霊は、しかしこのころの発する雰囲気は怖くて従順な態度を見せた。

「今夜、うちで夕飯を食べていってください」

「え？ でも……」

「でももなにもありません!! いいですね?! 今夜は! うちで! 夕飯を! 食べるんです!!」

「わ、わかった……」

仁王立ちし、憤怒の形相で霊を見下ろすところ。

錯覚なのか、このころの長く艶やかな髪がゆらゆらと逆立っているように見えた霊なのであった。

「うわぁ……久々に、こころちゃんがキレたねぇ……。御神くんの食生活がよっぽど許せないのかな？」

「というか御神のやつ、少し涙目になってないか？」

霊はSランクを圧倒し、たった一人で【心蝕獣】の群れを殲滅し、ジェネラルクラスをも倒してしまうような人間……なのだが、たった一人の少女に怒られて涙目。

こころのお説教によりどんどん小さくなっていく様に見えるのは気のせいだと思いたい。

「【心蝕獣】を恐れないのに、こころを恐れるとはこれいかに？」
「相性かもしれないよ？　ずばり御神くんの弱点はこころちゃん！」

名探偵の如く霊を指さし、自慢げに指摘する朗。
だがこのとき言った冗談が、まさか霊の強さの秘密そのものであるとは思えないのだった。



「ねえ、こころ。急にお邪魔して大丈夫なの？」

「はい。お昼休みのあと、すぐに連絡したので心配無用です。お母さん、今夜の夕食は腕に縊^よりを掛けて作るって、ハリキッてました」

放課後、霊はいつもと違う帰り道を、こころと二人で歩いていた。

純愛家は8年ほど前に引っ越しをしたらしく、霊の知っている場所とは違う所に家を構えたそうで、ここに案内されることとなった。

あの恐怖のお説教が終わった後、ここはあっという間に段取りを済ませ、霊を招待することに成功。

閃羽に帰郷して数日。

霊は幼馴染であるこちらの両親に会っていない。なるべく近いうちに挨拶に行こうと思っていたのだが、大和との決闘や【心蝕獣】の襲撃などが重なり、それは叶わなかったのだ。

「久しぶりだなあ……おじさんやおばさん、変わり無い？」

「はい。二人とも元気ですよ。あ、それと霊くん、実はですね……私に妹が出来たんですよ？」

「妹？ そうなの？」

初耳なことに、多少驚く霊。

積もる話も……という機会は、意外な事に今までしていなかった二人。というか、身の上話はところが一方的に霊の今までを聞き出す、というのが常だった。

「いくつになるの？」

「今年で6歳になります。真^ま心^{しん}って言うんです」

「ふーん……ということは、10歳も離れてるんだ……」

「そうなりますね。歳が離れていると、私が母親代わりになることもありますよ？」

「それだけ離れていれば、そうだろうねえ」

幼い頃のころは、霊にべったりで我儘。どちらかといえば霊が兄で、こころは妹。

そういう構図だった。

今の彼女の面倒見の良さは、そういう環境もあって育まれたようだ。

「ただ……真心は喋れなくって……」

「え？ どうして……」

「実は2年前にも、【心蝕獣】が閃羽に侵入してきたことがあったんです。運悪く真子はその現場に居合わせてしまって……目の前で友達を、その……【心蝕】されたのを見てしまったんです」

「その時のショックで、喋れなくなってしまった、と……？」

「はい」

【心蝕獣】に【心蝕】される様子は、幼子には精神的衝撃が強すぎる。

心を蝕まれ、生気を奪われていくその様子は、生きながらの死というものを体現したようなものだ。

大人でさえその様子に吐き気を覚えるものだというのに、それを目の前で見ってしまったこちらの妹の心中は察するに余りある。

「最初はすごく無口に見えるかもしれませんが、良い子なんです。仲良くしてくれると、嬉しいです」

「うん。大丈夫だよ。心配しないで」

やがて二人は住宅街に入る。

比較的落ち着いた雰囲気の街並みで、建物の高さや屋根の色が統一されていた。

基本的に2階建ての建築物で構成されており、ちゃんと区画分けされていて迷うことなく道を覚えられるだろう。

こころの家は住宅街の中央に位置し、庭付きの一戸建て。

しかし何より目を惹くのは、その裏手にある大きな道場だろう。高さはほかの家と変わらないが、横に広く、古風な外観を持っていた。

「ここが私の住んでいる家です。……その裏手が、白和一刀流道場……大和くんの家なんです」

8年前にここへ引っ越して、ここは守鎖之と知り合った。家が近いのでよく一緒に学校へ通い、道場で遊ぶこともあったそうだ。

そういえば遅れて入学した初日、守鎖之が言っていた【心技】に【白和一刀流】と前置きしていたのを思い出す。

「そういえば霊くん、あの話は本当なんですよね？ 大和くんが言っていた軍令反、無かった事になるって……」
「うん。篤情教官が、今日の会議でそう決まるって言ってたよ。おじさんに聞けば、詳細が分かると思うけど」

すでに第7チームのメンバーには、霊の受けた処遇とその後の展開を説明済み。

権限云々はまだ話していないが、大和の命令を聞かなかったことが帳消しにされるのは話した。

群れとジェネラルクラスを倒したのだから当然だろう、と朗や檜姫は納得。その本当の理由は別の所にあるとは知る由もない。

「で、では、どうぞ」

「お邪魔します」

こころに先導されて玄関へ入る。

「ただいま」

「おかえりなさ〜い」

廊下の向こうから一人の女性が出てくる。

料理をしていたのかエプロン姿で、長い黒髪を後ろで一つに纏めて
いる。

ここに似ていて、一目で親子だとわかる顔立ち。

純愛志乃は、じんないしの霊を見るなり笑顔を見せた。

「まあまあ……霊くん、よね？ 大きくなったわね〜」

「お久しぶりです」

ぺこり、とお辞儀。

5歳のころに閃羽を出て行った関係で、記憶は随分曖昧だが色々
よくしてもらったのは覚えている。

「すみません、急にお邪魔して……」

「何を言ってるの。知らない仲じゃないんだから遠慮しないの。」

それに、ここを助けてくれたのでしょうか？ 今夜はその御礼も兼
ねているのよ？」

「昨日の今日で、もう知っているんですか？」

「ええ。ここらったらあなたのこと、熱心に話をするんだもの」

「お、お母さん！」

顔を赤くしながら、こころは母親が余計なことを言わないよう牽制。
正直何を言ったのかよく覚えていないのだが、夢中になって褒めち
ぎったという自覚だけはあり、照れ臭くて知られたくない、という
心中だ。

「うふふ。さあさあ、こんな所でいつまでも立ち話をするものじゃないわ。上がって頂戴」

そんな娘を微笑ましく思いながら、志乃は家に上がるよう促した。

霊はお邪魔します、と礼儀正しく言い、靴を揃えてから上がる。

最初に案内されたのはリビングで、家族が団欒するためにテーブルやソファ―が置かれていた。そのソファ―に座って待っているように言われたが、すでに先客が……女の子がいた。

「あ……もしかして？」

「はい。私の妹、真心です」

ここに紹介される、ショートカットの女の子。

じゅんないまこ
純愛真心はしばらく霊を見つめたあと、口をぱくぱくと動かしてお辞儀をした。

「はじめまして。御神霊です」

「霊くんはお姉ちゃんの幼馴染なんです。仲良くしてくださいね」

「――」

また口をぱくぱくと動かし、首をかしげる真心。

何かを疑問に思っているようだが、喋れないので分からない。

だが……。

「うん。大和くんとは違うよ。ぼくは10年前にこの都市から外の世界へ出て行っちゃったから、真心ちゃんがぼくのこと知らないの

も、無理ないかな」

「っ！——」

「うん。読唇術って言ってね、唇の動きで大体わかるよ」

真心が口を動かし、そこから読み取った疑問に答える。

それを聞いた真心の表情が、驚愕を露わにした。

こころも同じような感じで、霊に詰め寄る。

「ほ、ホントですか?! 本当に真心の言ってる事がわかるんですか?!」

「う、うん。あ、でも読唇術って言っても読み取れるのは半分もないから。微弱な【心力】を読み取って、読唇術と合わせて会話してるんだ」

読唇術といっても、唇の動きだけでは全てを読み取れない。濁音の判断などは特に困難を極める。

だが霊は、微力ながらも相手の【心力】をも読み取って、読唇術と合わせて相手の意図を理解していた。

「【心力】を読み取る……それは、真心が霊くんと同じ、【心器】なしで【心力】を使える、ということですか?」

「違うよ。実はね……」

霊によれば、人は普段から無意識に微量な【心力】を放っており、訓練次第でその【心力】を読み取ることができるそうだ。

この発する【心力】は、その人の感情に呼応して性質が変わる。心が読めるという程ではないにしろ、表情のように読み取ることができるらしい。

ちなみに昼休み、霊が涙目になるほどところに怯えたのは、彼女が無意識に発していた【心力】が原因。怒りという感情を文字通り見せつけられたからだ。

「――」

「え？ うん……【心力】を読み取れる人は少ないからなあ……」
「あの……真心はなんて言ったんですか？」

「『外の世界には【心力】を読み取って会話する人がたくさんいるの？』って。でも少ない方じゃないかな。読唇術だって難しいから」

この二つは習得難易度が高い。

霊でさえ読唇術よりも【心力】を読み取る方に比重を置いて、ようやく相手の意思を理解しているくらい。

その【心力】を読み取る術も、一筋縄ではいかない技術だ。

「――」

「え？ うん。ぼくはここにいるよ。ここらと同じ心皇学園に通ってるし」

「――」

「うん。ずっとここにいるよ」

『またどこかに行くの？』『じゃあずっとここにいるの？』という質問に対する答えだったのだが、霊のその言葉を聞いて、真心の表情が喜びに染まった。

傍から見れば、一方的に霊が真心に話しかけている構図だが、しっかりと意思疎通が取れていた。

「むう……」

それを見て面白くないのがころだった。

可愛い実妹と会話ができる……という家族愛ではない。

真心に霊を取られたような気がして面白くないのだ。何しろ、二人だけしか分からない会話。二人だけ、という部分が激しく気に入らない。

ぶっちゃけジェラシー^{嫉妬}なのだが、真心の嬉しそうな顔を見ると邪魔ができないお人好しなころだった。

「あらあら、やっぱり霊くんは弦斎さんと同じなのね。あなたなら真心とお話できると思っていたわ」

「お母さん？ 知ってたんですか？」

「弦斎さん……霊くんのおじいさんもそうだったわ。とても博識な人だったから。」

さあさあ、夕飯前に軽くおやつを用意したの。うちの主人ももうすぐ帰ってくると思うから、自分の家だと思ってくつろいでね」

真心に引っ張られながら席に着く霊。その隣に座り、おやつとして出されたマフィンを霊へ渡す真心。

ちゃっかり霊の隣を妹に取られ、複雑な視線を向けるころだった。

が、こころはまだ気付いていなかった。

すでに争奪戦は始まっているのだということを……。

第13話【御招待】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。この頃の親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。この頃の親友。

●純愛真心——この頃の妹。【心蝕獣】に襲われたショックで
声を失っている。

●純愛志乃——この頃と真心の母親。

第14話【ジェラシー】

「では賛成4、反対1で、御神靈に、みかみくしびナイトクラスと同等の権限を与える」

ナイトクラスによる軍事会議。

その議題は先日の【心蝕獣】の群れと、商業区に現れた【心蝕獣】および、奴隷商人たちに関するもの。

その過程で霊の活躍が報告され、彼にはナイトクラスと同等の権限が与えられることとなった。

もつとも、すんなり決まった訳ではない。反対する人間が当然いた。

「Fランクとナイトクラスを同等にするなど……どうかしている」

No. 5ナイトクラス、おおわすさの大和守鎖之少尉。

霊を敵視している最年少ナイトクラス。彼だけが霊に対する権限について、反対の立場を崩さなかった。

「ダリい奴だな大和。Fランクとナイトを同等に扱うんじゃない。御神をナイトクラスとして扱うんだよ」

窘めるはNo. 2ナイトクラス、あつじょうちくば篤情竹馬少佐。

心皇学園で霊と守鎖之の担当教官を務める彼は、教育者としての立場もある。

そして二人の会話に追従するように、N O. 1ナイトクラス、純愛^{じゅんない}誠大佐^{まこと}が発言する。

「実際はナイトクラス以上だがな。ジェネラルクラスを単騎で倒すその実力は、敵対するより味方に付けた方が遥かに有益だ。大和よ……ランクに考えを縛られているようでは、これ以上の成長など望めん。世界は広いのだから」

「そのジェネラルクラスというのが嘘臭いではありませんか！ 純愛大佐、自分は今までそんなクラスがあることなど、聞いたことがありません！ ただデカイだけのナイトクラスではないのですか？！」

「大和くん、何をどう言おうがすでに決まったこと。これ以上はあなたの品格が疑われますよ？」

冷静に大和を静止する、N O. 4ナイトクラス、冴澄理知子中尉^{さえずみりちこ}。彼女も最初こそFランクの霊を侮っていたが、群れの殲滅やジェネラルクラスとの戦いをまざまざと見せつけられて考えを変えた。

「それでは、次の議題に移りましょう。技術部からいくつかの報告があるそうです。建持技術官^{たてもち}」
「はっ！」

冴澄中尉に呼ばれ、閃羽心衛軍の技術官が立つ。

「まず、昨夜に回収された水晶玉……ジェネラル・メーカーの解析を始めました。まだ正確な解析はできていないのですが、他の【心蝕獣】と同様、心を蝕み自身のエネルギー源とする【心経器官】が見つかりました。しかし報告にあるような、【心蝕獣】を生み出すという仕組みがわかりません。これからも解析を続け、解明に努力します」

奴隷商人によって持ち込まれたジェネラル・メーカーは、霊によって破壊された。

その死骸は竹馬が回収し、技術部へ解析に回されていた。

「次に、御神霊より心皇学園の心理工学科へもたらされたデータですが、我が軍でも解析中です」

心皇学園のデータバンクは心衛軍ともリンクしている。

学生から軍へのアクセスは厳しく管理されているが、逆側からのアクセスは比較的容易。

霊がダナンに託したデータは、すでに心衛軍の知るところとなっていた。

「御神霊からもたらされた設計データを調査したところ、そのほとんどがオーバーテクノロジーであり解析は困難なものでした。しかし僅かながら流用できる技術を確認。このデータを研究することで、我が軍の【心器】の性能を向上させることができます。これらの研究結果を応用した心器の改良、【第一次心器改良計画】を提案します」

ダナンも言っていたが、霊が渡した【心器】の設計データは、閃羽の技術力では再現不可能だった。

とりあえずという形で作った【糸刀】も、オリジナルの性能には程遠い。

しかし、【糸刀】は【心経回路】が閃羽では普及していない複雑な構造になっている。複雑ゆえに難しいが、【心力】の出力性能が向上するというシュミレーション結果が出ていた。

これは喜ばしいことであり、誠大佐は【第一次心器改良計画】を受け入れることにした。

「うむ。許可しよう。【心器】の発展は長らく停滞していたからな。朗報を期待している」

「はっ！ 全力を尽くします！ 以上で技術部からの報告を終わります」

その後、細々としたことを話し合い、決定し、解散となった。

いち早く会議室から出て行ったのは守鎖之であり、乱暴な足音を響かせて退出していった。

「大和のやつ、かなり御神を敵視していますねえ。これじゃあランクに関する真実を話しても、受け入れようとしませんか？ あゝゝゝダリい」

「仕方あるまい。彼の心情を考えれば無理もないことだ。ランクを心の支えにして、実力を伸ばしてきたようなものだからな」

ランクに拘るのはバカバカしい。

誠はそう考えてはいるものの、守鎖之の境遇を知っているだけに同情している。

いつかはそんな境遇を乗り越える強い心を持って欲しい……そんな願いを込めた憂いの表情を見せた。

それから自身も会議室を出て、徐に携帯の電源を入れる。携帯には一件のメールが届いていた。

「ん？ ほう……件の靈くんが、今夜うちで夕食を食べるそうだ」

「じゃあ大佐の方から今日の結果を伝えてくれませんか？」

「承知した、篤情少佐。これでダルい事項が一つ減ったかね？」

「理解のある上官を持って幸せであります」

そんなやり取りをしつつ二人は別れ、誠は家族の待つ家路に着いた。



「なあ母さん。オレは今、目の前で自分の娘二人を侍らせているクソガキをブチ殺したい衝動に駆られている」

帰宅し、霊との再会を喜び、家族4人＋1人の計5人で、最愛の妻が作ってくれた夕食に舌鼓を打つ。だが、誠は時が進むにつれ、腸が煮え繰り返るような感情に襲われていた。
はらわた

「ちょっと、真心！ 霊くんべったりくつつき過ぎ！！ それじゃあ食ベにくいでしょ！！」

「——！！ ——！！」

霊の隣に陣取り、しかも椅子をくつつけるほど近くで夕食を食べる真心。

その正面にはこころがいて、霊にべったりな妹を引き離そうとテールブルに乗り出していた。

「えっと……あの、こころ？ 真心ちゃん？ お願いだから、食事のときは静かにしようね？」

「靈くん！ 今、真心はなんて言ったんですか？！」

「うう……その、こころには関係ない、的なことを……」

「関係あるわよ……！　自分はちゃっかり霊くんの隣に陣取って、腕にくっつきながら『あゝん』なんて……！　本当なら霊くんの隣はお姉ちゃんの場所なんだから……！」

! ! ! ! !

「えっと……そんなの決まってる、って……真んちゃんが……」

「決まってるの!! 10年も前から、霊くんの隣はお姉ちゃんつて、決まってるんだから!!」

真心は声が出せない。

だが霊は口の動きと微弱な【心力】で真心と会話が出来るため、彼を甚く気に入ったのだ。

靈に甘えまくって食べさせてもらったり、食べさせあつたりと、気分はもう恋人同士。

それを黙って見過ごせないのが、こころ。

幼いころはその隣が自分の場所であつたから、それを取られて激しい嫉妬の炎を燃やす。

「こころだけでなく、真心まで……何故だっ」

誠の怒りの原因は、最愛の娘が二人とも霊にお熱だから。

目の前で娘二人を侍らせている（ように見える）霊が、憎くて憎くて仕方が無かった。

親馬鹿ここに極まれり。

「あなた、どうせ返り討ちにされるのが関の山なのだから見守ってあげなさいな。それに、霊くんなら文句のつけようもないでしょう」

「？」

「しかしな母さん……こころはともかく、真心までもだぞ?! 今
日会ったばかりの男に、何故だ!？」

「そりゃあ、自分と普通に会話できる人なんだもの。気に入って当
然よ」

真心のことを思えば、霊の特殊技能は喜ばしいことだ。

しかし、だからといって納得できるかと言うと、そんな訳が無い。
感情的に、娘二人ともが特定の男に取られるという状況は、父親と
して面白くない。何より、自分は真心と会話できないのに、霊がで
きるというのはずるい気がする。

はつきり言って シットshitt全開なのだった。

「真心! いい加減に霊くんから離れなさい!! お行儀が悪いで
すよ!」

「――っ」

「えっと……『お姉ちゃんの方こそ、テーブルに乗り出すなんてお
行儀が悪いよ』って……うっ?!」

単なる通訳として代弁しただけなのだが、何故か霊は睨みつけられ
た。

「霊くん? 食べ難くないですか? 食べ難いですよね? なら真
心を引き剥がしちゃってください」

「ああ……いや、うん……でもさ? ぼくは気にしないから……」

「くくしびくくくんくくく?」

「うう……」

相手は小さい子だし、何よりこちらの妹なのだから優しく……という気遣いは無駄だった。

それどころか余計に怒らせる結果に。

昼休みの一幕と同様、霊は涙目になって言い淀んだ。

「……なあ母さん。うちの娘が、【心蝕獣】の群れを単騎で殲滅した男を、涙目にして追い詰めているんだが」

「あらあら……。なら三人とも詰めて、並んで食べなさいな」

「母さん!? 煽ってどうする?! そっちの詰めるじゃないぞ!」

誠が妻を諫めるが時すでに遅し。

というか、ナイトクラスである誠はもちろん、霊ですら気付かない間に、こころは真心とは正反対の位置……霊の左側に移動した。

「真心、もうちょっとそっち行きなさい。というか、お父さんのところに行きなさい」

「――!――!――!」

「えっと……『嫌だ。お姉ちゃんが行けばいい』って……」

「おい霊くん……貴様、それは本当なのだろうな?」

嫌だ、という部分に過剰反応した誠が、引き攣った怒りの笑みを霊に向ける。

「お父さんは黙って!! 霊くんは右利きですよ? 真心が邪魔で食べられないでしょうから、私が食べさせてあげますね」

「――!――!――!」

こころのその言葉を皮切りに、真心も霊に食べさせようと食事を口

元を持つてくる。

二人ともが無理矢理に霊の口の中に入れるものだからさあ大変。
こころはマカロニグラタン。真心は鳥の唐揚。

「うう……味が分からない……分からないよお……」

左右から激しいプレッシャーを掛けられ、霊は消え入るような声で
呟いた。



胃の痛くなるような怒涛の夕食を終え、霊と純愛一家は一先ずの平
穏を取り戻した。

今は志乃とところ、そして真心の三人が食器を洗っている。
霊の取り合いで姉妹喧嘩をしていたところと真心だが、二人は基本
的に仲が良い。母である志乃も交えて談笑しながら仲良く食器を洗
っている光景が微笑ましかった。

一方の霊はというと、誠に連れられて書斎部屋に来ていた。

「少々カビ臭いところだが、まあ座ってくれ」

部屋の壁一面に並ぶ専門書の数々を背に、霊は椅子に座る。
テーブルを挟んで対面に誠が座り、いくつかのファイルを霊に渡し
た。

「これは？」

「今日の会議で話し合わせ、決定した事項だ。キミには弦斎さん同様、ナイトクラスと同等の権限が与えられる。」

詳細についてはそれで確認してくれ。まあ、この都市を守ってくれるのなら、色々と融通してやれるということだがな」

パラパラとめくって大まかに読んでいく。

自分に与えられる権限の内容。これからの【心衛軍】の方針。先日の【心蝕獣】の群れとの戦闘被害。等々。

十数ページに簡略化されているが、内容は十分伝わる。

それに、議事録もちゃんと記載されており、どういう意図の下、どのような流れで決定したのかが分かるので問題は無い。

「ああ……やっぱり反対者が出ましたか。大和くんですね？」

「そうだ。彼のしたことについては謝罪する。あいつはまだ、色々知らないことが多いのだ」

「気にしてませんよ。気にするほどのことはされていませんから」

そう。霊にとって、守鎖之にされた数々の侮辱と仕打ちは、別段気にするようなことでもない。あの程度で音を上げるようなら、外の世界で生きて行くのは不可能だ。

一番許せないのは、こころを危険に晒したこと。

【感応者】であるこころの役割を無視し、身勝手な自己満足のために戦線に連れ出したことが許せない。

それはこころの父親である誠も同じだった。

「娘を助けてくれたこと、改めて礼を言う。キミが群れを殲滅した後に詳細を聞かされたのだが、今でも背筋が寒くなる。真心の二の舞になるのでは……いや、それ以上に取り返しのないことになるのでは、と……」

娘を失いかけたのは、これで二度目だ。

一度目は真心。【心蝕獣】の所為で声を失い、会話することができなくなってしまった。

そして今回の群れの襲撃で二度目。もし霊がいなかったらと思うと、それだけで誠の胸中は締め付けられるような苦しい感覚に襲われた。

「キミには驚かされる。【殺神器】ではなく、普通の【心器】……それも急造したもので、あれだけの戦闘能力を見せるとはな……。だがどうして、【殺神器】を持ってこなかったのだ？」

霊の本来の力を引き出すには、普通の【心器】では不可能。

だから専用の【心器】を、彼は祖父の弦斎から譲り受けているはず。【継承】しているのならばなおさらだ。

「あれを持っていれば、【同列存在】を呼び寄せてしまう可能性があります。こころを危険に晒すわけにはいきませんから」

「だからといって、それで全く戦えなくなる可能性を考慮しなかったのか？」

「形振り構わなければ、【同列存在】以外の【心蝕獣】は倒せます。今回、心皇学園の先輩に、紛い物とはいえ【糸刀】を作ってもらったのは、閃羽でのこころの生活に影響が出るのを防ぐためでした」

簡単な話だ。

霊はその力でこころを守ることはできても、都市そのものを守るこ

とはできない。先日のように群れ単位で襲われた場合、霊一人で広範囲をカバーするのは物理的に不可能だ。だから万能武器である【糸刀】が必要だった。

「ここを守るだけならこの身一つで事足ります。しかし、例えばこちらの父親であるあなたが死んでしまったら、ここが悲しむ」「すべてはここのため、という訳か。つまりとところ、キミはこころ以外がどうなろうと構わない。そういう事だな？」

「そうですよ？ 一番大事なのはこころの命。次に、こころの負担になるようなことを極力避けること。よってもしも閃羽が滅びるようなことにでも連れ出し、ぼくは真っ先にこころを連れて、この閃羽を切り捨てますから」

特に気負うでもなく、淡々とした口調で断言した。

霊にとって守るべきはこころであり、閃羽は彼女が暮らすのに必要だから、ついでに守っているに過ぎない。

閃羽が壊滅し、そこで生きることが困難になれば、霊はこころを無理やりにでも連れ出し、別の都市に避難させるだろう。

「はつきり言ってくれるな。父親としては嬉しいが、軍人としては喜べんよ」

父親であり、軍人でもある彼は、霊のその言葉を素直に受け取れない。

娘を守ってくれるのはありがたいが、軍人としては、彼のような力を持った人間が最後まで閃羽のために戦ってくれないのは問題だ。

本来ならそれを咎めるべきなのだが、それは無駄だ。説き伏せるだけの力も無い。

「【糸刀】といえば、キミが心理工学科の生徒に渡した設計データ。こちらの知るところとなった」

「構いませんよ。どうせ全てを解析しきれないでしょうし、知られて困るようなものでもありません」

「確かに……。技術部の人間も、オーバーテクノロジーの塊だと言っていたからな……。しかし――」

テーブルに乗り出し、誠は対面に座る霊を睨みながら言う。

「あまり我々を舐めないでもらいたいな、御神・ロード・霊。確かに我々は、キミたち【ロードクラス】に比べれば取るに足らない存在だ。だが【心蝕獣】が現れて200年。練磨と研鑽を続けて来た閃羽心衛軍は、常に新しい技術を取り入れ、発展させようと努力してきた。それがどれだけ難解なものであろうと、だ。必ずや、あの設計データを解析し、キミたちに追いついて見せる」

現状では、目の前の少年に勝つことはできない。こころがいる以上あり得ない話だが、霊がその気になればこの閃羽の人間を皆殺しにすることなど造作も無い。それほどに彼の【心力】は強いのだ。

しかしこの状態のままではいるなど、あり得ない。

【心蝕獣】に抗い続けているように、いつの日か霊にも対抗できる力を身につける。誠はそう宣言したのだ。

「クスッ……そういう事じゃないんですけどね。まあ、期待せずには待っています。ただ、近いうちに終わらせますから、急いでくださいね?」

「なに……?」

意味深な霊の言葉に、理解不能な態度を見せる。しかし霊は気にした様子も無く続けた。

「残る【同列存在】は4体。それらを倒してしまえば、次は神です。それですべてが終わります」

「神……弦斎さんの言っていた、すべての【心蝕獣】の生みの親にして頂点……【ゴッドクラス】」

「ナイトクラスで精一杯の賢者と、神を殺そうとする愚か者……どちらが生き残れるんでしょうかね」

愚かゆえに霊は戦える。そして殺せる。

それが人類の天敵【心蝕獣】であろうと、神にも等しい存在ゴッドクラスであろうと……。

第14話【ジェラシー】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こちらの幼馴染。
- 篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のNO.2ナイトクラス。
- 純愛誠——閃羽のNO.1ナイトクラス。こちらの父親。
- 冴澄理知子——閃羽のNO.4ナイトクラス。秘書然としたメガネの女性。
- 針村槍守——Cランクにして閃羽のNO.3ナイトクラス。槍姫の父親。
- 純愛——真心——こちらの妹。【心蝕獣】に襲われたショックで声を失っている。
- 純愛——志乃——こちらと真心の母親。

第15話【約束の証】

緊張感に満ちた二者面談（ただし、それは誠のみ）は、そろそろお暇するレジャーという霊の申し出で終わりを迎えた。

「泊まっではいけないのか？ 仕事の話を抜きにして、色々聞きたいこともあったのだが……」

「その機会はまだまだありますよ。何より着替えを持って来てないんですから」

「そうか……」

霊は当分の間……少なくともここにいる以上、霊はこの閃羽に留まるだろう。昨日今日の知りあいではないのだから、また食事を共にする機会もある。

誠は改めてそう考え、無理に引き止めることはしなかった。

書斎のドアを開け、廊下に出ると、そこにはバスタオルとパジャマ服を持った真心がいた。

「どうしたの？ 真心ちゃん？」

「――」

「え？」

口をぱくぱくと動かす真心に対し、読唇術によってその意思を理解した霊は、少々戸惑ったような声をあげた。

「霊くん？ 真心はなんと？」

「それが、『一緒にお風呂に入ろう？』って……あのね、真心ちゃん」

床に膝を突き、目線を真心に合わせる。

「ぼくはそろそろ帰るから、一緒には入れないよ。それに、着替えを持ってないんだし……」

先ほど誠に言ったようなことを真心にも言って聞かせる。

目線を合わせた理由は、真心の申し出を断るためだ。上から目線では子供に圧迫感を与えてしまうので、やんわりと断るときや、言い聞かせるときはこうするのが吉。

「あらあら霊くん。着替えの心配なら要らないわ。実はあなたのお父さんの服が、うちにあるのよ」

「え？」

会話に入って来たのは志乃だった。

にこにこ笑いながらやってきて、真心の目線に合わせて片膝立ちしている霊の肩に手を置いた。

「あなたはお父さん……弦^{ゆずる}くんと同じ背丈だから、大丈夫だと思うわ」

「父さんの……？」

「大切な形見ですもの……捨てるなんてできなくて、ずっと大切に保管していたのよ？」

「弦斎さんからは聞いていないのか？ 私たち夫婦とキミの両親は、幼馴染だったんだよ」

「そう、だったんですか……」

眩く霊は、改めて知った事実に戸惑う。

霊の両親は、霊が生まれてすぐに亡くなった。例によって【心蝕獣】の襲撃が原因だ。

「二人とも優秀な【心兵】だった。生きていれば、オレではなく弦が閃羽心衛軍のリーダーだったろうな」

霊の父親もナイトクラスであり、その実力は誠と互角かそれ以上。そして……。

「そしてキミの母親……麗那^{れいな}は【感応者】でもあった。当時は私たち3人で心衛軍の中核を担い、幾度となく【心蝕獣】の襲撃を退けていた。だがあの日、高位の【心蝕獣】数体に攻められ、心衛軍に多大な被害が及んだ」

ナイトクラスの【心蝕獣】が2体、ビショップクラスが4体、計6体の【心蝕獣】が閃羽に襲来。

当時の閃羽にはナイトクラスが3人しかいなかった。誠と弦、そしてその妻……つまり霊の母親だ。

「私と弦はナイトクラスを相手にするので精一杯でな……ビショップクラスまで手が回らなかった。麗那が奮戦してくれたおかげで壊滅的な被害を受けずに済んだが、無傷と言う訳にはいかなかった。出産直後ということもあり、重傷を負って……」

「そう……だったんですか。知らなかったな……。父さんも、その時の戦いで？」

「ああ……当時の私はナイトクラスに成りたてでな。やられそうになったんだ。しかし、弦に助けられた……」

ナイトクラス2体を道ずれにして、相討つ形となったのだ……。」

今でこそ誠はナイトクラスの【心蝕獣】を倒せるほどに腕を上げている。

しかし10年以上昔は違った。ナイトクラスとギリギリ互角に戦うのが精一杯。1体相手に奮戦するも、かなり危うい戦いを強いられていた。

「その後、私たちがキミを養子に……と思っていたんだが、弦斎さんがキミを引き取りにきてな」

「この人、かなり粘ったんだけど弦斎さんに、逆に説得されちゃって」

「説得、ですか？」

「そうだ。自分の身内は霊くんしかいないから奪わないでくれ……そう言われたら、引き下がらざるを得なかったよ」

唯一の肉親を奪う……そんなつもりはなくとも、向こうがそう感じてしまうことも、あるものだ。

「【心蝕獣】との戦いで死んだのは聞いていましたけど、何も知らなかったな……知ろうとしなかった……」

「それだけ弦斎さんが、霊くんのことを大切にしていたのね」

「そうですね……。正直、親がいなくてもおじいちゃんがいってくれたから、寂しくはなかったですし」

強がっている訳ではない。

確かに、自分には親がない、というのは自覚していた。

だからといって何か負い目があった訳ではないし、それ以上に自慢できる祖父がいた。だから特に親の事を聞いたりはしなかったのだ。

「――っ！」

くいつ、と真心に引っ張られ、霊は我に返った。

まだ真心の話が終わっていないのに、誠や志乃と話し込んでいた事に気づく。

「え、ああ……でも、夕飯を御馳走になって、これ以上お世話になる訳には……」

「水臭いこと言わないの。真心とお話できるのは霊くんだけなんだから、色々と聞いてあげて？」

「は、はあ……」

そう言われると断り辛い。

結局断り切れず、霊は真心に連れられて一緒にお風呂に入ることになった。



御神霊、という人間は子供の相手をすることに慣れているらしい。

髪を洗うとき、シャンプーの泡が目に入らないように、真心の顔を上に向けて洗っている。

自分は真心の後ろにいたので、バランスを崩して倒れても受け止められるから安心という訳だ。

流す時も上を向けさせ、おでこのところで水が止まるようシャワーを

器用に動かす。

これら一連のテクニックは、幼い子供の髪を洗うのに非常に有効な手段となる。

「――」

「うーん……シャンプーハットは使い難いんだよねえ。洗い残しとかしちやいそうで、しっくりこないし」

「――」

「うん、使った事ないよ。このやり方だってぼくのおじいちゃんがやってくれてたし」

今は『シャンプーハットを使わないのに上手だね』『シャンプーハット使ったことないの?』という真心の質問に対する答えだ。

目を瞑りながらぱくぱくと口を動かす様は、生まれたばかりのヒナ鳥がエサをねだるのに似ていた。

「さてと……ぼくが頭を洗ってる間に、真心ちゃんは身体を洗って」

指先に【心力】を集中し、糸を形成。その糸でタオルと石けんを絡め取り、器用に泡だてて真心に渡す。

「――」

「え? 真心ちゃんか?」

「――」

「わかったわかった。それじゃあお願いするよ」

真心が霊の髪を洗う、と伝えて来た。

断るつもりだったのだが、それを言う前に畳み掛けられたので、苦

笑しつづ承。

許しを得た真心が嬉しそうに霊の後ろに回り込む。

その途端、真心の目が驚愕の色に染まった。



「あれ？ お母さん、霊くんはどこに？」

洗い物が終わり、霊と談笑しようとしてリビングに戻ると、母親しかない。

母……志乃はコーヒー片手に夜ドラを見ており、優雅な表情で次のようなことを言った。

「霊くんなら、真心と一緒に風呂に入ってるわよ？」
「え？」

思考回路が焼き切れた。それも一瞬で。

何度も母親の言葉を頭の中で反芻するが、理解が追いつかない。

そんな娘の心中を知ってか知らずか、志乃はコーヒーを一口飲んで言葉を続ける。

「真心と会話できるのは霊くんだけだし、色々お話してもらって、

真心のこと聞こうと思ってるの」

母親だから娘のすべてを理解している、などと自惚れてはいない。

会話をしてこそお互いを分かりあえると思っているのが志乃という女性だ。なのに、真心は声を失い会話ができない。

無論、その分愛情を掛けているつもりだが、やはり何か物足りない。それを少しでも埋めるには、霊という人間はまさに打って付けた。彼を通して少しでも今の娘の【声】が聞きたかった。

まあ、親の心子知らずという言葉がある通り、こころにはそんなこと知ったこっちゃないのだが。

「で、でも……二人つきりで入らせるなんて……そんな、そんなの……」

「あゝら、何を心配しているのかしら？　霊くんが真心に手を出す心配？　こころったら霊くんをどういう目で見ているのかしらねえ……？」

「なっ？！　ち、違うわよ！！　真心が霊くんに手を出さないか心配してるのよ！！」

「……あなた、実の妹をどういう目で見ているのよ」

真心はまだ6歳でそこまでマセてない……はず。

夕食の出来事は、どちらかといえば兄に向ける感情ではないかと志乃は思っており、霊も真心を妹のようにして接していたのが分かる。

「はあ……じゃあ、こころも一緒に入っちゃいなさいな」

「へえ？！　そ、そんな大胆なこと、出来るわけ……」

「素っ裸で入れなんて言わないわよ。そうしたいならいいけど。っ

ていうか、昔はよく一緒に入ってたじゃない」

「それは小さいころの話でしょ!!」

真っ赤にして怒鳴るが、事実なだけに否定はできない。しかも、お風呂に誘っていたのは自分なのだから……。

「嫌ねえ、思春期の娘を持つと苦労が絶えないわ」

「私は奔放な母を持って苦労してるの!!」

「はいはい。それで、まじめな話。そんなに心配なら水着でも着て一緒に入ればいいじゃない」

「……水着が、ない」

「中学で使ってたスクール水着で十分でしょ？」

「え……」

胸元に『純 愛』と書かれた白いゼッケン付きの、学校指定の紺色水着。

確かにあれも水着だが地味な色なので、こころ自身あまり気に入っていない。どうせ見せるならもっと可愛いデザインのが良かった。

「大丈夫！ あれはあれでイけるはずよ！ それに、霊くんは中学時代のあなたをまったく知らないんだから、10年間の空白を埋める意味でも、見せてあげなさいな」

「う、う……ん……」

そう言われると、見せてあげなくなる気もするから不思議だった。

素早くスクール水着を持ってきた母親に押し切られ、いざ、霊を連れ去った妹の待つアジト（注※…こころ主観）へ。

風呂場のドアを開け、中を見ると、ちょうど真心が霊の後ろに立っ

て髪を洗っているところだった。

幼い頃、互いに洗いつこしていた仲なのだが、それを忘却の彼方に押しやって『な、なんて羨ましいことを……』などと脳内で呟いたのは内緒だ。

「お、お邪魔します……」

「っ！？」　そ、その声……まさか、こころ？　なんで？！」

予期せぬ侵入者に、驚きの声を上げる霊。

普段何事にも動じない彼が、珍しく狼狽している。そんな姿がなんだか可愛かった。

「わ、私も一緒に入ります」

「待って！　ちょっと待って！！」

慌ててシャワーを取り（もちろん、【心力】で生成した糸で取った）、泡を洗い流す。

真心が不満そうな顔をしていたが、目を瞑っていた霊には見えていない。

それから霊は、恐る恐る自分の状態を確認。

セーフだ。ちゃんと腰にタオルを巻いていたからパーフェクトなセーフだ。知っててよかった、銭湯スタイル。

後ろを振り向かず、霊はこころに告げた。

「こ、こころ？　なんで？　っていうか、ちゃんと服着てるよね？！」

「なんでお風呂入るのに服を着るんですか。水着だから大丈夫です」
「あ、ああそう……ふう」

それを聞いて、ほっと安心する霊。

だから後ろを振り向いたのだが、それが油断以外の何物でもなかったことを痛感することになる。

「――なっ!？」

「あ、あんまり見ないでください……去年着ていた物なので、サイズが合っていないです……」

こころは、なんというか……イロイロ大変な状況だった。
1年でそれなりに成長したのか、かなりきつそうだった。身長が伸びた所為もあるだろう。全体にぴっちりくっ付いていて、身体のラインがモロ分かり。

だが何より大変なのは、水着をはち切らんとばかりに膨らんでいる胸。どうやらその部分の成長が際立っていたようで、ぴっちりしている理由は大半がその部分の所為らしい。

何故だかわからないが、咄嗟に手で目を覆い隠した。

真心の目を、だが。

「ね、ねえ……こころ？ サイズが合っていないのを着る理由は？」
「こ、これ以外に水着がないんです」

絶望した。着替えて来なさいとすら言えないことに絶望した。

そんな霊の心情を知ってか知らずか、風呂場に入ってくるころ。

「と、とにかく！ ……お、お背中お流しますっ」

消え入りそうな声で、そんな健気なことを言われたからだろうか。止める間もなく背後を取られてしまった。

これで相手が【心蝕獣】だったら、自分は間違いなく死んでいるなあ……などと現実逃避気味に思った。

そしてそれが失敗だった。

こころが霊の背中を見て目を見開き、絶句。

その表情がさっきの真心と似ていて、やっぱり姉妹だと、再び現実逃避気味に思った。

「く、霊くん……その背中……」

「あ、あはは……うん、まあその、ね？ もう治ってるし、古傷だから、さ……」

霊の背中とは、酷かった。

皮膚がドス黒く変色していて、ムチで打たれたかのようにミミズ腫れの跡が残っていた。背中のはとんどを覆うその傷痕は、あまりにも醜い。醜悪と言っても過言ではないだろう。

これは外の世界で付いた傷……ではない。それをこころは、理解した。

「こ、この傷……あの時の？ こ、こんなに酷かったんですか……？」

震える声でそう呟くところ。

あの時……それは、霊が外の世界へ行ってしまうよりも前。

いつぞやの医療室で思い出した、【心蝕獣】に襲われたときの幼い記憶。

【心蝕獣】から身を呈してここを守った霊は、当然のことながら重傷を負った。5歳の幼子が【心蝕獣】と戦える訳も無く、霊はここを抱きかかえて我が身を犠牲にすることしかできなかった。

その時に付いたのが、この醜悪な傷痕なのだろう。

「ご、ごめんなさい……私、知らなかった……霊くんが、こんな酷い目にあってたなんて……知らなくて……」

「気にしないでよ。全然支障なんかないし、傷が開いたりする訳でもないしさ」

そうやって、明るく笑う。

そこに偽りは無い。何よりこの傷は、ここを守ってできた傷。

この傷が幼い自分が無力であったという証明であり、強くなりたいという原動力になっていた。

そしてこの傷痕そのものが、霊にとって約束の証なのだ。

「で、でも……」

「それより、背中流してくれるんでしょ？ それとも、やっぱりこんな醜い傷痕、触りたくもない？」

意地が悪いと思いつつ、そんな聞き方をする。

でもこれが一番、こころを落ち着かせるのに有効だと心得ている。自責の念に駆られるにしても、前向きになってくれるはずだから。

「そんなこと、ある訳ないじゃないですか!! 私を守って付いた傷を、醜いだなんてっ……」

「じゃあ、お願いするよ。真心ちゃんの背中はおぼくが流すから」

最初のドキドキ感はどこへやら。

霊は真心の背中を洗いつつ、こころに背中を洗ってもらった。



背中を流してもらった後、霊は一足先に真心と湯船に浸かる。こころがいたので腰のタオルを外す訳にもいかず、少々マナー違反だがそのまま入った。

「霊くん、あの……私も身体を洗いたいので、向こうを向いててもらえますか?」

そんな折、こころが恥ずかしそうにそんなことを言ってきた。

「あ、ああ、うん。ごゆっくり」

なんと返せばいいか迷って、そんなことを口走ってしまう。

こころの方を見ないように体ごと逆をむき、そのまま目を瞑った。

水着の擦れる音が聞こえて、それからシャワーの流れる音が風呂場を満たす。

なぜ最初からシャワーを出してくれなかったのか、霊は切にそう思った。

それから髪を洗う音、身体を洗う音が続いて、霊はずっと早鐘のよ
うに鼓動が打ちっ放しだった。

ちなみに、真心は霊の膝の上に座り、アヒルのおもちゃをぶかぶか
浮かべて遊んでいる。

「し、失礼します」

こころが湯船に入ってきて、場所を空けるために移動する。もちろ
ん、こころの方は見ないように。

（あ……でも水着なんだよね？ 身体を洗ったんだから、着てるよ
ね？）

「あの、こころ——」

「ま、ちょっと待ってください霊くん！ こっち見ちゃだめです！
！」

話しかけようとして、そして振り向こうとしたら遮られる。

「私、今なにも着てないんです！！」

「っ——なんでえっ？！」

「お風呂に水着はダメだと思うからです!!」

湯船に浸かるのに水着は邪道といえど邪道だが、この状況下では止む無しだろう。何故わざわざ脱いだ。混乱しながらも振り向き切る前に停止し、再びこころとは逆側へ。

対するこころも霊と逆を向き、背中あわせになって浴槽に座った。

「あのさ、こころ。なんでこんなことに、なってるの？」

「それは、その……」

何かを言おうとして、結局言い淀む。

しかし沈黙に耐えられず、絞り出すように口にした。

「霊くんと、もっとお話がしたかったです……」

「でも、今じゃなくなたって、話をする時間はこれからいくらでもあるよ」

「そうですけど……でも、ここに来て正解でした。霊くんの背中の傷痕のことも、知れましたし……」

たぶん、こんな機会でもなければ知らないままだっただろう。

幼い頃、こころを守って付いた傷痕。10年経っても消えない、深い深い傷跡だ。

「そういうことも含めてお話して、知りたかったです。私たち、10年も離れ離れだったんですから……」

「……そう、だね」

「寂しかったんですよ？」

「ぼくもだよ。ぼくには、こころしかいなかったんだから」

霊がFランクであると診断されたその日から、遊び友達が極端に減った。

否、誰も遊んでくれなくなったと言ってもいいだろう。こころを除いて。

Fランクは人間の失敗作。社会の役に立たない、むしろ足を引っ張るだけの存在だから。

霊にとって、こころしかいなかったというのは、誇張でも何でもない。事実だ。

無論、祖父やこころの両親はよくしてくれた。それでも、こころを除く同世代の子供たちは、霊を遠ざけ、蔑んだ。

「だからぼくは、こころを守りたいと思った。あのとき、【心蝕獣】に襲われたとき、おじいちゃんが来てくれなかったら、ぼくはこころを守れなかったと思う。それが悔しくて、だから強くなりたくて、そして……強くなった」

「……はい」

ただ蹂躪されるだけだった霊とこころを助けたのは、霊の祖父、御み神弦斎だ。

彼がいなければ、二人は今頃、一緒に【心蝕獣】のエサとなっていただろう。

仮定の話にしか過ぎないが、それでも霊は許せなかった。【心蝕獣】に対してあまりに無力な自分を。

「霊くんは強くなって、そして約束通り、私を守ってくれました。だから、もうどこにも行かないですよね？」

「うん。そのためにぼくは、ここに戻って来たんだから……」

「じゃあ、私も約束を守らないといけませんね」

「え？　こちらの約束？　何か他にしてたっけ？」

「しまったよ。覚えてないんですか？」

「えっと……ぼくがここを守るって約束はしたけど……他にした記憶が無いような……」

首を傾げながら必死で過去の記憶を掘り起こす。

閃羽での思い出には必ずと言っていいほど、こころが一緒に想起される。忘れるはずはないのだが……。

一向に思い出せそうにない霊に対し、こころの顔が徐々に脹れっ面になってきた。

「一番大事なことなんですけど……」

「ええ？　うーん……」

「私は約束しました。もし霊くんが約束を守ってくれたら、その時は私、――」

そのとき、真心が霊を叩き、口をぱくぱく動かして何事かを訴えた。

「――」

「え、上がる？　そうだね、長湯し過ぎるとのぼせるもんね」

無理をさせるわけにもいかないので、真心を抱き上げて湯船からあがる。

それから自分も上がるが、当然ながら、この際に指先から生成した

【心力】の糸で、ちゃんと腰のタオルが落ちないよう留意。

それから掛け湯を真心にしつつ、こころに向き直る。

「それで、こころがした約束って？」

「……思い出してください。それまでは秘密です」

「え〜〜〜〜……」

宿題を出され、とりあえずは保留という形で落ち着く。

とはいえ、こころは思った。

あの様子では思い出さないだろう。それ以前に、ちゃんと聞いていたかどうかすらわからない。あの日自分は、一方的に言っただけにしか過ぎないから。

『レイくんが戻ってきて、約束を守ってくれたら、わたし、レイくんのお嫁さんになって、一緒に戦ってあげる！』

それが、こころが霊にした約束だった。

だから、【心兵】を養成する心皇学園に入ったのだ。霊と一緒に戦うために。霊だけを一人にしないために。

もし10年経っても帰らなければ、自分が探しに行くことまで考えて。

第15話【約束の証】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——純愛の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 純愛——純愛の妹。【心蝕獣】に襲われたショックで声を失っている。
- 純愛——志乃——こころと真心の母親。

第16話【第8技術班との協約】
(前書き)

急いでいたので誤字多数かもしれません。

遠慮なくご報告ください。> (し <

第16話【第8技術班との協約】

白いカーテンを通して朝陽が射し込み、こころは目を覚ました。

陽が出る時間に起きるのは珍しい事で、普通ならもう少し寝ているはずだ。しかし今日に限っては目覚めてしまった。

そしてその理由が、なんとなくだが、すぐにわかった。

隣に、霊が居るからだ。

「そっか……霊くん、うちに泊まってたんだっけ」

こころの母親の志乃に押し切られ、霊は消極的ながらも泊まることになった。

霊の外の世界での10年間の様子が聞きたかったらしく、志乃は霊を質問攻めにしていた。それは誠も同じであり、【心蝕獣】に対する様々な対処法を熱心に聞いた。

だがこころはというと……両親が語らせた霊のこれまでが、あまりにも過酷に聞こえた。無論、霊は気を遣って多少笑いを取るような形で語った。

しかし、笑って済ませられるような話ばかりではない。

【心蝕獣】に襲われ廃人同然になってしまった被害者の話。
都市が【心蝕獣】に滅ぼされた瞬間。

荒廃していく、【心蝕獣】が現れる以前の、旧文明の跡地。

どれもこれも、都市に居続ける限り経験しないであろう、悲惨な話ばかりだった。

しかし、明日は我が身かもしれないこと。

だから夕食後は、楽しくお話という雰囲気にはなれず、霊とまともに話ができなかった。

そこでこころは、一計を案じた。

（うう……今考えると、すごく大胆なことしちゃった……）

全員が寝静まった頃合いを見て、こころは霊を誘った。話がしたい、と。

昔みたいに一緒に寝よう。それを口実にして部屋へ誘い、霊と一緒にベッドで寝ることになったのだが……ここで一つ誤算が起きた。

真心も一緒に付いて来たのだ。

実はちゃっかり霊に付いて行き、なし崩し的に霊の布団に潜り込んでいたらしい。

結局、焼きもちを妬いてまともに話ができず、いつの間にか三人で川の字になって寝入ってしまった。

（まったく……真心ったら……）

霊を挟んで向こう側。霊の右腕に引っ付いて寝ている真心を見遣る。

自分の妹ながら油断のならない……とは思いつつ、霊は真心とまとも会話が出来る唯一の人。懐かない訳が無いか、とため息を一つ。それから霊の方を見遣ると、まだ寝ている。二人に引っ付かれて寝返りも打てなかったのか、まったく初期状態で寝ていた。

穏やか……とは違う、霊の寝顔。まるで死んでいるかのような……。

「――え？」

改めて観察しても、どうにも生きている気がしない。呼吸は、ある。

なのに、死んでいると錯覚するほどに、霊は静かだった。

「霊、くん……？」

錯覚だと思っけていても、確かめられずにはいられたかった。霊の胸にそつと頭を乗せて耳を当てる。心臓の鼓動が聞こえ、ちゃんと脈打っているのが分かった。

「生きて……ますよね……」

それでも、安心できない。どうしてこんなにも焦燥感が湧き上がるのだろうか。

正体不明の不安がこころを満たし、そして霊の顔をじつと見つめる。

それからしばらくして、霊が目を覚ました。

ゆっくりと目が開いて行く様子を見て、ようやく不安が薄れて行く。

「……こころ？」

目を覚ましたらこころの顔が目の前に。

一瞬理解が追いつかず、こころに疑問を投げかけた。

同時に霊の心拍数が急上昇。何せこころは、霊の顔をじっと見たまま。

しかも今まで霊の胸に頭を乗せていた関係で、覆いかぶさるようにくっ付いている。

こころの豊かな膨らみが、自分の身体に押し付けられて形を変えているのがモロ分かり。

「あ、あの……こころ？ その、離れてくれないと……起き上がれないんだけど……」

【心力】で身体を強化すればいけるじゃん、というのはこの際なしの方向で。

そもそも、こころ相手に【心力】を使えない。使わない、ではなく使えない。

このままではマズい……しかし打つ手なしの状況では、このまま流されてしまう……。

「こころ……」

その時。

こころが視界から消えた。

「痛っ?!」

それは真心が、こころを突き飛ばしたから。

壁側にいたために、突き飛ばされたこころは頭を壁に打ちつけてしまふ。

「――」

声を出せない真心は口ぱくと、怒っています、という表情で姉を睨みつけた。

「ま、真心ちゃん、落ち着いて。あと、暴力は良くないよ……」

「……霊くん、真心はなんて言ってますか？」

「うえ?! えっと……駄目だ、それは言えない……」

険悪なムードになりつつある姉妹に、ニトログリセリンを注ぐようなマネはしたくない。

というか、通訳したら確実にとばっちりが来る、と直感して黙秘権を行使。

だがそれは、言えないような罵りをしていたという証拠に他ならず、結果――

「真心! もう我慢の限界よ!! いい加減に霊くんにべったりするの止めなさい!!」

「――!!」

「おおおお、おち、落ち着いて二人とも! 喧嘩は、暴力は、取っ

組み合わせはダメだあああああっ！」

朝からドタバタと騒がしい音を響かせる姉妹に挟まれ、霊は心身ともに衰弱していった。

その後、騒ぎを聞きつけた誠が乱入。娘二人と同衾していたと知り、怒髪天を突く勢いで怒鳴った。

もつとも、制裁行為など霊に通用するはずもなく、返り討ちにあうのが関の山なので、嫌味をチクチク言うに留まったのだが。



心皇学園 1年1組 昼休み

霊、こころ、朗、檜姫。いつもの第7チームの面々で賑やかな昼食。霊を含め、全員お弁当。特に霊とこころの弁当箱は同じデザインの色違い。青とピンクのペアルック弁当箱だった。

これは志乃の計らいで、霊の常軌を逸した食糧事情を知って用意してくれたものだった。

「はぐはぐはぐ……ねえねえみんな、午後の実技見学はどうするのかな？」

ミートボールを食べながら朗が聞く。

その内容は心皇学園のカリキュラムについて。

ここでの午前中の授業は、主に一般教養と理論講習に充てられる。数学や物理などはそのまま専門科目に結び付くので必須。理論講習とは、戦闘における戦い方や【心力】、【心器】についての座学であり、定期試験も筆記で行われる。

一般教養以外の科目は次のようなものがある。

【心兵】としての戦い方を学ぶ授業―――――戦闘論。
都市の防衛を研究・学ぶ授業―――――都市防衛論。
【心力】を用いた戦い方を学ぶ授業―――――心技戦闘論。
【心器】についての仕組みを学ぶ授業―――――心器工学論

そして午後の授業は、実技。

午前中に学んだ理論を実践するための授業が主となっており、実戦形式の対戦や【心器】を実際にいじって整備したり、製造したりすることを体験する。

実戦形式での授業―――――戦闘学。
【心力】を使う授業―――――心技学。
【心器】の製作授業―――――心器学。

というような名目で各授業が組まれている。

「4月一杯の実技は見学だけだが、5月からは本格的に参加することになるのだろうか？　だったら、私としては心器学を先に見学すべきだと思うのだがな。戦闘学にしろ心技学にしろ、【心器】は必要になるのだから、早めに自力で整備できるようにしておくべきだ」
の先輩たちと交流できるようにしておくべきだ」

「それに、霊くんの新しい心器も用意してもらわないといけませんからね」

槍姫とこのころの言は妥当で、霊と朗は特に反対することもなく賛同した。

（【心器】は別に、無くても困らないけれど……せっかくだから賛成しておこう）

霊としては、【心器】があろうと無かろうと、大した違いは無い。相手が【心器】を持っていたとしても、この都市の人間では相手にならないし、この前の【心蝕獣】の群れだって、あれほどの数が大挙して押し寄せてくることは早々に無い。

とはいえ、せっかくの好意でもあるし、授業に支障を来たしてチームの足を引っ張るのも忍びない。

昼食を食べ終えた霊たちは、午後一の授業に心器学を選択。心理工学科の生徒たちが多く出入りする工学棟へ向かった。

「おお~~~~！　ここが心皇学園の工学棟か~~~~！」

様々な機器の置かれた工学棟に入って、朗が感嘆の声を上げる。

【心器】の核となる【CMPコア】の製造機。

【心経回路】の調整用マニピレーター。

そして【心器】の外装素材を加工する加工機。

【心器】を作るための製造機があちこちに並び、さながらどこかの工場のような。

「あゝっ。御神くんなんだなあゝ。おい」

その工学棟の一画に、見知った顔……ダナン・デナンを見つける。

相変わらずのポツチャリ体型にゆっくりとした口調。人を和ませる癒しポツチャリ系なダナンは、霊たちを招き寄せた。

「こんにちは、ダナン先輩」

「こんにちはなんだなあゝ。心器学の見学なんだなあゝ？」

「ええ。先に【心器】について色々準備をしたほうが、他の授業に支障がないのでは、と思ひまして」

「正解なんだなあゝ。【心器】を自分用に最適化できるようになれば、他の授業が楽になるんだなあゝ。よければよくが、色々教えるんだなあゝ」

ありがたい申し出を断る者はおらず、霊たちはダナンにレクチャーしてもらうことになった。

「御神くん達は戦闘学科の人たちだから、心器学の比重は少ないと思うんだなあゝ。最低限の調整を学べば単位はもらえと思うんだなあゝ。だから【心器】については、チーム毎に理工学科の各技術班と協約することになるんだなあゝ。御神くん達さえよければ、ぼくたち第8技術班が受け持つんだなあゝ」

戦闘学科の生徒は戦い方を学ぶのが基本だ。そのため【心器】についての授業は最低限。

【心器】の調整は理工学科の生徒たちで組織された技士に依頼し、授業を円滑に進めて行くのが基本となる。

心理工学科の生徒も、【心器】の調整をこなすことで成績評価が加算される仕組みになっているため、双方にとって有意義な協約になるのだ。

「それはありがたいです……。あ、こころ達はどうか？　ダナン先輩と協約してもいいかな？」

「私は靈くんに賛成です。それに、靈くんの【心器】を作れるのは、ダナン先輩だけなんですよね？」

【糸刀】は閃羽では普及していない珍しいタイプだ。

設計データが心衛軍によって解析されているため、いずれは追加されるだろうが、今のところ製造経験のある技士はダナンのみ。

そういった現状を鑑みて、こころは快諾した。

「ダナン先輩、私たちの【心器】はどうだろうか？　私は槍型の【心器】、朗はシールドガトリングガンの【心器】を使うのだが……」

問題はないであろうが、もし万が一自分達の使う【心器】が分野外だとしたら少々厄介なことになる。

そういった不安要素がないか確認するための、槍姫の質問だった。

「一通りの【心器】は扱っているんだなあ。もちろん、ビット型の【心器】も任せてほしいんだなあ」

ならば話は早いということで、靈たち第7チームは、ダナンが所属する第8技術班と協約することになった。



「まず【CMPコア】と【心経回路】。この二つが【心器】の基盤になるんだなあ」

ホワイトボードに図を書き込みながら、ダナンが【心器】の構成について説明する。

「心の力を【心力】として、物理エネルギーに変換する【CMPコア】。

これに【心力】を伝達する【心経回路】を接続。

そして例えば、銃型【心器】であれば、外装に相当する銃部分を作り、基盤に繋げていく。

こうして【コア】と【心経回路】を通して外装に伝達された【心力】は、銃の強度と貫通力を強化するという仕組みなんだなあ」

同じ第8技術班のメンバーがちょうど銃型の【心器】を作っていた。ちょうどいいので例に出して解説。

「【心器】の基本は【コア】と【心経回路】なんだけど、外装の素材も重要なんだなあ」。

例えば今作って見せた銃型【心器】なら、高い強度を持つ【ステイラル鉱石】を主として銃部分を生成。その先端部分は、鋭利な分子構造を持たせやすい【シャープラル鉱石】を使って組み上げ、銃としての性能を高めるんだなあ」

様々な鉱石が加工機に入れられ、機器を操作して加工していく様子が分かる。

一度溶解した鉾石が円錐形に整えられ、冷やされることで固体化。その先端を別に用意していたパーツと組み合わせ、槍の形となった。

「戲陽さんが使っているガトリンガンのような銃型の場合は、【心力】を弾丸として圧縮・保存する【心弾倉】に送ってから発射されるんだなあ」

手元にあった黒い弾倉と銃型【心器】を見せながら、懇切丁寧に解説。

「それで御神くんの【糸刀】は、今言ったどの【心器】のタイプにも当てはまらない、閃羽では見かけない技術が使われているんだなあ」

設計データがあったからこそ【糸刀】は作られた。しかしデータに示される性能を再現することは不可能だった。

「【糸刀】は使用者の【心力】そのものが糸となって射出される仕組みなんだなあ。柄は持ったためだけのパーツであって、これは【ステイラル鉾石】を用いているんだけど、実質的に【コア】と【心経回路】だけで構成された【心器】と言って差し支えないんだなあ」

そもそも、霊は【糸刀】がなくても指の数だけ【心力】の糸を使う事ができる。

この工程を【心器】に用いたのが【糸刀】だった。

「技術的な問題もあるんだけど、【糸刀】は使用者の【心力】の精密な調整があって初めて使える、間違いなく超上級者向けの【心器】

なんだなあ」

それは、【心器】の製造・整備を生業とする心理工学科の生徒をしての、称賛だった。

「ところで御神くん。一から【糸刀】用に作りなおした新しいものを作ってみたんだなあ。もらったデータ程の性能はまだ出せないけれど、糸を1000本出力できるようになったんだなあ。」

名付けて、【糸刀Ver.^{バージョン}1.0】なんだなあ」

「この短期間でですか？ それはすごい。助かります」

ダナンが霊に渡した新しい【糸刀】。

見た目は変わっていないが、【心経回路】をダナンなりに改良した手製の【心器】だ。

その甲斐あって、出力できる糸の本数が倍増。ダナンの腕の良さが伺える。

「あの、ダナン先輩。糸を1本から2本へ、ないし3本以上、途中から増やすことには耐えられますか？」

「うーん……それがすごく難しいんだなあ。【心経回路】にすごい負担が掛かるから、現段階では2本までが精一杯なんだなあ。」

「そうですか……。このまえ壊れてしまったのも、1本の糸を複数に増やしたのが原因だったもので……」

【心弦曲・糸白渦】。

1本の糸を数本、数十本に枝分かれさせ、複数の対象を突き刺し引き摺りまわす技。

この技を使った直後に、前にもらった【糸刀】は壊れてしまった。

「ぼくとしてもこの【心器】には凄い興味があるんだなあ。これからも研究・改良を続けるんだなあ」

「お願いします」

現状、霊はまだまだ本領を発揮することはできない。

ダナンの頑張りに期待だ。

「ただ、その代わりと言ってはなんだけど、ちょっと手伝ってほしいことがあるんだなあ」

「なんですか？」

「閃羽には【地下資源区】というのがあって、そこから鉱石なんかの資源を採取しているんだけど、質は悪いから精錬しても限界があるんだなあ」

閃羽の地下数百メートル下には、鉱脈がある。

そこから日々の物資を賄っているのだが、【心器】として最高の物を……そう考えるには物足りないのが現実だった。

「けれど都市の外……閃羽から少し離れたところにある、旧世代の鉱山へ行けば良質な素材が手に入るんだなあ。でも【心蝕獣】の所為でなかなか都市外への出向許可が下りなくて困っているんだなあ」

外へ出れば【心蝕獣】に襲われる危険性が高いため、人件費や護衛費が大量に必要となり、費用対効果が低く、従って質は物足りないが安全な都市内で採掘した方が経済的なのだ。

「なるほど……」

「学園長の許可が下りれば、授業の一環として単位を取得できるん

だなぁ。それもあり多く、なんだなぁ」

上級生にもなれば、都市外での訓練も課される。相当に危険が付きまとい、成績優秀者でなければ決して許可されないのである。

「でも、危険じゃありませんか？　いくら霊くんが強いとはいっても……」

「少数で行くなら大丈夫だよ、こころ。ただ、持ち運べる分が少なくなるかもしれないけれど……」

「御神くんの腕を見込んでお願いするんだなぁ。ぼくも一緒に行くし、運搬についてはぼくがどうにかするんだなぁ」

「わかりました。それじゃあ……第7チームの実戦訓練も兼ねよう」

霊が本領を発揮できない今、少しでも戦力を向上させたい。

そんな思惑もあって、霊はダナンの依頼を受けることに前向きな姿勢を見せた。

あとは、他のメンバーの反応次第。

「ちょっと怖いけど、御神くんがいるなら安心かな？」

「いい経験になるだろう。リーダー、頼りにしているぞ？」

こうして第7チームの全員一致により、都市の外へ行く計画が練られた。

第16話【第8技術班との協約】（後書き）

- 御神霊———主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛———霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫———背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戲陽朗———いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- ダナン・デナン———心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

第17話【退屈な移動の幸福な時間】

ダナンが都市外への出向を求める申請書を作成し、学園側に提出。

その後、なぜか理事長から呼び出され、霊たちは理事長室に来ていた。

「こうやって直接お話するのは初めてよね？ 私が心皇学園の理事長、おだみや せいな穂宮静奈です」

小柄な老婦人が、上品な笑みを浮かべて霊たちを迎える。

「1年1組、第7チームリーダー、みかみくしび御神霊です」

「あらあら、やっぱりあなたがげんさい弦斎様のお孫さんですか。懐かしいわあ……若い頃の弦斎様にそっくりなのね」

心なしか頬が赤い気がする。

どうやら御神弦斎にホの字だったようで、霊に弦斎の面影を見たようだ。

ちなみに、このことに気が付いたのは霊のみ。微弱な【心力】で相手の表情に依らず、心情をある程度伺える霊だからこそ僅かな変化に気付いたのだ。

「それに、あなたの父親のゆずる弦くんにも似ているわ。3世代に渡ってこれほど似ているなんてねえ……」

「父……ですか？」

「ええ。弦くんもこの生徒だったのよ？ お母様のれいな麗那さんもね」

「……そうだったんですか。それで理事長、ぼく達を呼び出したのは何ですか？ 何か不備でも？」

偶然だろうか。

連日親の事を話されて霊は少々、戸惑った。

別に両親のことが嫌いだからではない。そもそも記憶にないのだから好悪の感情など沸くはずもない。

では、どうして戸惑う必要がある？

自分でも理解不能な感情を棚上げするため、霊は穩宮理事長に用件を促した。

が、それに待ったを掛ける人物がいた。

「おいフランク。理事長に対してその言い方はなんだ？ 失礼だろうが。やはり所詮は出来損ないか」

先だってこの場にいた、おおわすさの大和守鎖之。

先日、フランクである霊にナイトクラスと同等の権限を与えることが決まってからは、露骨に敵視してくるようになった。

「私は構わないわ。それに、今のは私が悪かったのだから。御神くんの気持ちも考えるべきだったわねえ……」

「っ……いえ、お氣になさらないでください」

バレていた。

上手く隠したつもりだったが、自分が両親の話を遠ざけているのは、すでに悟られていたようだ。

弦斎もそうだったが、お年寄りに隠し事は難しいようだ。少なから

ず気に掛けられているのに、何気ないふうを装うから、失念しやすい。

「あなた方を呼んだのには訳があります。聞けばこれから、都市外へ行こうとしているのだとか」

「なに？ 確かに先日、大量の【心蝕獣】を殲滅したから数は減っているだろうが、それでもポークラス程度はうろついているかもしれない。こころを危険に晒すつもりか？」

初めて聞いた内容に、守鎖之は静かな怒りを燃やして霊を睨みつけた。

あの大量の【心蝕獣】の群れが来て、まだ日が浅い。

まだ残党がいるかもしれないのに、都市の外へ行こうとするのは自殺行為以外の何物でもない。

数が減っているだろうから遭遇する確率は低いが、懸念すべきことだ。

「そんなつもりはないよ。武装していくし、新しい【心器】をダナン先輩が用意してくれたから、もし遭遇したとしても戦える」

ダナンの所属する第8技術班と協約した霊たちは、さっそく【心器】を用意してもらった。

霊の【糸刀】は、【心経回路】をより調整した【糸刀Ver. 1.0】。

1000本の糸を射出できるようになったことで攻撃密度が増し、【心経回路】に掛かる負担を分散できるようになった。

先日の群れの襲撃時、ナイトクラスによって破壊されてしまった、
こちらの【心器】であるシールドビットも、ダナンが用意してくれ
たおかげで手元に揃っている。

ただし、【感応者】専用の【心器】は調整が【糸刀】並みに難しい
うえ、こちらの最大操作機数16機すべてに同じ調整を施さねばな
らず、8機用意するのが精一杯だった。

それでも一般の【感応者】が扱う機数分を用意できたダナンの腕は
優秀だ。

「だとしても、都市外へ行く理由はなんだ？ 危険を冒してまで行
こうとするのはなぜだ？」

「それはぼくから説明するんだなあ」

今まで黙って見ていたダナンが、間に入る様にして立つ。

「知っての通り、閃羽の資源区で採れる素材はどれだけ高度に精錬
しても、そこそこのものにしかないんだなあ」

「……まさか、こいつごときの【心器】を作るために、わざわざ危
険な都市外へ行くと言うのか？ バカバカしい……認められるわけ
がない」

守鎖之はダナンの謂わんとするところを理解した。

そして思う。

Fランクのために危険を冒すなど、なんと愚鈍な考えか。行くなら
Fランクだけ行けばいい。こころを連れて行かせまいと、守鎖之が
霊とダナンを睨みつけた。

しかし――

「確かに、御神くんの【心器】が強化されれば、それはそのまま閃羽の戦力増強に繋がるでしょう」

守鎖之の放つ怒気もなんのその。

穏宮理事長は変わらず穏やかな笑みを浮かべながら、霊たちの出向に賛成の意を示した。

「なっ……理事長?! 何を言っているんですか?!」

「大和くん。冴澄中尉が提出した御神くんの戦闘データ……あなたも見たでしょう? 現実を受け入れなさい」

「あれは……あれは何かの間違いです! フランクがたった一人で【心蝕獣】の群れを殲滅するなど!! 第一、オレは見えていない!」

「君は気絶していたからね」

しれっと痛いところを突く霊。

それは嫌みではなく、事実を述べただけのこと。事実を突き付ければ人は黙るか、もしくは勢いを失う。

話を先に進めるための指摘だったのだが、それを受けた守鎖之は憎悪の籠った視線で霊を睨みつけた。

「なら大和くん。あなたもチームを引き連れて、御神くん達と一緒に行きなさい。もしかしたら、納得できるかもしれませんよ?」

「……いいでしょう。フランクなどに、こころを任せられませんしね。すぐにオレの第一チームに招集をかけ、準備してきます」

そういつて、颯爽と理事長室から出て行く守鎖之。

提案した穩宮理事長は笑顔で見送った。

このとき霊は、『胸の支え^{つか}が取れた』かのような意識を、この小柄な老婦人から感じた。

表情には出していないが、どうやら守鎖之にウンザリしていた節があるようだ。

そんなことを考えていると、檜姫に肩を叩かれ心配そうな声を掛けられた。

「……なあ御神。大和と一緒に大丈夫だろうか？ 協調するつもりなどなさそうだが？」

「大丈夫ですよ、針村さん。なんといっても、御神くんの隣がこの世界で一番安全な場所なのですから」

微笑みを浮かべる穩宮理事長の言は、檜姫はおろか他の人間にも窺い知れなかった。

【世界で一番】という壮大過ぎる例え。

霊本人を名指ししての言葉であったため、こころが一番に聞き返した。

「あ、あの、理事長……それはどういことですか？ 霊くんの隣が、世界で一番安全な場所って……」

「うふふ……そのままでの意味ですよ。ねえ？ 御神くん」

「……だと、いいんですが」

答えに窮する……そんな感じを霊から受ける。そしてそれを説明する気が無いようだ。

「……むう」

なんだか隠し事をされているようで、こころは少しばかり腹を立てて唸る。

理事長は知っているようだが……答えを聞ける雰囲気ではなかった。ちよつと唸って腹を立てたのは、霊のことを何も知らないという彼女の焦りと、独占欲と……若さゆえの嫉妬心が原因だった。



いったんだナンと別れた霊たちは、外へ出る門前で集合する形となった。

守鎖之が率いる第1チームも同行することになり、ダナンは予定していたものより大きな移動手段を用意。

それは大型のコンテナトラック。

これなら結構な人数を乗せて移動できるし、かなりの鉱石を持ち帰ることもできる。

コンテナ内から上部へ出ることができ、道中【心蝕獣】に襲われても即応できるよう、第1チームから二人ずつ交代で見張りが出た。

ダナンの運転でコンテナトラックは荒野を走る。

すぐ先には森があり、少しだけ開けた道を進めば、やがて旧世代の鉱山が見えてくるはずだ。

その道中、第7チームはというと……見張り役以外の第1チームの生徒に絡まれていた。

「へえ。針村さんて、あの針村槍守さんの娘なんだ」

「戲陽さんって、体格に似合わずガトリングガンを使うんだね。勇ましいなあ」

「……」

「……」

絡まれている、とは言ってもナンパの類であり、殺伐とした雰囲気は無い。

第1チームのメンバー5人は全員が男である。

男女比1…3の第7チームと同行できてラッキー。あわよくばお持ち帰りしたい、という下心が見え見えだった。

もちろん槍姫と朗は気付いているが、いなし方など知る訳も無く、適当に頷いてやり過ごすしかできない。

おまけに……。

「こんな可愛い子たちのリーダーが、Fランクかあ。そりゃあこの前の大和さんとの【訓練】を見てたけどさ、心の質が最低じゃあ、何されるか分かんないでしょ？」

「爆弾だよな。何考えてるかわかったもんじゃない。ねえ、針村さん、戲陽さん。あいつが何かしでかしたら、すぐにオレらに言ってね？ とっちめてやるからさ」

こうやって、すぐに霊をバカにする。

Fランクと言う人間は【心力】が低いものだが、霊は当てはまらない。それは彼らも承知しているようだ。

だが、【心力】云々よりも、その心のありようが、Fランクの最大の問題点である。自ら底辺を望み、最悪の場合は他者をも巻き込む疫病神。どんな邪念を腹の底に抱いているか分からない。

それが、Fランクに対する世間一般の認識だ。

（はぁ……ばかばかしい）

（つまんなぁーい……）

他人の悪口どころか、自分達のリーダーの悪口を聞かされて話に花が咲くはずもない。辟易していた。

こころはというと……守鎖之が隣に座って独占していた。

第1チームのメンバーは守鎖之がこころ狙いであることを知っているのだ、リーダーを怒らせないよう檜姫と朗に集中しているのだ。

「入学してから、なかなか二人つきりになれなかったな。真心ちゃん元気か？」

「……ええ、元気よ」

顔を近づけてくる守鎖之に、こころは顔を背けて目を瞑る。そんな態度をとっても守鎖之は気付かず、さらに顔を寄せてこころに迫っていた。

幼馴染とはいえ、気安い態度で話しかけられるのは嫌いだ。

入学する前は何も思わなかったのだが、ここ最近の……とくに霊に

対する態度を見てから、守鎖之に対する嫌悪感が目立ちはじめて来た。

もとから守鎖之は、低ランクの人間を見下す性格だったが、ああも露骨な態度は見せ無かった。おそらくは、霊個人が気に入らないのだろう。その理由も、検討はついている。

だから余計に……守鎖之が恰好悪く感じられた。

「心皇学園は、そろそろ部活の勧誘時期だ。こころはどこに入ろうと思っっているんだ？」

「……まだ決めてない」

「なら、オレと一緒にのところに入らないか？ リサーチ部っていうのがあって、ゲーム感覚で作戦研究をおこなう部活があるんだ。学園の勉強にも役立つし、最新の機器も揃っているらしいんだ」

「……そう」

目的地まで15分ということだったが、こんなに長く感じるものなのかと、表情には出さず溜息を吐く。

（霊くんと一緒に、乗せてもらえば良かったかな。二人乗りできそうだったし……）

しつこい守鎖之に適当な相槌を打ちつつ、ここにはいない霊のことを考える。

トラックのなかに霊の姿は無い。

ではどこにいるかというと、トラックの外……コンテナの上部ではない、文字通り外にいる。

黒いバイクに乗って、トラックに並走していた。

このバイクは、霊が独自に用意したもので、外の世界を旅していたときからずっと乗っていたものらしい。

一般的なバイクよりも大型で、車輪も太い。後ろには積荷を乗せられる荷台が設けられており、都市内の短い距離しか移動しない閃羽では見かけない大掛かりなものだった。

「……槍姫ちゃん、朗ちゃん」

「ん？ どうした？」

「なにになに？ どったの、こころちゃん？」

そろそろうんざりしてきた二人は、こころに話しかけられてすぐに反応した。

嫌みにならない程度に、言い寄って来た男達から離れてこころのすぐそばへ座る。

「少し、『目を瞑る』ね」

眠る、ではなく、目を瞑る。

それが何を意味するのか、槍姫はすぐに理解した。

「ああ、了解した」

「どうした、こころ？ 眠いのか？ 肩を貸すぞ？」

「大丈夫よ。ちょっと酔っただけで、肩なら槍姫ちゃんに貸してもらうから」

額面通りの疑問を抱き、図々しい提案をしてきた守鎖之を適当にあしらう。

槍姫の肩に頭を乗せ、静かに目を瞑る。

意識を集中し、トラックの外に張りつかせていたビットの一つを起動させた。

『目を瞑る』とは、仲間以外にビットを知られずに起動させるための隠語だ。自分が【感応者】であると知られたくないときなどに役立つと、霊が教えたのだ。

先日の【ジェネラル・メーカー】の一件で、敵となる者が【心蝕獣】だけではないと知った。特に【感応者】は貴重な人材であり、奴隷商人のような人間たちに狙われやすい。

それを踏まえての隠語、およびその使用方法を教えてもらったのだ。

「……っ」

【感応者】であるこちらの【心力】を受け、遠隔操作によって浮遊。同時に、ビットから外の風景が脳裏に伝わる。トラックに並走する、黒いバイクを駆る霊が見えた。

黒いフルフェイスメットに、黒いライダースーツと、黒尽くしの格好。

これは夜間における【心蝕獣】による襲撃の対策だ。いまのような昼間ならば問題ないが、夜営するともなれば夜闇に紛れた方が発見されにくい……と出発前に霊が教えてくれた。

トラックに並走する霊のもとへビットを飛ばし、声を送る。

「あれ？　　こころ？」

『ちよっと退屈で……お話しませんか？』

「いいけど……【心力】の無駄遣いになるから、節約のためにもビットをバイクに乗せて」

守鎖之のときとは違い、霊の提案を快く受け入れ、ビットをバイクの後部へ置く。

『氣遣いありがとうございます。でも精神力には自信がありますから、大丈夫ですよ?』

「だろうね。けどさ、今は見張りが、ぼくを含めて三人いる。こんな小規模なんだ。警戒はぼくらに任せて、【感應者】はいざという時のために【心力】を温存しておかなきゃ」

こころも霊ほどではないにしろ、一般よりも相当な量の【心力】を有するため、そんなに疲れることは無い。

だがビットを起動させ続けると、【心力】は絶えず消費される。特に、こころは今日がはじめての、外の世界だ。長期にわたる【心力】の消耗は、自覚しないままに底を尽くこともある。

ビットの浮遊機能を停止するだけでも、かなり負担が減るのだ。

『わかりました。覚えておきますね。……それにしても、霊くんがこんなものを持っているなんて驚きました』

「そう? いくらぼくでも、歩いて回れるほど、世界は狭くは無いよ」

どうにも買いかぶられているな、と苦笑する。

もちろんそんなつもりで言った訳ではないと分かっているが、都市の外を知る身としては、やはり違和感の拭えない質問だった。逆の立場からすれば、当たり前に出てきてしまう質問なのだが。

「退屈って言ってたけど……何かあった？」

『……馴れ馴れしいんですね。親しき仲にも礼儀ありって言葉、知らないんでしょうか。それに、霊くんのこと、すぐバカにしますし。こっちは全然楽しくないってこと、分からないみたいなんですよね』

「それは仕方ないよ。事実だし、嫌悪感以上にぼくが存在を懸念してしまうのは、人として正しいよ」

『……まるで霊くんが、何か私たちの不利益になることを企んでいるような言い方なんです』

「それがFランクの人間に対する認識だからね。簡単に行っちゃえば、ぼくらは犯罪者予備軍って思われてるんだよ。犯罪者はFランクがダントツで多いんだよね？ そんな奴と同類っていう明確な基準がランクなんだから、嫌われたり、悪口を言われても仕方ないよね」

『霊くんはそんなことしません！ いつも私を助けてくれて、守ってくれてるのに……』

「信じてくれるのは嬉しいけど、それを普通の人の前で言っちゃダメだよ？ ぼくの所為で、こころが浮いちゃったりするのは辛いからね」

『……むう』

その様子から納得してないな、と感じて苦笑い。

辛い、という言葉で優しいこころを無理矢理にでも抑えたのだが、不満やる方ないことだろう。

せっかく退屈凌ぎを求めて話しかけてきたのだし、何より外の世界に出て来たのだ。

【心蝕獣】の危険があるとはいえ、楽しむべきところはある。それを知って欲しくて、霊は話題を変えた。

「それよりこころ、もうすぐ森に入るんだ。都市には無い、珍しい植物とか見れるよ？ ほら」

トラックが森のなかに入り、細い道を走る。霊は先行してトラックの前に出て、前方の安全を確認しながらここに解説していく。

『確かに、見たことのない植物ですね。色んな形があります……。あっ！ あの木なんか、葉っぱがトゲトゲしてます！ ……葉っぱなんですか？』

「うん、そうだよ。松っていう木で、針葉樹っていう分類なんだ。大抵の都市では、火災防止用に葉の面積が広い木とか、実を付ける広葉樹しか植えないから、珍しいよね」

『実はわかりますが、火災防止用というのは？』

「葉の面積が広ければ、それだけ蒸散量が多くなるよね？ 気温も低くなるし、火も燃えにくくなる。摩擦による火事は別にして、ね」

『なるほど……そういうことだったんですね』

はじめて見る、外の世界。

人類の天敵【心蝕獣】が横行すると聞く、人の住めない世界。

だがこころは、霊と一緒に見るこの世界が、とても綺麗で愛おしく思えた。

第17話【退屈な移動の幸福な時間】（後書き）

- 御神靈——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- ダナン・デナン——理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。
- 大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こころの幼馴染。
- 穩宮静奈——閃羽心皇学園の理事長。小柄な老婦人。

第18話【それぞれの幸せ】（前書き）

お待たせしました。第18話更新です。

いきなり旅に連れて行かれたので更新が滞ってしまい……申し訳ない（^^；

では、どうぞ（――）＜

第18話【それぞれの幸せ】

森の中の細道をひた走る霊のバイクと、ダナンが運転する大型コンテナトラック。

霊のバイクはかなり馬力があるため、坂道になっても軽快に登っていく。

その後ろを、『ぴったり』追走するトラックが、なんともシユールだった。

少しでもハンドル捌きを誤れば、タイヤは草むらに取られ、最悪バランスを崩して横転しかねない。

徐行しているのならまだしも、それなりのスピードで走るバイクに追走しているのだ。かなりのテクニクがなければ、スピードを出すこともままならないはず。

（ダナン先輩、すごいなあ……。慣れてる印象を受けるけど……。多芸な人だ……）

サイドミラーで、運転席に映るダナンを確認。その表情に緊張は見られず、あのぽっちゃり顔はいつもと変わらず和やかだった。

「ねえ、こころ。トラックの中、揺れて無い？」

『はい。ちよっと振動が強くなりましたけど、まだまだ気にならない程度です』

バイクの荷台に着地している、こころのビット。それを通して、トラックのコンテナ内にいるこころに聞いてみるが、返って来た答えに違和感はない。

「けっこう狭くて、揺れると思うんだけど……ダナン先輩の腕が良いのか、トラックの性能が良いのか……」

『きつと両方なんですよ。ダナン先輩が用意したトラックですしね』
「なるほど……」

やがて目的地……鉱山入り口の洞窟が見えてくる。

旧世代の名残なのか、錆びついた坑道が外から見え、その先の光の届かない暗闇に呑み込まれているような印象だ。

入り口前は少しだけ開けており、霊たちはそこに駐車することにした。

「それじゃあ運搬用トロツコを降ろして、中へ入るんだなあ。ヘッドライトは忘れずに、なんだなあ」

大きなハンマーを背負い、片手にツルハシを担ぐダナン。和やかな雰囲気のまま指示を出す。

当たり前だが、旧世代の鉱山は放棄されており、電力も通っていない。

生徒たちは【心力】を纏わせることで身体能力を強化する黒いバートルスーツ【心装】の他に、ダナンが用意したヘッドライトを装着。

ツルハシを持ってトロツコを押し、第1チームから二人の見張り役を残して中へ入ろうとする。

それを、霊が止めた。

「待つて。みんな、念のために【心器】は持っていて」

「ん？　　どういことだ？　　御神」

槍姫を筆頭に、他のメンバーも霊に疑問の視線をやる。

「おいFランク。【心蝕獣】は太陽の光……それを反射する月の光など、そういった光源のあるところでしか活動しない。【心蝕獣】が暗闇に包まれた鉱山のなかにとでも言いたいのか？　バカバカしい……」

守鎖之が露骨に、小バカにしたように霊に指摘する。

今言ったように、そういった生態が【心蝕獣】には確認されている。詳しい理由は定かではないが、基本的に【心蝕獣】は光のある場所を求める。洞窟のなかといった、狭い暗闇の空間や、月のない夜は活発な行動が確認されないのだ。

稀にナイトクラスが新月の日に活動しているのが目撃されるが、そういう日は大抵、雲ひとつない晴天の夜であり、星明りの見える夜である。

もちろん、そういう生態を霊も知っている。だが……気になることがあるのだ。

「このまえ現れたジェネラル・ゴーレム。あれは、更新されている個体だった……」

「霊くん、更新されている個体……というのは、どういう意味ですか？」

「【心蝕獣】には離れていても相互に通信しあえる、ネットワークのようなものがあるんだ。大抵は同じ、または隣接するテリトリーにいる【心蝕獣】同士の間でやりとりされるんだけど、稀に世界規

模で情報交換が行われるらしい。そのとき、各【心蝕獣】は、それぞれが得た経験を互いに共有し、弱点が見つければそれを補おうとパワーアップさせる」

それら一連の行動を、更新と呼んでいる。

「その更新のなかには、生態活動そのものに関わるものも含まれている。可能性としては低いんだけど、今までとは違い、光のないところでも活動できる【心蝕獣】が、いるかもしれない。あんな近くに更新されたジェネラルクラスがいたんだ……一足先に更新を終え、活動している【心蝕獣】がないとは、言い切れない」

霊とて、自身の強さに驕って力任せに事を運べるなどと思っていない。

相手のレベルを知っているのなら適度に力を抜くが、まだ見ぬ敵に対しては最初から全力で挑む。最悪の状況を常に想定し、物事を……露骨な表現をすれば……悪い方に考えて行動する。

「いなかったら、いなかったでいい。でも、もしその手の【心蝕獣】に【心器】も無い状態で遭遇してしまったら……ね？」

それがとり越し苦労であれば良い。備えあれば憂いなしというように、堅実にリスクを減らすことが生き残る秘訣だ。

むしろ、それくらいでようやく【苦戦するレベル】に落とせるのが、【心蝕獣】という天敵なのだから。

「ハッ。Fランクらしい、実に臆病な考え方だな。まあ好きにすればいい。俺は常に【心器】を携帯しているから、出て来たとしても一人で十分に対処できるがな。余計な荷物を増やして、泣きを見てればいいのさ」

小バカにしてその場を去る守鎖之。

第1チームのメンバーに指示を出し、洞窟のなかへ入っていく。

この際、守鎖之は採掘道具をまったく持っていなかった。持っているのは両刃剣の【心器】だけ。他はすべて第1チームのメンバーに持たせていた。態よく扱き使っているものである。

「あれ、針村さんたち、【心器】を持って行くの？」

「Fランクの言ったことなんて気にしなさんな」

その扱き使われている守鎖之のメンバーは、【心器】を装備し始めた第7チームの女子たちに目ざとく気付いた。

守鎖之とのやり取りを聞いていたのだろう。

彼らは霊を嘲笑うように視線を向け、話しかけて来た。

「私たち第7チームのリーダーは御神だ。大和ではない」

「リーダーの指示だから、従うのは当然だよ」

きっぱりと拒絶の意思を見せる、槍姫と朗。

はつきり言えば、霊の懸念は過剰過ぎるもの。

太陽が東からではなく、西から上ってくるかもしれない……そう言っているのと同じことだ。

それでも指示に従っている。こと【心蝕獣】に関して、霊の言葉は何よりも信じられると、先日の子の一件で実感しているからだ。

はつきりと言われ、困惑するようにうろたえた男子たちは、八つ当たり気味に霊を睨みつけたあと、守鎖之の後を追った。

「ありがとう、二人とも」

「別に礼を言われることではないだろ？」

「そうそう。靈くんはどっしり構えて、遠慮なく指示を出してくれればいいんだからね！」

太陽が西から上るかもしれない……。

それに等しいことを言っている自覚はあるから、意見を聞き入れられないかもと覚悟していた。

それだけに、二人の言葉はありがたいものだった。

「あ、こころ。ビットは4機まででいいよ。狭い坑内では、数が多くても邪魔になるだけだからさ」

「わかりました。じゃあ、もう半分の4機はこの見張りの人たちとの中継に残しておきますね？」

「うん、そうして。それと戲陽さん、ガトリングガンは連射式じゃなくて、単発式に設定して。洞窟を崩す訳にはいかないから」

「おお！　　そういえばそうだね！　了々解っ！」

細かいが、しかし重要なことを確認しつつ、ダナンを加えた第7チームも洞窟へ入っていった。



今回の遠征（とは言えない短い距離だが）は、閃羽の資源区では手

に入らない上質な素材の採掘が目的だ。

基本素材となる【ステイラル鉱石】を主に、【心経回路】の材料となる【トランスラル鉱石】、囲んだ空間内にエネルギーを閉じ込められる【シャトラル鉱石】、【心力】のエネルギーを圧縮させる【コプレラル】鉱石、などなど、霊の【心力】に耐えられる【心器】の開発を主眼に置いた素材の入手が優先される。

「うんうん、やっぱり閃羽よりも質がいい鉱石なんだなあ」

カツンッ！ とツルハシを坑道に打ちつけ、出てくる鉱石をうっとりと眺めるダナン。

ぶっちゃけ鉱石なるものをあまり見たことのない他生徒たちは、普通の石くれとどう違うのか分からなかったりする。
光沢があるのはわかるが、それも土で汚れていて一見ただけではわからない。

だが……。

「あ、ダナン先輩。ちょっと離れてくれますか？ 奥の方に良さげな塊があります」

霊が【糸刀Ver. 1.0】から細い糸を岩壁に撃ち込み、内部を探查する。

糸から伝わる感覚で良質の鉱石を感知。塊を糸で絡め取り、引き摺りだす。

無論、坑道や壁が崩れないように糸で締め固め、穴を掘ってからだ。

「おおおおお~~~~！ 大量の【トランスラル鉱石】なんだなあ
あああ~~~~っ！！」

掘りだした鉱石の塊は、人一人をすっぽりと覆い隠せるくらいに大きかった。

しっかりと糸で土を除去していたため、出て来た鉱石はとライトの光でキラキラと輝き、比例してダナンの目もキラッていた。

「【心器】を採掘に使うとはな……。我等がチームリーダーは、どこまで常識破りなのだろうか？」

「槍姫ちゃん、それは今さらじゃないかな？ 私としては、鉱石の良し悪しを糸で判別する御神くんは、一体どこまで万能なのか、小一時間は問い質したいね~~~~」

「あの、二人とも、聞こえてるからね？」

普通を心がける霊にとって、普通じゃないとか、非常識とか、型破りとか言われるのは心外……というか地味に凹む。

そもそも、霊にも言い分がある。【心器】は強力な武器なのだから、ダイナマイトと同じでこういった採掘等に利用しない方が不思議なのだ。槍姫の槍型【心器】はツルハシを使うより効率的に掘れるし、朗のガトリングガンは、単発設定に加えて威力を調節すれば小型局所爆破のダイナマイト代わりに使える。もちろん、坑道が崩れないよう配慮する必要があるが。

とはいえ、霊の言い分は霊だからこそ。
普通の人はずぐ【心力】に限界が来て、作業どころでは無くなってしまうという弊害がある。

精密な操作を要求されると神経がすり減るように、【心力】も必要以上に消耗してしまうからだ。

「御神くん、これはちよつと大き過ぎるから、適当な大きさに分割して欲しいんだなあ」

「あ、はい。そうですね。ちよつと待っててください」

【糸刀Ver. 1. 0】から糸を放出。鉤石の塊に絡めつつ【心力】の出力を上げる。

「——ふっ！」

短く気合を入れたと同時に、鉤石の塊はいくつにも分割され、人が持ち運びできる大きさになった。

「わぁ……霊くん、すごいですね」

「あはは。まあ、自分の【心器】を用意してもらうんだから、これくらいはね……さて、運んじゃうね」

「あ、私も手伝います。あんまり採掘できないから、せめてこれくらいはさせてくださいね。」

霊がすべて一人でやってしまいそうなので、何か言われる前に行動する。

糸を使えば手作業に頼ることなく運べるのだが、ここから【尽くしたいオーラ】が出ているので、無碍にするのも憚られる。

大きいものだけ優先して糸で絡め、残りをここに任せることにした。

「……ふん」

こころのそんな姿を見て鼻持ちならない様子の守鎖之。
彼女の気を引こうと考えを巡らせるも、第1チームの成果は芳しくない。掘っても掘っても細々とした鉱石しか出なかった。

「おい、おまえら！ もっとしっかり掘れ！！」

狭い坑道内に守鎖之の激が響く。

第1チームのメンバーも頑張っているが、霊の成果を比べると見劣りしてまうのであった……。

と、そのとき。

「――っ！？」

「――だっ！？」

霊と、そして一瞬遅れてダナン。
この二人が、気配を感じ取った。

気配は二つ。

一つは来た道……坑道の入り口側。薄暗い天井の上。

そしてもう一つは奥の側……守鎖之達が作業している、すぐ上の天井。

それは、【心蝕獣】の気配だった。

「ぼくが奥のを！」

「来た道側なんだな！！」

短いやりとり。しかしそれだけで動けた。霊はともかく、ダナンは手放して褒めるべきだろう。

天井に見えるのは、バスケットボール大の目玉……ポーン・アイズの【心蝕獣】。

そのポーンアイズに向かってツルハシを投げ付け、先端部分が見ごとに突き刺さる。

だがそれだけでは終わらず、背中に担いでいたハンマーを構え、そのぽっちゃりした体型に反した跳躍をもって、天井に張り付いていたポーン・アイズに、下から打ちつける。

潰れる音よりも打ちつける音の方が大きかったのは、ダナンのハンマーの威力をポーン・アイズが受け止めきれなかった証拠だ。

（うそっ!? あの手ハンマーって……!?）

（【心器】、だったのかっ）

見ていた二人……朗と檜姫が、ダナンの大きなハンマーを見て驚愕する。

緑色に光る【心力】が大きなハンマーに纏っていたことから、それが【心器】であることを理解し、同時に驚いたのだ。

心理工学科の生徒であるにも関わらず、かなり強い【心力】を纏っていたことが分かったからだ。

一方、霊はというと。

（やっぱり、ダナン先輩はただの技術士じゃなかった。少なくともビショップクラスの实力はあるな……）

霊とほぼ同時に【心蝕獣】に気付いたことと、感じ取れる【心力】からそう判断する。

初見でダナンのハンマーが【心器】であることを見破っていたため、距離的に近い方をダナンに任せることにした。

それはみごとに功を奏し、察知してから数秒で一体目の【心蝕獣】は倒された。

その数秒の間に、霊は守鎖之たちの真上にいる【心蝕獣】に糸を絡め、バラバラに引き裂く。

（あ……これくらい【心蝕獣】だったら、針村さんや戲陽さんにやらせても良かったかな？）

肉片となった【心蝕獣】を見てそんなことを思った。

実戦経験を積ませることになるし、なにより、懸念していた暗闇のなかでも活動する【心蝕獣】だったのだ。

少しもつたいなかったと思いつつ、霊は糸を【糸刀Ver. 1. 0】に収めた。

しかし……これだけでは終わらなかった。

ポーン・アイズの肉片が真下にいた守鎖之たちに降り注いだのだ。それだけならまだいい。だがその肉片に驚き、過剰反応してしまった者がいた。

「くっ！ うおおおおお！！」

守鎖之だった。

両刃剣型の【心器】を持ち、【心力】を集中させて斬撃として放つ

【斬撃波】を、この狭い坑道内で放ってしまった。

爆音と土ぼこりが辺りを覆い、激しい震動に見舞われる。

「あ！」

守鎖之の【斬撃波】によって起こった揺れの所為で、トロツコに積んでいた鉱石が転がり落ちた。

それに気付いたところが、慌てて回収しようとした矢先……脆くなっていたのか、地面に大穴が開いてしまう。

「きゃ——」

「こころ！？」

「こころちん？！」

槍姫と朗が咄嗟に手を伸ばすが間に合わず、成す術も無く大量の鉱石とともに落下する。

「こころ　おお　おお　おお　！！！」

怒声。

あるいは、慟哭か。

普段からは考えられないような叫びを上げながら、霊はこころを飲み込んだ穴に飛び込んでいった。

全身に【心力】を纏わせ身体能力を強化し、弾丸の如き勢いで急降下。

同時に【糸刀Ver. 1. 0】から糸を射出し、こころを絡め取る。

「くしび、くん——」

糸で傷つけないよう最大限の注意を払い、落下しながらこころを引き寄せる。

「こころっ!!」

しっかりと抱き寄せ、降り注ぐ土砂から自分の身体で守る様に抱きかかえる。

あるていど過ぎ去ったところで、改めてこころを確認。

怪我は無いと判断し、次いで落下状態から抜けようと試みるが……。

（糸は……だめだ。そこらの壁に突き刺しても、遠心力で激突する。こころに負担がかかる!!）

自分の身体を盾にして済むなら、とつくにそうしている。

だが今の落下スピードでは、こころにも激突の衝撃を負わせてしまうだろう。

（なら……【糸刀】の糸を……千本の糸を束ねて……）

ダナンの改良によって千本の糸を出力できるようになった【糸刀Ver. 1. 0】。

その千本の糸を、切っ先の鋭い槍の形に束ねる。

束ねられたその糸は、人の腕ほどの槍身となり、それを岩壁に突き刺す。

「ぐううっ?!」

急ブレーキが掛かると同時に、落下スピードを相殺しようと過大な負担が霊の腕に襲いかかる。

落ちた分の位置エネルギー＋落下スピードの運動エネルギー。そして二人分の体重。

【心力】で強化しているとはいえ、こころと、そして【心器】に掛かってしまう負担を軽減するため、ジェネラルクラスを相手にしたときよりも出力が抑えられていた。そのため、どうしても強化不足となり、霊の腕が悲鳴を上げたのだ。

しばらくしてようやく止まり、痛む腕でぶら下がり続ける。

「くっ……。こころ、大丈夫？」

「は、はい……。なんとか……」

少し放心気味だったが、霊に声を掛けられて正気を取り戻す。

「まったく……。崩れるかもしれないってときに、無茶なんかしないでよ」

「ご、ごめんなさい……。でも、霊くんのために必要なものだから……」

霊は強い。

強いが故に大きな負担を、背負う必要もない負担を背負わなければならない。

それを少しでも軽くしてあげるために、今日採掘した素材は必要不

可欠。失う訳にはいかなかった。

「……この際だから、ハッキリ言っておこうか。ぼくなんかのために無茶はしないで。絶対に、だ」

「そ、そんな……いい、イヤです!! 私、霊くんの役に立ちたいのに!!」

「もう十分役にたってるよ。いや、助けられてるよ。Fランクとして蔑まれているぼくのそばに、キミはどんなときでも居てくれた。それだけで十分」

「嘘です!! 私、霊くんに何もしてあげられてない! 守ってもらうばかりで、私だって、霊くんのことを……霊くんと一緒に、戦いたい……霊くんのために、何かしたいんです……」

自分はあまりにも、霊に頼り過ぎている。

そう思い悩むほどに、こころは霊を大切に想っている。【心兵】を目指すのも、霊と一緒にいたいがためだったのだ。

「……ありがとう。その気持ちだけで十分だよ。ぼくは救われてる」

霊は霊で、頼られ過ぎていると思っていない。

こころを大切に想っているからだ、それ以上に……。

「だから、こころが思い悩むことなんかないんだ。ぼくのは気にせず、自分の幸せを考えて?」

それ以上に、こころには幸せになって欲しいと思っている。世間から蔑まれるFランクを庇って、自分から奇異の目で見られることは無いのだから。

しかし、こころは——彼女の気持ちは違った。

「私の幸せはっ！ 霊がくん一緒じゃないとっ！！ 霊くんと一緒に、幸せになりたいんですっ——あっ」

霊が悲しいことを平然と言う。

だからつい熱くなって、思いの丈を叫んでしまった。

それが何を言っているのか自覚して、絶句して、こころは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

第18話【それぞれの幸せ】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●ダナン・デナン——心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

●大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こころの幼馴染。

第19話【if & amp; tomorrow】

思わず、告白っぽいことをしてしまった。

それに気付いて、こころは大いに慌てた。

「あの……その、今のは……なんというか……」

「う、うん……」

釈明しようとして、しかし上手く言葉がでない。

なにしろ、自分の本音だったのだ。釈明すべきことなんてない。

ならば、このまま勢いに任せて言いたいことを言ってしまうのもあり、なのでは……しかし、喉下で言葉がつかえてしまう。

二人の間にぎこちない空気が流れ始めた。

その時。

「く、霊くん……今のは、私はっ——」

『こころちゃん！　御神くん！

！　だぁーいじょぶううう？！』

真上から響き降りる大きな声。

落ちて来た穴から、朗が大声で呼びかけてきているのだ。

「うんっ！　ぼくもこころも、大丈夫だよっ！！　いま登って帰るから、心配しないで待ってて！！」

霊も大声で返す。

次いで、槍身を構成していた1000本の糸のうち、一本を解きほぐして上へと伸ばした。

「みんなが心配してる。帰ろう？」

「……はい」

伸ばした糸で自分達を引っ張らせ、登っていく。

「……」

ほっとしたような、しかしもったいないような……。

もし、勢いで言っていたら、霊はなんと返してくれただろうか……。

霊に抱かれたまま、こころは訪れなかったifの未来を夢想した。



こころが言おうとした言葉。

霊はその先を想像して……すぐにその考えを振り払う。

（ダメだ……それはダメだよ……）

『私の幸せはっ！　霊がくん一緒じゃないとっ！！　霊くんと一緒

に、幸せになりたいんですっ』

（できないんだ……それは、絶対にできないことなんだよ……）

霊はFランク。

最底辺の人間であり、失敗作であり、犯罪者予備軍とも考えられている、弱い心の持ち主。

本人がどんな人間であろうと、世間は霊をそう認識する。

そんな人間と一緒に、幸せになれるはずがない。

例え犯罪を犯さなくても自分と一緒にいれば、ここまで奇異の目で見られてしまう。

（そんなの、ぼくが耐えられないよ……）

自分に関しては全く構わない。

しかし、ここまで自分と同じだと認識されるのは我慢ならない。そうなれば……。

（ぼくは、閃羽そのものを破壊するかもしれない。そうしたら、ここが悲しむ……）

自分がFランクだという自覚はある。

もし閃羽が、ここに不利益にしかないような場所になれば、破壊する気にいるからだ。

それはとても異常なこと。

考えることすら異常で、しかし実行できてしまうのだから始末に負えない。

だが、偽らざる気持ちであることも確かだ。

自分が異常だと自覚している。しかしそうでなければ、こころは守れない。

——神を殺す——

それは、正常な精神では絶対に思いつかないこと。

だがやろうとしている。

そのための布石は打ってきた。

そのための力は付けてきた。

あとは神を炙り出すだけ。そうすれば……。

（そうすれば、ぼくが『殺されたとき』のあの恐怖を、こころに経験させないで済む……。）

寿命による死はどうしようもない。

しかし殺されるとあれば、それは別だ。その危険を少しでも無くすためには、世界の頂点に君臨している【心蝕獣】……それらを統べる神を殺すしかない。

他の人が聞いたら、なんと我がままで自分本位な考え方だろうと、霊を嘲笑するだろう。

だがそんなものは全て承知のうえだ。すべては、こころのために。

「あ、こころちゃん！ 御神くん！」

「二人とも、大丈夫なんだな！？」

「怪我はしてないか？」

穴の上から、朗、ダナン、そして槍姫が心配そうな表情で呼びかけていた。

思考に深く嵌っていたのか、出口が近づいていたのに気付けなかったようだ。

伸ばしていた糸は落ちて来た穴を超え、天井の坑道に突き刺していた。そうやって引っ張らせ、無事に脱出。

「うん。霊くんのおかげで怪我は無いよ。心配かけてゴメンね」

「それとダナン先輩。すみません……せっかくの鉱石、全部穴の底に落ちてしまいました……」

「気にすることはないんだなあ。二人が無事なこと。これが一番嬉しいんだなあ」

ダナン達に迎えられ、地に足をつけて着地。

「こころ……すまなかった。俺の所為で……怪我は無いかな？」

直後、守鎖之が申し訳なさそうに謝罪してくる。

そもその原因が守鎖之にあるからだ。

こんな狭いところで、しかも放置されている坑道であんな威力の技を放てば、崩れることなど容易に想像できたはず。

しかも守鎖之は、霊やダナンとは違い、【心蝕獣】の接敵に気付かなかった。

霊が注意を促していたのに、陽の光の届かないところでは【心蝕獣】は活動しない……その概念に囚われ、完全に油断しきっていたからだ。

そして、霊によって倒されていたにも関わらず、【心蝕獣】の肉片に驚き、取り乱し、あのような蛮行をやってしまった。

こころが開いた穴に落ちて、守鎖之は自分の迂闊さを呪ったくらいだ。だからこそ今回は、プライドの高い彼であっても、他の面々の前で謝罪したのだ。

「ううん。大丈夫……霊くんのおかげで、怪我は無いから……」

こころは、謝罪を素直に受け入れた。

わざとで無いことは分かっているし、結果的に無事だったのだから良しとしていた。

それに、【心蝕獣】に気付かなかったのは自分も同じ。守鎖之を責める気にはなれない。

「こころ、降ろすよ？」

霊は、抱えていたこころを降ろし、立たせる。

しかしこころは、ぺたんと力なく座り込んでしまい、霊が慌てて支えた。

「こころ?!」

「あ……ごめんさない。腰が、抜けてたみたいです……」

心配かけまいと、乾いた笑いで気丈にふるまう。

というか、さっきの霊とのやりとりが少なからぬ原因になっている気がして、過剰に心配されるのが恥ずかしい、という思いもあったりなかったり……。

「まあ、怪我は無いみたいだから、ぼくが運んで行くよ」

「待て。俺の責任でもあるから、俺が運ぼう」

守鎖之が前に出てそう言い、霊に支えられているところに手を伸ばす。

しかし、霊がそれを遮った。

それも、かなり険しい表情を見せながら。

「なんだ。邪魔をするなFランク」

「また【心蝕獣】が現れたとき、キミはここを抱えたまま戦える？」

「なに……そういうお前こそ、どうなんだ?!」

「戦えるよ。少なくとも、ここを抱えたままキミを縛り上げるくらいはできるよ」

ここを抱きかかえる……俗に言う、お姫様抱っこだが、その状態で指先から素早く【心力】の糸を生成。

瞬時に伸ばし、守鎖之を簀巻きにしてしまう。

「なっ……!!」

「こういう狭いところでの奇襲は、各自で素早く対処するしかない。この程度のことにも反応できないんだから、大人しく自分の身だけを守っていてよ。その方が面倒が少なくて済む」

（うわぁ……御神くん、もしかして珍しく怒ってる?）

（だろうな。少なくとも、いつものあいつなら、あんな挑発的な物言いはしないはずだ）

朗と檜姫が、いつもと違う霊を見てヒソヒソと囁き合う。

普段の訓練で二人が失敗しても、霊はそれを咎めるようなことは絶対にしなかった。

何度失敗しても、出来るまで繰り返し指摘し、実践させ、ときには自ら相手になって教える。それが霊のスタンスだ。

その分かなりキツイ訓練内容になるのだが、霊も一緒にやっているため文句も言えなかったりする。

一方、霊にお姫様抱っこされているところは、というと……。

（はわっ、はわわわぁー！ わたし、霊くんを抱っこされてるっ。
お姫様抱っこしてもらってる~~~~！~！）

乙女なら一度は憧れるシチュエーションに、思いっきり浸っていた。

霊はこころと大して変わらぬ身長なのだが、しっかりした安定感をもって抱っこしている。この状態で守鎖之を手玉に取るのだから、その実力差は推して測るべし。

……などという考察を皆がしているところを、こころは有頂天気味になっているためできなかった。

表面上には出さず、ただ固まっているだけなので、誰もそれに気付かないのは幸か不幸か……。

「さて……ダナン先輩。ここは一刻も早く閃羽に帰還し、これらの【心蝕獣】のことを早急に報告したほうがいいでしょう。申し訳ありませんが、鉱石の採掘はまた後日、しっかりと装備を整えるか、

心衛軍の人たちに付いてきてもらうかしたほうがいいと思います」
「わかったんだなあ。まあ、鉱石のほうは穴に落ちてしまったものの以外にも確保してあるから、気にすることはないんだなあ」
「ありがとうございます」

当初予定していたよりも大分少ない成果となってしまった。

そのことを詫びた霊だが、ダナンは寛容にそれを受け入れた。そもそも、今までの生態とは明らかに違う【心蝕獣】と遭遇したのだ。採掘よりも報告を優先すべきだという霊の意を、ダナンは誰よりも汲んでいた。

「じゃあ、さっそく戻りましょう。ぼくが前を警戒するので、申し訳ありませんがダナン先輩……」

「わかってるんだなあ。後ろは任せて欲しいんだなあ」

ポーン・アイズを叩き潰したハンマー型【心器】を構え、ダナンは和やかな表情で頼もしい言葉を述べた。

「あ！ 御神くん御神くん！！ 大和くんを忘れてるよ！？」

「（ちっ）……あ、そうだった」

【心力】を抑え、糸を消失させて守鎖之を自由にする。

このときこっそりと舌打ちしていたのを、抱っこされているところならば気付いたはずだが、幸いなことにまだ興奮の只中にいるため、まったく気付かれなかったことを追記しておく。

（くっそ……Fランクのゴミが……今に見てろよ……）

解放され、第1チームのメンバーの手を借りて立ち上がった守鎖之

は、忌々しいという視線を霊の背中に叩きつけた。

このときから、守鎖之の憎悪は大きくなっていく。
膨れ上がり肥大化した憎悪は、やがて【同列存在】となる切っ掛け
になり、神殺しの戦いに影響を及ぼすこととなる。

だがそれは、まだまだ先の話である……。



あれから何事も無く、霊たちは閃羽に帰還した。

学園長とN.O. 2ナイトクラスにして教官でもある篤情竹馬を通じ、
心衛軍に陽の光のないところでも活動する【心蝕獣】の存在を報告。
物証として、霊とダナンが倒した【心蝕獣】の残骸を持って帰り、
現在それらを検査中。

同時にナイトクラスたちは今後の対策を話し合うことになった。

「いや……それにしても、久しぶりの実戦だったんだなあ。御
神くんといると、退屈しないんだなあ」

一人で工学棟に戻ったダナンは、採掘した鉱石を第8技術班専用の
保管庫へしまう。

明日からこれらの素材を使い、霊専用の【心器】を作る予定だ。
彼の底知れぬ【心力】に耐えられるのかは分からない。だが自分の

限界に挑戦できるまたとない機会。

その癒しぽっちゃりな顔の奥では、技術者魂が熱く熱く、燃え上がっていた。

「ホント、楽しくなってきたんだなあ」

「ふむ。それは重畳だ。ちようじよう我が同志よ」

突如、ダナンの背後に現れた人影。

振り返ると、そこには身長180後半の、長身の男子生徒が立っていた。

黒いジャージ姿で、スポーツマンという印象を受ける、真っ赤な短髪が特徴的な男子。

野生児とでもいおうか、寧猛な雰囲気惜しげも無く晒す目つきをしていた。

「あ、凱くんなんだなあ。強化合宿は終わったんだなあ？」

どうやらダナンの知り合いのようだ。

凱と呼ばれた男子生徒は、腕組みをしながら自信満々な態度で応じる。

「うむ。これで俺様の野望がまた一步近づいた訳だ。して、ダナノよ。貴様ずいぶんと面白そうな奴と一緒にいるんでいたそうではな
いか？」

「そうなんだなあ。とおうっても楽しかったんだなあ。そして
明日以降も楽しみなんだなあ」

「ふっ。たしか、御神靈……と言ったか。今年は活きのいい奴が入ってきたではないか？」

「さすが凱くん。耳が早いんだなあ」

「ふっふっふ……まさに我が【探索部】に相応しい人材ではないか。あと一週間で部活への勧誘が始まる。是非、是が非でも我が部に招かなくてはな」

「あ、それなら霊くんのチームごと誘ったらどうなんだなあ？
きつと入部してくれる確率があがるんだなあ」

「ほお……さすが我が同志。なかなか策士な助言をしてくれる……む？」

凱が、窓辺に近づき校庭を見降ろす。

その視線の先には、これから下校するのであろう、霊とこのころの二人がいた。

「あ、御神くんに純愛さんなんだなあ。あの二人は本当に仲がいんだなあ」

鉦山から帰ってくるとき、霊はこころをバイクに乗せてきた。

運転席から見えたこのころの表情は至福そのもので、霊もまんざらではない様子が窺えた。

二人の幸せそうなツーリングを見て、ダナンは普段の5割増しくらいに微笑んでしまったくらいだ。

「ふむ……まるでオシドリ夫婦のような……これは、うまくすれば面白い展開になりそうだな……」

「あんまりからかっちゃダメなんだなあ。霊くんは、たぶん凱くんより圧倒的に強いと思うんだなあ」

「ほお……それは願ってもない人材ではないか。ふっふっふ……胸が躍るといふものだ」

まるっきり正反対であるはずの二人。

しかしお互いに意気投合しているようで、1週間後に始まる部活勧誘に、思いを馳せるのであった。

――次回へ続く。

＊補足＊

――【殺神器】――

・霊がダナンに渡した設計データに記されていた【心器】。詳細は不明だが、霊の力を最大限に引き出せる特別な【心器】であることが窺える。これを持っていると【同列存在】なるものを呼び寄せてしまうらしく、ゆえに霊は普通の【心器】を使用している。

――【同列存在】――

・霊が誠との会話のなかで言及した単語。本来の力を最大限に引き出すための【殺神器】を持ってこれない理由としているが、詳細は不明。【心蝕獣】を指していることは確かだが、それ以外の意味も含まれている様子。神を戦いの場に引き摺りだすために、この【同列存在】を倒す必要があるとも言っていた。その口ぶりから、どうやら霊に匹敵する能力を持っている模様。

第19話【if & amp; tomorrow】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こちらの親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こちらの親友。

●ダナン・デナン——理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

●大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こちらの幼馴染。

第20話【アウトスタンダード】

採掘から帰ってきて一週間。

その間、霊たち第7チームは、午後の自由科目の時間になると工学棟に入り浸っていた。

目的は各自の【心器】を最適化すること。

そして霊専用の【心器】である【糸刀】の改良を、ダナンと話し合うため。

ああでもない、こうでもない、と議論しあうダナンたち第8技術班。ここ一週間は白熱しっぱなしだった。

「問題は【心経回路】にかかる負担だよな。熱を持ち過ぎて周辺機器がショートしちゃう」

「持ち手の素材になっている【ステイラル鉱石】は、硬度が高くても熱に弱いですからね。【心経回路】そのものは熱に強いんですけど、御神くんの【心力】が強過ぎて意味がないんですよ」

「オリジナルデータ通りの回路構造だと、現状のうちの技術力じゃ完全再現できないしなあ。ってか、なんだよ1億本の【心経回路】って!?! どんだけ細いんだ?! こっちはやっと1300を超えたところなのによお!」

「質の良い素材を使っても限界があるよね……。素材自体の問題だとしたらお手上げよ……。そういえばこのデータに示されてる素材……【バルシリオン鉱石】って、聞いたことないわね……。まあ無い

物ねだりしてもしようがないから、こうやって一般素材で代用を試みている訳なんだけど」

口々に意見を出し合い、改良を試みる生徒たち。

しかし技術力の差があまりにも大きく、霊が渡したオリジナルのデータ通りに【糸刀】を作れないでいた。

それでも不断の努力によって改良が重ねられ、出力できる糸は1000本から1300本に増やせた。

「御神くん、この【バルシリオン鉱石】っていうのは、何なんだなあ？」

「ぼくも詳しいことは知らないんですよ。ただ、あらゆる特性を持った超希少素材という話です」

扱うものとして、霊も議論に参加している。

オリジナルのデータには、【糸刀】に関する詳細が、事細かに記載されていた。

だが、【バルシリオン鉱石】なるものに関しては、その名称のみ記されているだけで、こういった物質なのか説明されていない。

素材以外の構造は、形だけは真似ることができるめ、ちゃんと出力計算を行えば【心力】を糸にして出力させることはできた。だが霊の望む性能には程遠い。

【心経回路】の本数が、そのまま出力できる糸の数に直結する。回路を細くすればするほどいいのだが、それだと強度の問題が生じ、霊の【心力】に耐えられなくなってしまう。

質のいい素材で構成しても、限界があった……。

「御神の【心器】……難航しているようだな」

「そうだねえ……だいたい改良されているみたいだけど……」

離れたところでは、槍姫と朗、そしてこのころの三人が各々の【心器】の最適化を行っている。

三人はすでに一週間の間で【心器】の簡単な調整をマスターした。さすがにオーバーホール等の突っ込んだことまではできないが、必要最低限の整備はできる。

ここから先は、学園側が用意した課題に沿って【心器】を調整していき、必要な単位を取得する手順となる。

「そういえば、靈くんの【心器】はカタログに載っていないものだから、課題とかどうなるんだろ……」

こころの懸念は尤もで、だからこそ見通しの立たない現状に技術班が総掛かりになっていた。

「あ、そういえばそうだねえ。一応項目には、『最適化』、『出力調整』、『外装補修』があるんだけど、御神くんの場合は『最適化』が問題かな？ 全力を出せないからねえ」

「しかし【心力】が強過ぎて【心器】が壊れるなど前代未聞だろうからな。適当なところで切り上げるんじゃないか？」

実はすでに学園長がその手の根回しを済ませている。

だが向上心旺盛な技術班の生徒たちが、珍しい技術の塊である【糸刀】に熱中。連日連夜不眠不休で改良が行われ続いていた。

「ならそうすればいいのに……。技術班の人たちはともかく、どう

して霊くんまで熱中するの……」

不機嫌そうに霊を睨むところ。

実はこの一週間、こころは霊とともに話ができていない。こころが言ったように、霊も【糸刀】の改良に参加しているからだ。

しかし毎日夕飯を食べてもらいに来ているため、まったく会話ができないことはない。だが、家に帰れば妹の真心が霊を独占するし、両親が霊を気に入っているため二人つきりにならないでいた。

なんというか……

「やれやれ。欲求不満でご機嫌斜めか。御神も罪な男だ」

「なっ?! だ、だれが欲求不満なの!? べ、別に私、そんな不純な動機じゃなくて……」

「不純? 欲求不満は、何も性的欲求だけを指している訳じゃないんだがな? 以外に耳年増なこと……」

「っ!? も、もうっ!! 槍姫ちゃん!!」

とまあ、こういうやり取りでガス抜きをさせる。

霊にやらせたい役目だが、当分の間は適いそうもないので、親友たる槍姫と朗が担っているという訳だ。

女子三人がそんなやり取りをしていると、一人の男が現れる。

黒いジャージ姿に、野性的で凶暴な目つき。

真っ赤な短髪で、180を優に超えるであろう長身の男子生徒。

彼は、この場に現れるなりこんなことを言いだした。

「頼もおおおお！ 御神夫婦はいるかああああ！！」

「ひゃ、ひゃあい?!」

その男の発言に、真っ先に反応したのは御神……ではなく純愛。つまり、こころである。

「こころ、とりあえずおまえが反応する場面ではないぞ?」

「わ、わかってるわよ!」

檜姫に指摘されて、顔を真っ赤にするこころ。

その間にも件の男は霊のところへ歩いて行く。

「あ、凱くんが来るのを忘れてたんだなあ」

「ダナン先輩、お知り合いですか?」

「そうなんだなあ。すっかり忘れてたけど、実は今日、御神くん
に用事があると聞いてたんだなあ」

やがて目の前まで来た男は、霊を見ながら自己紹介。

「御神霊だな? 俺様は輝角凱^{きかどがい}。戦闘学科の3年生。探索部の部長
でもある」

「探索部、ですか?」

「そうだ。そのダナンも探索部でな。今日はお前を、我が部へスカウトしに来たのだ」

腕組をしながら自信満々に言う、輝角凱。霊が探索部に入るのが決定しているかのような雰囲気だ。

「規格外な問題児……さっそく犠牲者が出るのか……」

「いや、でも御神くんならあるいは……」

「だからって、また部活棟が半壊するような事態にならないだろうな……」

技術班の生徒たちから、なにやら不穏な会話が聞こえてくる。

それを意識の片隅で聞き止めながら、霊を対応していく。

「ダナン先輩も一緒なんですか。どんなところか聞いても？」

「無論だ。知っているかもしれないが、我が心皇学園の部活動は、その内容如何によっては単位を取得できる。医療部なら軍事医療学の、情報部ならば情報軍事学の、といった具合にな」

これは生徒たちに単位を取得させやすくし、もっと幅広く科目を履修して多くを学ばせるための措置だ。

都市で賄える人口からでは、【心兵】となる人間の補充は困難。そのため少数精鋭が好ましく、一人が複数の技術を持つことが求められる。

「で、探索部はどんな単位取得ができるかというところ……すべてだ」「すべて……ですか？」

「そうだ。名前こそ探索だが、その実なんでもやる。こちらが申請した内容と学園側の裁量で単位が取得できる仕組みになっている。無論、結果を出さなければ単位の取得はできないがな」

ちなみに、単位の取得は点数制である。

一定の点数を獲得できれば単位の取得となり、探索部のように何にでも手を出せば、それだけで様々な科目の単位を取得しやすくなるのだ。

「なんだか人気ありそうな部ですね？」

「と、思うだろうが……部員は俺様とダナンの二人だけでな」

「そうなんですか？」

「ああ。我が部の特性上、入部するにはそれなりの実力を測らせてもらっている。最近の者どもは軟弱な奴が多くてな……おまえのよ
うな猛者を探していた」

「はあ……」

なんと返せばいいか分からず、曖昧に返事をする。

霊から見ればこの閃羽の人間は弱い。

確かにナイトクラスは5人いる。他の都市では1人いるかいけないか
というご時世に、これは恵まれているといってもいい。

だからこそ他の人間は安心しきっており、危機管理意識が薄いのだ
ろうと推測。

その影響が次世代を担う生徒たちにも出ているのだろう。

「と言う訳で、だ。いま探索部は深刻な人材不足に陥っている。こ
れは心皇学園の弱体化をも意味しているのだ！」

「そこまで言いますか？」

「探索部以上に秀でたところなど無い！ 断じてぬわあ^{無い}い！！ だ
からお前をスカウトする訳だ。そしてこの際だ。おまえの妻と、そ
の仲間たちも一緒に入部するがよい！！」

相も変わらず、腕組みをしながら霊を見下ろす凱。

自信満々なその態度と物言いはどこから湧いて出てくるのだろうか
……。そもそも……。

「あの、輝角先輩？」

「俺様のことは凱と呼ぶがいい」

「あ、はあ……それでは凱先輩。妻って……誰ですか？」

言うまでも無いが、霊は結婚していない。なのに、妻とはどういうことか。

「それは愚問だぞ貴様。旧姓、純愛ころという女子に決まっておろうが。そうだろう？」

そういつて、こころに視線をやる凱。

唐突に話題を振られ、こころは慌てて――

「ひゃ、ひゃあい！？ ふ、ふ、不束者ですが?!」

凱の口車に乗った。

「待て待てこころ。暴走しているぞ？」

「そうだよこころちゃん！ そこは元気よく『はいっ！』って肯定しなきゃ！」

「煽るな朗っ」

状況を引っ掻き回す朗の脳天に、槍姫のゲンコツが落ちた。

朗は頭を抑え、呻き、地面に蹲った。

「まあ何はともあれ、一度我が探索部に来るがいい。いくぞ!」
「は、はあ……えっと、ダナン先輩？」

【糸刀】の調整がまだ途中だ。

ダナンの指示を仰ごうと視線を向けた。

「こうなった凱くんは止まらないんだなあ。気分転換も兼ねて、一緒に行くんだなあ」

それも一理ある。

ダナンは他の技術班の生徒に後を任せ、霊たちを伴って凱の後を追った。



凱に連れられてやってきたのは、訓練棟。

実戦訓練を行うこれらの施設は、1年生のうちから頻繁に利用するというのは稀だ。

しかし霊たち第7チームもよく利用している。

それは霊が、常に実戦的な訓練を施しているからだ。

習うより慣れろ。

それが霊の教育方針である。

「さて……スカウトしておいて何だが、これから俺様と模擬戦をやっってもらう」

「つまり入部試験ですね？」

「そうだ。貴様の實力は知っているが、俺様が直に手合わせしておきたい。いいな？」

「ええ。構いません」

霊が了承し、二人は戦闘準備にはいる。

凱は黒いバトルスーツ【心装】を着込む。

しかし普通のとは違い、背中に黒いバックパックのようなものが仕込まれている。

そしてそのバックパックには、バズーカ型【心器】が連結されていた。

「凱先輩はバズーカ型を使うのか……。朗のガトリングガンとは違い、一撃の威力に重きを置くタイプだな」

「そうだねえ。圧縮率を高めに設定してあるはずだから、連射は利かないだろうけれど、当たればタダじゃ済まないはずだよ」

槍姫と朗が、凱の【心器】を見ながら考察する。

【心力】を弾丸として圧縮・保存する際、その圧縮率によって威力が決まる。

朗のガトリングガンは圧縮率を低くしている分、素早い連射が可能。対して凱のバズーカは、圧縮率を高くしているために威力が大きい。しかし連射はできない。

おそらく凱の戦法は、強力な一撃による短期決戦だろうと当たりを付けた。

「しかし、あのバックパックはなんだろうな？　　こころ、知ってい

るか？」

「ううん……私も知らない。予備の【心弾倉】かなって思ったけど、大き過ぎるし……」

またも知らない装備。

どういう訳か、霊と会ってから未知の技術のオンパレードだ。

偶然なのかもしれないが、類は友を呼ぶ、という奴かもしれない。

「さてと……俺様はフル装備でやらせてもらうが、貴様はどうする？」

「このままでいいです。どうせ使えまえんし」

霊はいつも通り、制服に【糸刀】というスタイルだ。

膨大な【心力】を有しているが故に、【心装】を装着できない。

もし【心装】がオーバーヒートして爆発してしまったら、霊の身体がその爆心地になる。危なくて着れないのだ。

「ふっふっふ……では、始めよう。ダナン、合図を頼むぞ」

「わかったんだなあ。はじめえ」

「「「早っ!!」「」」」

間髪入れずに開始の合図を出したダナン。

第7チームの三人娘は揃って突っ込んだ。

ぽっちゃり和やか系に反したその流れに、突っ込みを入れずにはいられなかったのだ。

だが霊と凱の二人は、戸惑うことなく戦闘を開始した。

「っ?! バカな、御神に接近戦を挑むだど?!」

槍姫が驚愕を露わにする。

バズーカを背負いつつも、凱は霊に対して肉弾戦を仕掛けたのだ。

「ふうふううん!」

「っ!」

渾身の一撃を込めた拳が、霊に迫る。

それを躲し、逆撃の蹴りを凱の横っ腹に見舞う。

「ぬうんっ!」

身体を捻って回転。霊の蹴りを空振りさせ、空中に浮く凱。

直後、その回転の勢いを利用した裏拳を、霊の脳天に落とす。

それを打ち払い、ハイキック。

凱はまたしても身体を空中で回転させ、そのハイキックを流す。

「すごーい……御神くんと互角に戦ってる!」

「ばかな……あれだけやれる人が、ただの学生を今まで続けていただど? 大和よりよほど強いじゃないか」

霊の体術のすごさは、チームを結成してから嫌というほど理解させ

られている。

ナイトクラスを父に持つ槍姫ですら、霊以上の体術は見たことが無い。

その霊と、体術で互角にやりあっているのが輝角凱だった。

「バズーカだから、遠距離から仕掛けると思ったが……予想外だな」
「どういう場面でバズーカを使うのかな？ 御神くんみたいに全距離対応には思えないんだけど……」

二人が驚く間にも、霊と凱の模擬戦は次の段階へ進む。

「ふむ。悔しいが今の俺様では、体術で勝つことは難しいな。では、【心器】を使わせてもらおうぞ！」

霊から距離を取り、バズーカを構える凱。

紫色に光る【心力】が、その砲口から輝きだす。

（っ！ 収束が速っ——）

高く圧縮しようとするれば、それだけ撃ち出すのに時間が掛かる。

だが凱のバズーカは、霊の予想を上回るスピードで【心力】を収束。

結果、放たれた【心力】の弾丸……というよりもビームに近い攻撃が、霊に直撃する。

「霊くんっ！！」

まさか霊が喰らうなどと思わなかったところが、悲鳴を上げる。

しかし良く見ると、霊は腕に青く光る【心力】を纏わせ、ビームを凌いでいた。

「ふはははっ！ 聞いていた以上に凄まじい【心力】だ！ 俺様も久々に、全力を出せるぞ！！」

その顔に凶暴な笑みを湛え、凱はバズーカを霊に向ける。

今度はビーム状の攻撃ではなく、弾丸にして【心力】を放った。

「ふっ！」

【糸刀】から糸を繰り出し、その弾丸を絡め取る。

絡め取った弾丸はそれでも前方に突き進むが、霊は絶妙な力加減で軌道を逸らし、遠心力を利用して振り回す。

そして、その弾丸を凱に返した。

「なんとっ」

予想外の反撃を受けた凱はバズーカを構え、返された弾丸に狙いを定めて撃つ。

【心力】の弾丸と弾丸がぶつかり合い、爆発。生じた衝撃波が、訓練棟を揺らした。

「っ！？」

弾丸と弾丸が衝突し、煙が立ち込める。その煙から、数発の弾丸が霊に襲いかかる。

【糸刀】から複数本の糸を射出し、すべて絡め取って先ほどと同じように振り回す。

複数の糸が絡まないのは、さすが霊というべきか絶妙な技術だ。

順次絡めていた弾丸を解き放ち、凱がいるであろう煙の向こうへ返す。

だがその弾丸すべてが、ビーム状の【心力】によって掻き消された。

「ふはははっ！ 楽しいぞお！ 御神霊！！」

バズーカの構えを解き、高笑いする凱。

霊はいったん糸を回収し、凱の様子を窺った。

「ふっふっふっ……これは、アレだな。貴様になれば、俺の渾身の一撃を見舞っても良さそうだな」

「が、凱くんっ?! まさか、アレをやるつもりなんだなあ?!」

「ふははははっ!! 御神ならば耐えられよう! むしろそれくらいでなければなあ!!」

バズーカを肩に構え、砲口を霊に向ける。

「貴様の全力を見せてもらおうぞ! この俺の一撃から、貴様の後ろにいる者達を守ってみせろ!!」

「っ……」

霊の後ろには、観戦しているところ達がいる。
避ければ……ところが危ない。

「【心力コンデンサー】っ！ 直結 ちよっけええっ！！」

背負っていた黒いバックパックが上にスライド。
肩に構えていてバズーカの後部に接続。

「まさかあれは、【心力】を蓄えられる装置か？！」

「コンデンサーって言ってたもんね……って、ちよっとマズいんじゃないかな？！」

「ちよっ、待つんだなあ！！ それはマズいんだなあ……！！」

槍姫と朗が慌て、そして凱がやろうとしていることを知っているダナンが、二人以上に慌てる。

しかし、凱は撃つ気満々だった。

【心力コンデンサー】は、【心力】を蓄えられる装置。

蓄えた本人しか使えないが、戦闘前に【心力】をチャージさせることで予備バッテリーのような役割を持たせることができる。

この【心力コンデンサー】とバズーカを直結させることで、通常では考えられない【心力】を瞬間的に放つ。

これから放つ強力な一撃こそが、凱の本領だ。

最初の予想に違わず、一撃による短期決戦が凱の真骨頂。それをしなかったのは、霊の実力を見定めるため。

傍から見れば互角にやり合っていたが、凱は霊の底の見えない実力に、相手が格上であることを肌で感じ取った。

であるが故に、その最深部を見るため、敢えて人質をとるようなマネをした。

【心力コンデンサー】に蓄えられていた【心力】が、バズーカへ送り込まれる。

砲口の中は眩い紫色の光で満ち、今にも爆発しそうな甲高い音を発していた。

「ふはははっ!! 行くぞっ!! 規格外な青春の熱き血潮!!」
ガイズ スペシャル バズーカ
発射 はっしゅああっ!!」

「うわああああ! もうダメなんだなああああ!!」

眩い光が大きくなり、すべてを呑み込まんとばかりに広がる。

「霊くんっ!!」

こころが呼びかけるも、霊は動く気配がない。

襲ってくる光の濁流を前に、霊は青く光る【心力】を全身に漲らせた。

その青い【心力】は、霊の背中に集まって形を成す。

「……………え?」

凱の【心力】に呑み込まれる寸前、こころは確かに見た。

霊が全身に纏う青い【心力】が背中に集まり、3対6枚の翼を形成したところを。

天使の翼のような造形。

【心力】の糸で織ったのとは違う、【心力】そのものが翼になった、その光景を。

霊は3対6枚の翼を前方に折りたたみ、盾にした。

翼は凱のバズーカから放たれた膨大な光を受け止め、その行く手を阻んだ。

「なっ……なんだ、御神の背中から生えているアレはっ!!」

「すごっ……まるで、天使の翼みたいだよっ……」

槍姫と朗も、霊が起こした変化に気付いた。

すべてを呑み込み破壊する凶暴な光を受け止める、天使の翼。

今までのように、ただ【心力】を出力しただけのものとは明らかに違う、その青い翼。

「——……っ! かああああああっっ!!」

気合とともに、大きく張り上げられた霊の声。

同時に翼を勢いよく開き、凱の放った凶暴な【心力】の濁流を、一瞬のうちに掻き消した。

「なんと……」

自身のすべてを込めた一撃。

それを防がれた驚き。そしてそれ以上の、歓喜。

「ふはははっ……見えたぞ。貴様の底が垣間見えたぞっ……貴様の

ような奴がいるっ！　これが、世界の奥深さと言うやつかっ！！
はっはっはっはっ！！」

凱が、今日一番の大声で笑う。

強者と出会えた喜び。

予想を上回る世界の奥深さ。

霊という存在を通じて、凱はそれらを実感した。

「——っ！　とっ」

その笑いを掻き消すかのように、スパークするような音が響き渡る。

それは【糸刀】から発せられており、霊は慌てて投げ捨てた。

直後、【糸刀】は爆散。

黒い煙の花を咲かせ、粉々に吹き飛んだ。

「ふむ。さすがにそれほどの【心力】を纏えば【心器】も影響を受けるか。とことん人外な奴よのお、御神」

凱が笑いながら話しかける。

霊は全身に【心力】を纏わせた。

その余波は【心器】にまでおよび、使っていないにも関わらずオーバーヒート。爆散したという訳だ。

「……ぼくが止められなかったら、どうするつもりだったんですか？」

「ふっ……止められると思ったからこそ、撃ったのだ。そのような

もので止められるとは予想外だったかな」

凱の視線は、霊の背中……青く光る3対6枚の翼に注がれている。

「俺様たちの知らない【心力】の形か。実に興味深いぞ。よし！御神霊、合格だ！！我が探索部に入部することを許可してやろう！！無論、貴様のチームも一緒になっ！！ふはははははっ！！」

「あのっ……誰もまだ入部するなんて言ってないんですけどね……」

「はっはっはっはっ！！めでたい！実にめでたいなあ！！」

霊のさり気無い突っ込みも、無視。

凱は心底嬉しそうに笑い、霊たちに入部届けの用紙を配り始めた。

第20話【アウトスタンダード】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●ダナン・デナン——心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】

に関する技術はなかなかのもの。

●輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー

1。

第21話【同類ではなく、同列】

今日も今日とて、霊は純愛家にお呼ばれされた。

どうやら霊の食生活を相当に疑っているらしい。

事実、霊は食材をそのまま調理せずに食べてしまう。

野菜はもちろん、肉すらも生で食べてしまうのが霊だ。それで体調を壊してしまうならば改善させられるのだが、厄介なことに、霊は【心力】によって身体能力を強化し、無害化してしまう。食べてしまえば栄養を無理矢理に補給できるので、栄養失調にならないのだ。

だからといってそんな食生活を許せるわけもなく、こころやその母である志乃が、事ある毎に……それこそ毎日夕飯を食べに来るよう呼びつけていた。

毎日それだと気が咎めるので、せめて食器の片付け程度は手伝っている。

「霊くん、コップはこっちの棚にお願いしますね」

「うん、わかった」

この男、料理はしなくせに家事全般はソツなくこなす。他人の家だから置き場所に迷うくらいで、他は文句の付けようもない。

（はぁ……。さて、明日からどうしようかな……）

片付けが一段落し、少しだけ思考に耽る。

今日の昼間、凱との模擬戦で見せた、3対6枚の【心力】の翼。

その説明を求められたが、いずれ話す、と詳しい説明を拒んだ。

説明してもいいのだが、現段階では理解を得られないだろうと思い、はぐらかしたのだ。

素直に引き下がってくれたのだからいいが、内心でどう思っているのか少し気になる。

これから接する機会が多いであろう人達と亀裂を入れるような事態は避けたい。

（凱先輩が【同列存在】だという確証が得られれば、説明できるんだけど……まだ分からないんだよなあ……）

内心で溜息を吐き、どうしたものかと悩む。

（まさか【心力コンデンサー】をああいふうに使うとは思わなかったなあ……。だから、まだ断定できないでいるし……）

【心力コンデンサー】。

あれは【心力】を蓄えておくバッテリーのようなもの。

もし戦闘中に【心力】が尽きてしまったら、適時【心力コンデンサー】から補給。継戦能力の向上を図った結果、生み出されたものだ。

欠点としては、蓄えた本人しか【心力】を補給できないこと。そして半日しか【心力】を蓄えておけないこと。

普通の人間は【心力】を完全回復させるのに一日以上かかる。なに半日しか蓄えておけないのでは意味が無い。

【心力】をコンデンサーに蓄える……つまり移すことになるのだが、当然その人の【心力】は消費される。そして回復には一日以上。なに半日しかコンデンサーは保たない。

ぶっちゃけ使えないのだ。

（なのに……凱先輩は使えている。単に【心力】の回復が速いのかもしれないけれど……）

【心力】の完全回復は、霊ならば1時間もあれば余裕だ。ある程度でよければその半分以下でもかまわない。

もし凱が、霊に匹敵するような回復速度を持っているのなら、【心力コンデンサー】を使っているのも、分からないでもない。

問題は、その使い方なのだ。

（【心力】の高速収束。そしてあの威力。あれは【心力コンデンサー】に蓄えていた【心力】と、凱先輩自身の【心力】の二つを合わせて【心器】に注ぎ、一気に解放した結果だ）

だからこそ、あの威力。

もし霊が防がなければ、訓練棟はおろか学園の一部が消し飛んでいただろう。それはダナンの慌てぶりからも明らかだ。

（えーっと、なんて言ってたっけ？ ガイズ・スペシャル・バズーカ、だっけ？ あの威力は、間違いなくジェネラルクラス並みだった……）

そう考える根拠。

それは、霊が全力を出さざるを得なかったから。

霊の【心力】を全開にし、3対6枚の翼に集約したアレは、全力の証。ジェネラル・ゴーレムのときですら出さなかった、霊の本気だ。

霊が本気を出さなければならなかった相手……それが、きかどがい輝角凱。

（【心力コンデンサー】を併用しての【心力】。それが問題なんだよなあ……。単体でどれほどの【心力】を有しているのか……。それさえわかれば、凱先輩が【同列存在】かどうかの判断になるのに……）

仮に凱が【同列存在】であれば、3対6枚の【心力】の翼のことも説明できる。否、説明しなければならない。

「霊くん？」

一人悩んでいると、こころが顔を覗き込むようにして目の前にいた。

「あ……こころ。どうしたの？」

「それは私の台詞です……。もしかして、昼間のことで悩んでいるんですか？」

「え……えっと……」

凶星。

そしてそれ以上に、こころに気付くのが遅れたことで、平常心が保てなかった。

（もし凱先輩が【同列存在】で、ぼくの事と一緒に説明した場合……こころは、ぼくをどう思うのかな……）

そこでふと、自分の思い違いに気付く。

（いや。どう思われようとも守るだけだ。ぼくのやることに変わりはない……無いんだよ）

そう自己完結させる。

すると、自分でも驚くほどに心中のさざ波が治まった。

「ううん。ちよつと考え事してただけだよ」

「それを悩んでいる、というんです」

「うっ……」

早くも心が折れかけた。

「霊くん……。霊くんはいずれ話すと言ってくれました。だから、私は霊くんが話してくれるまで待ってます」

「っ……こころ」

「きつと檜姫ちゃんや朗ちゃんだって、分かってくれてます。先輩たちだって、待つって言ってくれたじゃないですか」

「うん……。そうだね。うん……。いずれ、必ず話すよ」

いずれにしても、賽は投げられている。自分がこの閃羽に戻って来たときに。

である以上、受け入れてくれようがくれまいが、行動するしかない。

行動しなければ、この閃羽ごと、こころが殺されるだけ。

それは変わらない事実であり、それを避けるために自分は強くなった。

改めて決意した霊だが、翌日にまた悩む羽目になるとは、この時は露ほども思わなかった……。



5月に入った心皇学園は、今日から本格的に部活勧誘が始まる。

4月に行わないのは、部活が単位取得に大きく関わるから。各々の適性を見極めさせ、どの部活に入るか考えさせるのである。

この勧誘期間中は、休み時間……特に昼休みに盛んに行われ、学園祭に次ぐ賑わいになる。

そして今年は、希代の新入生がいる。

その名は、純愛こころ。

数少ない【感応者】にして、入学前から閃羽最大のビット操作数を誇り、【感応心療】も施せる才女。

戦闘が常となる戦術部や治安部、医療を主とする医療部、さらには全く関係無さそうな多種多様な部、つまりすべての部が、こころを招こうと躍起になっていた。

そう……もうそれは過去形である。

「うおおおお……何故だああああ!!」

「すでに、入部済みだとおおおお?!」

「そんな……2か月掛けて練ったプランが台無しよおおお!!」

こころに対する勧誘は、彼女自身がすでに特定の部に籍を置いてい
ると説明したことで、玉砕の様相を呈していたのだ。

今は昼休み。

授業が終わって早々に1組になだれ込んだ上級生たちは、教室の廊
下に折り重なるようにして崩れ倒れていた。

「なんか……悪いことしたみたいですね……」

「こころが気にすることじゃないよ。どの道、どこかの部に入れば
こうなっていたはずだし」

廊下を歩きながら、フォローを入れる。

このバカ騒ぎでクラスメイトに迷惑が掛かることを懸念したこころ。
それを察した霊が、どこか人気のないところで昼食を食べようと提
案。第7チームのメンバー全員で移動中だった。

「そうだねえ。それに、こころちゃんに責任は無いんじゃないかな
?」

「ふふっ……そうだな。どっちかというと、道連れにした御神が悪
いか?」

「うっ……」

本当のことなので言い返せない。

霊だけでなく、こころや檜姫、朗も一緒にいつの間にか入部するこ

とになっていた。

凱の目的は霊個人だったようだが、部員が少ないという理由で第7チーム全員、まとめて入部させられてしまったのだ。

質を落とす訳にはいかないと言っていたが、部員数が足りないのはさすがにマズいとのこと。霊ほどではないが今後に期待できるということで、試験無しで三人娘は入部させられたのだった。

「まあ探索部はすべての単位を取得できるとのこと。御神のおかげで簡単に入れたんだ。むしろありがたいと思っているよ」

「なら、ぼくの所為にしないでよ……」

「はははっ……お約束と言うやつさ」

霊が珍しくやり込められつつ、4人が廊下を歩いていると……。

「きゃっ！」

「うわっ!!」

「おっと……」

廊下の一角で、こころが誰かとぶつかった。

階段に通じる一画で、お互いに気付かずぶつかってしまったのだ。よろけるところを、霊がさり気無く支えたので事無きを得た。が、ぶつかって来た相手はそうはいかなかった。

「イッテテテ……あっ！　ごごご、ごめんなさいすみません不注意でしたごめんなさい!!」

こころとぶつかったのは、霊以上に小柄な男子生徒。

ぶつかったのに気付いたその生徒は、大慌てで謝り倒す。それはもう見ているこっちが気の毒になるくらい。

「大丈夫ですよ。私のほうこそ、すみませんでした。あ、お弁当箱を落としてますよ」

ぶつかったときに落としてしまったのだろう。

こころは黄色の弁当箱を拾って渡す。

「あわわわ、すみませんごめんなさいありがとうございます!!」

「あ、あの、私は本当に大丈夫ですから、そんなに謝らないでください……」

「すすす、すみませんすみませんごめんなさい申し訳ありません!」

(悪循環だなあ……)

とりあえず傍観していた霊が、心中で溜息をつく。

この小柄な男子生徒、謝るのが癖なのか、とにかく謝りまくる。

これではまるで、こころが悪いことをしたかのような雰囲気だ。

(まあ、そう思う人なんていないだろうけれど。いたら分らせればいいだけだし)

無論、それは力尽くで、という意味だが。

謝りまくる小柄な男子生徒と、恐縮するこころ。

そろそろ助け船を出そうと思ったとき、新たな乱入者が現れた。

「くおおおらあああ！！ 照討てらうちいいいい！！」

廊下に響く、ドスの利いた声。

おそらく小柄な男子のことであろう、照討と呼ばれた人物が下つて来た階段から、3人の男子がやってきた。

全員ガラが悪い。

どれも体格ががっしりしており、見た目だけなら熊に見えなくもない。

彼らは、いまだ地面に座ったままの獲物を見つけると、その胸倉を掴んで怒鳴りつけた。

「コラ照討い……てめえ何逃げてんだあ？ さっさと昼飯寄こせって言っただろうがあ？」

「つうか、逃げられるとか思ってたんじゃないよ。バカかてめえは？」

照討と呼ばれた小柄な男子生徒を囲み、ガラの悪い3人が脅す。

「うう……こ、これは僕のお弁当だか、ら……」

「んなこたあ関係ねえんだよ！！ ゴミとしての価値しか無いフラシクのでめえに、下僕つつう役目を与えてんだ！ 下僕は下僕らしく、てめえが持つてるもん全部差し出しゃあいなんだよ！！」

壁に叩きつけ、さらにどなり散らす。

しかし照討は、弱々しくもそれに抗った……。

「でも、これは……これは、孤児院のみんなが作ってくれた、お弁

当だから……」

「はあ？ 親無しどもの作った弁当だあ？ はっ。ゴミに作った弁当なら……」

「あっ！」

弁当箱を取り上げる。

すぐに反応する照討だが、彼の手が届く前に――

「ゴミにしたって構わねえよなあ？！」

弁当箱を地面に叩きつけ、あげく踏みつぶしてしまった。
中身が飛び散り、無残に潰されていく。

「なっ、やめてよっ！」

「ああん？！ なんでFランクのゴミがオレに指図してんだあ？
ぶっ殺されてえかゴミがあっ！！」

叫ぶと共に、照討の横っ腹に蹴りを入れる。

呻く照討は、それでも弁当箱に手を伸ばしていた。

どうやら、照討はFランク……つまり、霊と同じようだ。

人間の失敗作、弱い心の持ち主、社会の底辺。ゴミとしてしか認識
されない人間。

それを黙って見ていなかったのが、こころだ。

「っ！ あなた達っ！！」

（だよね。こころなら黙ってないよ……）

ガラの悪い3人に詰め寄ろうとするこころ。

それを予期していた霊が、【心力】の糸を出そうとしたとき、それは起こった。

「やめてよっ!!」

「うお——」

再び踏みつぶされそうになった弁当箱。

照討がひと際大きな声を出したとき、橙色の光が彼の全身を覆った。弁当箱を踏みつぶそうとした1人を突き飛ばす。そして、突き飛ばされた生徒は壁に激突し、めり込んだ。

「なっ……今のはっ……」

「御神くんと同じ、全身から【心力】を!?!」

槍姫と朗が、驚愕する。

照討の全身を覆っていた光は、【心力】で間違いない。そしてそれを出来る人間は限られている。その限られた人間は自分達のチームリーダーであり、その人だけだと思っていただけに、目の前で起こった出来事が信じられなかった。

それは、霊も同様だった。

「っ……まさか……」

「? 霊くん?」

霊の声。

それは、彼にしては珍しく動揺の色を含んでいた。

「まさか……【同列存在】……」
「え……？」

それに気付いて、霊に振りかえったところの耳に届いた、ある単語。

（そんな……こうも連日、【同列存在】に出くわすものなのか？
いや、まだ凱先輩がそうだと決まった訳じゃない）

聞かれてしまったことにも気付かず、霊は思考を繰り返す。

（いや、それより今は、目の前の彼だ……）

思考を切り替え、照討と呼ばれた生徒に意識を向ける。

照討は自分がやったことに驚いているのか、震えながら壁にめり込んだ生徒を見ていた。

「て、てめえ……今なにしゃがった？！」

「この、ゴミのくせに、人間様に盾突こうってのか？！」

残る2人が、照討を襲う。

その2人を、青く光る糸が絡め取り、縛り上げた。

「な、なんだ？！」

「その辺で、やめてあげてくれないかな……」

無論、その糸を操っているのは、霊。

右手の指先から【心力】の糸を放出し、ガラの悪い男子生徒2人を捕まえたのだ。

「お、おまえは確か、大和を倒した……」

「Fランクの、御神霊か?!」

守鎖之との決闘で、霊のことは知られている。

この2人もあの決闘を見ていたようで、霊の姿を見て顔を真っ青にした。

「へ、へへ……同類のことを思いやって、助けたってか?」

「Fランクのゴミのくせに、同類意識は持ってやがんだな?」

だがその2人は、霊が所詮はFランクであると高たかを括っていた。

Fランクであるのなら、例えどんなに強かろうが、付け入る隙はあると思っている。

なぜなら、彼らは総じてゴミだから。

だがそんな思いは、次の霊の発した言葉で霧散してしまった。

「同類じゃないよ。彼は、ぼくと【同列】だ」

「「あ?」」

霊の目が、縛り上げている2人ではなく、照討を見たのはその台詞の直後だった。

「あ……あのっ……」

「……」

視線を向けられた照討という生徒は、怯えながらも目を逸らさなかった。

いつもの彼なら、俯いてしまっただろう。
だがこのときばかりは、彼の目を見ていなければならぬ……そんな強い焦燥感に駆られ、見つめ返していた。

第21話【同類ではなく、同列】（後書き）

●御神霊———主人公。Fランクの落ち零れとされているが、
みかみくしび

膨大な【心力】を有する謎の少年。
じゅんない

●純愛こころ———霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
はりむらせうき

●針村槍姫———背の高いクールな少女。こころの親友。
あじやらほがら

●戲陽朗———いつも元気で明るい少女。こころの親友。

第22話【悪いこと】

「同類じゃないよ。彼は、ほんと【同列】だ」

彼は、気付いていない。

だから教える必要がある。どんな手段を使っても、彼が自分と…
…神殺しを成そうと思っっている者達と同列であることを、分からせなければならぬ。

「はっ…：Fランクってのは本当に訳がわかんねえな。てめえらはいつもそうだ！ いつもビクついてるくせに、訳がわかんねえことでキレやがる！」

「そして平気で人を殺す！ どうせ人を人とも思っちゃいねえんだろ！！」

霊の糸で拘束している2人の男子が、その拘束を解こうと吠える。

罵声を浴びせられている霊は、しかしその話を聞いていない。
ずっと、恫喝されていた照討という小柄な男子生徒を見ていた。

「無視してんじゃねえよ！ こいつを解きやが——！！」

霊が腕を振るう。

その動作につられて、糸が拘束している男子たちもろともに宙を舞った。

そして、壁に激突。

「ぐあっ!!」

「あがつ!!」

照討が無意識で突き飛ばし、壁にめり込ませた最初の男子と同じように、拘束されていた2人の男子も壁にめり込んだ。

「ちょ、ちょっと御神くん!? やり過ぎじゃないかな?!」

「……あっ」

言われてみればそうだった。

彼に……照討と呼ばれていた人に意識してもらいたくて、彼が無意識にしたことと同じことをやった。

だが考えてみれば、今それをする必要はない。あとで分かっただけえればよかったのだ。

「くおおおおらああああ!! 貴様らそこで何をやっとなるかああああ!!」

廊下のむこうから怒鳴り声。

見ると、教員と思わしき大人の男性が走ってきていた。

「マズいぞ御神!! 生徒指導の先生だ!!」

槍姫が叫び、暗に逃げろと言う。

霊がどれほど強かろうが、Fランクに対する風当たりは強い。生徒指導の先生、^{へだいしやうじやう}隔異霄壤は、特にそれが強い傾向にあると有名だ。

「このまま放っておけないでしょ? みんなは行って。これはぼくが撒いた種だから、ぼくに任せて」

「しかし、あいつには理屈が通じない！！感情論に任せて、おまえにどんな理不尽を強いるかわからないぞ！」

逃げようとしなない霊を、なんとか説得しようとする槍姫。そして――

「ならば俺様に任せておけい！！」

「ひぁぁぁぁぁ？！」

槍姫の背後から、赤髪短髪の暑苦しい男が大音声とともに現れた。いきなりのことに、槍姫が驚いて悲鳴をあげた。

いつも凜としている彼女からは想像もつかない、実に可愛らしい悲鳴だった。

「が、がが、凱先輩？！なぜここに？！　　というかいつの間に！？」

「ふっ……針村よ、気配を消して近づくなど、俺様には赤子の手を捻るより簡単なことだ。まあ御神は気付いていたようだが、こいつは普通ではないので除外しておく」

「っ……」

「霊くん、相手は一応先輩なので抑えてください……。ね？」

普通ではない、と面と向かって言われたので何か言おうとした。が、話が進まないのです、こころはそれを押し止めた。

「ふむ……隔異^{へだい}教諭か。奴の相手は慣れている。ここは俺様に任せ、貴様たちは逃げるがいい」

「は、はぁ……しかし、凱先輩に迷惑をかける訳には……」

「その生徒絡みで面白いことを考えているのだろうか？　ならば御神、貴様らの先輩にして部長である俺様が応援するは必然。ほれ、さっさと行かんか！！」

「わかりました……では、お願いします」

ぺこり、とお辞儀をして、霊と第7チームはその場を去る。もちろん、照討と呼ばれていた小柄な男子生徒も一緒に。

「クッククク……さて……。悪い子はいねがぁー！」

「それはおまえだ輝角おぉお！　また、また、またしても貴様かぁあああ！！」

「フハハハッ！　震えおって……どうした駄教師がっ！！　俺様の規格外な威厳に怖気づいたか！！」

「これは怒っておるのだぁああ！！」

怒りに震える隔異を、腕組みしながら高笑いとともに迎え撃つ凱。

このあと通算738回目の、輝角凱に起因する校内乱闘騒ぎが勃発した。



「て、てて、照討^{てらうち}じゅ、じゅじゅ、準^{じゅん}と言いますっ。さ、先ほどは助けてもらって、ありがとうございますっ」

怯えているのか、何度も噛みながらやっと自己紹介をする、小柄な

男子生徒。

てらうちゅん
照討準。

それが彼の名前らしい。

霊たちと同じ、今年入学した1年生。4組所属のFランク。

屋上に逃げて来た霊たちは、連れて来た準とともに、そこで昼飯を食べることにした。

とはいえ、準の弁当は先ほどの騒動でほとんど食べられなくなってしまった。

なので、霊たちは少しずつ弁当の中身を準に提供。恐縮する準だが、持ち前の明るさを発揮した朗に言い含められて受け取ることになった。

「か、重ね重ね、ありがとうございます……」

「気にしない気にしない！ でも残念だったねえ、照討くんのお弁当……。あ、これもあげるね」

「朗、ニンジン嫌いだからってあげるなっ」

ゴツッ、と鈍い音を立てる槍姫の拳骨。

都合良く嫌いな物を処理しようとした親友に、お馴染みの制裁をくわえた。

「あ、あはは……」

「うう……槍姫ちゃんったらすぐ殴るう……」

「おまえが悪い。」

……それにしても照討。キミには驚いたよ」

「え、え？ な、なな、何ですか？」

突然そんなことを言われ、戸惑う。

心当たりがないだけに、また怯えてしまっていた。

「【心器】も無しに【心力】を使えることだ。

そんなことが出来るのは、ここにいる我ら第7チームの非常識リダーだけだと思ってたよ」

「は、針村さん……ぼくは別に非常識じゃないよ……？」

目の前で堂々と非常識にカテゴライズされ、抗議する。
しかしスルーされ、話は進んでいった。

「あ、あの……そのことなんですけど……あれは本当に、僕がやったんでしょか……？」

「ん？」

「さ、先ほども言ったように、ぼぼ、僕はFランクです。だ、だから【心力】が弱い……。【心器】を使っても、僕の【心力】なんて高が知れているんです……」

「しかしキミは、さっき全身から【心力】を出力し、1人倒したじゃないか？」

霊と同じように、全身から【心力】を出力。

身体能力を強化し、体格で勝るガラの悪い男子生徒を突き飛ばして壁にめり込ませた。

目の前で見せつけられたのだ。間違いない。

「で、でも今だって、今だって【心力】を使おうとしても、何も起きないし……」

「うーん……御神、何か心当たりはあるかい？」

同じことができる霊に、槍姫が聞いてみる。

「たぶん、無意識だったんだと思うよ？」

あらかじめ答えを用意していたかのように即答。

違和感を持たれる前に、霊は矢継ぎ早に準へ話しかけた。

「ねえ照討くん、キミのお弁当、孤児院のみんなが作ってくれたって言ってたけど、キミは孤児院に住んでいるの？」

【心力】に関係ないことを聞いてどうする、と槍姫は思った。
が、次に準が答えた内容を聞いて、押し黙ってしまう。

「は、はいっ。僕が赤ん坊だったころ、両親が【心蝕獣】に殺され
たらしくて、それで孤児院に引き取られたんです」

「そっか。じゃあ孤児院のみんなが家族なんだね」

「はいっ！ 血は繋がっていなくても、みんな僕の大事な家族なんです！ だから、ぼぼ、僕は【心兵】になってみんなを守りたい……。Fランクだけど、僕はみんなを守りたいんです」

このとき、準に怯えの色は見られなかった。

はつきりと自分の覚悟を口にしたのが、この場にいる全員に伝わっていた。

そして準は徐に、潰されて汚れてしまった弁当を開け、中身を食べ始めた。

「あ、照討くん、お腹壊しちゃうよ!!」

朗が止めようとするが、準は笑ってそれを静止した。

「構いません。孤児院のみんなが作ってくれたお弁当だから、どんなに汚くなっても食べられます」

汚れているところを取って食べればいいものを、準はすべて口に入れて行く。

（そうか……。やっぱり照討くんは、そういうことなんだね）

これは、確信。

いまの準の言葉を聞いて、霊は確信した。

「ねえ照討くん。今日の放課後、照討くんの孤児院に行ってもいいかい？」

「？ 霊くん？」

なぜ、霊がそんなことを言い出したのか。

こころはそれが分からず、霊に答えを求めようとしたが……。話は先へ先へと進んでいく。

「え……。いいですけど、何もない所ですよ？」

「それでも、ちょっと見てみたいんだ」

「わ、わかりました。助けてくれたお礼もありますし……。じゃあ、放課後に行きましょう」

釈然としないながらも、準はとくに考えることもなく霊の提案を受け入れた。



準の孤児院は、教会を兼ねた場所だった。

【心蝕獣】の襲撃がある度に犠牲者が出ており、親を殺され、残された身寄りのない子供は、大抵がどこかの孤児院に引き取られる。

準が引き取られた孤児院は、学園区のすぐそば……森林に囲まれた緑豊かなところにあった。

「あ、あの、なんかすいません……。小さい子たちの面倒を見てもらって……」

「気にしなくていいと思うよ？　こころ達、すごく楽しそうだ」

霊と準の視線の先。

そこには、まだ幼稚園にも満たない小さな子供たちと遊んでいる、第7チームの3人娘がいた。

そう、彼女たちも付いて来たのだ。

理由はボカしたが、霊と同じように【心力】を使う準のことが気になっていたので。

準はまだ意識して全身から【心力】を出力できないので、一緒に切っ掛けを探せたら、自分達も彼らと同じように強くなれるかもしれないと思っていた。

まあ、ここに来てから霊は、準に何をするでもなく孤児院を見学しているだけなので、彼女たちは子供たちの相手をする事になった訳だが。

そんな風景を見ていたら、霊と準のもとに一人の牧師と、20歳くらいの女性ががやってきた。

「皆さん、夕食の準備ができましたので、どうぞ中へお越しく下さい」

孤児院の院長を務める、孤児たちにとって父親のような存在。

てらながれ
寺太流さん。

白い修道服を着ている、聖職者な白髪の老人だ

「さあさあ、みんな手を洗って！ 準、お友達を食堂に案内してね！」

女性の方は寺河^{てらかわ}ほとり。

肩ほどで切りそろえた赤毛が特徴で、ここの孤児たちのお姉さんの存在だ。

彼らは準がFランクである、という問題から学園での生活を心配していた。

しかし、霊たちに助けられ、こうして孤児院に連れて行く学友が出来て嬉しく思っており、夕飯を御馳走してくれるという。

「では、準の新たな学友と、そしてその出会いを祝い、頂きましょう」

この孤児院には、準を含めて12人の孤児たちがいる。
寺太牧師を含む13人と、霊たち4人を合わせた食事は、非常に賑やかなものだった。

「しかし、準が御学友を連れて来たと聞いたときは驚きました」
「そうよね。準ってかなり気弱で、慣れてないと会話するのも一苦
労だから」

Fランクである準は、その低ランク通りとても弱い。

すぐにどもり、いつもビクビクしているから友達が出来にくい。そんなんだから、今まで友達を呼ぶなんてこともしていなかった。

「ふむ。確かに照討は、そういう印象を受けるな」

「ごご、ごめんなさいっ。ぼく、ひひ、人と話するのが苦手なんですっ」

「ほおら準、せっかく出来た友達なんだから、もっとシャキつとなさいよ」

ばしんっ、と背中を叩かれ、咽る準。他の子供たちから笑いが漏れていた。

「ところで、話は変わりますが……。御神霊くん、と言いましたか？」

「はい。なにか？」

「もし違っていたら申し訳ないのですが、あなたは御神弦斎という人の、お孫さんでしょうか？」

「え、ええ。そうですが……」

祖父の名前が出てきて、少しばかり驚く。

肯定の答えを返された寺太牧師は、嬉しそうに目を細めた。

「ああ、やはりそうでしたか。若い頃の弦斎に似ていたので、もしやと思ひましてね……」

「おじい……祖父とは、どういう関係で……？」

「同じ学び舎に通っていた仲でして。中学から高校の6年間、ずっと同じクラスだったのです」

「そうだったんですか……」

祖父の学生時代。

思えば、霊は祖父の実力は知っていたが、その生い立ちを知らない。だからか、とても興味が湧いた。

「ですから、こうして君と準が一緒にいることに、縁を感じていま
す」

かつての級友の孫と、自分が育てている子供が、知り合えた。
だからこそ、縁。

感慨深いものがあつた。

「ところで、弦斎は元気ですか？」

「あ、ええ……実は……」

2年前に老衰で亡くなったこと。
最後は笑って眠りについたことを伝えた。

「そうですか……弦斎が……」

しばし目を瞑り、何かを堪えるように天井を仰ぐ牧師。
それからしばらくして、霊に向き直った。

「すみません。知らぬ事とはいえ……」

「いえ。祖父も気に掛けてもらって喜んでいると思います」

寺太牧師は短い黙とうを捧げ、胸の前で十字を切って、級友の冥福を祈った。

「少し湿っぽくなってしまいましたね。さあ、どんどん食べてください。今日は嬉しい日ですので」

仕切り直すように、笑みを浮かべて促す。

「あの、寺太さん？」

「为什么呢ようか？」

「あとで、祖父の話を聞かせてもらえませんか？」

「ええ、いいですよ。とはいえ、そう多くはありませんが」

聞かれ、寺太牧師は嬉しそうに快諾してくれた。

祖父の話を聞きたい。

唯一の肉親を失った霊の本音だ。

（これで話が上手く進む……願っても無いことだね）

しかし、これを口実とし、打算を働かせていたのも事実だった。



騒がしくも楽しい夕食を終えたあと、霊は孤児院から少し離れた裏

手の庭の一本杉の下で、夜の月を眺めていた。

ここにいるのは、待ち人がいるからだ。

程なくして、その待ち人は来た。

小柄な少年。今日会った、気の弱そうな少年……照討準だ。

「やあ、照討くん」

「ど、どうも……。あ、あの、御神くんがここで待ってるって、寺太牧師から教えられたんだけど……」

「うん。ちよっと話があって……。キミの【心力】について」

それは昼間、準が見せた【心力】。

【心器】も無しに【心力】を出力して見せた、あの力。

「ぼぼ、僕の【心力】？」

「うん。キミの【心力】は強大だ。でも自分の意思でそれを使えない……」

そう。準は無意識に【心力】を使っていた。

裏を返せば、いつでも使えるという訳ではない。あのガラの悪い男子生徒たちに、再び絡まれてされるがままになってしまうことも考えられる。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 僕はFランクだよ？！ 心が弱い、最底辺の人間っていう診断結果が出るんだ！！」

「うん。それは否定しないよ。キミは気弱で、いつも何かに怯えている。でも、その理由が、孤児院の人にあるとしたら？」

「え？」

その瞬間、準の胸がざわめいた。
嫌な予感。

霊の瞳が、それを感じさせる。

「キミの心の在り様が、孤児院の人たちに左右されたとしたら、それを利用することができる。例えば、こんなふうに」

よく見ると、霊の左手の指先から、青い糸が出ていた。
その糸は、一本杉の上に伸びていて、その先にはよく知った人が吊るされていた。

「っ?! ほとり姉さんっ?!」

吊るされていたのは、ほとり。

孤児院の子供たちにとって姉的存在

気絶しているのか、まったく動かないままだった。

「この砂時計、すべてが落ちるまで約3分だそうだね? これがすべて落ちる前に、僕に一撃入れられたら、彼女は無事に返すよ。でもそれが出来なかったら……このまま落とす」

特に何かの感情を表すでもなく、平然と言い放つ霊。

それが返って、本気であることを理解させられた。

「な、どど、どうして?! どうしてこんなことを?!」

「キミを駒として使えるようにするためだよ」

「こ、駒……? な、なにを言ってるの、御神くん……」

理解ができない。

今日会ったばかりだが、こんな酷いことをする人でないと思った。

なのに、こんな形で裏切られるとは……。

動揺する準に対し、霊は話を続けて行く。

「人類側の戦力は圧倒的に少ない。戦える人が少ないから。その数少ない戦える人でも、ポーンアイズを相手にするのが精一杯。

閃羽にはナイトクラスが5人いるけど、それだってこの前の大群に押し潰されそうになった」

「そ、それが何なの?! 僕を駒とするに……弱い駒を得ようとするのに、何の関係があるのさ?!」

「ぼくは、探していた。ぼくと【同列】の人を。それが、キミだ」

何も、感じられない。

感情を読み取れない普通の表情が、たまらなく怖い。

それでも、家族同然の人を助けるため、準は説得を試みる。

「わ、分かんないよお! 僕は、御神くんみたいに、ナイトクラスの大和くんを倒せるほどの【心力】を持ってないっ!」

「だからそれは自覚してないだけ。でも安心して。今から自覚させてあげる。ほとりさん一人……ううん。孤児院の何人かを犠牲にすればいいだけだ」

言いながら、霊は地面に置いた砂時計を指さす。

「この砂が落ちても駄目なら、そうだな……次はあの子供たちのう

ちの誰かにしようか？」

「な、やめてよっ！ そんなことしても、僕は強くなれないよ！それに、それって犯罪じゃないか！！」

「そうだね……悪いことだ。とても悪いこと。」

でも残念だね。ぼくはナイトクラスと同等……ううん。それ以上の権限を与えられているから、これは必要経費として許される。都市を守るための、ね」

人の命を、必要経費と言い切った。

「そ、そんなこと、許されるわけ……ない……」

「現実はいつも理不尽だよ。その理不尽を如何に少なくし、ねじ伏せられるようにするか。やっぱり、力がないとね」

「ち、力って……」

「物理的な力、暴力でもいい。権力でもいい。とにかく、人に認めさせる、認めざるを得ない力を誇示しないと。」

キミはその資質を持っているのに、自覚していないから、理不尽を強要される」

どんな綺麗事を言っても、最後に物を言うのは力。

暴力でもいい。

権力でもいい。

数の暴力でもいい。

風潮でもいい。

とにかく、他人を圧迫できるものであればいい。

「あ、砂が少なくなってきたね。あと何秒だろ？」
「っ?!!」

実際は、何秒もない。
すぐに、砂はすべて落ちてしまった、

「じゃあ、まず一人目」

霊の青い糸が波打ち、絡めていたほとりを地面に落とす。

「っ、や、止めろおおおお!!」

瞬間、準の全身から橙色の【心力】が噴き出す。

その【心力】によって身体能力を強化され、弾丸の如き勢いで飛び出す。

ほとりが落ちる前に助け出す。そのために飛び出した。

「おっと。僕に一撃入れないと、返してあげないよ」

だが、巧みに糸を操る霊がそれを許さない。

軌道を変更されたほとりは、再び宙を舞って別の場所へ落下。

「ほとり姉さんっ!？」

態勢を無理矢理に変えて、再び準は飛び出した。

「一撃入れるのが早いか、あの人が地面に落ちるのが早いか。趣向は変わってもやることは変わらないよ」

その声は、準には聞こえていない。

ただ、大切な家族を助ける。そのことしか頭になかった。

そして霊は、準の力を引き出させることしか頭になかった。

そのためなら、孤児院の子供たちを皆殺しにしても構わないとさえ、考えていた。

第22話【悪いこと】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛こころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー

1。

●照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切
にしている。

●寺太流——孤児達を養う老牧師。

●寺河ほとり——孤児院の子供たちの姉的存在。彼女自身も孤児。

姉御肌。

第23話【資質の開花】

【心力】の糸で縛りつけた孤児院の女性、寺河ひとり。
それを助けようとする、同じく孤児院の少年、てらうちしゅん照討準。

霊が巧みに動かす糸は、準の必死の動きを尽くかわ躲し、ひとりを地面に叩き落そうとしていた。

しかし、変化が訪れる。

異変に気付いたのは、当然のごとく霊だった。

(……先読み、されている?)

徐々にはあるが、準は霊の糸の動きに付いてきていた。

いや、徐々にという言葉は相応しくない。

そう思った瞬間には、ひとりを奪還されていたのだから。

「ひとり姉さんっ!!」

霊の糸を引き千切り、ひとりを助け出した準。

(決まりだね……彼は間違いなく、【同列存在】だ)

霊の糸は、ジェネラルクラスでも千切ることでできない頑丈なもの。
それを一瞬で成した準の【心力】は、霊と同等であることの証だ。

「おめでと。でもまだ、ぼくに一撃も入れてないんだから、続ける

よ？」

あとは、彼が【何に属する】のか見極める。

両手を駆使して糸を躍らせ、準とほとりを襲わせた。

「くっ!!」

目にも止まらぬ、霊の糸。

寸前で避けた準は、ほとりを抱えたまま霊に肉薄しようとする。

両手の指から出力した10本の糸は、巧みに準を襲う。それでも準は【心力】で身体能力を強化しているため避けることができ、避けきれないものは【心力】を纏わせた素手で弾いていった。

これは、驚くべきことだった。

（初動が、速いつ。こっちが仕掛けるよりも速く動いてる？ 予知……じゃない、彼は糸じゃなく、ぼくを見て動いている？）

霊の糸は速い。

だがそれ以上に、細いという点が厄介なのだ。すべてを見て躲すなど、常人には不可能。

なのに準は、すべてを往^いなしている。

そしてよく見れば、準は糸ではなく霊を見ている。

（つまり、彼はぼくの何気ない、それこそ僅かな筋肉の動かし方が見えていて、だからどういう攻撃が来るのか予想している、という訳か……）

【心力】の糸を動かすのは、確かに指先の動きにあるていど追従させる。

しかしその動きというものは、本当に極僅か。動かしたかどうかも定かではないほどに。

圧倒的な動体視力と、先天的な先読みの才能。

（参ったな……即戦力じゃないか）

どうやら見た目に惑わされていたらしい。

普段は気弱で、おどおどしていて、狩られる側としか思えない存在。見た目は判断材料にならないという典型例を嫌というほど【心蝕獣】で味わったはずなのに、これは反省が必要か。

霊は準の評価を上方修正し、技を繰り出すことにした。

そのとき――

「ストーーーーップっ!!　それまでえっ!」

気絶していたはずのほとりが、準に抱えられながらも大声をあげて二人の戦いを止めた。

「ほ、ひとり姉さんっ?!　大丈夫なの?!」

「当たり前でしょ!　別に怪我なんかしてないわ。でも、協力すると言った矢先に、気絶させられるなんて思わなかったけどね」

「え?　どういうこと?」

ぽかん、と呆ける準。

ほとりの話……特に『協力する』と言ったところが引っ掛かる。

そんな準を無視して、ほとりは話を進めて行く。

「まったく。臨場感でも出したかったのかしら？ 御神くんって、大人しい顔してやる事は過激なのね？」

「中途半端にやれば、照討くんが今まで以上に虐げられるだけですから」

指先の糸を回収し、戦闘態勢を解く。

まだ続けてもいい。

だが確認はできた。それで十分。

これ以上は蛇足でしかないと判断し、霊は矛を収めた。

「あの、ほとり姉さん？ 協力って、どういうこと？」

一方、準は姉から出て来た言葉に思いがけない言葉に気付いた。

今の自分達……準と霊のやり取りを考えると似つかわしくない言葉があったのだ。

「準、アンタがいつもウジウジしてるから悪いのよ？ シャキッとしてれば強いのに、踏ん切りが付かないからイジメられてるって、御神くんが言ってたのよ」

「それで、その、じゃあ今までののは、お芝居？」

「【心力】は心の強さで決まるんでしょ？ さっきまでの感覚を覚えておきなさいって」

（より正確には、個々の精神状態で決まるんだけど……今はまだ、

黙ってようかな)

霊は準に近づき、ほとりに続けるように、そして諭すように話しかける。

「照討くん。さっきも言ったけど、力は誇示しておかないと、いざという時に振るえない。それはつまり、孤児院のみんなを守るために努力してきた力を、使えないってことなんだ」

「つ、使えないって……どういふことなのっ!？」

「周りはFランクだからという理由でキミを拘束し、結果、キミより弱い人間が戦って死ぬ。そしてその後ろにいる孤児院のみんなも……死ぬよ」

すでに一度、霊は経験している。

【心蝕獣】の群れが現れたとき、霊はFランクであり、まともに【心器】を使えないという理由で邪魔をされた。

「そ、それは……」

準も、霊の言いたいことはわかっていた。

「だから、僕を挑発したの？　ひとり姉さんを使って？」

「照討くん。ぼく一人じゃ、この都市すべてを守れないよ？　わかるよね？　物理的に不可能なんだ。ぼくが手一杯になってしまったら、誰がああ孤児院を守るの？」

「っ……!」

(喰い付いてくれたかな?)

準が、自分の言わんとしていることを理解した。

その感触を掴んだ霊は、さらに畳み掛ける。

「いいの？　ぼくが手一杯ってことは、それだけ逼迫した状況。心衛軍の人たちでは対処できない」

「だから、僕が……？」

「うん。キミはキミで、守りたい人たちを守ればいい。そのためには、周りにそれだけの実力があることを示さないとね」

準とほとりの間を抜け、孤児院へ歩み出しながら、霊はさらに話を続けた。

「例えFランクであっても、それだけの力を持っていると誇示すれば、キミもある程度自由に動けるはずだ。

だから忘れないで……キミが戦う理由。覚えておいて……戦えなかった時、何を失くすことになるのかを」

「……うん」

頷いて、くれた。

これで……安心できる。

（閃羽なんて滅んでも構わない。でもそうになると、こころが悲しむ。そのリスクを減らすには、照討くんの存在は好都合だったよね）

それが、すべての理由だ。

本来なら、その役目は槍姫と朗に任せようかとも思っていたのだが……。

霊にとって、照討準との出会いは嬉しい誤算だったのである。



「あ、霊くんっ」

孤児院に戻ると、その前でこころが待っていた。
他には寺太牧師に、槍姫と朗も。

「こころ？　こんなところでどうしたの？」

「それはこちらの台詞です。急に姿が見えなくなって、心配したんですよ？」

「ああ、ごめんね。ちょっと照討くんと話があったからさ」

「お話、ですか？」

霊の後ろを見ると、準とほとりがいる。

だが一体、何の話だろうと訝しんでいると、ほとりが口を開いた。

「準を鍛えてもらっていたの。私はそのお手伝い」

「あ、もしかして【心力】のこと?!」

「自分の意思で使えるようになったのか?!」

朗と槍姫が思い当たり、霊と準に詰め寄る。

「まあね。照討くんは即戦力だよ」

「ずるう〜い!! 私たちも照討くんの【心力】について、色々知りたかったのにい〜!」

朗が駄々をこねるのも無理ない。

ここまで付いて来たのは、どうすれば【心力】を強くできるのか、準を通して知るためだったからだ。

なのに、自分達の預かり知らぬところでそれは成された。

出し抜かれたような気分だ。

「あはは、ごめんね。でも照討くんには、明日からぼくらのチームで活動してもらうから、知る機会はあると思うよ？」

「え、ええ?! みみ、御神くん、そそ、それはどういうこと?!」

「準、あんたまた囁んでるわよ？」

霊が何気なく発した爆弾発言。

準は怯えたように囁みまくり、霊に詰め寄った。

「ぼぼ、僕は4組だよ?! クラスが違うじゃないか!!」

「学園長に頼んで、すぐにでも1組に編入してもらうつもりだけど？」

「だけど? じゃないよっ!! そんなこと認められるわけが……」

「だから、さっき言ったじゃないか。ぼくはナイトクラスと同等の権限を与えられてるって」

その権限を使うつもりだ。

要は、特権を行使するのだ。

権力は使うためにある、とは誰の言葉だったか。兎に角、霊は必要とあらば権力を惜しみなく使う性質^{タチ}だった。

「そういえば、ほとりさん？」

「ん？ 何かな、こころちゃん」

「お手伝いって言ってましたけど、どんなことを？」

徐にそんな質問をしたのは、興味本位だった。

というか、一般人にできることとは何だろうか、と気になったのだ。

霊のような、強力な存在の手助けができるのなら自分も、という意味合いがあった。

「ん、ん………」

「あの、内緒なんですか？」

「別に口止めはされてないけど……そうね……」

瞬間、本当に一瞬、ほとりの口が歪んだ。それも、小悪魔的な笑みだった。

しかし瞬時にそれを手で隠し、こころに抱きつきながら悲痛そうな声で言った。

「実は、協力すると言った矢先、気絶させられたの」

「え、なっ?! き、気絶?!」

不穏な単語に、こころの声が裏返る。

「く、霊くんっ!! 気絶させて、一体ひとりさんに何をしたんですか？」

「え？ 何って……気絶させたあと、縛っただけだけど？ 糸で」

「縛っ——!!」

こちらからも不穏な単語が。それも平然と。

その物言い逆で逆に冷静になるはずなのだが、こころの感情は沸騰し、話してもいないのに様々な憶測を脳内で展開。

なんというか、妄想が暴走して未成年お断わりな状況になっていた。こころの頭が。

「にやはは……御神くん、言葉が足りないよね」

「そうだな。そしてこころも……勝手に妄想するあたり、やはり耳年増だな」

霊とこころ。

そんな二人のやりとりを苦笑しながら見守る朗と槍姫。

リーダーの非常識具合も、親友の考えていることも、手に取る様にわかっていた。

「霊くんっ!! 縛って、それから、それから一体ナニをしたんですか!?! あれですか、そういうのが趣味なんですかっ?!」

「え、ええええ?! おお、落ち着いてよ、こころ!!」

「これが落ち着いていられますか!! なんで私じゃなくて、ほとりさんになんですか!! 年上がいいんですかっ?! そうなんですか?!」

「なんか発言が色々おかしいよ?!」

色々アウトな発言を自覚しないこころ。

絶賛沸騰中の彼女に、さらなる爆弾が投下された。

「縛られ、縛り上げられ、【落】とされ……もうお嫁にはいけない

わあゝ」

「【墮^お】とされっ!? くゝしゝびゝくゝん?!」

「え、ちょ、なんで縛られただけで、お嫁に行けない、とかに?」

自分は何も悪くない……ことも無いが、反省の色のない発言に、こころがキレた。

「霊くんっ! そこにっ! 座りなさいっ!!」

その後、霊は孤児院の前で正座させられ、涙目でお説教を受けた。

さすがに悪ふざけが過ぎたと思い、ほとりが真相を話してなんとか誤解は解けたのだが、やり方に問題ありと判断したところがお説教を追加したのは、不運としか言いようがなかった。

まあ、自業自得ではあるが。



孤児院を後にした第7チームは、それぞれの家路に着いた。

ただし朗だけは、本日発売のマンガ本を買うために寄り道。
夜の商店街を一人で歩き、馴染みの本屋へ歩いていた。

(いやあゝ……改めて御神くんの非常識さが際立ったねえゝ)

道中、考えるのは孤児院でのやりとり。

いくら準に本気を出させるためとはいえ、人質を取るような脅しをかけるとは。

しかもよく聞けば、芝居ではなかったような口ぶりだ。

他の者が気付いていたかはわからないが、朗はなんとなくそう感じた。

だが今のところ大事が起きている訳ではないし、自分の思いすごしかもしれないと思考を中断。

馴染みの本屋へ入り、これまた馴染みの店長に挨拶。

「こんばんは〜!」

「おや朗ちゃん、こんばんは。新刊かい?」

メガネをかけた、人の良さそうな壮年の男性が迎える。

朗は「そうだよ」と一つ頷くと、新刊コーナーへ一直線に向かった。

「あったあった。って、おお!? 長期連載休止だったマンガが再開されてるっ! これも買おう!!」

夢中になって新刊を次々に取る。

そして6冊目を取ろうとしたとき、そばに居た人に気付かず、衝突。

「うにゃあ?」

自分からぶつかってしまったのだが、相手はかなり頑丈だったのか、一方的に弾かれた。

「――っ、と」

そのぶつかった相手は、朗に気付くと素早く手を伸ばし、掴んだ。朗の、サイドツインテールの片方を。

「っ?! イタタタ?!」

「あ、ワリイな。いい感じな位置にあったからよ」

謝罪しながらも、朗の髪を離さない。

離したら朗が倒れるからだが、男は面白そうに引っ張っていた。

「ちよっ?! 離してくれない?!」

「離したら倒れるだろうが。自分で態勢を直せよ」

言われてはじめて倒れそうな自分に気付き、態勢を立て直す。

「ううっ……もう! 女の子の髪は命と同じくらい大事なんだから、もっと優しく扱ってよね!」

「だから、ワリイって言ってんじゃない。っていうか、ぶつかられたのはオレなんだが?」

「うっ……」

正論を言われて押し黙る。

目の前のぶつかった相手……おそらく、男性だろう。

長身で、おそらく190cmは超えている。もしかしたら2mはあるかもしれない。

全身をすっぽりと覆う茶色のフードを被っているため、顔は見えない。

声の感じが若いから、たぶん20歳前後。

でも身長が高過ぎるからそう感じるだけで、本当はもっと若そうだな、と思った。

「まあいいや。オレも注意不足だったしな」

「……何か、探してるの？」

「ん？ ああ、本じゃないんだがな。人を探すために、この辺の地図が欲しかった」

そう言うのと長身の男は、この辺りの地図が載っている本を取り出した。

ページを開き、流し読み。

「……立ち読みは、マナー違反だよ？」

「ちよつとの間だけだったの。よし、覚えた」

「速っ！？ って、本当に覚えたの？！」

「大まかに、だけどな。それより、おまえに聞きたいことがあるんだ」

懷に手をやり、何やら探しはじめる男。

やがて一枚の写真を引っ張りだし、朗に見せた。

「こいつを探しているんだけどな、見覚えはないか？」

その写真には、一人の少年が写っていた。

「ん……？ あれ、これって、御神くん？」

写真の少年は今より幼い顔立ちをしているが、間違いなく霊だった。

「知ってるのか？」

「うん。クラスメイトだよ」

「クラスメイト？ ああ、そういえばおまえ、制服着てるもんな…
…。心皇学園、か。さっき見た地図だと、学区のそこだろうな…
…」

男は、顎に手をやってしばらく考える素振りを見せる。

対して、朗は男が呟いた内容に驚いた。

どうやら、先ほどの地図を覚えているというのは本当らしい。
羨ましいほどの記憶力だなあ、と呆けた。

が、しばらくして気を取り直し、長身の男に質問しようとして……。

「あ、そういえば御神くんを知り合いなのかな、って……あれえ？
！ 居なくなってる?!」

呆けている間に、長身の男は姿を消していた。

店内を見回しても、どこにもいない。

「て、店長！ 茶色いフードを被った、背のすんごく高い人、出て
行かなかった？」

「ん？ ああ、今ちよつと仕入れの処理をしていたから、気付かな
かったなあ。あ、朗ちゃん?!」

聞くやいなや、朗は外へ飛び出す。

だが、長身の男は見当たらない。あんなに目立つのに、一体どこへ消えたのだろうか。

（御神くんのこと、探してるみたいだったけど……）

言い知れぬ不安。

一体、あの男は何者なのだろうか。嫌な予感が止まらなかった……。

そして一方、その長身の男は、夜の商店街の屋根を次々と跳び越え、駆けていった。

（ハッハッハッ……ようやく見つけたぜ、霊よお……）

フードに隠れた唇が、鋭利につり上がる。

「デメエは、手足を押し折ってでも連れ帰るぜえ？ 覚悟しろよ、霊っ！！」

男の両腕には、緑色に光る手甲が見え隠れしている。

ガントレット型の【心器】だろうか……どこか、異様な雰囲気を持っていた。

まるで、霊が【心力】の翼を出したときのように、触れるものすべてを消し飛ばそうとするかのような、異様な雰囲気……。

第23話【資質の開花】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、みかみくしび

膨大な【心力】を有する謎の少年。じゅんない

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。はりむらそつぎ

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。あじやらほがら

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。てらうじゅん

●照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切にしている。てらかわ

●寺河ほとり——孤児院の子供たちの姉的存在。彼女自身も孤児。姉御肌。

第24話【連レ帰ル者】

温かい……。

5月に入ったこの時期。朝方の気温は過ごしやすい。

眠りから目覚めるには少しばかり億劫で、このまどろみをもっと楽しみたいという気持ちが強くなる。

（なんでだろ……なんでこんなに眠たいのかな……。いや、すごく心地いいんだ……）

都市の外の世界では、これは生き死に関わる致命的な油断だ。

だから霊は、この心地良さに身をゆだねる事が非常に危険なことで、必死に抵抗感を奮い起そうとした。

が、何故か、どうしても身をゆだねてしまう……。

（すごく、あったかい。それに良い匂いもするし、やわらかいなあ……やわらかい？）

一瞬、ベッドだからか？　とも思ったが……違うと断言できる。

霊は、布団派だ。

それゆえ自宅の高層マンションにはベッドを置いていない。

（でも……今、ぼくが寝ているところは、ベッド？　あ、そういえば……）

昨日の孤児院での一騒動。

あの後、霊はたつぷりとところに怒られ、気が付けばかなり遅い時間になっていた。

それで、こころを送ったのだが……その母親である志乃や、こころの妹である真心に捕まり……。

（いつかみたいに泊まることになって、これまたいつかみたいに、三人で川の字になって寝た……っ！）

そこで瞬時に目を見開く。

朝の日差しが差し込んでいたためか、真っ暗ではない。ちゃんと室内を視認できる。
むしろ、それが問題だった。

「……っ！」

目を開けて飛び込んできた光景に、思わず声を上げそうになる。が、寸前で留める。

「……すう……すう……すう……」

すぐそばで聞こえる、こころの寝息。

だからと言って、目の前にこころの寝顔は無い。

目の前にあるのは、瑞々しく綺麗な肌をした、深い谷間を形成する豊かな双丘。

「……………ゴクっ」

思わず、喉を鳴らしてしまった。

霊とこころは、お互い向かい合うように、横向けにして寝ていた。ちょうど霊の顔が、こころの胸元にあるという位置。だから目の前にさきほどの光景があったのだ。

こころは淡いピンクのパジャマを着ていて、寝る前はちゃんとボタンをすべて止めていた。

しかし、彼女は寝ている間に第二ボタンまで外してしまっただけで、結果、胸元がはだけて際どいことになっていた。

（な、な、なんで……どうして、こんな状況に……）

このままでは色々と、本当にイロイロと不味い。

そう思い、距離を離そうとして……自分の背中に何かが引っ付いているのに気付き、動きを止めた。

「うう……前はこころ（の胸）、後ろは真心ちゃん、か……」

霊の背中に引っ付くようにして寝ていたのは、真心だった。完全密着。

服を掴んで離さないという徹底ぶり。

純愛姉妹に挟まれ、霊は身動きの取れない状態になってしまっていた。

（うあ……このままじゃマズイ。そろそろ起きる時間だし、なんとか離れないと……）

二人を起こすのは、離れてから。

でないと、何が起こるか怖すぎる。誤解されるかもしれない。不可抗力のはずなのに。

とりあえず背中 of 真心を引き離すため、指先から【心力】の糸を生成。真心に絡ませ引き離そうと試みる。

「っ……服を掴まれてるから、無理か……」

無理矢理というのは気が引ける。というか、状況が悪化しそうで怖い。

そこで霊は、真心の身体を少し浮かせた。

これで動けるようになった。起こさないようにゆっくりと移動。

あるていど距離が離れたところで真心を背負ったまま起き上がり、二人に声をかけた。

「こころ、真心ちゃん、そろそろ起きて。朝だよ……」

「ん……ふあい……起きまふ……」

霊の声に反応し、むくりと起き上がるこころ。

まだ眠たそうで、目をこするも目蓋がなかなか開かない様子。

「おはよう……ごさいます……」

「おはよ、ふたりとも。あと真心ちゃん？ 動き辛いから離れてくれると嬉しいんだけど……」

「ふえ？ 真心……？」

ようやく開き始めた目で、霊を見る。

半身を起した霊の背中に、真心が引っ付いていた。

それも、霊の首に腕をまわし、腰に足を絡めているという状態。

静かに、しかし確実に、こころの心理温度が上昇していく。

（う、うわあゝ……こころの眼が、ゆっくり、確実に、細く鋭く……うわあゝ……）

眠たげだったこころの眼。

それが陰しく冷たいものになっていくのを、間近で見ってしまった。凍てつくような視線が真心に向けられるも、彼女は相変わらず霊に引っ付いたままだ。

「……真心」

「――――」

真心は一層、霊にくっつく。

顔は嬉しそうに笑っており、そして身を乗り出して霊の頬に頬ずり。

「っ?! 真心ゝゝゝ!!」

「うわっ、ちょっ、こころ?!」

黙っていられなくなったこころが、真心に跳びかかる。

しかし、忘れないでほしい。

こころと真心の間に、霊がいるということを。真心に跳びかかるということとは、霊に跳びかかるということ。

霊は真心を押しつぶさないよう、押し倒されながらも必死に背中を浮かせていた。

「真心っ!! 霊くんから離れなさいっ!!」

「——っ!! ——っ!!」

「ちょっと?! ころろ落ち着いてっ! っていうか、のしかからないでっ……」

真心を守ろうと背中を浮かせれば、当然……胸元に当たる。ころろの柔らかいものが。

かといって背中を沈めれば、真心が潰れるだろう。

とんだ板挟み。

それも朝一から神経を擦り減らすようなハプニング。

その後、騒ぎを聞きつけた純愛姉妹の父親、誠がやってきて騒ぎになったのは言うまでも無い。

「なるほど。だから御神はそんなに疲れているのか」

「てっきり昨日のお説教の影響が残ってたのかと思ったよ」

ぐったりしている霊の理由を聞いて、檜姫と朗がそんな会話をする。

さしもの霊も疲れたようで、机に突っ伏していた。

起きぬけに白く深い谷間を見せられ、そしてその谷間による圧迫攻撃。

嬉しいよりも疲れがくるのは、霊の性格故だろうか。

「あ、ねえねえ御神くん。ちょっと聞きたいことがあるんだけどね

「？」

話を切り出す朗。

その内容は、昨夜遭遇した、長身の男との会話。

霊を探していたらしいことや、いつの間にか消えてしまったことを話す。

「2mに届きそうな長身の男……？　その人がぼくを探していた？」

「うん。心当たり、ある？」

「うーん……。外の世界の知り合いで、そういった知り合いはいないなあ」

記憶を掘り返すも、該当する人物が引っ掛からない。

とりあえず頭の片隅にでも留めておく、として保留扱い。

朗も、霊ならば何かあっても対処できるだろうと思い、話を切り上げることにした。

「そういえば御神。照討をうちのチームで活動させるということだが、どうなったんだ？」

「うん。さすがに色々手続きがあるからすぐには無理って言われたよ」

「当たり前だろう。いくら理事長でも、そんな異例なことをすぐに行える訳が無い」

「とはいっても、朝からは無理ってだけで、今日の午後から合流することになってるよ」

「なっ……そ、そうか。意外に早いな……」

「うん。それに、その方が都合が良いよ。今日の午後は実戦訓練の戦闘学。照討くんの調整をすぐにでもしておきたいし」

照討の実力は昨日の一件で理解した。

が、今度は【心器】の問題も出てくる。【心力】をあるていど自在に引き出せるようになれば、【心器】の調整は必要不可欠だろう。最大出力に耐えられるかのテストもしておきたい。

「ふむ……そうだな。それに、その方が騒動が少なくて済むだろう。特に……」

霊に顔を寄せ、周囲に聞こえないよう小声で話す。

「大和あたりが激しく反発するだろうしな」

「そうだね。そしてその反発を鎮めるためには、今日の戦闘学は打ってつけかもしれない。実力を証明する、良い機会だよ」



お昼休みが終わり、午後の授業……戦闘学が始まる。

すでに霊たちはバトルスーツに着替え、野外訓練場に集合。

ちなみに、霊のバトルスーツは他の生徒とは違い、【心経回路】の織り込まれていない普通の防護服。

霊の【心力】に耐え切れず爆発するかもしれないため、敢えて普通

の防護服をダナンに用意してもらったのだ。

「さてと。それじゃあ照討くん、さっそくやってみようか？」

「みみみ、御神くん、ぼぼ、僕、本当にここに居ていいのっ?!」

怯える小柄な少年、照討準。

こんなに早く1組へ編入することになるとは思わなかった彼は、何度も霊に確認していた。

「理事長からも言われたでしょ？ 大丈夫。昨日の感覚を思い出して？」

「そそ、そんなこと言われても、ぼぼ、僕……」

あまりに怯えているせいか、涙交じりになっている準。

というか、ぶるぶると震えてしまっていた。

そんな彼を見て、霊は一つ溜息をついてから話を続けた。

「照討くん、ぼくは昨日言ったよね？ ぼく一人じゃ無理だって。そのとき、一体だれが孤児院の人たちを守るの？」

「うう……」

「あのね、照討くん……」

霊は準に近寄り、二人以外には誰も聞こえないよう、小声で諭す。

「ぼくは正直、この都市がどうなろうが構わないんだ」

「っ、え、ええ?!」

「ぼくの目的は、閃羽の存続が絶対条件じゃない。もし状況が逼迫ひっぱくすれば、閃羽は見捨てる」

「そ、そんな……」

「本当さ。でも、それはぼくが一人だから、そうなってしまいう可能性があるだけで、ぼくと同じくらい【心力】を持ってるキミが戦えるようになれば、そうならずに済むよ？ どうする？」

諭す……よりは、脅しに近いかもしれない。

霊は、こころさえ無事ならそれでいい。

閃羽が滅んだとしても、霊には行くあてがある。この都市を死守する理由足りえない。

だが、準は違う。

都市が滅べば、孤児院の皆は生活できない。生きていられない。閃羽の存続は絶対条件であり、死守しなければならない場所だ。

「照討くん、キミ自身が力を示さないとダメなんだ。そうすれば、閃羽を守る確率は高くなり、ぼくはその確率の高さから閃羽を守る方にメリットが大きいと考えるかもしれない。いい？ 孤児院のために、できるよね？」

「孤児院の……みんなの、ため……」

準の全身を、橙色の【心力】が覆う。

さきほどもでの怯えが嘘のように、その目には盲目的とも言えるような、目的を持った意志が宿っていた。

「よぉ～しおまえら～、集合～～。ダリィからさっさと動けよ～～」

ちようどそのとき、戦闘学の担当であり霊たちの担任でもある篤情あつじよ
うちくば

竹馬教官から声が掛かった。

皆、素早く竹馬のもとへ集まって行く。

その頃には、準の【心力】は抑えられ、通常状態に戻っていた。

「集まったな？ 今日はこちらから、第3訓練場にて、チーム対抗の模擬戦をやってもらう。」

あるていどは座学で学んでいるはずだから、各自それを実戦。出て来た問題点を見つけるのが、この対抗戦の目的だ。

何か質問のある奴はいるか？」

ぐるりと生徒達を見まわす。すると一人、手を上げる人物がいた。

やはり、とういうか案の定、大和守鎖^{おおわすきの}之だった。

「篤情教官、一人見慣れない奴がいますけど、誰ですか？」

「あゝ忘れてたわ。今日から、っていうか今からか。とにかく、4組から1組へ編入してきた照討準だ。」

第7チームに入ってもらったことになったから、みんな、よろしくしてやってくれな」

色々と、担当者としては失格な失言。

しかしこれは、この1カ月で慣れてしまったのか、誰もその失言を指摘する生徒はいなかった。

その代わり、別の問題を守鎖之は指摘し、大いに反発してみせた。

「待って下さい。そいつのランクは？ 4組ということは、低ランクということではないのか？」

基本、組の数が若いところに高ランクの生徒を集めている。

これは、圧倒的なランク差による軋轢を回避するための処置であり、守鎖之が指摘した通り4組はDとEランクの者が多くを占めていた。

「ダリィなあ……。照討はFランク。そうだったよな？ 照討？」

「はい」

間髪入れずに応えられたのは、さきほどの霊とのやりとりで、目的をはっきりと見据えていたから。

だが、見ようによっては過剰な自信ともとれる。

それが、守鎖之は気に入らなかった。

「ふざけるなよ……。？ すでにFランクが一人、1組にいるだけでも問題なのに、もう一人増やすだど？」

静かな怒りを燃やし、霊を揶揄するように睨みつける。

「大和、ランクでの組分けは1年のときだけだ。それ以後は、筆記と実技の試験による実力がすべてになる」

ランクⅡクラス、ではない。

ランクとはいわば、潜在能力の高さだ。

それを上手く引き出し、心の強さだけでなく、技術・体力を合わせた総合的な実力……。すなわち『心・技・体』のすべてにおいて優秀なものが、ナイトクラスに近づいていくのだ。

入学してきたばかりの1年生に、それらの総合的な実力を求めるのは不可能。

だからこそ、唯一の明確な基準であるランク。それによって組分け

が成されているのだ。

そういう意図を竹馬は伝えたつもりなのだが、守鎖之は理解しなかった。

「Fランクに実力があるとでも言うのか……？」

「御神が良い例だろうが」

バカかこいつ……と喉元まで登って来た言葉を呑み込み、霊に丸投げする。

目線を向けられたことに気付いた霊は、内心苦笑しながらも逆にこれをチャンスと捉え、引き受ける事にした。

「納得できないようなら、ぼくらと模擬戦をしてみない？」

挑発するように、守鎖之へ提案。

霊を憎悪する守鎖之は、簡単にその挑発に乗った。

「なに？」

「ぼくらが大和くんのチームに勝てば、認めてくれるよね？」

「……いいだろう。ただし――」

視線を、霊から外す。

代わりに、ここをその視界の中心に置いた。

「オレ達が勝ったら、ここを第1チームに『返して』もらう」

「ふうん……」

まるで、霊が奪ったかのような言い方。だがこれと言った指摘はし

ない。

無駄だから。

「人を景品みたいにするのは嫌いだけど……ところが、それでいいのなら」

正直、こころを巻き込むようなことはしたくない。

例えこちらの勝利が決定的なものであっても、こころを物扱いしたくないという心情が、霊には強く存在する。

だが、今ここで準を認めさせれば、後々有効なのだ。有益なのだ。

敢えて下品な言い方をすれば、『役に立つ』。

「はい。私は、霊くんを信じてますから」

「ありがとう。まあ、この面子なら絶対負けないけどね」

だから霊は、最低限の了解をこころに確認し、大和の【賭け事】に乗った。



第3訓練場は、市街戦を想定した場所。

大小様々な建物が並び、最高で5階建ての建築物が建てられている。

今日、ここで訓練する本当の目的は、都市内に【心蝕獣】が攻めて来た場合を想定してのことだ。

すでに過去、何度も都市内への侵入を許している。

最近であれば、ジェネラル・メーカーが持ち込まれ、多数の【心蝕獣】を生み出された時だ。

そういう経緯もあって、大規模な都市外戦に不慣れな新人たちに、せめて安心して（そう感じてしまうのも問題だが）戦える都市内での戦闘を考えさせるのが、今回の戦闘学の目的だ。

（まあ、【心蝕獣】と人間とでは、戦い方が違うからあまり意味はないんだけどね……）

竹馬のダルそうな説明を独自解釈し、それについて内心で批評する。やらないよりはマシだが、もう少し自分達が戦う相手を、生徒に理解させるべきでは？　と思ってしまう。

竹馬をはじめ、ナイトクラスの人間は戦闘能力が高いから一緒にたにしてしまえるのだろうか、意識改革をしなければそのうち人間側から崩壊してしまいそうだ。

（まあ、そうになったらそいつらを全員殺すか、閃羽を見捨てるだけなんだけどね）

そんな自己完結と同時に、模擬戦の開始が告げられた。

思考を中断し、霊はチームメンバーに指示を出していく。

「それじゃあこころは、この建物のなかでビットによる索敵をよろ

しく。戲陽さんはこころの護衛。

攻めは、ぼくと針村さん、それに照討くんね」

霊たちのスタート地点は、平屋の商店を模した建物。

この模擬戦は、どちらかのリーダーが倒れるか、あるいは全滅した方が負けとなる。

一応、すべての【心器】は出力が抑えられた非殺傷設定にされているため、深いダメージを受けたとしても気絶で済む程度に調整されている。

そのため、この訓練場には複数の教官たちが特定のポイントに配置されており、死亡の判定を下す審判の役目を担っていた。

「みんな、日頃の訓練通りにやれば大丈夫だから。敵と出会ったら、焦らず自分の戦い方にあったペースに巻き込み、難しいなら援軍を待つこと。」

照討くんはさっきぼくが言った事、忘れないで。いいね？　じゃないと……」

意味ありげに、その先を言わない。

それだけで、準の心に灯る火が、大きく膨れ上がった。

「うん。わかってる。孤児院のみんなのためだもんね。僕は、この模擬戦に勝つよ？」

黒い二丁の拳銃型【心器】を掲げ、準ははっきりと宣言した。

中距離型の拳銃型【心器】を使う準。

近距離戦の槍型【心器】を使う槍姫。

そして全距離対応型の【心器】であり、日々ダナンに改良され糸の出力本数を1400にまで増やした【糸刀Ver. 1.4】を使う霊。

あらゆる局面に対応できる布陣で、この模擬戦に挑む。

「うん。必ず勝とう。じゃあ、行こうか」

その言葉を合図に、市街地訓練場の中央へ走り出す。

そんな霊の背中を、槍姫は途中まで追いかけて、気になったことを問いかけた。

「なあ御神。照討は『孤児院のみんなのため』と言っていた。それだけであいつの【心力】は膨れ上がったように感じた。……何故だ？」

「ん？　それが彼の【戦える理由】だからだよ」

「た、戦える理由？」

普通は【戦う】理由ではないだろうか？

聞き間違いでなければ、霊は確かに【戦える】理由と言った。

言葉遊びの類にしては、霊の声音に冗談めかしたものを感じない。

その違和感が気になって更に問おうとしたとき、3人に追走するころのビットから、接敵が知らされた。

「ぼくが正面から迎え撃つ。二人は横合いから攻めて」

「あ、ああ、分かった」

「了解」

槍姫は戸惑いながら、準はやる気満々に返答。

接敵が知らされた場所は、商店街の大通りを模して造られた場所。様々な商店を装った建物が、一本の通りを挟んで両側に並んでいる。その通りの向こうから、守鎖之が向かってきていた。

『霊くん、気を付けてください。建物の屋根上から、霊くんを狙撃しようとしている人がいます』

「了解。ということで二人とも、ぼくが囷になるから狙撃主をよろしく」

上空に複数のビットを配置し、市街地訓練場の状況を把握。

ビットから送られる風景や熱センサーのデータ等々……それらすべてを瞬時に纏め、オフセンス組に追走させているビットを通して概要を伝える。

これが【感応者】の役目。情報の扱いが、彼女たちの戦いなのだ。

『霊くんから見て、右側から狙撃、来ますっ』

「――っ」

銃声。そして足元の道路が爆ぜ、銃痕が刻まれた。

相手の位置を把握した霊は、糸刀から【心力】の糸を出力。

1000本の糸を駆使してドーム状に展開。不規則に乱れ舞う糸の檻が、二射三射の銃弾を弾く。

『左側から斧型【心器】、来ますっ！』

こころの警告通り、人の体ほどもある大きさの斧を持った男子生徒が、屋根から霊にむかって跳び下りてくる。

霊の糸を、その重量を持って撃ち破るつもりだったのだろう。落下の勢いそのままに、叩きつけて来た。

が、簡単に弾かれた。それが予想外だったらしく、相手は無様な隙を見せる。

「針村さん」

「分かっているっ!!」

斧を弾かれ態勢を崩すその生徒に、槍姫が横合いから槍の一撃。脇腹に、槍姫の槍が突き入れられた。

無論、訓練用に先端は潰されているので貫くことはない。

それでも、【心力】を纏った槍の威力は強い。例え出力を抑えられていても。

衝撃の強さを表すかのように、斧を使う男は吹き飛ばされ、建物の壁面に激突。気を失った。

その結果、霊を狙っていた狙撃主に動揺が生まれる。霊に対する射撃が止まったのが、その証拠。

（止めるのなら、せめて移動しようよ。じゃないと——）

じゃないと、ただでさえ居場所を特定されているのだ。強襲を喰らう。

そう思ったときに、狙撃主がいるであろう場所から銃声が響いた。

『霊くん。照討くんが狙撃主を倒しました。これで残るは守鎖之くんを含め、あと3人です』

どうやら、準がうまく立ちまわれたようだ。

この模擬戦で、霊は相手を直接攻撃するようなことはしない、と決めている。

自分がやれば、一撃で戦闘不能になってしまうのは目に見えている。それではチームメンバーのためにならない。

敢えて囷役を引き受け、メンバーに攻撃を任せる。そうすることで攻撃面での経験を蓄積させるのが狙いだ。

最初から攻撃以外……立ち回り方や防衛方法など、すべてをこなせる訳がない。

総合的な実戦はもう少しあと。最低でも、雰囲気を掴めれば儲けもの。

『っ?! 霊くん、守鎖之くんの様子が――』

だから、何か突発的なことが起ころうとも、霊はギリギリまで、すべてをメンバーに任せることにしている。

(この【心力】……なにか大きなことをやろうとしている?)

こころが告げる異変。

それは守鎖之が発しているであろう【心力】からもわかる。

通りの先にいた守鎖之の姿はなく、感じる気配は建物の裏……。そこで【心力】をためている、守鎖之の気配を感じた。曲がりなりにもナイトクラス。その【心力】は学生はおろか、一般の【心兵】には出せないほど巨大なものだった。

その守鎖之は、両刃剣型の【心器】に【心力】を注ぎ、渾身の一撃を込めていた。

「白和一刀流——斬撃波っ!!」

剣を横なぎに振るい、貯めていた【心力】を解放。

【心力】で強化されたその斬撃は……三階建ての商店を、文字通り切った。

やや斜めに切られた商店は、その荷重に従い表通りへ……霊のいる場所へ倒れて行く。

（ふっ……これで終わりだな。潰れて死ねッ！ フランクのゴミがっ!!）

建物をぶった切る、というナイトクラスならではの荒技。

迫りくる建築物が、霊を押し潰そうと倒れ掛かる。

『な、なんてことをっ！ レイくん、逃げてっ!!』

霊を守るため、追走していたビットが、霊を庇うように真上に位置取る。

だが対照的に、霊は慌てず、冷静に呟いた。

「任せるよ……照討くん」

「任せてっ——撃つよっ!!」

照討が表通りに姿を表し、二丁拳銃を構える。

橙色の【心力】をその身に纏い、二丁拳銃に注ぐ。

【心弾倉】に注がれた【心力】が圧縮され、引き金を引くと同時に発砲。

橙色の小さな弾丸が2発、霊に倒れる建物に命中。

直後、轟音とともに建物が吹き飛び、粉々になって地面に落ちた。

「な……何が、起きた?」

事を見ていた槍姫は、目の前で起こった出来事が理解できなかった。

準の放った【心力】の弾丸は、大きなものではなかったはずだ。

遠巻きに見て視認できるようなものではなかった。つまり、一般的な拳銃の弾丸と、大きさは変わらないということ。だというのに、建物を吹き飛ばした。

見た目と結果のアンバランス。

非殺傷用に威力を抑えられているにも関わらず、その威力。

それはつまり、準の【心力】が建物を一瞬で粉々にするほど強力で、

小さな弾丸に圧縮されていたという事実にはならない。

「ば、ばかな……」

そして、理解できないのは守鎖之も同じこと。

建物を一瞬で破壊できるのは、この場ではナイトクラスである自分だけ。の、はず。

起こるべき正しい結果は、自分が切り倒した建物がゴミを押し潰す、というもの。それ以外の結果など、起こりようはさすがない。

だが、目の前の現実が違う。

建物は一瞬で粉碎され、潰されるべきゴミが平然と立っていて、そのゴミと同じゴミが、二丁拳銃をこちらに向けている。

「くっ——」

狙われている、と気付いて回避行動。

直後、自分がいたすぐ後ろの建物が爆発。粉々に消し飛んだ。

「照討くん。もう少し抑えて。今は市街戦を想定しているんだから、無用な被害を出す訳にはいかない」

「でも、あの人が【心蝕獣】だった場合、確実に倒しておかないといけないよね？」

霊の指示に、しかし準は暗い瞳を携えて反論。

なおも守鎖之に狙いを……膨大な【心力】を内包した拳銃を向ける。

その顔は、自分のしている事に自信があるかのよう。薄っすらと笑

みが浮かんでいた。

「確かにそうだけど、それで閃羽の都市機能がマヒしたら、真っ先に被害を受けるのは孤児院のみんなだってこと、わからない？」

「――あつ」

霊のその言葉で、準はようやく我に返った。

（孤児院を守る手段が、敵を倒すことだけじゃないってこと、ちゃんと教えないとダメかな？）

そんなことを頭の片隅で考えるが、模擬戦はまだ続いている。

次の行動を起こそうとして、しかし大きな声が霊に振りかかった。

「おいFランクっ！！ 貴様ら、【心器】の設定を非殺傷にしないんだろう?!」

その声の主は、守鎖之。

霊たちの前に堂々と（考え無しにとも言えるが）姿を表し、そう抗議した。

「でなければ、建物を破壊できる威力を出せる訳が無い!!」

その抗議は、なんの証拠も無い推測に過ぎない。

しかも、建物を破壊したのは守鎖之が先だ。指摘すれば守鎖之も疑われる、のだが、頭に血が上っているのか考えもしていない。

いや、そもそも最初から考えていないだろう。

これは模擬戦であって、殺し合いではない。【心器】で直接殺さな

ければオッケー。など誰が認めようか。

建物を切断し、霊に向けて切り倒した行為は、明らかに度が過ぎている。迂闊、という言葉では済まされない。

それは各位置に待機していた審判役たちも思ったのだろう。

試合を中断させようとしているのか、慌ただしい空気が漂い始めた。

「やはり、Fランクは危険で排除すべきだな……。オレが、引導を渡すっ」

そんな空気を読めないのか、敢えて読んでいないのかはわからない。しかし、守鎖之は霊に向かって剣を構え、襲いかかった。

（この自己正当化の結論を出す速さの、清々しいこと……。『ある意味で』Sランク『らしい』よねえ）

呆れを通り越して感心さえしてしまう。

だが、降りかかる火の粉を払うため、守鎖之を迎え撃つ。

と、そのとき。

『霊くんっ！ 上空から、人がっ——！！』
「っ!？」

こころの警告。

同時に、霊と守鎖之の間に人影が落ちて来て、轟音をたてながら地面に激突。

「くっ……」

「ぐわあああっ!？」

衝撃波が周囲に広がり、すべてを吹き飛ばす。

霊は糸を地面に刺して身体を固定。

守鎖之はもろに衝撃波を受け、身体を建物に叩きつけられてしまった。

「な、なんだっ?!」

「……人、だったよ?」

槍姫の乱暴な質問に、準が持ち前の動体視力で捉えたことを教える。

それは正しく、落下して来たのは人だった。

「……よお霊。ようやく、見つけたぜえ?」

衝撃による砂埃が薄まったころ、その人物は出て来た。

茶色いフードに身を包み、全貌はわからない。

しかし立ち上がったその人物は、2 mに届きそうな高身長。

瞬時に思い浮かぶ、朗が言っていた男の特徴。目の前のそれは、合致する。

「キミは……」

しかし霊がその男の正体に気付いたのは、朗が言っていた特徴と一致するからではない。

朗が話していた、自分のことを探しているらしい正体不明の男、その人そのものだということでもない。

何が言いたいかというと、正体不明の男……高身長の男に覚えは無いが、この男は知っている。

正確には、この男が両腕に身につけている、緑色に光るガントレットを知っている。

あのガントレットは、たった一人の人物以外、身につけることができないもの。ゆえに、この男は間違いなく、【自分が知るアイツ】であることの証拠に、他ならない。

「キミは……昂……憤激昂、だよな？ 背、伸びたね……」

「まあな。そう言うお前は、あんまり伸びてねえなあ？ 2年前のままだ」

憤激昂。

それが、目の前にいる高身長 of 男の名前。

彼は、2年前は霊よりちょっと背の高い、程度の身長だった。だから、2 mに迫る高身長 of 男と言われても、昂のことが思い浮かばなかったのだ。

「ちょっとは伸びたよ。ちょっとだけだけど」

「そうか。そうかよ。でもなあ、んなこたあどうでもいいんだよ……」

高身長に見合った、凛々しくも雄々しい顔付き。

肩まで届きそうな、金の長髪。

茶色のフードをまくりあげ、昂はその顔を露わにした。

「霊よお、神を殺すのがオレ達の目的だろうが。なのにてめえ、こんな所でなに『ごっこ遊び』してんだゴルア？」

しかしその顔とは裏腹に、言葉使いは汚い。いつの時代の不良だと言いたくなるようなものだった。

「ここに帰ること。それは【先生】や【老師】、それに【ババ様】も同意してくれた。

反対していたのは昂と【リン】だけ。賛成多数でぼくはここに帰って来た。それをキミに、とやかく言われる筋合いはないよ」

そんな言葉には慣れっこなのか、いつもの調子を崩さない霊。

正論に正論を重ね、霊は自分がここに居る事が疾しくないことを告げた。

が、憤激昂ふんげきこうという人間は、それで納得できるような人物ではない。

「つぎけたこと言ってんじゃねえぞ？ オレは1秒でも早く神をぶっ殺したくてしょうがねえんだよ。

ホームシック野郎の我儘に付き合っていられるほど……」

昂の両腕のガントレットが、緑色に光る【心力】を纏う。

「 気 い 長 く ね え ン だ よ ゴ ル ア ア ア
ア ア っ ！ ！ 」

茶色のフードを脱ぎ捨て、黒を基調とした服を露わに、霊に殴りかかる昂。

動く霊は、緑色のガントレット型【心器】の一撃を、後ろに跳んで寸前で躲す。

勢い余った昂の拳が地面を殴る。

それだけで、地面は陥没。衝撃波が広がり、再び周囲を吹き飛ばした。

「てめえは連れて帰るぜ？ 抵抗しても無駄だ。【殺神器】を持ってねえ状態で、オレに勝てるなんて思っちゃいねえだろおがゴルア？」

「……」

無言を貫く霊。

その頬には一筋の汗……冷や汗であり、焦りを示す証拠が流れていた……。

第24話【連れ帰ル者】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛こころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●純愛真心——こころの妹。【心蝕獣】に襲われたショックで
声を失っている。

●針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こ
ころの幼馴染。

●篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のN
O.2ナイトクラス。

●照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切
にしている。

●憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が
悪い。

第25話【糸と、拳と、銃弾と】

血の気が、引いた。

『てめえは連れて帰るぜ?』

突然チーム対抗戦に乱入してきた男の声が、ビットを通して聞こえる。

その声に、その言葉に、こころの血の気が一瞬で引いた。

霊が、昂と呼んだ男。

彼は、一体だれを連れ帰るというのか? 分かっているのに、思考が答えに行きつくのを拒否している。

『抵抗しても無駄だ。【殺神器】を持ってねえ状態で、オレに勝てるなんて思っちゃいねえだろおがゴルア?』

誰が、誰に勝てない……?

勝てないということは、負けるということ。

負けるということは、この男の言いなりになるしかないということ。

この男は、何を言っていた?

連れて帰ると言っていた。

誰を連れて帰る?

男は、霊と話している。つまり、霊を連れて帰るつもり――

「っ!! 霊くんっ!!」

「あっ、ちよっと?! ころちん?!」

居ても立ってもいられず、ころは持ち場を離れる。
突然走り出したころを、護衛役の朗が慌てて追った。

「やだっ……やだよっ……霊くんが、居なくなるなんて……」

嫌な予感が止まらない。

せっかく再会できたのに、また離れ離れになるのか。それだけは絶対に嫌だ。

早く霊のところへ行かないと、もう一生会えない気がする。

このとき、彼女は普段よりも速く走っていた。

いつもは槍姫、朗、ころ、という順で、三人娘のなかでは、ころが一番遅い。

「はあっ、はあっ、待ってよ! ころちん!!」

なのに、朗が追いつけないほど……下手をすれば見失ってしまうほどのスピードで走り抜けている。

【心装】による身体能力強化は、朗も行っている。

つまり、今、ころの【心力】は非常に活性化されており、普段の肉体的な能力差を覆しているという証拠に他ならなかった。

こころが現場に到着したとき、戦いはすでに始まっていた。

霊と、高身長ふんげきこうの男……憤怒ふんげきこう激昂。両者ともに【心力】を全身に纏い、周囲の建造物を破壊しながらの戦闘になっていた。

昂は、その両腕に装備したガントレット型【心器】による殴打。

音速を超えているのか、拳を繰り出すたびに空気の爆ぜる高い音が鳴る。そして音速を超えた衝撃波が周囲の道路、建物を削り、修繕不可能なほどの被害を撒き散らしていた。

これは、普通の人の目には映らないほど、とにかく速い。

事実、こころには何が起きているのかよくわかっていない。発砲音にも似た音が断続的に聞こえる以外、理解ができない。

「霊、くん……どこ？」

「こころ、ダメだ！ 私たちの手には負えない！！」

「純愛さん、下がって！！」

激戦の渦中に踏み入ろうとするところを、槍姫と準が止める。

霊に追走させていたビットは、戦いに追いつかず市街地訓練場全体を上空から見降ろすのみ。

あちこちで煙があがり、地面が陥没し、建物が倒壊する、というこ
としか分からなかった。

「オ　ラ　ア　ア　ア　ッ　！　！　！」

そんな雄叫びが聞こえたかと思うと、また建物が倒壊。

5階建てのビルの一角で爆発が起こり、音を立てて崩れて行った。

そして、こころの前に霊が現れる。

「っ！ 霊くんっ！！」

「来ちゃダメだっ！！」

強い、拒絶の声。

次の瞬間、昂が霊の前に突然現れ、殴りかかろうとする。
それを、糸刀から糸を射出し、雁字搦めに拘束。

「っ、やった……」

こころは、安堵した。これでもう、あの男は動けない。

やはり霊は強い。負けるなんてありえない。

いつものように悠然と佇み、場を征して自分のところに帰ってきてくれる。

「ハッ！ おいおい霊よお、たかが千本ちょつとの糸でオレを止められるとも思ってたのかぁ？」

しかしその安堵は、すぐに塗り潰された。

昂は見下すような眼を霊に向け、獰猛な笑みを浮かべて吠える。
きつく縛られているはずなのに、この余裕。

霊の糸の強力さは、都市外の坑道で守鎖^{すさの}之を糸で簀巻きにしたときに証明されている。
ナイトクラスの力を持つ彼でも、身動きできず地面に倒れるしかなかった。

だが、昂という男はしっかりと立ち、話をする余裕すらある。

「くっ……」

「ましてや、オレに対して拘束なんて手段を取るのは悪手だろおが。こんな引き千切るなんざ——」

霊の青く光る糸が、昂の放つ緑色の【心力】で覆われ、見えなくなる。

そしてブチブチっ、と糸の切れる音が響く。

「オレの得意分野だゴルアアアッ
！！」

気合一閃。

そんな言葉が浮かび上がるほどの声量とともに、昂は糸のすべてを引き千切った。

「くっ！！」

そのことに怯むことなく、霊はすぐに行動を起こす。
糸刀を昂に向け、再び糸を射出。無数の細い光条が、昂に向かって一直線に飛び出す。

「だから、力技はオレに通用しねえんだよっ！！」

昂は、拳に【心力】を集中。拳が緑色の光に包まれる。

「ましてこの程度の本数じゃあ、なあっ!!」

拳を前に突き出す。

同時に、突き出された拳から極太の光が放たれ、霊の糸を散らす。
のみならず、その光は離れていた霊にまで到達。

咄嗟に防御するも、一瞬以上踏ん張る事が出来ずに吹っ飛ばされた。

「くうっ!!」

「霊くんっ!!」

吹っ飛ばされて地面を転がる霊を、こころが受け止める。
だが、地面を転がってなお衝撃が残っていたらしく、受け止めながら自身も尻もちをついてしまった。

慌てて安否を確認する。

「霊くんっ！ 大丈夫ですかっ!？」

「んな訳ねえよ」

受け止めた霊が、消えた。

「……えっ？」

目の前には、足を上げている金髪の男。

「純愛さんっ！ 上だっ！！」
「っ！？」

準の声に上を仰ぎみれば、霊が空を舞っていた。

こころが受け止めた直後、瞬時に距離を詰めた昂が、霊を蹴り上げていたのだ。

「そ、んな……」

震えながら、自分の両手を見つめるころ。

もとから二人の動きを追えていなかったころが、昂の接近に気付かず、霊を蹴り上げられていたこともわからなかったのは当然だ。

それでも、その腕に抱いていたはずの霊を、守れなかった。愕然とし、呆然となってしまうのも無理ない。

「はっはっはっ！ そうこなくっちゃなあ、霊いっ！！」
「っ！？」

我にかえって上を見上げれば、霊は空中で態勢を立て直していた。

全身に青色の【心力】を纏わせ、鋭い視線を昂に向けている。

「来いよ、霊いっ！ フルボッコにしてやるぜえ！！」
「っ！！」

纏う【心力】が一層輝いた瞬間、霊の姿が消えた。

同時に、昂も。

直後、あちこちで青と緑、2色の光が発光。

激突しあっているかのように明滅を繰り返し、瞬時に、連続的に、場所を変えながら発光している。

霊と昂……二人の纏う【心力】が激しくぶつかり合っている証拠だ。

だが、しばらくして爆発音。

光ではない、黒い煙と破片が空に飛び散った。

「な、何が起きた?!」

「まずいよっ!! 御神くんの【心器】が爆発したっ!!」

槍姫の疑問に答えたのは、準。

そして焦りの表情を浮かべながら黒い2丁拳銃を構え、発砲。

空中で【心力】の弾丸が兆弾。発光現象は止まり、拳を交えている二人の姿が、空中に現れた。

「……ハッ! おいおいテメエ、まさか【同列存在】かよ?」

嬉しそうな、しかし獰猛な笑みを見せる昂。口の端が大きく吊り上げ、準に言葉を紡ぐ。

「オレ達の戦いに割って入れる……それはテメエが、オレ達と【同列】であることの証に他ならねえ!! やるじゃねえか!!」

霊の拳を片方のガントレットで受け止めながら、もう片方で準の弾丸を弾いた格好。

瞬間移動の如き二人の戦いに、準の2丁拳銃が介入した形だった。

圧倒的な動体視力と、先天的な先読みの才能。
これこそ、霊に見出された照討準てらうちゅんの力。

その力で、霊と昂の戦いの一部始終を見ていた。

爆発の原因が分かったのも、そのおかげだ。

激しい戦いに、霊は全力を出さざるを得ない。

だがその結果、【糸刀Ver. 1.4】は霊の【心力】に耐えられずオーバーヒートを起こし、あっという間に爆発。

ダナンによって改良を重ねられていても、まだまだ霊の全力に應えることができない。それが浮き彫りになった。

「じゃあ……もうちつと、飛ばすぜ？」

そう呟いたあと、昂と霊の二人がまた消えた。

再び、空のあちこちで発光する、2色の光。

「くっ!!」

そして一見、無造作に、あちこちに2丁拳銃を乱射する準。

しかし、発光と同時に兆弾の跡が現れる。

闇雲に撃っている訳ではない。二人の戦いを追うことができ、そして正確に昂だけを撃っていた。

「よ、よし! いいぞ照討!! その調子で、御神の援護を——」
「だ、ダメだっ!!」

霊の援護が出来ている。

そう思った槍姫の声は、しかし悲鳴に近い準の声に掻き消された。

「このままじゃ、御神くんが殺されるっ!!」

先ほどよりも濃くなった、焦りの表情。

汗をダラダラと流しながら、四方八方に銃を連射する。

「このっ!!」

渾身の一射なのか、2丁拳銃を同時に発砲。

直後、準の視線の先に昂が現れる。

その姿は、両手を使って弾丸を弾いた格好だった。

「く、霊くんはっ?!」

霊の姿が見当たらない。

こころが慌てて周囲を見回すが、その姿は欠片も見えない。

と、後方で何かが落着する音がした。

後ろを振り返ってみれば、霊が倒れていた。

バトルスーツのあちこちが破れ、血に染まった肌が露出。ポロポロに傷付いた霊が、力なく倒れていた。

「霊くんっ!!」

急いで駆け寄り、霊を抱き起こす。

霊に、反応は無い。
顔には夥しい量の殴られた跡が刻まれており、口の端は切れて酷い有り様。

文字通り、虫の息だった。

「霊くん！！　しっかり、しっかりしてくださいっ！！」

呼びかけるも、霊は起き上がらない。

その間にも、昂は悠然とした歩みでこちらに向かっている。

「ちんけな【心器】だなあ。んだよあれは？　すぐぶっ壊れちまつたじゃねえか。あれを【殺神器】の代用にするなんて、何を考えてんだ？　バカか？　それともホームシックで頭イカれちまったかよ？」

罵倒を続けながら、昂は歩みを止めない。

両腕のガントレット型【心器】が一層の輝きを放っているのは、戦意の表れ。

霊をボロボロにしてなお、昂は戦いを止めるつもりが無いのだ。

「……あん？」

そんな昂の前に立ちふさがる、小柄な人影。

「なに通せんぼしてんだ？　どけよ。【同列存在】だからって、使ってる【心器】がそれじゃあ、戦いになんねえよ」

「……御神くんは、渡さない」

立ちふさがったのは、準。

黒い2丁拳銃の銃口を昂に向け、威嚇していた。

「御神くんが居なくなったら、この都市を……孤児院のみんなを守れない……僕がちゃんと戦えるようになるまで、教えてもらわなくちゃいけないんだ……。だから、渡さない」

霊は言った。自分一人だけでは守れない。

だが準が強くなれば、それだけ閃羽の被害を抑えることができる。霊が閃羽を見捨てる確率が低くなる。

準は、自分一人がいくら強くなろうが、閃羽を守り切れると考えてはいなかった。

生来の気弱さもあるが、それ以上に戦い方を知らない。だから霊の助力がどうしても必要。霊のチームで訓練し、霊のように圧倒的な力を身につけるまで、彼を渡す訳にはいかない。

「へえ……そうかよ。そりゃあ霊に……【同列存在】に教わった方がいいよなあ……」

緑色のガントレットで顔を覆い、天を仰ぎ見る。

その声には納得の色が含まれていた。

確かに、納得していた。

絶対に、納得していた。

「けど、だから、なんだ？」

ガントレットの覆いを外して表情を晒し、準を睨みつける。

納得したうえで、準の訴えを切った。

「お前が困ろうが、この都市が滅ぼうが、オレには関係ないだろ？」
「なっ……それはそうだけど……」

この昂という男が、何か目的を持っているのはわかる。その目的に霊が必要なのもわかる。

だが、準にも譲れないものがある。

「でも、御神くんは強いから、だから戦い方を――」
「んなもん知るかよっ！！ 都市が滅ぼうが、人が死のうが、オレが神をぶっ殺すのを我慢する理由に」

必死で説得を試みる準の言葉は、激しい怒気を伴った叫びに消された。

「ならねえだろうがよっ！！」

再び全身に【心力】を纏い、準に襲いかかる。

我慢の限界なのか、昂の表情には先程のような余裕が無い。早く霊を連れ帰って、目的を達成する。

そしか、頭がない。

そしてそれを邪魔する準に、激しい怒りをぶつけようとしていた。

「このっ！」

昂の怒気が、生来の気弱さを刺激し、押し潰そうとしてくる。

だが逃げるわけにはいかない。逃げれば霊が連れてかれてしまう。そうなれば、誰に教えてもらえばいい？ 誰が都市を守ってくれる？ ナイトクラス5人でも抗しきれない、圧倒的な数を誇る【心蝕獣】たちが、また群れをなしてきたらどうする？

霊でなければダメだ。だから連れて行かせはしない。

2丁拳銃をかまえ、昂を迎え撃つ。

「オラァっ!!」

昂の拳が、顔面に迫る。ことは、わかっていた。

だから反応できた。

常人には見えない速さの拳に、一射。

銃弾が昂の拳を弾いた。

が、もう片方の拳が動いていた。

それも読んでいた。読んでいたから、準ももう一方の拳銃を撃つ。

弾いた。

2丁拳銃で、迫る拳を捌く。

ゼロ距離による銃撃で、昂の拳を弾く。弾く。弾く。退ける。

だが、昂は怯まない。銃弾に弾かれながらもすぐに殴りかかる。

「どうしたあ?! どうしたよお?! もっと頑張らねえと、オレを倒すまえにテメエの【心器】がぶっ壊れちまうぜえ?!」

その指摘通り、高出力高圧縮の弾丸を撃ち続けた準の拳銃型【心器】は、その銃口を赤熱化させていた。

霊と同様、準も【心力】が強大過ぎるために、【心器】に膨大な負荷をかけていた。

そのためオーバーヒート寸前。

2丁拳銃が文字通りに火を吹くのは、時間の問題だった。

第25話【糸と、拳と、銃弾と】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切
にしている。
- 憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口
が悪い。

第26話【記憶の蓋】

心臓がバクバクと、破裂しそうなほど脈打つ。

血液の流れる音が脳に響き、頭痛と勘違いしそうになる。

あじやらほがら
戲陽朗は、それだけ本気で走っていた。

「うっそ……なんで、こころちに追いつけないの……？」

突然こころが走り出し、朗はそれをすぐに追った。

なのに、こころはあつという間に加速していき、自分の視界から消えてしまった。そんな錯覚をしてしまうほど、速かった。

じゅんない
純愛こころは【感応者】だ。

【心器】の遠隔操作に意識を集中するため、前線に出ることはほとんどない。そのため、身体能力向上の訓練は最低限しか行われないのが通例だ。

心皇学園に入るための受験訓練（受験勉強に相当する、適性試験に合格するための訓練）を受けていた中学時代から、こころは【感応者】としての才能を磨くことに費やしていた。そして身体能力向上の訓練を重点的に行っていた朗や檜姫と、運動能力に圧倒的な差が生まれた。

だから、こころに追いつけないということは、有り得ないことだ。

「はあっ、はあっ、とにかく、急がないと……」

ビットの通信から聞こえてきた、霊たちオフエンス組の状況。

聞こえて来た声は間違いなく、昨日の夜に本屋で出会った、茶色いフードを着込んだ高身長タカシナの男のもの。

しゃべり方が一緒だったし、なにより狙いが霊だと明言していた。

ようやくオフエンス組のいる、商店街を模したフィールドに到着。

「……へっ？」

商店街の大通りに入って視界に飛び込んできた光景は、朗に予想外の展開を見せている。

まず、ここに介抱される、全身痣だらけで血だらけの、ズタボロに傷付いた霊の姿。

圧倒的な強さを見せていた霊が、やられていた。

一体、誰が霊を？

決まっている。

模擬戦に割って入った乱入者……霊によれば憤激昂ふんげきこうという名前らしい、高身長タカシナの男だ。

霊の知り合いのようで、彼を連れ戻しにやってきたそうだ。

「御神くんがやられるって……あの人、どんだけ強い……。って
いうか、そんな人と今戦ってるのって……照討くん？」

次々と迫る拳を、黒い2丁拳銃を駆使した零距离射撃で防ぐ人物。

小柄で気弱な男子……照討準。てらうちじゅん

普段から何かに怯えたような挙動。そしてFランクということもあって、いじめられている男の子だ。

そんな彼が、霊を倒したであろう昂という男と戦っている。

一体何がどうなっているのか。

朗はこの場にいる親友の一人、針村槍姫はりむらそうぎのもとへ駆け寄った。

「槍姫ちゃん槍姫ちゃん!! これってどういう状況?! 御神くんがやられちゃってるけど、まさかあの人が?!」

「ああ。私には目で追えないほど激しい戦いだった。だが御神は、自身の【心力】に耐えられる【心器】がない。そのために自分の能力を十全に発揮せず、激戦の最中に【心器】が爆発した。その結果が、あれだ」

視線の先には、こころに抱かれる霊。

虫の息という表現がすぐに浮かぶほど、目に見えて酷い状態だ。

「でも、御神くんが負けるってことは、あの男の人の【心力】もすごいってことでしょ? なんてあの人の【心器】は壊れないのかな?」

「簡単なことだ。それだけの【心力】に耐えられる【心器】だということだろう。御神の知り合いということでもあるし、そんな高性能の【心器】を持っていたとしても、おかしくは無い。

しかしな、問題はそこじゃない。そんな奴を、どうやって退ける? 今は照討が奮戦してくれているが、いつまで戦っていられるか……」

膨大な【心力】を纏わせたガントレット型【心器】。

その拳打のすべてに銃弾を当てて弾く、準の2丁拳銃。昂の動きに合わせていて、拳銃で殴っているかのような印象を受ける。

「すごっ……あれ、【ガンⅡカタ】って言うんだっけ？ ホントに殴る様に撃ってる……」

「あの昂とやらの猛攻を凌ぐために、無意識にやっているんだろう。拳の動きに合わせて銃を移動しているから、必然的に【ガンⅡカタ】の流れになっているんだ」

「もしかして、もしかする？」

「いや、無理だ。照討の【心力】は御神に匹敵するらしい。ということは、照討の【心器】も持たないということだ。

対して、昂とやらの【心器】は、閃羽に存在するどの【心器】よりも高性能。ジリ貧で照討が負ける……。どれほど照討の放つ【心力】の弾丸が強力でも、な……」

準の【心力】を圧縮した弾丸は、3階建てのビルすら一発で粉碎できる。

そんな威力を内包した弾丸をすべて弾く、緑色のガントレット型【心器】。その強度は如何ほどのものか。

あるいは、それほどの強度を持たせる憤激昂ふんげきこうの【心力】が凄まじいということか。

どちらにしても、強大で強力な力をもつ昂に対し、準が対抗できているのは【心力】のみ。

「どうしたあ?! どうしたよお?! もっと頑張らねえと、オレを倒すまえにテメエの【心器】がぶっ壊れちまうぜえ?!」

その【心力】も、活かせる武器である【心器】が壊れる寸前で意味

を成さなくなろうとしていた。

「くっ……このっ……」

焦りが無意識の声となって出てしまう。

黒い拳銃の銃口は、高出力の弾丸を発砲し続けたために赤熱化しており、限界が近いことが否が応でもわかってしまう。心なしか、拳銃のグリップまでもが熱く感じた。

「【心器】に気を取られ過ぎなんだよっ、テメェは」

気を取られたのは、ほんの一瞬だった。

その一瞬のうちに、昂の姿は視界から消え、背後から声を掛けられる。

「っ?!」

咄嗟に拳銃のグリップ底で、殴打。しかしあっさりと受け止められてしまう。

「素人が……甘えよっ!!」

受け止められただけでなく、銃そのものが碎かれてしまう。

膨大な【心力】を纏った昂のガントレットが、叩きつけてきた側の銃を、逆に破壊した形だ。

【心器】としての性能、強度、すべてにおいて劣っている準の拳銃では、歯が立たない。

だが、まだ1丁残っている。

無理矢理に動揺を押し殺し、すぐに銃弾を放つ。

しかしそれすらも昂は弾いた。さきほどと同じように。

違いが出るとすれば、ここからだ。

「オレの腕は、2本のままだぜえ?!」

「ぐっ?!」

受け止めたのとは反対側のガントレットで、準を殴打。

2丁拳銃を駆使してようやくなんとか戦いらしい戦いになっていた時とは違い、1丁を破壊された今、準の勝ち目は無くなっていた。

片方を捌くことは出来ても、もう片方は間に合わない。だからもう、あとは一方的だった。

「そろそろ限界だろお? 寝てろやっ!!」

「うあっ!!」

昂の拳が、準に炸裂。

内包された膨大な【心力】が準を吹き飛ばし、戦闘不能の状態にまで追い込んだ。

「はっ。【同列存在】だけあって、なかなか粘り強かったけどよお

……オレも暇じゃねえんだわ。

そこんところ、てめえら理解してつかゴラア?」

意識が再び、霊に向かう。

だが、その行く手を阻む存在がいた。

槍姫と、朗。

立ちふさがる様に昂の前に立ち、それぞれの【心器】を構えている。

昂はそのうちの一人、朗に向かって話しかけた。

「よお、お嬢ちゃん。昨日はありがとよ。おかげで霊を見つける事ができだぜえ?」

「……こんなことするんなら、教えなきゃよかったよ」

「はっはっはっ。こんな手荒なマネをするつもりなんか、無かったんだぜ?」

軽薄に笑いながら、昂は二人に歩み寄る。

「オレはただ、霊を連れ戻しに來ただけなんだ」

一歩、また一歩、確実に近づいてくる昂。

朗と槍姫は、各々の【心器】を構える以上のことができない。あまりにも、力の差があり過ぎるから。

「だからよお……退いてろ」

昂がその気になれば、二人は動きを追う事すらできない。

一瞬で二人の間に現れた昂は、彼女たちの【心器】に触れ、自身の膨大な【心力】を流し込んだ。

霊や準と同等の【心力】。

そんなものを流し込まれた朗と槍姫の【心器】は、一瞬でオーバーヒートを起こし、煙をあげた。

「なっ……」

「うそ……」

戦いにすらならないことに愕然とする。

抵抗の術を失った二人は、昂がそのまま霊とこのころのいる場所へ歩き出すのを、止められなかった。

「さてと……その女。霊を渡しな」

朗と檜姫の戦意喪失を確認した昂は、今度こそ狙いを霊に定める。

こころは、霊を守る様にして立ちはだかっていた。

霊は地面に横たえられており、2つのビットが彼を守る様にして浮いている。

こころの左腕には、4機のビットが連結させたシールドがある。

今、昂の視界に映っているのは6機のビット。

遠目から見たとき、この女は16機のビットを操っていたはず。だとすれば、残りの10機はどこへ？

疑問は、湧かない。なぜならすべて把握しているから。

「問答無用か。いいゝねえゝ。嫌いじゃないぜえ、そういうのはよお」

上空、昂の真上から降り注いでくる、数発の黄色い弾丸。

発生源は、こころが操るビット。

降下しつつ【心力】の弾丸を昂に浴びせ、取り囲む。

そして絶え間ない連弾を、ビットの囲いの中心……昂に向かって叩きこんだ。

この波状攻撃なら、あるいは……。しかし、無駄だった。

「けどよ、格の違いってのをもう少し、意識しやがれゴルァ」

目の前に現れた、緑色の手甲。

「あうっ!!」

頭を掴まれるところ。

凄まじい握力が、こちらの頭部を潰そうと締め付けてくる。

「にしても、テメェ……本気で霊を守るつもりでいるのか？」

絶対的優位に立っている。だからこそ、余計な疑問が湧いていた。

こちらの頭を掴みながら、昂は感じていた疑問を口にする。

「なんで力を抑えてんだ？ 本気出しゃあ、もうちっと粘れんだろうがよお」

「なにを、言って……っ?!」

突然、口を利けなくなる。

昂の【心力】がガントレット型の【心器】を通して頭に流れ込み、何かをこじ開けようとしていた。

「あん？ 違うな……抑えてんじゃないねえ。抑えられてんのか？ へえ……」

不思議だった。

この女から感じられる【心力】は、相当強い部類に入る。
だというのに、ビットから放たれた【心力】の弾丸は、感じた【心力】に比べれば大きく劣っていた。

「ぐうつ?!」

「おもしれえ……なんでこんな面倒くせえことしてんのか知らねえが、オレがテメエの蓋を、引っぺがしてやるよ」

口の端を釣り上げ、込める【心力】を徐々に大きくしていく。

頭が割れそうな、何かを無理矢理引き摺りだされるような、そんな感覚が、こころを蝕む。

それは、あまりにも辛かった。何故かはわからないが、とても耐えられそうにない、苦痛。

意識が、徐々に暗くなる。

そして暗くなった意識は、昔の記憶のなかを漂い始めたのであった……。



事の発端は10年前……霊が外の世界へ旅立ってしまう1ヶ月まえに遡る。

その日、【心衛軍】上層部の主催する会議があり、霊の祖父であるみかみげんさい御神弦斎は彼を純愛家に預けていた。

普段から一緒にいる霊とところ。

弦斎がいない、という状況を除けば何一つ変わらない日常。朝一に預けられてからお昼まで、霊はこころと二人で仲良く遊んでいた。

『ねえねえレイくん。公園に行こうよ。新しい遊具ができたんだって。』

『いいけど……。こころのお母さんが帰ってくるまではダメだよ』

『えええ……。なんでえ……。』

『おじいちゃんが言ってた。子供だけで外に行っちゃいけないって。こころのお母さんだって、言ってたでしょ？』

『やだっ！ やだやだやだ……。行くのっ！ 行きたいのっ！』

『行くったら行くのっ！！』

『はあ……。』

幼い頃の自分達。

こころは、今とは違って非常に我儘だった。

髪は短く、霊のような普通の男の子と変わらない長さだった。顔立ちは可愛いのだが、後ろから見れば男女の区別はつかないだろう。

そんな、お転婆なこころの面倒をよく見ていたのが、霊だった。

両親はおらず、祖父に育てられていた霊は、幼いながらに聡い子だったのだろう。こころとは間逆で、大人しい利口な子だった。我儘もいわず、言いつけられたことを守る。

『行く行く行くくくく!! 絶対行くのくくく!!』
『……わかったよ。ちょっと待ってて』

そんな霊だが、こころが相手になると少し甘かった。

こころがあまりにも粘る子、というのも原因だったかもしれない。
とにかく、霊はこころの我儘を聞いてしまうことが多かった。無論、
その後のフォローが出来るよう、いくつかの手は打っておく。

『えくつと……紙と、えんぴつは……あった』

5歳でありながら、すでに平仮名を習得していた霊は、紙に伝言を
記しておく。

『こころと こうえんに 行ってきます。 おゆうはんまでには
もどります』

祖父である弦斎は、この閃羽の【心衛軍】の予備役として、若手の
教育に赴くことがあった。

その間は霊が一人で留守番か、期間が長ければ純愛家に預けられる。
であれば、口頭で伝えられないことも多々あったため、霊は最優先
で平仮名を覚えさせられた。

幸い、おじいちゃんっこであった霊は、祖父との連絡手段を増やせ
るという理由で必死に覚え、幼い身でありながら簡単な読み書きを
マスターしていたのである。

『これで大丈夫かな。ほら、こころ。行くよ』
『やったくくく!! 早く行こっ!!』

二人で手をつなぎ、公園に向かう。

この当時、純愛家や御神家が暮らしていたのは、第1居住区という都市開発初期の、古い建物が並ぶ住宅地だった。

個人住宅よりも3階建てのアパートがあちこちに点在しており、統一性のない景色をみせている。これは少しでも居住できるところを増やそうとした結果であり、初期段階の都市開発ではよくあることだった。

ただ、再開発の計画が持ち上がっており、その起点として公園の改修が行われていた。

公園に新しい遊具云々……というのは、その一環だ。

そのため、比較的真新しい雰囲気のパークとして生まれ変わり、連日家族連れの人々で賑わっていた。

『うう……。人がいっぱい遊べない……。』

『しょうがないよ。新しくなったばかりだから……。先に砂場に行こうか。あちは前より大きくなったから、きつと遊べる場所もあるよ』

渋るところを、霊が手を引いて連れて行く。

砂場には何人かの子供たちがいて、それぞれ思い思いの遊びをしていた。その砂場のなかに入り、先に遊んでいた子達に交じって、砂山を形成していく。

ここは新しい遊具に未練があるようだったが、霊がほかの子供たちとつくる砂の城に興味に移り、そしていつの間にか夢中になっていた。

そんな時間がしばらく経ったとき。

『どうしたの？ レイくん』

『……空から、何か降ってくる』

霊につられて空を見る。

上空には、閃羽の中心に建つ巨大な時計塔から発せられる、半透明の膜状エネルギーバリアで覆われた空しか見えない。

だがよく見ると、小さな黒い点がいくつか見えた。

『あれ、なんだろう……』

『……落ちてくる』

その黒い点はシミのように広がり、やがて一滴の滴となってなって、霊たちのいる公園に落ちて来た。

遠目から見それは丸い。

しかし、よく見ると触手のようなものが、その丸い物体から生えている。

気付いたのは、一人の大人だった。

『し、【心蝕獣】だっ!!』

バスケットボール大の目玉に、複数の触手が生えた異形の生物。

【心蝕獣】としては最弱の部類、ポーンクラスに属するタイプだが、それでも一般人を食物とする。

『ど、どうしてだ?! ポーン・アイズは、シールドを突破できな

いんじゃないかったのか?!』

現在確認されている【心蝕獣】のなかで、唯一の飛行能力を持つのがポーン・アイズだ。

そのため、外縁防壁に阻まれず、上空から飛来する可能性のあるポーン・アイズの対策として開発されたのが、都市の上空を覆う半透明の膜状エネルギーシールドだった。

【心蝕獣】の体液は、特定の電磁波の影響を受けると蒸発する。この特性を利用したのがエネルギーシールドだ。

しかしこれは、ルーククラス以上の強力な【心蝕獣】には効果が薄い。

飛行能力を持つのがルーククラス以上にもいたらどうしようもなかったが、幸いなことに、ポーン・アイズ以外に確認されていない。

だが、今日の前に降りて来たポーン・アイズは、エネルギーシールドを突破してきた。

実はカラクリがあった。

複数のポーン・アイズが一斉にシールドへ突撃。一点に負荷をかけて突破してきたのだ。

その証拠に、他のポーン・アイズはシールドの外だ。

『に、逃げろっ! 【心衛軍】を、【心衛軍】を呼ぶんだあ!!』

唐突な襲来に、逃げ惑うしかない人々。

各々の子供、家族を連れて必死に逃げ回る。

が、そんな集団に向けて、ポーン・アイズは容赦ない攻撃を繰り返した。目から光線を放ち、逃げる人々を焼き払う。

『うあああああっ!!!』

幼い悲鳴。

辛うじて生きていた子供に、触手を突きたて、その体液と心を奪い取って行くポーン・アイズ。

幼い子供の皮膚があっという間に干からびていき、ミイラのようになっていた。

『こころ、逃げるよっ!!!』

大人たちと一緒に来たわけではない霊とこころは、自力で避難するしかない。

だがこころは、生まれて初めて見る【心蝕獣】に恐怖し、足が竦んで動けないでいた。霊が無理矢理に引っ張るが、そんな状態では当然、足を縛れさせて転ぶに決まっている。

『きゃっ!!』

『立つてこころ!! 逃げないと……うつ?!!』

転んだこころを立たせようとして、すぐに気付いた。

ポーン・アイズに、見られている。

複数の触手を生やす血走った目玉。見るもおぞましい化け物が、自分達に狙いを定めている。

『まずいつ!!!』

霊は、咄嗟にこころに覆いかぶさる。

直後、背中に走る激痛。ポーン・アイズの触手が、鞭のように霊の背中を打つ。

『があっ!!』

『れ、レイくんっ!!』

慌てて起き上がろうとするところを、霊は必至でその腕のなかに収めようとする。こころを丸まらせて懸命に抱き、【心蝕獣】から庇う。

容赦のない鞭打ちが、霊の背中を何度も襲う。その度に激痛が走る。

痛い、熱い。

熱いが、痺れに。

痺れが、無痛に。

あまりの痛みに感覚がマヒしたのか、霊は背中の痛みを感じなくなっていた。

そこでようやく、この状況から逃れるための思考を開始することができた。

と、目の端に石ころが映る。手を伸ばせば届く距離。

少しずつ、こころを抱きながらじりじりと移動し、その石ころを手取る。

『くっ……このっ!!』

そして一瞬の隙をつき、背後を振り返って石ころを投げた。

その石ころは見事、ポーン・アイズに命中。その目玉の中央に当たった。

次の瞬間、こころの視界が、赤く染まった。



この先だ。この先を思いだそうとすると、ノイズが掛かったように思考が麻痺し、何も思い出せなくなる。

「ははっ！ ずいぶん強力な封印じゃねえか。このオレが、一瞬で破れないってえと、霊の仕業か？」

「あっ……くっ……」

こころの頭を鷲掴みにしたまま、自身の【心力】を流し込む昂。

【心力】によって施されている心の鍵。それを強引にこじ開けようとしているのだ。

この鍵を開ければ、抑えられている【心力】が解放されるはず。

「神をぶっ殺すのに、使える駒が多いに越したことは無いからよお……精々、派手に撒き散らせよ？」

「うっ……！！ ああああああ——っ！！」

無理矢理に流される【心力】に、悲鳴を上げるこころ。

昂は、この女が壊れてしまおうが構わない。

強力な【心力】を発現すれば儲けもの、程度の気持ちで封印を壊そうとしているに過ぎなかった。

だが、それを許せない人物がいた。

突如、こちらの頭を掴んでいるガントレットに、青い筋が浮かび上がった。

それは徐々に光を強くし、やがて締め上げるようにきつく絡みついてきた。

「……あん？」

こちらから手を放す。

苦痛から解放されたところは、そのままよろけて地面に倒れ伏した。

「あ……う……れ、レイ、くん……」

まだ意識があるようで、霊の名を呼ぶ。

視線の先には、起き上がっていた霊の姿が。全身ボロボロなのはさつきと一緒だが、違う点が一つだけ。

背中に、3対6枚の【心力】の翼を展開していた。

こころを放した昂は、意識を本来の目的に……起き上がっていた霊に向けた。

「おいおい霊よお……おまえ、こんな都市の真ん中で【天使モード】になるって、正気か？」

立つのもやっと、という様子の霊に対し、昂は少しだけ焦りの色が込められた声で問う。

霊の表情は、暗い。

いつもと同じ無表情に近い、感情を表すことのない目を向けているが、発する声があまりにも冷たかった。

「昂……【序列5位の力^{りよくてんし}天使】ふぜいが、調子に乗るなよ……」

ゆっくりと、昂に向けて歩きはじめる霊。

背中の翼が、崩れ落ちて来た瓦礫片を瞬時に蒸発させた。

「ハッ……おもしれえ。いくら【死^{してんし}天使】のおまえでも、【殺神器】を持たない状態でオレに勝てる訳がねえ。悪足掻きかよ？ それならそれで……」

全身を、緑色の【心力】で覆い、身体能力を強化する昂。

「たたきのめすだけなんだよゴル
ア！！！」

ガントレット型【心器】にも【心力】を集中し、霊に向けて襲いかかる。

霊は、迎え撃つように両手の指から【心力】の糸を放出した。

第26話【記憶の蓋】（後書き）

- 御神霊みかみくしび——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛じゅんないこころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村はりむら槍姫そうぎ——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戲陽朗あじやらほがら——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 照討準てらうちじゅん——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切
にしている。
- 憤激ふんげき昂いづ——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口
が悪い。

第27話【生きる目的と戦える理由】

神を殺す。

それは彼……ふんげきこう憤激昂にとって、生きる目的そのものと言ってもいい。

この世界を蹂躪する【心蝕獣】。

その頂点に立つ、神と呼ばれる存在。

宗教にある抽象的な神ではなく、実在する神。実在するからこそ、その存在を憎まずにはいられない。

そう……憎いのだ。

昂は、実在する神が憎い。

あの日、自分からすべてを奪った【心蝕獣】。親や兄弟、友人……さらには、故郷そのもの。何もかも奪われ、命すらも奪われそうになったあの日。

奴が、現れた。

『神がいるから、【心蝕獣】がいる。神を殺さないと、【心蝕獣】は永遠に生まれ続ける』

あの日とは、いまから5年前。

【心蝕獣】に殺されかけた昂を救ったのは、10歳のこども……御み神霊かみくしひだった。

その手に持つ【殺神器】、糸刀から無数の糸を周辺に放出。

破壊しつくされた故郷の都市全域を跋扈する【心蝕獣】を、その糸で絡め、絞め殺し、圧殺し、そして貫く。あちこちで血風が吹き荒れ、断末魔の聲が上がっていた。

『ぼくの力はまだ発展途上だけど、いずれ必ず神を殺してみせる。キミはどう？ 神を殺したくないかい？』

幼い霊は、呆然と座り込む昂に手を差し伸べ、問うた。

その顔は、酷く無機質だった。

同情や憐れみ、ましてこの事態に共感するような感じも受けない。

ただ目だけが、この幼い少年の心情のすべてを表していた。

すなわち、狂気。

暗い暗い、人の心を闇に沈めるかのような瞳。あまりの暗さが、逆に並々ならぬ生気を思わせるほどの黒さ。しかしよく見れば何も見えていない。目的を果たすことしか考えていない。それがはっきりとわかる、狂気の目をしていた。

つまり、本気で神を殺そうとしている目だった。

『殺す……？ 神、を？』

『そう。ぼくは神を殺す。殺したい。じゃないと、ぼくはキミのように大切な人を失うかもしれないから』

すっ、とゆっくり指を差す霊。

そのさきにあるのは、たった今失った、昂の故郷。都市だった廃都

市。

【心蝕獣】によって滅ぼされた、昂の居場所。

『あっ……ああっ……くっ、あ……』

今までどこか、認めていなかった現実。

しかし突きつけられた事実。

認識すると湧きあがる、悲しみの涙。

張り裂けそうになる胸の痛み。

そして……この身が爆発するかのような怒り。

その怒りは捌け口を求め、昂のなかを激しくのた打ち回る。

『怒ってるよね。うん……怒って当然だ……。それを、力に換えてみない？』

『なっ、にい……』

『その怒りを、憎しみに換えて、力に換えて、神にぶつけるんだよ』

『神……神い……神つつっ!!』

すべてを奪った【心蝕獣】。それを率いている、神。

『きっとキミは、ぼくと【同列】だ。【あの時】、ぼくはキミになつていたかもしれない。

だからこそ、ぼくと一緒に戦えると思う。一緒に戦おうよ。一緒に殺そうよ。一緒に……神を、殺そうよ』

『うう……く、う、うおおおおああああっ——!!』

天を貫く、昂の慟哭。

二人以外には存在しない無の廃都市に、虚しく響き渡る。

霊との出会いが、昂を変えた。昂を生まれ変わらせた。そして……
殺神者に変えた。



「神を殺そう……。そう言ったのはテメエだった。なのに、なの、
にいいいいいい——」

昂の【心力】が、緑色の光となって吹き荒れる。

怒りを、憎しみに。

憎しみを、力に。

両腕のガントレットに【心力】を集中し、霊を睨みつける。

「なんでオレ達の前から、居なくなっただんだあああ!!」

踏み出す。

踏み込みのあとが地面を陥没させる。

勢いよく霊へ迫り、その慣性を利用した一撃を見舞う。

「——っ?!」

が、昂の動きが突然止まる。理由は簡単。霊の指先から伸びる10本の糸が、昂に絡みついて拘束したからだ。

「確かに、今のぼくには【殺神器】がない。けれど、アレはぼくにとって操る糸の本数を増やす装置でしかないんだよ……言っただけ？」

糸の強度その他は、【心器】を使おうが使うまいが変わりは無い。

違いが出るのは、操れる本数。

【心器】無しでは指の数しか出力できないだけなのだ。

ただ、心弦曲は糸の本数が多ければ多いほど、その技術力は発揮されるので、【心器】があればそれに越したことは無い。

「くっ……なん、だ、と……」

「ああ、言っただけだったよねえ。手の内を晒すなんて、バカのやることだし」

それは、昂にとって痛烈な皮肉だった。

霊は、昂の手の内をすべて知っている。知り尽くしている。

なぜなら、霊が昂を殺神者に誘ったのだから。

「それで、なんでキミたちの前から去ったか、っていう話だけ……」

逆に聞いていい？ 【先生】や【老師】、【オババ様】……殺神者の主要メンバーが、なぜぼくが閃羽に帰郷することを許したか、考えたことある？」

「それは、おまえが序列1位……オレ達のリーダーだから、だろお

がっ」

「忘れてない？　ぼくは多数決を取った。序列は便宜的なものであって、あくまで議論によってぼくら全体の行動は決議される……」

殺神者、という集団……。

それはいわゆる、民主制的な意思決定方法を採用している。霊を頂点としてはいるものの、独裁状態ではない。

「だとしても！　理由を聞いてねえ！！　いきなり帰るなんて言い出して、何もオレ達に言わなかった……いや、待てよ？

【ジジイ】や【ババア】どもは、理由を知ってんのか？！　そうなんだな？！」

「別に黙ってたわけじゃないよ。ただ、ここ数年で【同列存在】を3体、立て続けに倒してしまったから、時間が惜しかったんだ」

「どういうことだよ？！」
【同列存在】は倒すべき相手だろうが！

「最初に倒した【同列存在】は、能天使エクシア。次に力天使デユナメイス。そして智天使ケルビム。残りは4体。つまり、4分の1の確率で【アイツ】とあたるということ……」

アイツ、が誰を指しているのか。

それが誰かを、昂は一瞬で思いつく。昂にとっても、神を殺すために倒さねばならない相手の一人だから。

「……熾天使セラフィム。死天使のおまえと【同列】の存在」

「そう。アイツはここで……閃羽で生まれたらしい。アイツが最初に現れるのは、間違いなくここだ」

「んなっ？！」

確信を持った目で、霊は告げた。

霊は、確信も確証もなく、憶測で物事を進める人物ではない。

そう分かっているのに、疑問を挟まずにはいられない。【心蝕獣】
がここで……人間の住まう場所で生まれたなど、信じられるはずが
ないから。

「お、おいおい……どういうことだっ?! 【心蝕獣】がここで生
まれただど?!」

「正確には、熾天使セラフィムという【心蝕獣】が、ここで生まれ
た」

「同じことだろうがっ!! 第一、なんでそんなことを知ってんだ
?!」

「【オババ様】からそう聞いてたんだ。おじいちゃんの寿命がもう
無いってわかったとき、ぼくに教えてくれた」

「だとしても、おまえがここに帰る理由はなんだっ!!」

聞いても納得がいかない。倒すべき【同列存在】が出現するまえに、
わざわざ待ち伏せまがいなことをする理由が、昂にはわからなかつ
たから。

だから、霊は答えることにした。

「……ぼくが【天使モード】になったのと、同じ理由だよ」

いつの間にか、霊はこころの所にいた。

昂に【心力】を流し込まれ、封印されていた記憶を無理矢理に解放されかけた。
霊の目から見ても、こちらの体力はかなり消耗しているように思えた。

「く、霊くん……」

「ごめんね。もっと上手くやれると思ってたんだけど……思い通りにはいかないね」

昂には、理由を話すつもりはなかった。

話せば、ここに施していた記憶の封印についても話さなければならぬから。

だが、十全に力を発揮できない状態で昂を退けられるほど、甘くは無かった。自分自身の甘さを、悔やまずにはいられなかった。

そんな霊の、こころを労わる様子を目の当たりにして、昂は一つの答えを導き出した。

「まさか……？ それがおまえの【戦える理由】ってやつかよ……」

霊の強さ……つまり心の、【心力】の強さ。

それは昂も理解している。だから、幼いころからたった一人で、【心蝕獣】を殲滅できるその強さの原動力が、気になっていた。

どんな理由かと思えば……たった一人の女のためだったのか、と……ある意味で失望を禁じ得なかった。

「大切な、人なんだ……ぼくの味方であり続けてくれた、とても大切な人なんだ」

去来する、過去の思い出。

あの日……自分がFランクだと分かってから、周囲の人間は自分に対する態度を反転させた。

蔑み、嫌悪し、忌み、軽視し、見下す。

それまで友達だと思っていた同年代の子供たちはおろか、その親たちまでもが、霊を蔑視した。

あの子は人間の失敗作だった。

あの子は弱い心の持ち主だった。

あの子は社会不適応者になる。

気付けば、霊のまわりは敵だらけとなっていた。【心蝕獣】に脅かされる世界のなかで、人間すらも敵になっていた。

だが、そんななかでたった一人だけ、霊ゴミに変わらず接してくれた人……それが、こころだ。

だから大切に思えた。大切にしたいと思えた。守りたいと思った。強くなりたいと、渴望した。

「戲陽さん、針村さん、こころをお願い」

昂に【心器】を破壊され、あじやらほがら はりむらそうき見ているしかなく呆然と立っていた二人……戲陽朗と針村槍姫に声をかける。

はっとなって正気にかえり、二人は慌てて霊とこころのもとへ駆け寄った。

「こころちゃん、大丈夫なの？」

「体力を消耗してるけど、大事はないと思うよ」

「御神……勝てるのか？」

「心配しないで。手はあるから……」

朗と槍姫に答えつつ、霊は昂の前に立った。

「昂……キミは、こころを傷つけようとした」

「だから【天使モード】になったってかよ？　ちゃちい理由だ……」

「おおごとぼくにとっては大事だよ。それに、キミは殺神者の決議に背いたんだ……。罰は受けてもらう」

次の瞬間、昂の身体が宙に飛ばされる。

絡み付いていた霊の糸が、昂を空へ押し上げたのだ。

だが、絡み付いていたのは8本の糸。【天使モード】となり【心力】を完全解放したとしても、それを十全に発揮できる【心器】……【殺神器】がなければ、【殺神器】を持つ自分……昂に対抗するには不十分なのだ。

そう。昂のガントレット型【心器】も、【殺神器】。霊クラスの【心力】にも耐えられる、超高性能【心器】。神を殺せる、唯一の武器だ。

昂は全身から【心力】を放出し、霊の糸を引き千切る。

「ハッ！　例え【天使モード】でも、【殺神器】を持ってるオレの方が有利だゴルー！」

だが間髪入れず、再び8本の糸が昂の左腕を絡め取る。

「だから、数で補おうと思ってる……照討くん、よろしく」

糸は指一本につき1本。つまり、両手の指を合わせれば、【心器】がなくても10本まで出力できる。

昂を絡め取っている糸は、全部で8本。

残る2本のうち一本が、昂ではない人物のところへ伸びていた。

その糸を通して霊が声をかけた人物……それは、てらうちしゅん照討準。

先程の戦いで昂に敗れはしたものの、まだ拳銃型【心器】が1丁、残っている。

殴られた部分がズキズキと痛んで起き上がれないが腕は動く。狙いを付けるだけなら問題ない。

準は地面に倒れたまま、空中にいる昂に銃口を向けた。

「うん、わかってる……撃つよっ」

引き金を引く。橙色の弾丸が、昂を襲う。

「ウゼエ！ 大人しくくたばってればいいものをつ!!」

絡め取られていない、右腕のガントレットで弾丸を弾く。

（ちいっ！ 片腕を封じられてっから、埒があかねえぞゴルア）

絶え間ない射撃に舌打ち。

しかしよく考えれば、この攻勢は長くは続かない。

準は、霊や昂と同等の【心力】を有している。であるが故に、一般の【心器】では耐えられない。

時期にオーバーヒートを起こして壊れ、戦闘不能になる。

だが、霊がそれを失念しているわけではない。

（あん？ 残る1本は、どこに通じてる……？）

そこで気付く。

本気で抵抗するつもりなら、今使える手段……10本の糸を駆使してくるはず。1本を準への連絡に使っていたとしても、残りの1本はどこにある？

気付いて、準の弾丸を捌きつつ周囲に注意を払うと……最後の1本が見えた。

その1本は訓練場の外……校舎の方へ伸びていた。

「じゃあ、止めをお願いします……凱先輩」

その校舎の屋上に、人影を見つける。

真っ赤な短髪に、黒いジャージ姿の男子生徒。

輝角きかど凱が、バズーカ型【心器】を肩に構え、そして背中に黒いバツクパツク……【心力コンデンサー】を背負って立っていた。

糸電話の理屈を応用し、凱に連絡をとって加勢に来てもらったのだ。

「ぬわぁーはっはっはっ！！ 任せておけいいいいっ！！」

【心力コンデンサー】、ち^{直結}よっけええつ!!」

背負っていた黒いバックパックが上にスライド。
肩に構えていてバズーカの後部に接続。

【心力コンデンサー】に蓄えられていた凱の膨大な【心力】が、バズーカに流れ込む。

「行くぞ!!」
^{ガイズ}規格外な青春の熱き血潮!!
^{発射}はっしゅああっ!!」

放射される、紫色の光。

膨大なエネルギーがすべてを呑み込まんと放たれ、空中に拘束されている昂に迫る。

「なっ……この【心力】は、まさか……」

「【同列存在】が3人……さすがに予想できなかったかな?」

昂の表情が、驚愕の色に染まる。

反応が遅れ、凱の放ったバズーカの光に呑み込まれてしまう。

学園の上空を蹂躪した紫色の光が、都市上空を覆うエネルギーワールドを超え、外の世界の地平線の向こうを貫いた。

「や、やったのか……」

「あれって、凱先輩の……だよな? あんなにすごい威力だったんだ……」

【心力コンデンサー】に蓄えた【心力】を一気に解放し、超ド級の
一撃をもって必殺とする、凱の戦術。

前回は霊のおかげで事無きを得たが、改めて目の当たりにした威力

は、筆舌に尽くしがたい。

正直、あの威力なら都市の一部を壊滅させることなど容易いのではないか？ と震撼した。

が、それよりもあの男……昂はどうなったのか。

光条が収束しはじめ、ようやく収まったところで空を注視する。

「……バカな。凄いだのか」

槍姫の呟きは、驚愕を表している。

その視線の先には、昂の姿が。

両腕を交差させ、防御の体勢を取っていた。全身から煙が立ち上っており、服も所々溶け破れている。

それからしばらくして、交差させていた腕が、だらんと垂れる。そして、ゆっくりと落下する昂。

地面に落下し、力なく倒れて行った。

「み、御神くん……？ やったの、かな？」

「……」

返事は、なかった。

だが、霊の代わりとばかりに響いたのは、笑い声だった。

昂の、笑い声だ。

「くっくくく……ハハハ……ヒヤハハハハ、ハッハッハッ！！」

「全然……効いてないの……」

朗の声は震えていた。

身体を大きく痙攣させ、大きな笑い声を響かせる昂。

ボロボロでありながら爆笑を続けるその光景は、どこか不気味だ。これだけのダメージを負っているながら、まるで堪えた様子を見せないのだから。

ひとしきり笑った昂は、勢いを付けて起き上がった。

「はっはっはっ……霊よお。最後に【同列存在】を見つけたのは5年前だったよなあ？　なのに、この短期間で2人も見つけたのかよ……すごいな」

昂は肩を小刻みに震わせ、手で顔を覆いながら話す。表情は分からないが……口の端は大きく吊り上がっていた。

「ただ故郷に帰って、のうのうと過ごしていたわけじゃねえってか」
「……2人を見つけられたのは偶然だった。けど、これはチャンスだ。戦力は多いに越したことはないからね」

「なるほどな……。おまえがここに留まるってのは、ある意味で合理的だわなあ」

「急いでいても、神は【同列存在】すべてを倒さないと出てこない。ならそのとき、確実に神を殺せるように準備しておくのも、悪い手段じゃないだろう？」

「フッ……いいぜえ。なら見てやるよ。あの時のおまえの言葉が、

嘘じゃねえってのをよお……」

「神は必ず殺すよ」

「その女のために、か？」

「神を殺さないと、ずっと脅おびかされたままだからね」

「わかったよ……。想像してたのと違ちがえけど、てめえの【戦える理由】を知って納得したぜ」

ここで数少ない【同列存在】である2人の戦力を鍛え上げる。
そうすれば、勝算はかなり上がるだろう。

神を確実に殺せるならば、しばらく待ってやってもいい……。そう、思うようになった。

それほどに、【同列存在】の発見は希少なものだったのだ。

「おまえは神を殺すんだよなあ。オレと同じで、自分の願いのために」

「もちろん。付け加えるなら、ぼくの願いのために、キミを仲間に取り入れたんだ。役に立ってもらうよ」

「けっ。神を殺せるならどんなことだってやってやるよ。だから、失望させんなよ？」

背を向け、そのまま跳躍する昂。

あっという間に姿が見えなくなり、あたりには静けさだけが残った。

「御神くん……。いいの？ 放っておいて……」

「うん……。まあ、もう大丈夫だと思うよ。それより、はやく学園側に状況の報告をしないと」

朗の問いに曖昧に頷き、糸を使って学園の教官たちに状況を知らせた。



昂の乱入により、戦闘学のチーム対抗戦は中止。

市街地を模した野外訓練場の被害が馬鹿にならなかったためだ。

建物の倒壊が7棟。損壊は、修復に1週間以上を要するものだけでも2桁に達していた。

行方を眩ました昂については、霊がナイトクラス権限を使って搜索の一切を止めさせていた。

理由の多くは語らなかった。

それでも、もうあのような真似はしないだろうという霊の強い進言で、昂の搜索は行われず、学園に平穏な日々が戻りつつあった。

かに、見えた。翌日までは。

「あゝ……ダリィけど転校生を紹介するぞ」

1年1組の担任、篤情竹馬教官が、いつも通り教師とは思えない態度でHRを始めた。

ガシガシと頭をかきながら、大あくびを一つかます。

しかしこんなのでも、閃羽のNO. 2ナイトクラスである。

そんな彼の隣には、2 mに届きそうな高身長の男子生徒の姿があった。

「憤激昂……昨日の一件で知ってるやつもいるだろうが、まあクラスメイトとして仲良くしてやれ」

ニヒルに笑いながら、クラスの面々に向かってそう挨拶。

「え……えええええ？！
なんでえええええ？！」

昨日の一件を中継で知っているクラスメートたちも、昂の姿に開いた口が塞がらない。

「ちよつ、なんで?! 御神くん、これはどういうことなの?!」

「ああ、そういえば言ってなかったつけ。彼はああ見えて、ぼくらと同じ年だよ」

「いや、それも結構驚きんだけど、そうじゃなくて!!
なんで転校生としてここにいるの?!!」

これは本当だ。霊だって今知った。

まあ理由はなんとなく想像が付くが、あえて口には出さなかった。

これだけ騒いでいれば、昂の耳にも入っているだろうから。

「おいおいお嬢ちゃん。昨日言っただろ？ 見ててやるってよ」

案の定、昂はが近くに来て説明した。

霊が本当に神殺しを成そうとしているのか。それを近くでみるために、転校生としてやってきたのだ。

「お、お嬢ちゃんって、同じ年なのに……」

「っていうか、お嬢ちゃんはオレとタメなんだな。どうみても小学生……よくて中学生くらいにしか見えねえ……これが生命の神秘ってやつか？」

「んなっ?! ひ、人が気にしてることをズバっと……」

「朗、落ち着け。本当のことでもな」

「ちよっ?! 槍姫ちゃん酷いっ!!」

ガヤガヤと騒がしくなる、霊の周辺。

そこに追い打ちをかけるように、篤情教官が告げた。

「んじゃあ憤激は第7チームに入れな? これで数もちょうどよくなるだろ?」

「……押し付けましたね? 篤情教官」

霊がボソッと抗議するが、篤情教官はスルーして次の連絡に入ろうとした。

が、それを遮った生徒がいた。

大和守鎖之^{おおわすさの}だった。

「待って下さい、篤情教官！ 立て続けに、このクラスに転入生などおかしいじゃないですか！！」

「そうだけだよ。まあ色々あんだよ。それに貴重な戦力にもなるって、理事長が即、許可しちゃったんだ。従うしかねえわなあ……」

「貴重な戦力だと……こいつが？」

「大和。きのう、おまえを吹っ飛ばして気絶させたのが……コイツなんだわ」

「なっ?! こいつが、あのときの乱入者?!」

昂は乱入時、あたりを吹き飛ばしながらやってきた。その時の余波で守鎖之は吹き飛ばされて気を失ったのだ。

「ふざけるなっ！ こんな訳のわからない奴を放っておくなど——」

その時の屈辱から、昂を糾弾しようとしたとき……教室のドアが勢いよく開いた。

ドアが壊れそうなほどの音が教室に響き、一人の男子生徒が顔を出す。

「憤激昂というヤツはいるかあああああっ！ 探索部にスカウトしにきてやったぞおおおお!!」

いつかのように、輝角凱^{きかどがい}は吠えた。

今年の新生は不作だと思ったが、立て続けに光るものを持つ……
というか、光っている奴が転入してきて、凱のテンションはウナギ
登りだった。

「……混沌カオスだっ」

疲れたような霊の眩きが、現状のすべてを表していた。

第27話【生きる目的と戦える理由】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛こころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。
- 戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切にしている。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー。
- 大和守鎖之——Sランクにして最年少ナイトクラスの少年。こころの幼馴染。
- 篤情竹馬——霊たちの担当教官。ズボラな性格だが閃羽のNO.2ナイトクラス。

第28話【神とその子供たち】

『大切な、人なんだ……ぼくの味方であり続けてくれた、とても大切な人なんだ』

今でも、聞き間違いかと思う。

大切と言われて、ドキリとした。
ただ幼馴染だからという理由も、あるかもしれない。

それでも、期待してしまうのは、仕方のないことだろう……。

好きな人に大切と言われるのは、嬉しいことだ。

それで両想いになれば、どんなに幸せなことだろう。

近くにいることを、我儘を言う事を許してくれているところを見ると、やはり期待してしまう。

優しく、困ったときはいつも助けてもらっていた。
身体を張って守ってくれたこともある。

周囲から疎まれ、軽蔑されようとも、自分は彼の良いところをたくさん知っている。

だから、今度は自分の番。

今はまだ無理だけど、いつか彼の隣に並んで立って、支える。

「だから……知りたい。レイくんを支えるためには、知らないことが私には多過ぎる……」

それが、純愛こころの、御神霊に対する偽らざる気持ち。

霊を連れ帰ろうとした男……ふんげき こころ憤激昂

彼は、自分に何らかの封印が施されていると言っていた。

それさえ解放すれば、霊の足手まといにならずに済む、ようなことを言っていた気がする。

そして、その封印を施したのが霊だとも、推測していたらしい。

だが……。

「けど、レイくんは私に、知って欲しくないような言い方だったな……」

霊が大和と決闘した日のこと。

あるとき、医療室で霊を治療していたとき、自分は何かを思い出そうとした。

思い出そうとして、急に気分が悪くなった。

それを、霊が治めてくれた。

そして『思い出す必要が無い』という趣旨のことを、言っていた気がする。

「レイくんは、嫌がってる。でも、どうして？」

聞いてしまいたい。

だが、聞いたときの霊の反応が、何故か怖かった。

憤激昂が模擬戦に乱入してきた翌日の朝。

まどろみのなかで、こころは一人、悶々とした朝を迎えていた……



憤激昂ふんげきこうが1年1組に転入。

同時に、探索部部長の輝角きかく凱がいが昂かえりを探索部にスカウト。

朝のHRはドタバタ劇化し、やる気の無さに定評のある篤情竹馬教あつじょうちくば官の怒りを買うという、ちょっとしたイベントが起きた。

が、凱は反省せず。

そして昂も反省せず。

「御神……あとで反省文提出」

「……何故ですか」

「おまえが悪い気がするからだ。というか、たぶんお前が原因だろ」
「……」

凱も昂も、霊へいを起点とした知り合い。

完全なとぼっちりなのだが、状況を鎮静できるのにやらないので、

篤情教官なりの頼みごとなのだろう。^{メッセージ}

思惑通り、霊が二人を締め上げて騒動は終息。

昼休みにきちんとした話し合いの場を設けることになった。



昼休み。

探索部の部室で昼御飯を食べることになった霊たち。

昂の転入により、第7チームは霊、^{そうぎ}こころ、^{ほがら}槍姫、^{じゅん}朗、^{じゅん}準、昂の6人編成となった。

その6人に加え、探索部の先輩である凱とダナンの2人。計8人で昼食を囲む。

探索部の部室は、一般の生徒たちが授業を受ける教室と同じぐらいの広さだ。

霊たちが入るまで、凱とダナンのたった2人しかいなかったというのに、これは広すぎるだろう。

ダナンが整理しているらしく、本や紙媒体の資料などはきちんと整頓されている。

中央には円形の机が設置されており、十数人は座れそうな大きさだ。

その円形の机に、各々が座って弁当を広げる。

なお、弁当を作っていない凱や昂は、学食から持って来ている。部室の裏手が食堂に直で通じているので、さほど苦勞せず持つてこれるのも、探索部の良いところだった。

「ぐおおお……痛え……。ったく、少しは手加減しやがれよ」

「クックククッ……この程度で情けないぞ、憤激昂。男なら余裕で耐えてみせ——ぐおおお……」

朝の一件で、靈に締められた昂と凱。

愚痴をこぼした昂を嘲笑った凱だったが、直後に反撃を受けて悶絶。生傷の部分を指先でビシッと指されてのことだった。

「き、貴様……」

「へっ。口ほどにもねえ——ぐおおおっ?!」

昂も反撃を受け、撃沈。

そんな二人を追い込んだ靈は、そのやり取りに構わず話しかけた。

「昂、前より【心力】の出力が上がったでしょ？ 手加減してらんなかった」

【心器】無しで【心力】を使える靈と昂。

前日は昂が【殺神器】を持っていたために、靈は圧倒された。が、【殺神器】を互いに持つていないという条件であれば、【心力】を糸状にして自在に操れる靈に軍配が上がる。

昂もかなりの実力者だが、この場合は相性の問題で霊が有利となり、ボッコボコにされる確率が高い。

霊としては昂を気絶させるつもりでやったのだが、そうならなかったが故の言葉だった。

「つたりめえだろおが。2年も経ちゃあ余裕でレベルアップしてるつつうの。ってかよ、そういうお前の方こそ、めっちゃくちゃ【心力】が強くなってるんだろ？　どういふことだよ……」

そもそも、最強最高の性能を持つ【殺神器】に対し、あれほど抵抗できたのは驚嘆すべきことだ。

例えるなら、【戦車という殺神器】に対して、【石ころという心器】で挑むようなもの。

冗談、もしくは誇張しているように思われるかもしれないが、【殺神器】と【心器】とではそれほどに性能差がある。

「さて、どうしてだろうね……」

ところで凱先輩。昂や照討くんを誘いつつ、今回の騒動に関連して聞きたいことがある……それは、ぼくらの事ですよね？」

答えを返すことはせず、霊は話を進めることにした。

ここに集まった目的。

昂と準を探索部に入部させることももちろんだが、昨日の騒動において霊たちの話しに出て来た、諸々の事を聞く目的もあった。

「うむ。貴様らの会話は、ダナンが学園の施設にハッキングを掛けて収集した、昨日の模擬戦のデータからすべて把握済みだ。俺様に

も関係あることならば、聞いておこうと思ってな」

訓練所の至るところには、監視カメラや収音マイクなどが設置されている。

それらから得られた戦闘データその他は、学園のサーバーにリアルタイムで蓄積される。

本来は学園の教師か軍関係者しか閲覧できないのだが……ダナンは凱の無茶に付き合わされているうちに、ギリギリアウトなスキルを身につけてしまったのだ。

だから……知ることができた。

霊と昂。

2人の会話とその内容が……。

「私も気になります。照討くんのときも言っていましたけど、【同列存在】って、一体何ですか？ それに、神や、殺神者……霊くんの

【心力】の翼のことも、気になります」

これまで見せられた、常識外れな霊の実力。そして昨日の戦闘。

知りたかった。知らなければ、霊のそばにいられない……そんな気がして、こころは必死に訴えた。

そんな彼女の視線に、しかし霊は即返答ができない。

どこまで教えていいのか？

いや、そもそも教えるべきでは無いのでは？

教えるにしても、【あの事】について触れないようにしなければならぬ……。

上手くいくか？

表情は変えず、心中で葛藤する。

そんな霊に、昂は溜息混じりに声を掛ける。

「まあ、なるようにしかならねえだろ？　どのみち巻き込まれることになんならよお、心構えだけでもさせておくべきじゃね？」

「うん……そうだね。じゃあ、まずは何から説明しようか……」

心構え……確かに、無用に混乱させるよりかは、今のうちに慣れてもらった方がいいのかもしれない。

とりあえず頭の中で教えるべき情報を取捨選択。

細心の注意を払いながら話を進めることにした。

「ぼくらが何者か。何に所属しているのか。それは、殺神者という……いわば傭兵集団、かな」

「殺神者……なんか物騒な名前だねえ……」

「神を殺す者……という意味か？　罰当たりだな」

朗が率直な感想を述べ、槍姫が推測を口にしながら、少々呆れたような言葉を漏らした。

なにしろ、畏怖の象徴である神を殺す、と言っているのだ。
槍姫の言うとおり、罰当たりもいいところ。

それでも、霊は苦笑しながら補足をする。

「まあ、神といっても全知全能の、お伽話に出てくるような存在じ

やないよ。実在する神……事実上、この世界の頂点に君臨する【心蝕獣】の……すべての原点」

「ゴッド……オレ達はそう呼んでいる」

霊に続いて、昂。

ゴッドという単語を口にする彼からは、憎悪が感じられた。

「ぼくたち殺神者は、【心蝕獣】の頂点に君臨する、ゴッドと呼ばれる存在を殺すことが目的なんだ」

「その神を炙り出すには、神が直接産んだ7体の【心蝕獣】……つまり【同列存在】を倒す必要があんだよ」

「ええっと、御神くん……？ 【同列存在】って、僕や凱先輩のこ
とでも、あるんだよね……？」

【同列存在】 Ⅱ 準や凱 Ⅱ 敵。

二人の口ぶりから出てくる、この【同列存在】という単語。それは完全に敵視されていた。

一瞬、ヒヤリとし、準は慌てて聞き返してしまった。

「ん？ ああ、忘れてた。えっと…… 【同列存在】には二つの意味があるんだよ」

霊の方も、説明不十分で余計な誤解を与えてしまったことに気付き、再び補足していく。

「【同列存在】は、クラスのことと表している。みんなはジェネラルクラスを含めて、5つの階級しか知らないよね？」

「はい。一番下から、ポーン、ルーク、ビショップ、ナイト……そ

してこの前に現れたジェネラルクラス、ですよね？」

確認するように、こころが聞く。

【心蝕獣】の群れとともに現れた、山のように大きな岩の巨人。ジエネラル・ゴーレム。

それまで、こころ達はナイトクラスより上があるなど知らなかった。

「うん。でもあと二つ、さらに上の階級があるんだ」

指を2本立て、言葉を続ける。

「ゴッドと呼ばれる【心蝕獣】を頂点とし、これをゴッドクラスと呼ぶ。これはゴッドそのものを指すんだ」

「ゴッドしかいねえからな」

ゴッドクラス＝ゴッドのことであり、事実上、ゴッドクラスは1体しか存在しないことになる。

「そしてさっき言った、神が直接産みだした7体の【心蝕獣】。ぼくらは皇王^{ロード}クラスと呼んでいる」

「そのロードクラスの【心蝕獣】、またはロードクラスの間人。そいつら全部をひっくるめて【同列存在】って呼んでんだ」

【同列存在】とはロードクラスの実力を持つ【心蝕獣】と人間のこと。

霊たちが倒すべき【同列存在】とは、【ロードクラスの心蝕獣】というわけだ。

「ある意味では、同じクラス同士なら【同列存在】って呼べるけど、数の少ないロードクラスにのみ、適用しているんだよ」

「ロードクラス以外ははっきりいってザコだからな。」

ま、モブキャラ共に付ける別称なんざ必要ねえってこった。笑えるよなあ……ナイトクラス程度で二つ名を授ける所もあるんだってよ。ザコの分際で身の程知らずだぜ」

「そうは言っても、知らない人にしてみれば、ナイトクラスは人類最高峰の証なんだよね……」

「井の中の蛙、大海を知らず、か……。滑稽だぜ、本当に」

鼻で笑う昂。

その笑いは嘲笑であり、無知であることは罪である、と断言するものでもあった。

「ふむ……つまり、俺様や照討もロードクラスということか？」

「ええ。その資質はあると思います。……人類側の戦力は圧倒的に少ない。なら、一騎当千……いや、一騎当億の人間を見つけ、鍛えた方が効率いいんですよ」

霊が、準と凱の2人にこだわる理由はそれだ。

すぐにやられてしまうような有象無象を手駒にするより、自分と同等の力量を持つ人間を見つけて鍛えた方が、思い通りに戦える。

実のところ、この2人が本当にロードクラス相当なのかは、まだハッキリしない。

だが少なくとも、鍛える価値はある。

ナイトクラスよりも、遥かに強い領域……自分達と同じ列に辿りつける可能性を感じていた。

「それで、ぼくの翼のことだけど。アレは【心力】で作り出した翼、っていうのは分かるよね」

次に教えるべきこと。

それは【殺神者】としての、霊たちの役割。

その切っ掛けとして、【心力の翼】を話題に出した。

「はい。ただ、霊くんが普段纏う【心力】よりも、すごく強いものを感じました。霊くんくらいになると、ああいうことも、【心力】で出来るようになるんですか？」

本来、【心力】の体外出力は、【心器】か【心装】を通してしかあり得ない。

だが、霊たちはそれら無しで【心力】を出力できる。全身に【心力】を纏い、肉体を強化。強力である彼らの【心力】に比例し、超人的な動きを可能にする。

が、【心力の翼】は肉体強化の域を逸脱している。

あの翼に触れただけで、すべてが消し飛んでしまうような威圧感を感じるので。

聞いている者を代表したこちらの質問に対し、霊は……。

「いや、できない。アレには条件があるんだ」

「条件、ですか？ それは……？」

「神を殺す兵器……【殺神器】に認めてもらい、神殺者としての高位権限を継承すること」

「【死天使】やら、【力天使】^{りよく}やらのことなんだなあ？」
「そういえば、そんな会話もしましたよね」

あの場にいなかったはずのダナンが、霊と昂の会話の内容を把握していた。

どうやら、本当にハッキングしていたらしい。

「神が産んだ7体のロードクラスには、それぞれ神から与えられた役割がある。それに対応して、殺神者も7つの【殺神器】を作り、それらを扱うものに殺神者の中心的役割を担わせることにしたんです」

「その役割を持つ者に与えられる権限の証として、例えば霊には【死天使】、オレには【力天使】^{りよく}の名が与えられているって訳だ」

「名と役割を継承すると同時に、【心力】を収束・凝縮できる能力を【殺神器】を通して与えられる。その結果が【心力】の翼なんですよ」

「ふむ……翼のことはわかった。だが今の話で疑問に思った事がある。

なぜ、神とやらは自ら動かんの？ 7体のロードクラスの役割とは、一体なんだ？」

霊たちは、ゴッドクラスを自分達の上のクラスに置いている。

ということは、ゴッドという存在は、この世界で最強であるということ。

その最強の存在が自ら動かず、配下の【心蝕獣】に役割を持たせていることが、凱は腑に落ちなかった。

「神はある目的を持っているそうです。その目的が何なのかまではわかっていません。が、それに集中するために、7体のロードクラスを生み出したそうです」

「だからこそ、そいつらをぶっ殺せば、神は自ら出てこざるを得ない。すでに3体まで倒した。残りは4体だ」

「役割については色々ややこしくなりますし、今知っても意味がないので割愛させてもらいます。まあ一つ言えるのは、神が持つ圧倒的な力の一部を、それぞれが持っている、ということです」

「神が持つ圧倒的な力？」

この質問はこころ。

だが、それは霊と昂以外の、この場の全員が知りたいことだった。

「力にも、色々種類がありますよね？ 単純な力の強さから、速さや、技術、などなど」

「つまりロードクラスとは、各々が何かに特化した能力を持っている、ということか？」

強さ、という言葉に敏感な反応を示したのは、凱だった。

「ええ、その通りです。そしてぼくらにも、特化とまではいかなく

ても、名を表した力と能力を持っています。とはいえ、それも【殺神器】あつてのものですし、後々説明していきますよ」

一息つくため、お茶をすすする。

こころの母である志乃が用意してくれたお茶だ。
口当たりがよく、霊の好みに合っていた。

「あうわゝゝゝ……色々スケールが大き過ぎて処理しきれないよゝゝゝ」

「確かに、朗の言うとおりだな……。私も追いつけん……」

朗が頭から煙を出し、槍姫が難しい顔で話を整理しようとしていた。

そんな2人に苦笑しながら、霊は手元にお茶のコップを置き、助言した。

「ぼくらは【殺神者】。【心蝕獣】の親玉を殺すという目的があり、残る4体の【同列存在】……【心蝕獣】側のロードクラスを倒す必要がある。

とりあえず、これだけ覚えてくれれば困らないかな」

話が一段落し、それぞれ本格的に昼食を食していく。

霊は相変わらず、純愛家が用意してくれた弁当。

こころとは色違いのおそろい弁当箱で、今日はご飯ものに野菜炒め系が中心だった。

学食組である凱と昂は、唐揚ランチ。

学生用に大盛りになれたごはん、5個の唐揚げにキャベツの山盛り。

そんな折、凱は部室に備え付けられている冷蔵庫から、ある物を取り出した。

それは、レモン。

半分に輪切りにされたレモンを取り出し、それを摘まんで果汁を唐揚げに掛けた。

「フッフッフッ。今日のレモンは一段と活きが良いではないか。ナン、これはどこで見つけた？」

「農業区の友人にもらった物なんだなあ。育て方を少し工夫した試作品で、今年採れた物のなかでは、一番のデキだって言ってたんだなあ」

「ほお……この果汁の色味、なんとも素晴らしい。輝いてすらいる。そしてこの酸味と香り……果汁量が多いにも関わらず、実に濃厚ではないか」

唐揚げに掛けたレモン汁。

それを頬張りながら、不敵な笑いを洩らす凱。

彼はレモン汁を掛ける派であり、大抵のものはこうした食べ方をしていた。

「おいちよつと待てやゴルァ。唐揚げにレモンだとお？」

しかし、それに待ったを掛ける人物がいた……。昂だ。

「なんだ、憤激。貴様もレモン、いるか？」

「いらねえよ！　ってか、唐揚げにレモンは邪道だろうがゴルァ！！　醤油漬けにしたものをさつと揚げて、そのまま食べんのが常識だ

!!」

「なっ！ き、貴様っ！！ レモンを侮ったなあ！！ レモンはなあ、醤油だけでは不可能な味の域に達することのできる、唯一の手段なのだぞ！！」

「バカてめえ醤油だけで十分だろおが！ レモンなんぞ加えた日にゃあ、至高なる醤油のうまみがぶっ殺されちまうぜゴルァ！！」

ギャアギャあと舌戦を繰り広げる、【同列存在】の2人。

互いに譲れぬもののため、殴り合いに発展しそうな勢いで論戦。

静かな昼食が一変、激しい味比べになってしまった。

「たははっ……憤激くんにも、こだわりってあるんだねえ……」

「戲陽さんがそう言うのも無理ないけど……。でも、昂って大体あんな感じだよ？ 好みにはうるさいんだ」

朗が、昂の意外な一面を垣間見て苦笑する。

一応の友人として、また戦友として、霊は何かフォローしようとも思ったが……結局やめた。

「まあ放っておけばいいよ。下らないことでこっちが気を揉むことはないから」

「おい霊い！！ 下らないってなんだゴルァ！！」

「そうだぞ御神！！ 貴様にはポリシーというものはないのかっ！！」

今まで言い争っていた昂と凱。

霊がボソツと漏らしたおざなりな一言を、耳聴く聞きつけた2人は、息ぴったりに彼を糾弾する。

「別に、唐揚げの味付けにそこまで拘らなくても……」

「何を言うか！ 事は唐揚げだけの問題ではないのだぞ?!」

「そうだぜゴルァ！ お前みたいに、腹に入れば何でも一緒だとか言ってる奴にゃあ分からないだろうけどなあ、食ってのは、生きる上で一番大切なことなんだよ!!」

「よくぞ言った憤激。だからこそレモンによる味付けは必要不可欠なのだ!!」

「だから醤油で味付けした唐揚げには不必要なんだって言ってんだろゴルァ!!」

再び争う凱と昂。

堂々巡りなるかと思われた。が、しかし。

徐に、凱は不敵な笑みを浮かべて席に着いた。

「よし、そこまで言うなら、この味音痴な御神に、レモン汁付きの唐揚げと醤油漬けの唐揚げ。これらを食^{しょく}させてどちらか美味いか選ばせようではないか」

「それはいいけどよ……こいつ、まともな感想なんか持たないぜ？ どっちもどっち、とか言いそうでお」

「フッフッフ……俺様に拔かりは無い。一つ、確実に感想を持たせる策がある」

「ほお……そいつはなんだよ？」

「ふっ……それはな……御神嫁!!」

「ひゃ、ひゃあい?!」

ビシッツッ! ところを指さす凱。

定番になりつつあるフレーズに、こころは顔を真っ赤にしつつも、否定せず返事をした。

「貴様、唐揚は作れるか?!」

「え、は、はい……一応、作れますけど……」

「ならば話は早いっ!

今日の放課後までに、俺様と憤激の2人は、それぞれ唐揚げ用の材料を用意する!

その材料を使って、御神に、貴様の持てる全ての技術を費やして唐揚げを用意してやるのだ!!」

「なるほど……それなら霊も、何かしらの反応はみせるってか……いいぜ、乗ってやるよ」

霊の心の内を知った昂は、それならばいけると、凱がふっ掛けて来た勝負に乗ることにした。

それに、勝算もある。

世界中、閃羽のように外縁防壁を設けて社会を形成しているところは少ない。【心蝕獣】の陰に怯えながら、深い森や谷、標高の高い山など、住むのにあまり適さない場所で暮らしているところがほとんど。

故に、閃羽のようなところでは、文明・文化が発達しており、食材

を探すのは比較的容易だ。

「今日の探索部の活動はこれで決まりだ！　ダナンっ！　学園側には、何か適当な理由でもでっち上げて受理させろ！！」

「ええ？！　そんな無茶苦茶なんだなあゝゝゝ！！」

あまりにも畑違いな活動内容を、どう誤魔化せというのか。

具体的な指示を出されず、すべてを丸投げされたダナンは悲鳴を上げた。

とはいえ、相変わらずのゆっくり口調なので、切迫した雰囲気など微塵も無かったが。

「材料はこの閃羽にあるもので構わん！　外に素材があるのならば、探索部付けで出向許可を出してもらえ！！　いいなっ！！」

「上等だあっ！　逃げんなよ輝角お！！」

「フッ、その台詞、そっくりそのまま返してくれよう！！」

こうして、凱と昂による唐揚対決が始まった。

「あの、霊くん……私、精一杯頑張って、美味しい唐揚を作りますね！」

「うん、楽しみにしてるよ。あ、それからさ……ちょっと別に頼みたい事があるんだけど……」

霊にしては珍しく、ちょっと言い辛そうに口を開く。

が、何か言葉にするまえに、こころがそれを遮った。

「分かってます！ 霊くんの好みは、昔と変わって無いんですよね？」

「うん、そう。よく分かったね」

「よく見てれば、霊くんは分かりやすいですから」

この時の2人の会話が、まさか勝負の行方を決する大事な要素である、と気付いた者は、まだ誰もいなかった。

第28話【神とその子供たち】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。
- 戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切に行っている。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー。
- ダナン・デナン——心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

第29話【価値】

唐揚げにレモン汁を掛けるか、否か。

唐揚げは醤油味に尽きるか、否か。

はっきり言って下らない事だが、本人達……輝角凱きかどがいと憤激昂ふんげきこうにとつては、世界存亡の危機にも勝る重大事らしい。

この2人はノリと勢いで、己の嗜好こそ正義であるという事を知らしめるため、勝負をすることになった。

それぞれ材料を調達し、純愛じゅんないここに唐揚げを作らせ、2人の好みの味付けをさせる。

そしてそれを、御神霊みかみくしびに食べさせ、どちらが上手いか選ばせるのだ。

「つてえ訳でだ。オレは閃羽のこと知らねえからよ、ちょっと案内してくれよ？ お嬢ちゃん」

「ぶうぶう！ 私はキミと同じ年だよ！ ちゃんと戲陽朗あじやらび ぽがらって名前があるんだから、名前で呼んでよ！！」

はじめてあった時以来、昂は朗をお嬢ちゃん扱いしている。

まあ、背の低さと言動が相まって、年下に見えてしまうので仕方がないのだが。

「わかったわかった。だからさっさと案内しろよ。放課後までに集

めなきゃならねえからよ!」

「ちよっ!?! 　なんで担ぐの?! 　やだ、スカートの中、見えちゃうよ!?!」

ひよい、と朗を肩に担ぐ昂。

2 m近い身長を誇る彼に担がればかなりの高さになる。小柄な朗であれば、それは尚更。

「裾は抑えてやってんだ文句言うな! 　それより朗、喋んな! 　舌噛むぞ!!!」

「いきなり呼び捨て?! 　――って、うっきゃあああああ!?! 　飛んでるうううう?!」

校庭に出た昂は、朗を担いだまま跳躍。

【心力】を全身に纏って身体能力を強化した昂は、あっという間に建物の上を飛び交い、商業区の街並みへ向かって行った。

一方そのころ、凱はというと……。

「フッフッフツ……地の利は我に有り。

最高なるレモンと、その酸味を究極に引き上げる香辛料……胡椒。こしよう

閃羽で最高のものが揃う場所を、彼奴は知るまいて……フハハハハッ!!!」

霊とところを連れ、悠々と廊下を歩いているところだった。

何やらセコイことを言っているが、あながち間違いでもないのも突っ込まない。

「こころ、農業区の拡張ってどのくらいされてるの?」

「霊くんが出て行ったあとのことですよ。たしかここ10年で、地下へ2階層分拡張したって言ってました」

世界中を見てきた霊からしても、閃羽は大規模な土地を有している。それでも人が、防壁の内側という限られたスペースでしか暮らせない以上、拡張の手段は地下へと伸ばすという選択肢しかない。

人工疑似太陽という、太陽光線を人工的に生み出す照明のおかげで、地下であっても農作物は育つので妥当。

おまけに、【心蝕獣】には地下で活動するようなタイプは確認されていない。今のところは。

だから人類が今以上に発展する方法は、地下施設の拡張という手段が定石だった。

「先輩はその農場区へ行くつもりですか？」

「そうだ。ダナンの話しによれば、最下層の地下6階で、先ほどのレモンを育てた人物がいるとのこと。そいつのもとへ行く」

ダナンが持ってきたというレモンを甚く^{いた}気に入った凱は、再び件のレモンを手に入れるため向かうとのこと。

霊が付いてきている理由だが、自分がいない間にどの程度発展したか見るため。

こころは霊が行くなら、ということで付いてきた。

「……むっ」

しばらく3人で歩いていると、向こう側から1人の男子生徒がやってきた。

その生徒を見て、凱の顔が曇る。

「おやおやこれは。輝角くん。今日は珍しく部活動かい？」

「珍しいとは聞き捨てならんな。俺様は毎日部活動に励んでいるぞ、さすが貫名生徒会長」

さすが貫名一聡。

メガネを掛けた長身の優男。制服をきっちり着こなしており、第一ボタンまでしっかり止めている。

几帳面そうな風体だが、薄く笑うその様はインテリ系。

凱が言ったように、心皇学園の生徒会長である。

「毎日問題を起こしている、の間違いではないかな？」

「ふん。俺様の崇高なる行動が、凡人には理解できないだけだ」

「ふふっ……そうだろうね。Dランクのような低能な人間のやることなど、ぼくらのようなSランクの人間には理解できないよ」

くすくすと口に手を当て、遠慮がちに笑う一聡。

だがその目を見れば、遠慮とは程遠い感情を持っているのが分かる。明らかに、凱を見下していた。

今まで誰も触れてこなかったが、凱のランクはD。

下から3番目に低い。

「そうだよね。純愛ころろさん」

同意を得るように、こころへ声を掛ける。

突然話を振られたところは戸惑う。が、その間にも一聡は話を進めた。

「純愛さん。キミには感服しますよ。このような低能な輩と付き合っているのだから。Sランクという崇高なる心を持っているだけがあります」

ランクが高い⇨強い心の持ち主。

強靱で清廉。どのような状況下でも己を見失わない、常に自己を律することのできる立派な人間。

Sランクの人間に対する一般的な認識はそれだ。

「しかし、あなたがいくら誠心誠意、彼らに接しても、所詮彼らは低能。こちらの心遣いに応える気など、毛頭ないのですよ。どうです？ あなたのような人が、彼らのような低能な人間のそばにいる事などありません。我ら生徒会の一員になりませんか？」

こころに対し、手を差し出す一聡。

だがこころは、首を振ってそれを拒んだ。

「貫名生徒会長……私は、ランクが人間の価値のすべてを測っているとは思えません。低ランクでも、良い人はたくさんいます。むしろ、低ランクだからと見下すような態度をとる人の方を、私は軽蔑します」

霊にしろ、準にしろ、Fランクと言う最低最悪の烙印を押されている彼らは、多少変わっているかもしれないが、付き合える人間だ。特に霊は、心が弱いと言われるFランクであるにも関わらず、ナイトクラスのはるか上……ロードクラスの【心力】と実力を持っている。

昔から疑問に思っていたのだ。

ランクは、本当に人の心の優劣を決定づけるものなのか、と……。

その疑問を、はっきりとSランクの人間にぶつけた形だった。

「ふむ……キミの気持ちは、そこにいるFランク……御神霊の存在があるから、ですかね？」

ちらっ、と霊をみやる。

その目は、凱を見ていたとき以上に冷たいもの。嫌悪感を隠そうともしない、これでもかというほど侮蔑の籠った視線だった。

「キミのランク査定における診断結果を見せてもらったことがあります。驚きましたよ……まったく【心量計】に反応がない」

ランク査定における診断……それは【心量計】という特殊な機械を使って、心を診断するということ。

【心力】は心の強さに比例すると考えられており、【心量計】を使って検査する。

それは地震計のように振れ幅となって記録される。

この振れ幅が大きく、なお且つ周期が短ければ【心力】が強い……つまり、心が強いとされる。

振幅の大きさと周期の短さ。これらを総合し、ある段階ごとに区切ってランクを決めているのだ。

「Fランクでも多少の反応はあるというのに……キミはFランクのなかでも最低の最低なのかな？　まるで死人かなって思ったよ」

一聡が言った反応がない、というのは、まったく振幅がない状態。寝ている人間を検査しても反応はあるが、死体を検査した場合は反応がない。

死人という言葉を口にしたのは、霊の検査反応が死体を検査したときと同じであるということだ。

「おい貴様、それはいささか口が過ぎると思わんか？」

「キミはSランクの人間に対して口が過ぎると思ないのかい？ まあいい。ぼくはね、事実をありのままに表現しただけだよ。御神くんの心は死人も同然。それでよく、ナイトクラスのおおわすきの大和守鎖之くんを倒せたものだね？ 本当に薬とか使ってないのかい？」

「キサマ……」

怒りも露わに、掴みかかろうとする凱。だがそんな彼を、霊が止めた。

「御神、止めてくれるなっ！」

「先輩、この人を相手にしても、得られるものなんてありませんよ。部活動をしていた方がまだマシです」

「へえ、言うね。Fランクのゴミくずにしては、なかなかユーモラスな言い回しだ。まるでぼくなど、歯牙にもかける必要が無いと言っているようだ」

互いに刺々しい応酬。

だが、一聡は生徒会長をしているだけあって激昂するようなことはなかった。

「どう解釈して頂いても構いません。ぼくらのようなゴミくずの言

葉など、聞く必要は無いでしょう？」

「ふうん……口だけは一人前か。一つ良い事を教えてあげよう」

一歩前出る一聡。

自分より頭一つ分ほど背の低い霊を見下ろしながら、冷めた口調投げかける。

「ぼくらは真剣に、【心蝕獣】に抗うための術を学^{すべ}んでいる。生半可な覚悟でここにいるなら、いますぐ、退学することだ」

「生半可、ですか。今はじめて会ったというのに、分かったようなことを言いますね」

「キミに限ったことじゃない。Fランクの人間すべてに言えることだ。気弱で軟弱、且つ意気地の無い心しか持たないのに、どうして戦えるって言うんだい？ 戦場は過酷だよ。死の危険に晒されて、己を律することが、キミらに出来るとは思えない。スラムになるところを見てみなよ。あそこに住んでいるFランクの人間の、なんと醜く情けないことか……。生きることを放棄しているのに、死にたくないだなんて……。虫唾が走る」

最後は吐き捨てるように言った。

Fランク。

彼らがただ弱いだけの存在なら、こうまで悪感情を抱くことはなかっただろう。

彼らは自己中心的。自分のことだけしか考えられない。生きることを諦めているのに、死にたくないと言う。

結局、自分の力で生きようとしなない人間が、あのスラム街には溜ま

っていた。

一聡には、それがどうしても許せないのだった。

「生き恥を晒して生きることには抵抗感が無いようだけど、見ている側にとっては不快なものでしかない。そのことを理解することだ」

そう言って、一聡は霊たちの前から去っていった。

「ふんっ。相変わらずいい好かんヤツだ。御神、気にすることは無い……むっ、どうした？ 御神嫁」

去っていく一聡の後ろ姿を見ながら、凱は鼻を鳴らす。
その直後、こころの様子がおかしいことに気付いた。

目は大きく見開かれ、体を震わせ、呼吸を大きく乱していた。

「死体……？ ちがう……レイくんは、死んで無い……死体になんか、なってない……違うっ、違うのっ！！」

「どうした?! 御神嫁!!」

いきなり錯乱しはじめるこころ。

頭を抑え、否定の言葉を何度も発する。

「こころ、大丈夫だよ。あの人の言うことを、気にする必要は無いから……」

そんなこころを、霊は胸に抱き寄せ、その頭に手を乗せる。

その手は青く淡い光を放っていた。【心力】を手に集中しているの

だ。

「御神、これはどういうことだ？」

「昨日、昂が余計なことをしたから、記憶に掛けていた封印が外れかかっているんですね。今、封印し直しているところです」

「記憶に、封印？　どういうことだ？　というか貴様、そんなことまで出来るのか？」

「いえ、ぼくができるのは、【心力】によって封印の強度を補強するだけです。心に鍵を掛け、特定の記憶を封じる術は、ぼくのおじいちゃんがやったことなんです。」

霊の祖父、御神弦斎。
みかみ げんさい

彼は【心力】の扱いに長けていた。世界中を見て回った霊も、彼以上の使い手は『1人』しかいなかった。

【心力】は心の力。【心器】などの特殊な道具でも無い限り、直接使うことはできない。

しかし霊をはじめとしたロードクラスの間人は違う。直接操ることが可能であり、使い方によっては相手の心に干渉して一部の感情を抑えつけるようなこともできる。

弦斎は、こころの感情の一部……霊の死にまつわる【動揺】の感情を抑制し、同時にその感情の切っ掛けとなる記憶を封印することに成功した。

もつともこれは、こころがまだ幼かったからできたこと。

成人した人に干渉しようとも、自我が形成された状態では不可能だ。自我が完全に形成される前の、幼子の段階でしか、干渉することはできない。

「先輩、こころにはこのこと、話さないでくれますか？ 封じていた記憶を刺激すれば、こころは壊れてしまうかもしれない……」
「それはつまり、記憶を封じねばならんほど、過去にトラウマがあるということか？」

少し考えたあと、霊は頷き、凱の推測を肯定した。

「今見たとおり、こころはぼくに関連する『死』という言葉に、過剰反応してしまいます。あの生徒会長が、ぼくを死人と同じだと言ったことは、あながち間違いではありません。だから、こころの記憶を刺激してしまう」

こころの頭に置いていた霊の手から、光が消える。

封印の補強が完了したのだ。

「再度封印し直したので、もう大丈夫だと思います。ただ、なるべく刺激したくは無いので……」

「ふむ……些か非常識で信じ難い話ではあるが……承知した。しかし、御神。自分を【死人】だなどと、卑下する必要はない。貫名の言ったことなど――」

「いえ。ぼくは、ただ心臓が動いているだけの人間にしか過ぎません。だから、心量計が反応しなかった……」

凱の言葉を遮り、霊は平坦な口調で言葉をかぶせた。

格好付けてる訳でも、自虐思考に陥っているわけでもない。事実をありのままに言っている。そう思わせる雰囲気だった。

「御神……どういふことだ……。もしお前が本当に死体だとして、なぜあれほどの【心力】を有している？」

「……先輩たちは、【心力】の強さ……。心の強さの意味を履き違えています。だから、ぼくらの【心力】を理解できない」

こころを背負って歩き出しながら、霊は静かに語りだした……。



時は移り、放課後。

閃羽で最高の醤油を探し求めていた昂と朗は、都市の外に出ていた。

現在地は、閃羽から少し離れたところにある森。

荒野のなかに存在する、貴重な自然環境だ。

「この森に自生している大豆があるって話だけどよお……。具体的な場所ってどこだよゴルァ？」

醤油の原料の一つ、大豆。

朗の案内で訪れた醸造所は、農場区で採れた大豆を主原料としている。が、何割かは自生している大豆を使っているとのこと。

天然物を何割か混ぜることで独特の風味が生まれるらしい。

だが、数日前に【心蝕獣】の大群が襲ってきた影響で警戒態勢が敷かれたままで採取にいけない。

そろそろ今年の分の醸造に取りかからねばならないのだが、都市から許可が下りないのだ。

それを聞いた昂は、自分が代わりに採取してやるからタダで醤油よこせゴルァ、的なことを言い、朗を担いだまま都市の外へ出て来たのだ。

ちなみに、都市の門を通って来た訳ではない。

いつだったか、霊がしたように、都市の上空を覆うエネルギーフィールドを突き破って出て来たのだ。

「ねえ……いい加減降ろしてよお……ずっと担がれたままって、どんな羞恥プレイなの……」

「あ？ 別にいいけどよお……てめえオレに付いてこれねえだろ？ 置いてくぞ？」

「うっ……うう……御神くんといい、憤激くんといい、なんでこんなチートな人がいるのお……」

「っていうか！ 私、外にまで一緒に行くなんて言っていないよ?! 勝手に連れて来てその言い草はどうなの?!」

「オレ、ここの土地勘ねえからよ、案内が必要な訳よ。ちよいと考えれば分かんだろ？」

「私だっていないよ!! 生まれてこの方、ずっと閃羽の中で暮らしてたんだよ?! 最近になって一回だけ、チームの皆で素材を採るのにちよっと旧鉾山へ行っただくらいなのに!!」

「あ？ それマジか？ どんな引き籠もりだよマジ使エネ〜」
「都市の中に居続けるのを引き籠もりって言わないよ！！」

二人の言い分は、育ってきた環境によって違いが生じている。

昂は、殺神者に引き取られて以降、ずっと外の世界で修業に明け暮れていた。

そのため、一か所に留まることなどせず、【心蝕獣】が横行する死の世界を渡り歩くことを常としていた。

都市のなかは安全地帯。一時的な休憩所。その程度の認識。

故に、昂にとって外に出た事がないという朗の境遇は、家の中から出たことがない、という感覚と同じに感じるのだ。

対して朗は、というか朗を含めた一般の人間は、都市の外に一度も出ないで生を終えることなどザラにある。

【心兵】のように【心蝕獣】を撃退するために外へ出る事はあっても、それは都市の生活圏の範囲に収まる。

商人のような都市間を行き来する場合もあるが、それは極稀。

都市が世界の全てであるのだ。世界の外は、異世界。死の危険に満ちた異世界も同然。

都市の外……遠く離れて旅をするようなことなど、考えも付かないのだ。

「はあ……本当にもう……。こんなに非常識なのに、どうして【心力】が強いのかなあ。憤激くんにいたってはデリカシーの欠片もないし、粗野だし、乱暴だし。心が強いとか、絶対ありえないし」

「あ？ 粗野で乱暴だと心が強くないってか？ おまえら、心の強さの意味を履き違えてやがんのな。だからポークラス程度のザコ

に喰われちまうんだよ」

「え？ なに、それ？ どういうこと？」

「聖人君子みたいな奴ほど【心力】が……心が強いとか思ってたんだろ？ それ、恥ずかしいくらいに間違ってたやがるぜゴルァ」

肩を震わせ失笑する昂。

はつきりいって、感に触る笑い方だった。
バカにしているのが直で伝わってくるから。

「ちょっとなによ！ 感じ悪いなあ……」

「口で説明するより、実践してやるよ」

昂の視線の先。

そこには、3体の獣がいた。【心蝕獣】だ。

四足歩行で狼に酷似した姿から、ルーククラスであることが予想される。

ポーンクラスの一つ上。まだ訓練中の朗では勝てない相手だ。

「聖人君子とは間逆なやり方……残虐なやり方で、あいづらをぶっ殺してやるよ」

昂の口の端が、鋭利につり上がるのが分かった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

10／3…追記

作中、霊たちのランクが間違えて【E】となっていましたので修正しました。

本来は【F】ランクです。

混乱してしまったら申し訳ありません。> (|) <

なお、凱のランクはそのまま【D】ランクです。

第29話【価値】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー。
1。

●貫名一聡——心皇学園の生徒会長。長身のインテリ眼鏡。S
ランク。

第30話「二人の愚者と、百人の賢者」(前書き)

＊残酷&不快な描写注意

第30話【二人の愚者と、百人の賢者】

——心の強さ。それは一般的に言って、正のイメージがあると思います——

——愛と勇気と優しさ。素直で穏やか。物事をプラスに考えられる柔軟性——

——Sランクの人ほど、これらの要素を強く持つ傾向にあります——

——ですがそれは、一面的な見方でしかありません——

——俗っぽく言えば、マイナス面の心でも……場合によっては強い力となります——

聖人君子とは間逆……残虐なやり方で、【心蝕獣】を殺す。

昂は、それで自分の【心力】の強さ……心の強さを証明すると言う。

「朗、テメエはあそこの木の上にでも座って見てろ」
「へ？　って、うっきやああああ？！」

昂は、唐突に朗を放りあげる。
悲鳴を上げながらも、昂のコントロールが絶妙だったのか、座るの

に十分な太さの枝に着地することができた。

「ちょ、ちょっ、ちょっと!!　せめて一声かけてよ!!　びっくりするじゃない!!」

枝に座りながらも木の幹にしがみ付き、抗議の声を張り上げる。

「かけたろ。そこに座ってろって」

「投げるなんて聞いてないっ!!」

「察しろよ」

「な、なん……なんで、自分が悪いって、欠片も、思わない、かなあ……?」

間髪入れずに即答してくる昂に、怒りを隠しきれない様子の朗。睨みつけるも、すでに昂は【心蝕獣】に視線を向けており、朗を見ていなかった。

「いいか?　手は出すなよ。オレがどんな戦い方をしてもな。手を出したら……テメェでも殺す」

緑色のガントレット型【心器】……否、【殺神器】を両腕に装着。そして全身から緑色の【心力】を放出し、万全な戦闘態勢をとる。

「朗、よく見ておけよ?　強い力とは、強い【心力】とは、強い心とは何かってのをな」

——昂を例に挙げるのが、一番分かりやすいでしょうか——

——彼が【心蝕獣】と戦う目的。彼が戦える理由……それは……

口の端を釣り上げ、凶暴な笑みを見せる昂。

そんな彼に向ってくるのは、3体の【心蝕獣】。

狼に近い外見を持った四足歩行の獣型。ポーンクラスの一つ上。下から2番目のルーククラス。

一般的には、ルークウルフ、と呼ばれる。

側頭部に三対六つの複眼を持ち、鋭い牙をのぞかせて獲物に食らいつこうとしている。

が、昂は向こうが襲ってくるのを待つほど、気の長い男ではなかった。

「行くぜえ……一匹残らず——ぶっ殺してやる
よゴルァ！！！」

——すべての【心蝕獣】を、残らず殲滅することです——

前に飛び出す昂。

踏み込みが強烈だったのか、土煙が盛大に上がる。

瞬く間に3体のルークウルフに肉薄。

一番大きい真ん中の個体の喉元を掴み、真上へ、空高く放りあげた。

「下りてくるまでに、つとな!!」

次いで、2番目に大きい個体に狙いを定め、その頭を足で踏みつける。

「アレが父親で、てめえが母親だろうなあ? んで、この1番小さいのが、テメェらのガキってところか」

踏みつけている個体を助けようと、1番小さい個体が昂に襲いかかる。

しかし喉元を鷲掴みにし、動きを拘束した。

「どうしたあ? 早くオレの足を退かして掛かって来いよ。テメェのガキが窒息しちまうぜえ?」

昂は、掴む手の握力を徐々に大きくしている。

1番小さいルークウルフの個体は、息ができずに口から泡を吹いていた。

「グルルルッ! グウアアアッ」

「ハッ! テメェのガキが死にそうなんだ。もっと力入れろや」

昂が母親と断定したルークウルフは、我が子を助けようと必死に昂の足下でもがく。

だが、昂の【心力】の前に、母ウルフは無力だった。

どんなに暴れても、昂の足を退けることが出来ないうた。

——ただ殲滅するだけではありません。より残酷なやり方で殺すこと——

——おおよそ考えうる限りの、ありとあらゆる残虐非道なやり方——

——【心蝕獣】に惨たらしい死を。それが昂の戦える理由です——

「それとも、こうしたらもっと力が入るかあ？」

昂は、空いている片腕を子ウルフの胴体にかけていき、掴む。そして、引っ張る。

首と胴体を引き千切ろうとしているのだ。

「ガアアアアア！！」

「オラオラァ……ガキの首が、千切れちまうぜえ？」

母ウルフが一層暴れる。

そんな様子を嘲笑う昂は、さらに力を入れ……ついに子ウルフを引き千切った。

千切れた首元から大量の血飛沫が噴出。

それは昂と、母ウルフに降り注ぎ、その場の全てを赤く染め上げた。

「ギャハハハッ！！　ざあくんねえくんでえくしたあく！　テメエのガキは首と胴体がお別れしたので死にましたってよお！！」

肩を大きく震わせ、下卑た笑い声を張り上げる。

その目は狂気に満ちていて、残酷な仕打ちを楽しんでいるのがわかる。

正常な人間とは思えない、狂気の狂喜。

血に染まりながら笑い続ける昂を、朗は怯えながら見ていた。

「な、なんで……あんな残酷なこと、できるの……？　狂ってる……狂ってるのに、なんなの？　あの【心力】の強さは……」

霊や昂、準、凱といった者たちの所為で忘れ勝ちになるが、ルーククラスの【心蝕獣】に一对一で戦えるような人は少ない。

ほとんどの人間はポーンクラスを相手にするのが精一杯であり、ルーククラスは小隊長並みの実力がなければ難しい。

昼休みの一件で、霊や昂がロードクラスという、一般の常識からかけ離れた存在だということとは説明された。

だが実感が湧かない。

この残虐非道な行いを見て、なおさら疑問に思う。

一般的に言われる、心の強さ。

それは正義を重んじ、道徳を重んじ、義を重んじる、等々の人として正しいものを持つことが必須だと教えられている。

だから、こんなやり方をする昂の心が強いはずはない。

ほとんどの人間が数に任せてようやく倒せるルーククラスを、単独で圧倒できるはずがない。

だが……現実はどうか。

昂は残虐な戦い方をし、それに狂喜しているというのに、3体のルーククラスを屠りつつあった。

「さてさて……次はテメエだ。そういやあ、最初に放り投げたヤツはどの辺にいるかねえ？」

1番大きい個体……便宜上、父ウルフとする個体は、未だ落下の最中だった。

「はっはっはっ。早く落ちてこねえと、テメエの女も死ぬぜえ？ オレは待ってやるほど気い長くねえから、よお！！」

踏みつけている母ウルフを蹴り上げ、次いで、殴る。

「テメエが落ちるのが先か、テメエの女が死ぬのが先か、どっちだろおなあ？！」

地面に這い蹲らせ、一方的に殴り続ける昂。

殴る度に、牙がへし折れ、骨格が碎け、血が噴き出す。

無論、すべて母ウルフのモノだ。

「ガアアアアアー！！」

「吠えてばっかで何もできてねえなあ？ 殺すぜえ？ 殺すぜ殺すぜ殺すぜえええええ！？」

昂は狂った笑いを続けながら殴りまくった。
一撃入るたびに、母ウルフの命が確実に潰されていく。

「もうちょっとかあ？　もうちょっとだなあ！？　でもよお……」

真上から落ちてくる父ウルフを見上げ、狂気の冷笑を向ける。

それからゆっくりと拳を振り上げ、

「もう間に合わねえよお！！」

振り下ろす。

【心力】を纏ったガントレットが、母ウルフの頭を潰し散らした。
内蔵物が血液とともに飛び散り、地面にぶちまけられる。

直後、父ウルフが吠えた。

怒りの咆哮。

目を血走らせ、牙を剥き出しにし、落下先の昂へすべての憎悪をぶつける。

「憎いかよ？　オレが。テメエの家族殺したオレが憎いかよ？　どれくらい憎いんだ？　オレを殺したくらい憎いかよ？」

口の端を上げながら笑う昂は、挑発するように問いかける。

それに応えるかのように、父ウルフが一層吠える。

——昂は5年前、故郷と自分の家族を【心蝕獣】によって滅ぼされました——

——それも……目の前で——

——そしてぼくは、その事実を突き付けました——

——そうすることで【心蝕獣】に対する昂の憎しみを増幅させられると思ったからです——

——思惑通り、憎悪と復讐心に取り憑かれた昂は、負の感情を原動力とし……——

「そうかよおオレが憎いかよお……。けどなあ、オレの憎しみの方が——」

肉薄する、昂の狂眼と父ウルフの牙。

「ずっと強いんだよゴルアアアア
アッ！！！」

昂の【心力】が、右腕のガントレットに集中する。

激しく明滅するその【心力】は、昂の長身を覆い隠しそうになるほど、大きい。

大量のエネルギーに変換された昂の【心力】は、ガントレットを通して周囲に吹き荒れる。

ただ集中するだけで風を起こし、周囲を吹き飛ばし、相手を威圧する。

ガントレット天に向かって突き上げ、静止状態のエネルギーを運動状態へ。

——膨大な【心力】を発揮するに至りました——

「う お お お お お ら あ あ あ あ あ
っ ！ ！ 」

緑色の光を纏ったガントレットが、父ウルフを殴りあげる。

膨大な【心力】を叩きこまれた父ウルフは、跡形も無く爆散霧消。
それでもなお、昂の【心力】は光柱となって天を貫き、昼間の森を照らした。

「はっはっはっ……ははははっ……ギャーハッハッハッハハハ
ハハハハッ！ 」

天を仰ぎ、大声をあげて笑う昂。

血に染まったその体が震えるたびに、赤い液体が滴り落ちる。

「ああ……スカッとしたぜえ……。昨日は不完全燃焼だったから

よお。はっはっはっはっ」

ひとしき
一頻り笑った後、ゆっくり息を吐きながら呟く。

霊との戦いは決着付かずで、スッキリしなかった。

その結果をよしとしたのは昂自身ではあるが、燻ぶる思いを消火で
きずにいたのは確かだ。

——憎悪……復讐……それらは確かに原動力となるであろうな……

……

——だがなぜ一般的に言われているものと間逆の心で、貴様らは
あれほどの【心力】を生み出せるのだ？——

——心の力を物理エネルギーに変換する。それもまた、一面的な
見方ではありません——

——【心器】を通して生み出したエネルギー。その指向を決定づ
けるのは、人の心です——

——【心蝕獣】に復讐しようとする心。【心蝕獣】を殺そうとす
る心——

——その感情が強いほど【心力】は強くなり、【心蝕獣】を殺す
ために変換されるエネルギーは大きくなります——

——普通の人でも、戦いになれば相手を殺すために感情を昂ぶら
せますよね？——

——それはつまり、【心力】による【心器】の殺傷力増加を意味します——

しばらくして、昂は歩き出す。朗を回収するためだ。

「よお朗。どうだったあ？ オレの【心力】が、戦い方が、聖人君子さまに見えたかよお？」

挑発するような問いかけ。

それは、朗のような一般人が抱く【心力】の強さ、心の在り方を否定するための、嘲笑だった。

「い、いくら【心蝕獣】が相手でも、あんな酷いやり方って、ないよ……」

【心蝕獣】は人類の敵。

確かにそうだが、朗は迷うように言う。

倒すなら一思いに。残虐に殺すことなど、無いと思っているから……。

「酷い？ オレがあ？ じゃあアイツ等【心蝕獣】が、人間にしていることは酷くないのかよお？」

「そ、それは……」

座学のことだが、【心蝕獣】の喰い方を教えられたことがある。

クラスや種類によって違うが、人の心を喰らおうとするとき、恐怖

するようわざと追い詰めるとのこと。

その方が人の心の負の面が活性し、【心蝕獣】にとって最高の栄養源になる。

「アイツ等にとって人間を喰うことは、人間が家畜を殺して料理し、胃に収めるのと同じことなんだよ。

だがなあ、オレ等は家畜じゃねえ。家畜と違って遥かに複雑な感情を持ってんだよお。

身内殺されりゃあ、怒りもする。復讐しようとする。そして、より残酷な方法で復讐しようとする。

それがオレの生き甲斐だっ！！ 家族のっ！ 故郷を滅ぼされたことへのっ！！ 私怨による復讐！！

オレの戦える理由だっ！ オレの【心力】の原動力！ 強さの源だ！！」

———守るために相手を殺す———

———しかし昂は、復讐するために相手を殺す———

———動機の違い。ですがどちらも最終的な【心力】の指向エネルギーは殺しです———

「優しい心で【心蝕獣】を殺せるかあ？！

慈悲の心で殺せるかあ？！

慈悲で奴らを殺せるかあ？！

綺麗事並べりゃあ、ぶっ殺せるのかあ？！」

——出せる指向は同じ。では、より大きなエネルギーを出せる要因とは何か？——

——それは強い感情です——

——相手を殺すという感情が大きければ大きいほど、【心力】は強大になります——

「違うなあ！！ 憎いから殺せる！ 怒りを感じるから殺せる！ 嫌いだから殺せるっ！！」

だから【心力】の攻撃エネルギーが高まる！！ オレのこの、私怨に満ちた心を原動力にしてなあ！！」

——簡単に言いましょう——

——ぼくらのような人間を簡潔に表す言葉です。それは……——
「納得いかねえか？ なら、納得のいくシンプルな表現をしてやるよ。それはなあ……」

『愚者一人いれば、賢者百人分の働きをする』

——要は、結果を出すためにどれだけ【執着】できるか——

——それが【心力】の強弱を決める、決定的な要因なんです——

「【心蝕獣】に復讐を考えているオレの方が、安っぽい正義感で戦ってるテメェらより、強い感情を引き出せるのは当たり前だあ！」

強い感情を引き出せるってことは、そのまま【心力】の強弱に影響するからなあっ!!」

「で、でも……【心蝕獣】にはそれでいいとして、じゃあ、人間が相手でも？ 憤激くんは、人間が相手でも復讐をするの？」

「当たり前だろおが。なんでオレだけやられっぱなしで黙ってなきやいけねえんだゴルア？」

「皆殺しにするまで、残虐なやり方をするの？ でもそれじゃあ、きつと新たな憎しみを持つ人が生まれるだけだよ……」

その人を殺したことで、昂くんが恨まれるかもしれないの？ それじゃあ永遠に復讐は終わらないよ……」

「ああ、分かるぜえその理屈。オレが一人の人間を殺せば、殺したそいつの親しい奴がオレに憎悪を抱くってんだろ？」

「それに、復讐したって虚しいだけだよ……。亡くなった人は、帰ってこないんだよ？」

「そう！ それだよ！ それなんだよっ!!」

弾かれた様に声を張り上げ、朗を指さす昂。

「虚しいと感ずるために復讐すんだ！ 生き返りはしないってことを認識するために復讐するんだよ！！」

昂とて、通り一辺倒の理屈を知っている。理解している。

「でなけりゃあ、オレは家族を、故郷を滅ぼされたってことを認識できねえ！！」

前に進むことも、立ち止まることも、顧みる事も、思い出を思い返すこともできねえんだよ！！」

だが納得はしていない。

理不尽に奪われた家族を、故郷のことを。

納得、できていない。

「復讐したって虚しいだけのな分かり切ってんだよ！ それを実感するために復讐すんだよ！！」

死んだ人間は生き返らない？ 分かり切ってんだよ！ それを認めるために復讐すんだよ！！」

復讐を遂げることで、はじめて昂は悲劇と向き合える。

そう考えていた。

いや、そうとしか考えられずにいた。

「……へっ。まあアレだ。失った者にしかわかんねえ、なんて常套句は言わねえよ。ただ、オレが今言ったことはすべて本心だ。復讐の連鎖を断ち切る気なんかねえんだよ。それを止めたきゃ、否定したけりゃあ、力尽くで来い。オレの私怨よりも、【強い心】を持つ

て、オレを止めればいいんだよ……止められるならなあ？

言っておくが、オレは1人で賢者1億人分の働きはするぜえ？」

「……」

昂の挑発に対し、朗は今度こそ何も返せなかった。

聖人君子……清水のごとく澄み切った水でも、昂のような復讐者……煮え滾ったマグマを、鎮めることなどできない。

止められる気がしなかったのだ。

少なくとも、今の自分の【心】では……。



気を失ってしまったところ。

彼女を背負って医療室まで運ぶ道すがら、霊は凱に、【心力】について説明を続けていた。

「マイナス面の心でも、強い【心力】を出せる……。その理屈は分かった。ならばなぜ、プラスのイメージで無ければ強い【心力】を出せないという考えが広まったのだ？」

霊がどんなに強さを示しても、まわりのほとんどが納得しない。

それは、霊がFランクだから。

例えば、だ。

糖度1と出ている果物を食べたでしょう。そしてそれが、糖度10の果物より甘く感じた……。

検査機に問題は無い。すべて同じ結果を示す。なのに、糖度10よりも糖度1の果物の方が甘い。

その話を、誰が信じようか？

「それもまた、見方によっては真実だからです。そしてその方が都合が良かったんですよ」

「都合？」

「物事をプラスに考えられる柔軟な思考と心。そうであれば、いざ戦おうというとき、即座に【戦う気】になれます。そうすることで【心器】に伝達されるエネルギーの指向は、攻撃的になりますからね……」

「ふむ……確かに怯えていては、【心器】の威力は下がると聞くな……」

「ランクが高ければ良いというのは、思考の切り替えがスムーズにいくから。もっといえば、高ランク者ほど思考の切り替えが早く、柔軟性に富むため上手くいくんです」

そこで霊は、何かを思い出したかのように口を開け、言葉を続けた。

「ああ、それと……大和くんのように、自分の都合の良いように物事を解釈できる。それもまた、Sランクの柔軟性といえます。」

おおわ すきの
大和守鎖之。

彼もまたSランクであり、閃羽最年少のNo.5ナイトクラス。

守鎖之が低ランクの霊に負けたとき、霊が薬物強化していると疑った。

負けるはずのない相手に負けた……という事実を正当化する、自己解釈の産物だと言う。

「無論、Sランクとして本当に聖人君子のような人もいます。ただ、現在世界で普及している【心量計】は、本当に柔軟な心を持つのか、単に都合よく自己解釈できるだけなのかを、区別することができないですよ」

人の心は複雑。

【心蝕獣】に少しでも速く対応するため、急ピッチで製作されたため、開発当初は大まかな反応しか検知できずにいた。それが改良されずに今でも使われているのだ。

「一方で、ぼくや昂のような低ランク者は、柔軟な思考と心を持つことができません。

一度考えてしまったこと、感じてしまったことを変えることは、早々出来ないんです」

頑固。

愚直。

我儘。

Fランクに多い傾向だ。

「もうダメだ、と思ったらそのままの心理状態であり続けることがほとんどです。だから社会に適応できない。

だけど、一度やると決めたら、盲目的なまでの行動し、それが他

者を害することならどんなことでもやれます。

先に例とした昂でいえば、復讐という感情に囚われたため、それ以外を度外視する。だから残酷な戦い方ができますし、復讐に関連することなら【心力】も強大になります」

【心蝕獣】を殲滅する。復讐する。

昂は異常なほどそれらに執着しており、その結果、自分を含めたすべてがどうなるかが構わないと、本気で思っている。

「なるほど……確かにFランクの人間は、物分かりの悪い人間が多いと言われている。」

それにSランク……特に権力者に多いが……。都合の良い自己解釈に長けていると聞かされれば、納得がいく。そういう奴らが多いからな……」

「時の権力者は、いち早く気付いたんです。【心量計】の欠陥に。だから、プラスのイメージだけをSランクに対して持つよう、情報を操作した。そしてFランクに侮蔑の感情を集中させることで真実を追求されることを躲^{かわ}してきたんです」

医療室が見えて来た。

ノックをするが、返事無し。しかし鍵は開いていた。

とりあえず霊たちは中へ入り、ここをベッドに寝かせる。

この医療室の主である保住建子^{ほすみ たてこ}が来るまで、待つことにした。

適当な椅子を持って来て座り、今度は凱が話の続きを促した。

「理屈はわかった……。だが、おまえはそれでいいのか？ 知っていないがら、現状を変えようとは思わないのか？」

「ぼくにとって、ランクの認識の間違いはどうでもいいことなんです。

現状を変えて【心蝕獣】を……そして神を殺せるならいくらでもやりますが……労力に見合ったメリットを、今のところ見つけられませんか……」

霊の目的は【心蝕獣】と、その頂点に立つ神を殺すこと。

ランクによる差別意識を改革することなど、彼にとっては二の次以上の些事だ。

「ふむ……だが、おまえはそれでいいとして、嫁の方が納得するとは思えんが？」

「こころは優しいですからね……。けれど、今さら何をどう言おうとも、人々の間に根付いた観念を変えることは容易じゃありません。そんな苦労を、こころが背負う必要はありません」

もちろん、こころの優しさを異端視し、迫害するような輩があれば、全力をもって徹底的に排除するつもりだが。

「あと、先輩。こころはぼくの嫁じゃありませんからね？　こころに失礼ですよ」

「何を言うか。こ奴とて満更ではなさそうだぞ？　貴様はそこまで鈍感ではないはずだ」

呆れたように言う凱。

彼から見ても、こころは霊に好意を寄せているように見える。
御神の嫁、と言われて強く反論しないし、なにより二人の距離はいつ見ても近い。

「ええ、まあ。小さい頃は、お嫁さんになる、みたいなことをよく言われましたけど……でもそれは子供のころの話です。

現在は、今のぼくと10年前のぼくを、重ねて見ているから懐いている、という感じだと思いますけどね。

10年も経てば人は変わります。ぼくは、こちらの想像通りの人間ではないことを自覚していますから……」

「貴様あ……それは違うだろうに……」

今度こそ、凱は呆れ果てた。

10年も経てば変わるといふ言ひ分は分かる。それに、子供のころ好かれていたからといって、今も好かれていたとは限らない、というのもわかる。

10年も離れ離れになっていれば尚更だ。

でも……。

「いいか？ 貴様はすでに、数々の偉業を……それこそナイトクラスの打倒から【心蝕獣】の殲滅までやって見せているのだぞ？ そしてどのケースでも、おまえは嫁を助けている。惚れんほうがおかしい」

それでも、霊は10年前の自分ではなく、今の自分を正直に見せているはずだ。

少なくとも凱は、霊が飾るような人間に見えなかった。

そしてこころは、今の霊も受け入れているように感じる。

「凱先輩。ぼくは、本当はこころの前に現れるつもりは無かったん

ですよ」

「何故だ？」

「ぼくはFランク。ぼくと一緒にいれば、ぼくと知り合いだと思われれば、それだけでここに迷惑がかかると思ったからです。だから、姿を見せずに戦おうと思っていました。

でも、いざここに帰って見たら、ここは【心兵】になろうとしているじゃないですか。

さすがにぼくでも、そばに居ないと思って、こうして一緒にいるわけですが……」

「だからこそ、気兼ねなくこ奴の隣にいるために真実を……とは思わんのか？」

「さつきも言いましたよね？ 人々の間に根付いた観念を変えることは容易じゃないと……」

「だから寄り添うことをしない、というのか？ こ奴の気持ちはどうなる？」

「……だから、悩むんじゃないですか。こころの気持ちに沿うことをしたい。でも傷付いて欲しくない。

例えばこころが、10年前言っていたことが今でも本気なのだとし、でも、ぼくと一緒に居続ければ必ず迫害されるでしょう」

「では聞こう。10年も経ちながらここに戻り、こ奴を守るお前の気持ちを」

「約束したんですよ。強くなって守るって……。その約束を守ることは、ぼくがFランクと分かっても変わらず接してくれた彼女に対する、ぼくの恩返しなんです」

「フンッ。まどろっこしい。御神よ、悪いがその理屈は通じんぞ？

ようは二人の問題なのだからな。周りの事など気にするな。貴様

らは孤独ではない。貴様のチームメンバーを含め、我が探索部も、貴様らの味方なのだ。

いいか、この事を、この事実を、絶対に忘れてくれるなっ」

言うだけ言って、そして念を押すように言って、凱は医療室から出て行ってしまった。

あとに残された霊は、今の言葉を反芻しつつもため息交じりに呟いた。

「無茶を言ってくれるなあ……凱先輩は……」

まわりのことなど気にするな。

霊一人の問題であればそれでいいのだが、こころを巻き込むとなればそうもいかない。

そう、考えた矢先だった。

「なにも無茶なこととは言っていないと思います」

「えっ」

驚いて、俯いていた顔を上げると……ベッドで眠っていたはずのところが、目を開けて霊を見ていた。

「こころ……。いつから、起きてたの……」

言葉が、途切れ途切れになってしまう。

（いつから？ いつから起きてた？ どこまで知られたんだ……）

なぜ、彼女が起きていることに気付けなかったのか。
凱との話を、どこまで聞かれたのか。

霊は、珍しく動揺してところを見つめ続けた。

第30話【二人の愚者と、百人の賢者】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。

●戲陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。

●輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー。
1。

第31話【本心】

「こころは優しいですからね……。けれど、今さら何をどう言おうとも、人々の間に根付いた観念を変えることは容易じゃありません。そんな苦勞を、こころが背負う必要はありません」

（……んん……？）

自分の名前を呼ばれて、意識が覚醒する。

頭が少しボーっとしており、意識が覚醒しても、こころは目を開けることはしなかった。

そのかわり、すぐそばで成されている会話に耳を傾けた。

「あと、先輩。こころはぼくの嫁じゃありませんからね？　こころに失礼ですよ」

「何を言うか。こ奴とて満更ではなさそうだぞ？　貴様はそこまで鈍感ではないはずだ」

（——ッッ！！　ば、バレてる……？！）

一応、こころとしては隠していたつもりだった。

それとなくモーションをかけた覚えはあるが、それは霊と2人だけのときはず。

目を瞑ったままなので顔は見られないが、声から自分の気持ちを指摘しているのが凱であるとわかった。

顔が真っ赤になっていないか、急に心配になった。

「ええ、まあ。小さい頃は、お嫁さんになる、みたいなことをよく言われましたけど……」

（っ……！ やっぱり、覚えてたんだ……。けど……）

霊のニュアンスから、それが【あの時】の約束を指しているのではない、と分かった。

どうして、【あの時】以前にも、それこそ、事ある毎に宣言するようになんて言っていたのか。

幼い頃の事とはいえ、ここぞという時だけ言え、とその頃の自分を叱りつけたかった。

「でもそれは子供のころの話です。現在は、今のぼくと10年前のぼくを、重ねて見ているから懐いている、という感じだと思いますけどね。10年も経てば人は変わります。ぼくは、こころの想像通りの人間ではないことを自覚していますから……」

「貴様あ……それは違うだろうに……」

（うん……それは違う）

心中で凱に同意する。

時折、懐かしさから霊のことを昔の呼び名で呼んでしまうが、それが【今の気持ち】の全てではない。

（気付いてる？ 私、霊くんだけに敬語を使っているんだよ？）

その理由は、再開したあのとき……まだ霊がレイだと知らなかった、あの屋上での印象が強く残っているから。

あの時、すごく安心したのだ。

入学早々、チーム決めの騒動に巻き込まれ、困惑していた自分を、彼は助けてくれた。

【心器】無しで【心力】を自在に操る偉業を成しながらも、それを誇ることはせず自然体で接して来た彼に、この上ない安心感を抱いたのだ。

「いいか？ 貴様はすでに、数々の偉業を……それこそナイトクラスの打倒から【心蝕獣】の殲滅までやって見せているのだぞ？ そしてどのケースでも、おまえは嫁を助けている。惚れんぼうがおいしい」

まったくもって、凱の言う通りだった。

どんな時でも自然体でいる霊が、とても頼もしかった。尊敬できた。だから、敬語になっているのだ。

「凱先輩。ぼくは、本当はこころの前に現れるつもりは無かったんですよ」

「何故だ？」

（ッ?! どう、して……?!）

起き上がって問い詰めたい衝動に駆られる。しかし、本心を聞き出すために自制心を総動員し、現状維持に務めた。

「ぼくはフランク。ぼくと一緒にいれば、ぼくと知り合いだと思われれば、それだけでここに迷惑がかかると思ったからです。だから、姿を見せずに戦おうと思っていました」

そんなこと気にしないでいい。

自分は平気だ。周りの評価なんか気にしない。霊は霊だ。そばに居てくれれば、どんなことだって耐えられる。

今すぐにでも、そう叫んでしまいたい。

霊の真意を、今の気持ちを、こころは聞き出したかった。そのために、眠るフリを続ける。

「でも、いざここに帰って見たら、こころは【心兵】になろうとしているじゃないですか。

さすがにぼくでも、そばに居ないと思って、こうして一緒にいるわけですが……」

「だからこそ、気兼ねなくこ奴の隣にいるために真実を……とは思わんのか？」

（真実……？ 私が起きる前の話と、関係している……？）

最初から話を聞いていた訳ではないので、流れの変化に付いて行けない。それでも、辛抱強く聞き続ける。

「さっきも言いましたよね？ 人々の間に根付いた観念を変えることは容易じゃないと……」

「だから寄り添うことをしない、というのか？ こ奴の気持ちはどうなる？」

「……だから、悩むんじゃないですか。こころの気持ちに沿うことをしたい。でも傷付いて欲しくない。

例えばこころが、10年前言っていたことが今でも本気なのだとし、ても、ぼくと一緒に居続けければ必ず迫害されるでしょう」

「では聞こう。10年も経ちながらここに帰り、こ奴を守るお前の気持ちを」

（聞かせて……霊くん。あなたの気持ちを……）

「約束したんですよ。強くなって守るって……。その約束を守ることは、ぼくがFランクと分かっても変わらず接してくれた彼女に対する、ぼくの恩返しなんです」

恩返し……。

期待していた答えと違うことに、胸に針が刺すような痛みが奔った。いや、今までの話を聞くに、それは自分に対する建前のように思える。

Fランクである霊が、自分に接する周囲への言い訳。その言い訳は、霊自身ではなく、自分のことを心配してのもの。

こころは、それを冷静に推測できた。

当然だ。霊のことを、ずっと見てきたのだから。

「フンッ。まどろっこしい。御神よ、悪いがその理屈は通じんぞ？

ようは二人の問題なのだからな。周りの事など気にするな。貴様らは孤独ではない。貴様のチームメンバーを含め、我が探索部も、貴様らの味方なのだ。

いいか、この事を、この事実を、絶対に忘れてくれるなっ」

凱の気配が遠ざかり、ドアを乱暴に開けて出て行く音が聞こえた。

「無茶を言ってくれるなあ……凱先輩は……」

（なにも、無茶じゃない。私は、一緒になれる事をこんなにも望ん

でいるのに……)

話しかけるなら、今だ。

思考も回復し、完全に覚醒している。

目を開け、喉から声を出す。

「なにも無茶なこととは言ってないと思います」

「えっ」

弾かれた様にこちらを見つめる、霊の驚いた顔。

普段は無自覚に周囲を驚かせている霊の、その珍しい表情が、少し可愛いと思えた。

「こころ……。いつから、起きてたの……」

一方の霊は、2つの懸念から思考を高速回転させていた。

凱との話を、どこからどこまで聞かれたのか。

あるいは、最初から最後までか。

1つ目の懸念。

それはこころの記憶に関すること。

凱との会話では、【過去の自分の死】について直接触れるようなことはしていない。しかし記憶を刺激するには十分なもの。

2つ目の懸念。

これは些事であり、聞かれても気恥ずかしいだけのものだ。

しかし、もろに聞かれたら恥ずかしい会話。こころがどう思ってい

るのか気が気ではなかった。

心の振れ幅がほとんど無い霊とはいえ、こころが関わると容易に振り切れる。

それは霊の強力な【心力】の源であり、同時に【こころの存在】が【致命的な弱点】でもある証拠。

「今さっきです。霊くん、昔私が言ったこと、覚えててくれたんですね。なのに……【あの時】の約束は覚えて無いなんて……惜しいところまで来てるのに……」

「【あの時】って……ここを出て行く直前の？　そういえば、前に言ったよね？　ぼくがこころに約束したように、こころもぼくに約束したって」

それを思い出すことを宿題にされていたのだが、今に至るまで思い出せず、内容は保留のままだ。

「はあ……本当に惜しいところまで来てたのに……。私は、あの時こう言ったんです」

『レイくんが戻ってきて、約束を守ってくれたら、わたし、レイくんのお嫁さんになって、一緒に戦ってあげる！』

「あっ……」

「思い出してくれましたか？」

「うん……。そう、だったね……。うん。そうだったよ……」

自分が宣言した約束……強くなって守るという約束ばかりが先行し

ていて、それ以外のことがすっぱりと抜け落ちていた。

「私、今でも本気ですからね？ 霊くんが約束を守ってくれたように、私も約束を守るつもりでいますらかね？」

「で、でもっ。子供のころの約束を、しかもそんな大切な事を、約束だからって――」

「大切だからっ！ 約束だから守るとか、そう言うんじゃないくて！ 本気だから守るんですっ！！」

霊の言葉を、こころは大きな声を出して遮った。

その声は、あまりにも必死だった。

その必死さが滲み出ていた声によって、霊は出かかっていた言葉を押し込められてしまった。

「私は10年前のレイくんに言っているんじゃないんです。今の霊くんと約束を守るって言っているんです」

上半身を起こし、霊の目を真っすぐに見つめる。

「確かに、私はこの10年間、レイくんはどうしてるだろう、どんなふうになってるだろう、って考えていました。

10年はすごく長かった……だから、記憶が美化されているところもあるでしょう。でも、」

強くなって自分を守ると約束してくれた少年。

その少年は、確かに強くなった。自分が想像していた以上に。

でも……。

「まだ霊くんと再会して1カ月近くしか経ってないけど、それでも

私は、10年前の、10年掛けて考えたレイくんじゃなくて、今の霊くんを――」

常軌を逸するほど強くなった少年は、それに比例して常識外れな行動もする。

肉や野菜を調理せず生で食べたり、訓練とはいえ女子の胸部に打撃を入れたり、嫁入り前の女性を縛りあげたり……。等々、霊は微妙にデリカシーに欠ける。

それでも――

「好きになりました」

どれもこれも、目で追っていたから……。気になっていたから、気付いたこと。

つまり、彼の事が好きなのだと、好きになったのだと、こころは思った。

そしてその一言を聞いた霊は、目を大きく見開いた。けれど、それはすぐに苦悶に満ち、絞り出すように言葉を紡いだ。

「でも、でもぼくは……。ぼくと一緒にいると……」

「周囲の評判が落ちるよりも、霊くんと一緒にいられない方が、私にとって……苦痛です」

凱との会話で、霊は自分が関わることで、こころに対する周囲の反応が悪くなることを恐れていたという心情を話していた。

それは、こころにとって本当に苦痛でしかなかった。

周囲の評判が落ちようとも、理解してくれる親友がいると確信しているし、それ以上に霊に距離を置かれるという事の方が、考えただけでも辛かった。

ただでさえ、10年も離れていたのだ。もう、一瞬たりとも彼のそばから離れたくなかった。

「それとも霊くんは、私と一緒にだと苦痛ですか？」

「そうじゃないっ。そんな訳が無いっ。けど、こころが中傷されるのが、ぼくにとっては苦痛なんだ……」

「そんな言い訳聞きたくありません」

凱が言っていたように、それは理由にならない。

こころが知りたいのは、聞きたいのは、霊の気持ちだ。

「もう一度聞きます。霊くんは、私と一緒にだと苦痛ですか？」

「……そんなこと、ない」

「私の事が嫌いですか？」

「……嫌いじゃ、ない」

見る見るうちに、霊の表情が歪んでいく。

こころと距離を置くために、それが駄目ならせめてこれ以上、近づかせないために、霊は彼女を否定しなければならぬ。

なのにそれができない。こころを苦しめる事になるというのに、それができない。

何故か？

答えは簡単だ。

否定すれば彼女自身は傷付くと言われたし、そして何より自分がそれをしたくないからだった。

そんな彼の、苦しみにのた打ち回るかのような心情を感じながらも、こころは続ける。

「私の事、どう思ってますか？」

「……ぼく、は……」

喉まで出かかった言葉を、霊は呑み込んだ。

それを、こころが別のやり口^{質問}で引き出す。

「私をそばに、置いてくれますか？」

「………うん」

「私と一緒に、居てくれますか？」

「………うん」

「ずっと一緒に、居てくれますか？」

「………うん」

「それは、霊くんも望んでくれることですか」

「うん」

勝てないな……と、霊は思った。

さっきから、こころの目は自分を捉えて動かない。

こっちはその真剣な目を見るたびに俯いてしまうというのに……。結局のところ、気圧されているのだ。こころの本気に。

「なら、もう一度だけ。私は霊くんが好きです。霊くんは、どうですか？」

はつきりと好意を伝え、答えを求める。

今度こそ、今度こそ……答えて、応えて……と、震えそうになりながら。

「ぼく、は……ぼくは……」

「……………」

最後の、葛藤。

しかしこちらの視線が、その葛藤を押し退けた。

「ぼくは、ここが好きだ……よ……っ?!」

途切れ途切れだった霊の言葉が、完全に絶たれた。

ここがベッドから飛び付いて来たからだ。

霊の首に腕を回し、力の限り抱きしめる。

「よか、った……よかった、です……」

「……うん。ぼくも、良かった……」

言葉にし、抱きしめ返すことで想いを伝える。

求めてくれるなら、それに全力で応えよう。

自分を求めてくれる彼女を傷つける存在がいるなら、全力で守ろう。
霊は改めて誓った。

このとき、こころは霊にとって致命的な弱点になった。
彼女を失う事は、戦う意味も同時に失くし、生存できなくなるのだから。

だが同時に、さらなる力の源泉ともなった。
彼女が存在する限り、霊は彼女を守ろうと際限なく力を引き出せるのだから。

それが良い事なのか悪い事なのか……この時点では、まだ誰にも分からない。



どれくらい、2人は抱き合っていただろうか。

お互いの体温を、鼓動を、確かにここに居るという存在感を、一瞬たりとも逃すまいとするかのように抱き合っていた。

それを、さかのぼること数分前から見ている人物がいた。

(……やれやれ。いつまであの状態なのかね。そこはこう、ベッドにドサッてやって、ギシギシ言わせるところだろう……)

心皇学園の専属保険医、ほずみ たてこ保住建子である。

長い髪を後ろで一つのお団子にして纏めており、長身の身体を常に白衣で覆っているメガネ女性。

男装させたら様になるであろう、クールに笑う麗人は、今や出歯亀根性丸出しで2人を覗き見ていた。

ドアが微妙に開いてたからそろりと覗いてみれば、今まさにっ！な展開。（保住視点）

ここは曲がりなりにも教育者として注意すべきか、生温かい目で見るべきか。

よし、見守ってやろう。

なんてことを僅か0.195秒で即決し、今にいたるのだが……。

（……長いっ！　いつまで抱き合っただまなんだっ！？）

数分間ずっとあのまま。

2人とも何か事を起こすでもなく、ずっとくっ付いたままなのだから、見守ってやろう（覗いてやろう）と思っていた保住は、だんだん焦れていき……。

「おいっ！　いつまでそのまんまにいるつもりだお前らっ！！」

我知らず突っ込んでしまったのであった。

「お前らもういい年だろ?!　その辺の知識あんだろ?!　むしろ偏ってるくらいだろ!?　デキんだろ!?」

なのになんと抱き合っただままって、お前ら小学生かっ!?　っつか小学生でも無いわっ!!」

「な、何言ってるんですか先生っ!!　っていうか、いつから居たんですかっ?!」

「かれこれ数分前。もそろそろ10分が経過するか?」

悪びれずサラッと答えるあたり、保住もいい性格をしていた。

「なっ……の、覗いてたんですかっ?!」

「ふむ。雰囲気が雰囲気だったのな。注意してやろうかどうか迷っているうちに、時が経ってしまったんだ」

迷っていた時間は1秒にも満たなかったのに、真顔で嘘を口にする。

「それよりなんだ？ 純愛、おまえ具合でも悪かったのか？」

「ちよっと倒れたんです。それで、ぼくがここに運んできました」

未だ顔を真っ赤にしているころの代わりに、霊が答えた。

「倒れた？」

「ええ。昨日の一件で、昂……ふんげき こう憤激昂という奴と一戦交えましたから、その時の影響が出たんでしょう」

「ふむ。私も記録を見たから知っているが、確かにおまえクラスの人間とやり合えば、疲労も溜まるか……」

あれだけの騒ぎになって怪我人が出るかと思いきや、第7チームの霊以外に出ることはなかった。

その唯一の怪我人であった霊も、己の【心力】で治癒能力を活性させて治してしまった。

出番がなくてホッとしたが、本来は有り得ないことなので肩透かしを食らった気分だったのを覚えている。

「それより保住先生。怪我人でもいるんですか？ 外に人の気配がありますけど？」

「ん？ ああ、そうだった。おまえらの事で頭から吹き飛んでたよ」

「だ、ダメじゃないですかっ！！　早く怪我人を運んでくださいっ！！」

霊の指摘に、保住が呑気に答え、こころが慌てる。
とりあえず運ぶ手伝いをするため、医療室の外へ。

念のためこころをベッドに残そうとしたが、彼女はもう大丈夫だから、と手伝ってくれることに。

医療室の外には、壁に寄り掛かって気絶している男子生徒が3人いた。

全員、顔が赤く腫れあがっており、酷い有り様。
鼻血が垂れて制服に付着していて相当酷い暴行を加えられたのが伺える。

「あ、あれ？　この人たちは……」

「どっかで見たような顔だね……。ああ、照討くん那时的……。」

その男子生徒たちは、いつだったか、準の弁当をたかり、あまつさえ地面に投げ捨てて滅茶苦茶にしたイジメっ子達だった。

「一体、彼らはどうしたんですか？」

「ボコボコにされたのさ。いま話に出て来た、てらうち じゅん照討準にな」

さっきまで一緒に昼食を摂っていた仲間が、自分達の居ない間に、何を？

甘い雰囲気から一変、俄かに戦慄を覚える2人だった。

第31話【本心】（後書き）

●御神靈——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●保住建子——閃羽心皇学園の保険医。外科治療専門。ちょっと

と不良な先生。

●輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー
1。

第32話【やっぱり好みがモノを言うよね】

急遽勃発した、唐揚醬油味VS唐揚レモン汁付け。

醬油派である憤激昂ふんげきこうと、レモン汁付け派の輝角凱きかくがいの戦い。

どちらが美味いかに決着を付けるため、審査員として選ばれたのは
御神靈みかみくしび。

それぞれが最高の材料を用いるために、昂あじやらびは戲陽朗ほがらを、凱は靈じゆと純んない愛んないこころを連れて行った。

この時点で残されたのは、針村槍姫はりむら そうちきと照討準てらうち じゆん、そしてダナン・デナンの3人だった。

「しかし、たかが唐揚ごときでよくもここまで大事になったものだ……」

「は、針村さん。そそ、そんなこと言ったら、凱先輩や憤激くんが怒っちゃうよ」

槍姫は呆れ、その愚痴に警鐘を鳴らす準。

あの2人の好みに対する執着心は異常で、それ故に槍姫の愚痴が何の火種になるか分からなかった。

「ま、凱くんの無茶はいつものことだし、たぶん憤激くんも同類な気がするんだなあ」

いつも通りの呑気な声で、的確に指摘するダナン。

凱との付き合いはこの学園に入ってからだが、3年も一緒に行動していれば概ね同類の臭いを嗅ぎ付けることができるようになってい

た。

「ところで照討くん。実はキミの【心器】を改良したものの試作品が出来上がったんだな」

「か、改良、ですか？」

「そうなんだな。昨日の憤激くんとの一戦で、やっぱりオーバーヒートして使えなくなるっていうのは問題だから、冷却機構を実験的に取り付けたものを造ったんだな。前例の無い試みだったから、まだまだ改良の余地が残ってはいるんだけどな」

【心器】が耐えられないほどの【心力】を流されてオーバーヒートする、など想定されていない。だから冷却機構を付けた【心器】は、閃羽ではダナンが最初に造ったことになる。

そもそも、世界中探してもそんな事例は稀有だ。

そんなことになってしまう霊、昂、準の3人が異常なだけ。

しかし、技術者としてこれほど贅沢な人材もいないと、ダナンは考えている。

何しろ、常識外れの性能を付加してもなお、彼らは使いこなせる。自らが造った【心器】の限界を、彼らが使うとこれでもかという程に見せつけられるのだ。燃えない訳が無い。

彼らが十全にその能力を発揮できる【心器】を作り出すこと。それが今のダナンの目標になった。

と言うわけで残された3人は、探索部がある部室棟から工学棟へ向かう。

事が起こったのは、工学棟への道中……中庭を通っている時だった。

「よおおおっ！！ 照討いいいっ！！」

ドスの聞いたデカイ声。そして耳障りでもある声が、3人に襲いかかった。

「あいつ等は……」

「でっかい声なんだなあ」

見覚えのある3人組の男子生徒たち。

槍姫は露骨に顔を歪め、ダナンは呑気に言った。

「うっ……」

そして準は、その3人組を見て怯え始めた。

彼らは霊たちと出会うまで、常に自分をいじめ、パシリにしてきたグループ。

苦手意識……以上の恐怖が、準を竦ませた。

「2日ぶりだな照討いいいっ！！ あの時はいくもやってくれたなあ、アアン?!」

「どんな手を使ったか知らねえが、Fランクのゴミがオレ達人間様に逆らう……許されると思っ^{リンチ}てんじゃねえぞ？」

「覚悟はいいかあ？ 今日とはことん私刑^{リンチ}してやるよお」

ずかずかと準に詰め寄り、3人で1人を囲む形をとる。

と、1人の男子が何の前触れもなく準を殴り、倒れ込む準にさらに蹴りを入れた。

「おい、止めろっ!!」

槍姫が割って入ろうとする。

しかし、一番近くにいた男がナイフを持ち出し、槍姫の首に突き付けた。

「おい……動くんじゃない。殺すぞお？　その肉ダルマもだつ！
！」

「……ぼく、ぽっちゃり系なんだなあ……」

微妙に落ち込む様子を見せたダナン。

しかし常備している工具……小型のハンマーに手をかけていた。
牽制されはしたが、強かった。

「くっ……貴様ら、こんな物まで持ち出して……」

これが霊や昂であれば、素手で刃物を叩き折っていたことだろう。

彼らは【心器】無しで【心力】を扱えるから。しかし槍姫はそんな
ことできない。

素手で刃物を処理することはできないので、ナイフを突きつけられ
たら動くことは難しい。

「照討っ！　照討っ！！　どうした？！　なんで抵抗しないっ！？」

現状を打開することは、自分には難しいと判断。

ならば霊や昂に続く、準に期待するしかない……と思ってみれば、
準は残った2人に袋叩きにされていた。

地面にうずくまり、蹴られるがままに暴力を受けていた。

「はっ！　出来るわきゃねえだろ！　こいつはFランクの臆病者！

入学式からずっとオレ達がパシリにしてんだっ！！ オレ達が怖くて抵抗できねえよ！！」

「なのこいつは一昨日、オレ達に盾突いた。弱いくせに、オレ達に貢ぐ事を拒んだ。しかも、どんな手段かわからないが、オレ達に怪我を負わせたんだ……。マジ許せねえ」

あの日、第7チームと準が初めて会った日。

この3人組は準から弁当を奪い、そして目の前で地面に叩きつけて滅茶苦茶にした。

その弁当は、準が家族のように大切にしている孤児院の子供たちが作ってくれたもの。それを滅茶苦茶にされ激昂した準が、無意識のうちに【心力】を操り、彼らを撃退した。

だが、それは本来有り得ない事。特に準をパシリにしていた3人組にとっては。

Fランクというゴミの烙印を押された落ち零れに負けるなど、彼らの【普通の人間】としての矜持が許さなかった。

「照討！ おまえはもつと強いはずじゃないか！！ 御神に認められ、憤激と渡り合ったおまえの力なら、こんな奴ら敵じゃないだろっ！？」

そう叫んで聞かせるも、準は反応してくれない。

代わりに反応したのは、ナイフを突き付けていた男子生徒だった。

「おい？ オレ達があいつの敵じゃないだど？ オレ等がゴミ以下だったのか？」

ナイフを持った男子は額に青筋を浮かべ、槍姫に詰め寄る。

一方、準を袋叩きに行っている2人は、蹴りを入れながら問いかける。

「なあおいFランク様よ。あの女があんなこと言っただよお……まさか本気にしちゃってねえよなあ？」

「おまえは弱い人間だ。しかも生きる価値のないFランク。身の程というのを……弁えろよ？」

さらに激しい暴行を加える。

脇腹につま先を入れ、そこがろっ骨の感触を捉えては満足する。

蹴られた箇所をかばう手があっても、容赦なく蹴る。指がひん曲がろうが関係ない。

蹴る場所は一か所ではない。顔面も蹴り上げる。

——惜しいっ！！

もうちょつとで眼球を捉えるところだったのに、当たったのは鼻柱。

鼻血が出やがって靴を汚した。汚らわしい。

ゴミの分際で赤い血を持つとか、マジ勘弁。人間じゃないくせに。

そんな行為を繰り返すうち、2人の息が切れ始めた。

「はあ、はあ……よしよし。大人しくなったなあ？」

「Fランクがオレ達に逆らえばこうなるって分かっただろ？　これに懲りたら、二度とオレ達に盾突くなよ？」

準は文字通り、ゴミのようにボロボロ。

見下しながら笑う2人の制服には、返り血が付着していた。それだけ、激しい暴行を加えたという事だ。

だというのに、準は……立ち上がった。

「もう……終わった……？　なら、行っても、いいかな……」

「……あん？」

「僕……用事が……先輩の新しい【心器】を、受け取りに行かなくちゃ……」

足を引きずりながら、歩こうとする準。

弱々しくも動き出す彼は、棒立ちになる2人の男子生徒の間を抜けようとするのを、止められた。

「はっ……はははっ？！　おい？！　おいおいおいおいおい
い？！　おまえに【心器】なんか必要ねえだろおおお？！」

「Fランクに【心器】なんか、あっても無くても同じだ。どうせ使いこなせないんだからな」

準の肩を掴み、そして突き飛ばす。

尻もちを突いた準は、それでも再び立ち上がった。

「【心器】なんかもらってどうすんだよ？　ああ？！　てめえにやあ必要無えだろおがっ！！」

「ひ、必要、だよ……僕は、孤児院のみんなを守るために、この心皇学園に来たんだから……」

Fランクというだけで、準の未来は暗闇に閉ざされている。

適齢期に達しても就職は厳しいと言わざるを得ない。

ならばせめて、社会的に必要とされていないこの命を、孤児院のた

めに懸けよう。

捨て石でもかまわない。

それほどの覚悟で、準は心皇学園に入った。

だがそこでも、Fランクというレッテルがすべてを邪魔する。

「……おいおい。Fランクってのはよ、心が弱い奴のことなんだよ。つまりな、【心力】がクソミソ程も無いヤツのことなんだよ!!」
「そのFランクのおまえ如きが、何かを守るとか、出来るとか思ってたんなよ……ウゼェ」

ただ強くなりたい。守るために強くなりたい。

誰かに迷惑をかけている訳でもないのに、まわりがすべてを否定し、阻んでくる。

「まったく。この間から孤児院の、孤児院のみんなを、とか……なあ照討い？ ゴミ風情のおまえが人間様に盾突く理由が孤児院ならよお……」

一呼吸置いて、笑みを浮かべながら言葉が続ける。

「その孤児院、オレ等が消してやるよ？」

「……………え？」

痛覚が、消えた気がした。

「親無し共なんか、居てもしょうがねえだろお？ しかもおまえと一緒に暮らしてる。そんな奴ら、お荷物なんだよ。これ以上人口密度を無駄に増やしたらよお、オレ等が窮屈で仕方無えんだよ」

「そういえば、おまえの所の孤児院には綺麗な女がいたよな？　そいつだけはオレ等がもらって、他はぶっ殺してもいいよな」

「……——え？」

何を言われているのか。

何を言っているのか。

心のどこかで、理解を拒む自分がいる。

心のどこかで、理解しろと叫ぶ自分がいる。

「知ってるか？　孤児院だなんて言ってもよ、けっきょくは邪魔者扱いされてるってのをよ」

「【心蝕獣】の所為で、外縁防壁を広げる事はできない。だから地下へ、って話なんだが……そんなことするよりも、タダメシ喰らいの孤児院を撤去した方が建設的、って話があるんだ」

「……え？」

ダメだ。聞くな。考えるな。

御神霊も言っていた。

【心蝕獣】に対してならともかく、社会に対して何かを起こせば、孤児院に負担がかかる、と。

だが、耳に入ってくる言葉が、準の心を……Fランクの心の揺れ幅を、加速度的に大きくしていく。

「お荷物にしかないなら、いっそ死んでくれた方が役に立ってんだよお？　それが嫌なら、オレ達の慰み者くらしか、存在理由

はねえだろ？」

「オレ達は命を懸けるんだ。無駄に生きるくらいなら、奉仕くらいしろって話なんだよ」

「……え？」

「決めた。どうせ、あそこをぶっ壊しても、誰も文句は言わないさ。今夜、決行だ」

「はははっ、いいなあ！ 思いついたら即実行。Fランクにはマネできない速攻だよなあ！！」

（このっ……ゲス共がっ！！）

下卑た笑いを響かせる男子生徒たちに、心の中で檜姫が毒吐く。

こいつらのランクは知らないが、少なくともFランクを見下せるくらいには高いはず。

だが、本当にこんな奴らが、こんなことを口に出来る奴らのランクが、Fランクの準より優れていると言えるのか？

動けないもどかしさにイラつきながら、檜姫は齒ぎしりした。

「——ねえ、やめてよ」

突然、準が言った。

されるがままだった準が、抵抗の意味を持つ言葉を、口にした。

「あ？ おまえ、まだ分かんねえのか？」

「誰に指図してんの？ オレたちに？ おまえ如きが？」

準に近づき、睨みを利かせる。

準は俯いたままで、表情は見えない。
しかし、震えていた。

「やめて、よ……」

その震えは、自分達に対する恐怖心からだ……と、男子生徒たちは
思い上がった。

そして同時に思う。

これは、痛めつけるだけでは理解できないゴミなのだ、と……。

「はああああ……もういいわっ。ゴミが人間様に逆らったらどう
なるか、今すぐに分からせてやるわっ」

「今夜じゃない。今すぐだ」

準を残して去ろうとする2人。

だが次の瞬間、片方の男子が、くず折れた。
腹を抑え、痛みへの打ち回る。

「ぐっ……あっ……?!」

「—————ねえ、やめてよ?」

準が、拳を握りしめていた。

自分の脇を通り抜けようとしたその男子に、一発喰らわせたのだ。

「くっ、照討、てめえ……」

「—————ねえ、やめてよ?」

残った1人が準の所業に気付き、報復しようと殴りかかる。

だが、いつのまにか準の顔が……何も映さない暗い瞳が、目の前にあった。

「ぐほおっ?!」

腹にめり込む、準の^{ゴミ}拳。

内臓を圧迫する拳は、橙色の【心力】に覆われていた。

「お、おいコラア照討っ!! 何してやがる?!」

あっという間に2人を地面に這い蹲らせたことが、残った1人には信じ難い光景となって網膜に焼き付いていた。

「ゴミの癖につ……舐めた真似を——」

槍姫に突き付けていたナイフを離し、準に向かって襲いかかろうと1歩踏み込む。

「——キミも、やめてよ?」

2歩目を踏み込もうとしたとき、目の前に準の暗い瞳が。

「がっ……」

何が起こったのか、分からなかった。

気付けば宙を舞っていて、先に倒れていた2人の元へ、重なるように落とされた。

しかも、準が馬乗りになっていて、こちらを見下ろしている。

準が、橙色の【心力】に覆われた拳を振り上げた。

それを無造作に落とし、振り上げ、また落としながら、準は必死に声を発する。

「ねえやめてよ？孤児院のみんなは関係無いでしょ？キミたちは僕がウザいんでしょ？なんで僕だけ狙わないの？なんで孤児院のみんなの話が出てくるの？関係無いでしょ？やめてよ？お願いだからやめてよ？僕はただ守りたいだけなんだよ？孤児院の皆を守りたいだけなんだよ？なのにどうして孤児院のみんなを殺すなんて言うの？孤児院を消すなんていうの？酷いよ？僕等は好きで孤児になった訳じゃないのに？寄る辺が無いから寄り添って生きてるだけなのに？どうして？【心蝕獣】に家族を殺されたから？殺された方が悪いの？だったら僕は殺すよ？僕等を殺そうとする【心蝕獣】を殺すよ？僕等を殺そうとする奴らを殺すよ？そすれば僕等は悪くないよね？だって殺された方が悪くて殺した方が生きてて良いってことだからだね？殺して生き残っていれば僕等が生きてても問題ないってことなんでしょ？」

「ぼがつ……やめ……ぶふつ……——」

3人をまとめてボコボコにする準。

全身からは橙色の【心力】が噴出しており、その状態で殴られることはかなり危険。

それ以上に……。

「……バカな。相手に、防御させないだと？」

準は顔面を殴っていて、いじめっ子たちはそれを防御するために、顔を腕で庇おうとしている。

しかし、準はその腕を素早く払い、返す勢いで器用に殴っているのだ。

霊が見出した準の力。

それは先天的な先読み能力と、圧倒的な動体視力。それらが合わさると、相手はまともな防御をさせてもらえず、一方的な暴力に晒されるのみだった。

「くっ……！ やめろ、照討！！」

槍姫が後ろから準を抑えようとする。

しかし、強大な【心力】を纏う準に、生身では歯が立たない。それどころか、羽交い絞めにしようとしても、スルッと抜けられてしまう。終いには腕すら掴めない。

どうやら、こちらの動きすら目の端で捉え、予測し、拘束されないように殴っているらしい。器用すぎる。

（くそっ……どうすれば止められるっ！？）

このままでは、殴られている相手が死んでしまう。いくらなんでも、殺人はまずい。

Fランクというだけで即極刑もありえるし、彼を高く買っている霊が、どういう行動を起こすかも気になる。

こんなときに御神がいれば……そう思わずにはいられない。

焦りによって冷や汗を掻き、それが滴となって落ち始めたとき……呑気な声が掛かって来た。

「照討くゝん、それ以上やったら死んじゃうんだなあゝ」

ダナンが準の前にやってきて、そう声をかける。
だが、準はぶつぶつ言いながら殴るのを止めない。それでもダナンは話を続ける。

「もしキミがこの人たちを殺したら、キミは犯罪者になるんだなあゝ。そうになったら、孤児院の人たちがどう思うか考えてみるんだなあゝ」

――止まった。

ダナンの口から、孤児院という単語が出た瞬間に、準は暴行を止めた。

「それに孤児院にも迷惑が掛かるんだなあゝ。Fランクの犯罪者を育てた、とでも言われたら、孤児院の汚名になるんだなあゝ」

「……はい。そう、ですね」

立ち上がり、3人のいじめっ子たちを見下ろす準。

その顔は、すでに無表情。あの暗い瞳は鳴りを潜めていた。

「それじゃあダナン先輩。早く工学棟へ行って、【心器】を見せてください」

そうして、何事も無かったかのように、明るい声と笑顔で言った。準の中には、すでにいじめっ子たちの存在は無いものになっているのか。

「……照討……」

あまりの変容ぶりに、槍姫はかけるべき言葉が見つからなかった。



「と、いうことがあったんだ。正直、ダナン先輩がいなかったらと思うとゾツとする……」

「私も……憤激くんに反論できなかったな……」

放課後、家庭科室の一角を借りて、探索部は唐揚げを作っていた。とはいえ、作っているのはこころだけで、他は出来上りを待っているという状況。

ちなみに、準とダナンはこの場にいない。

改良した冷却機構搭載型【心器】の調整のため、工学棟に籠もっていた。

唐揚げができる間に、槍姫は準の暴挙を、朗は昂の残虐性を、それぞれ

れ霊に話して聞かせた。

「そっか……折りしも、凱先輩に話していたことが起きていたんだね……。ちょうど良いから説明しようか」

霊は、一般的に言われている【心力】の強さの根源が、必ずしも正しいものではないという事を聞かせた。

それは凱に話したことと同じ。

道徳的で正しい行いをする正義の心よりも、昂のように復讐に狂った負の感情の方が【心力】を強くする場合もある、というもの。準についても然り。

孤児院に対する執着心が、準の【心力】を強大なものにさせる。

「ねえ御神くん。その話が本当だとすると、ランクの意味はどうなるのかな？」

「朗、御神が今説明しただろう。ランクが高ければ高いほど、即座に【心器】に伝達されるエネルギーの指向が、攻撃的になりやすいと」

「え？ うーんと、それは聞いてたけど、エネルギーの指向が攻撃的になりやすいって……好戦的ってこと？」

疑問を呈する朗に、檜姫が改めて補足するが……彼女はさらに混乱してしまったようだ。

「ちょっと違うかな。そうだな……他に良い例えは……これなら、どうかな？」

少し考えた霊は、改めて例を出す。

「車に例えてみようか。」

高ランク者は、ギアの切り替えがスムーズにいく。すぐに最高速度までもっていけるとしよう。

これはつまり【心力】をすぐに活性させられるんだ。

対して低ランク者は、ギアの切り替えがやり難い。最高速度までいくのに時間がかかる、どころかエンストして動けなくなることもある。

平時にいきなり戦え、と言われても【心力】はなかなか活性しないんだ」

「戦うべきときにすぐ戦えるような【心力】を発揮するのが高ランク。できないのが低ランクということだな？」

「うん。ギアの切り替えが上手くいかないうことは、カーブを曲がる時危険だね？」

ギアを切り替えられれば、というのは、状況に応じて動ける……司令官の命令を聞けるってこと。

でもギアを切り替えられないということは、司令官の命令を無視して戦い続ける危険性がある。

カーブに差し掛かっても曲がり切れず、そのまま追突して……ドカン、という訳さ」

「でも、御神くんや憤激くんを見ると、ギアの切り替えが速い気がするんだけど……」

「それは、ぼくらの戦える理由……昂で言えば【心蝕獣】に復讐するというのが着火剤になるから。【心蝕獣】に復讐するためならすぐ戦闘態勢になれるし、それを邪魔しようとするものがいれば、それもまた然り。

その代わり、復讐が遂げられるまで……目の前の【心蝕獣】を倒すまで止まらない。誰の命令も聞かないんだ」

【心蝕獣】に復讐するために、残虐な殺し方をした。

【心蝕獣】に復讐するために、問答無用で霊を連れ戻そうとした。

【心蝕獣】に復讐するために、強大な【心力】を引き出すことができる。

昂の戦える理由。そして強さの源。

ギアの切り替えが上手くい条件……すべて、復讐が絡んでいた。

「照討の戦える理由……それが孤児院だとすれば、あいつらが孤児院を脅かそうとしたのが、照討の凶行を誘発する要因になったわけだな？」

「そうだね。普段はすぐビクビクしている照討くんの【心力】は低いままだけど、孤児院が関わると豹変する。そして【心力】が高まるんだ」

孤児院を脅かす存在。

それが【心蝕獣】であろうと、人であろうと、準は躊躇い無く殺すことができる。

躊躇いが無いから、すぐに【心力】が強くなる。

孤児院が関わる場合にのみ、だが……。

「ランクの高い人なら、理由無しに【心力】を強くできる。でも……ぼくらのようなFランクはそれができない。

こういう人たちはね、とても扱い難いんだ。しかも手に負えなくなれば……暴走すれば……味方にも被害が出る。

だから、扱いやすい高ランク者を遇することにしたんだよ……世界はね」

どんなに強力な兵器でも、期待通りの性能を発揮しないのであれば意味は無い。

また、自らをも巻き込むほど強力な核兵器よりも、狙った敵だけを屠れる銃火器の方が、使い勝手が良いのは誰にでも分かるだろう。

「でもまあ、この事はあまり他人に言い触らさない方が良い。今さら真実を言ったところで、変な目を向けられるのはこっちだし、何よりそれで世界は上手く回っているんだから……」

「……今のを聞かされて、はいそうですかと納得いくはずもないが……御神の言い分はわかった。そしてそれが正しいのだろうな」

「でも……なんか、価値観が変わっちゃうね……」

溜息を吐く2人に、霊は気休めと分かっているが付け加えた。

「別に、高ランク者の【心力】……最高速度が、低ランク者のそれに及ばない、ってことはないよ。

ぼくの知り合いにBランクの人がいるけど、その人はぼくと同じくらいの【心力】を有しているしね。

要は、本当に心の強さが問題なんだよ。何かを成したい、という強い意志・想いが、【心力】の本当の強さを決めるんだ。

ただ、低ランク者の場合、狂ってしまうくらいに執着してしまう事が多いから、比例して【心力】の最高出力が高くなる。

狂ってしまうほどの想いに対し、平常心で対抗するのは難しいよね？　そういう事なんだよ。

【心力】の……心の強さっていうのはね……」

「……ねえねえ、御神くん。それじゃあ、御神くんの戦える理由って、なに？」

憤激くんや照討くんみたいに、その……狂ってしまう程、何かに

執着してるとは思えないんだけど……」

朗に聞かれ、それについてどう答えたものか、霊は迷った。
言って理解されないか、あるいは嫌悪されるかのどっちかか……。

そんな折、唐揚げを作っていたところが呼びかけて来た。

「出来上がりました。凱先輩、憤激くん、どうですか？」

出来上がった唐揚げを、2つの皿に分けて出す。

醤油で下味を付けられた唐揚げは、見事なきつね色。揚げたての音を響かせていて、とても美味しそうだった。

それを一つ、箸でつまみあげ、昂は咀嚼した。

「……おう。美味しいじゃねえか。これなら文句ねえぜ」

口の中で広がるジューシーな肉汁と、醤油のコク。
満足そうに昂は合格点を出した。

「ふむ。美味だ。醤油のコクとレモン汁の酸味が見事に調和している。貴様は良い嫁になるなあ。はっはっはっ」

凱も一つ取り、レモン汁をかけて口の中に頬張る。

その出来に不満はなく、心から褒め称えた。

「出来上がったみたいだね。じゃあ、ぼくも行ってくるよ」

「あ、御神くんっ」

話が途中なので呼びとめるが、それを察していた霊がすかさず制し

た。

「その話は、また今度してあげるよ」

そう言って有無を言わず振り返り、こころのもとへ歩き出す。

こころが小皿に2つ唐揚げを盛りつけ、箸とともに霊へ手渡す。

まずは素揚げの物を1つ、それからレモン汁をかけた2つ目を食べた。

どちらも美味しい。

醤油ベースであろうと、レモン汁をかけたものであろうと、程よく揚げられた唐揚げは、絶品の一言に尽きた。

「どうだ？ 御神？」

「どっちが美味いんだゴルフ？」

霊に迫り、判定を促す凱と昂。

ひとしきり味わった霊は箸を置き、感想を述べた。

「どっちも美味しいね。さすがこころ」

目の前に迫る2人は完全にスルーして、こころに笑顔で感想を言う。

「どっちも美味しいのはわかってんだよ！ より美味しいのはどっちか決めるのが目的だろうがっ！！」

「いや、まあそうなんだけどさ……。どっちもどっちでしょ？」

瞬間、凱と昂の何かが切れた。

それはもう、盛大に切れた。おそらく、家庭科室の外にまで聞こえるんじゃないかという切れ具合だった。

「み、御神貴様あー！ー！！ どっちもどっちなど、そんな事があるかあ！！」

「そうだぜ霊い！！ どっちもどっちとか、テメツ喧嘩売ってんのかゴルア？！」

「そうじゃなくてさ……ぼくは――」

何か言おうとした、その時。

霊の前にもう1品、唐揚げが置かれた。こころが置いたものだ。

「霊くん、頼まれていたものです」

「むっ？ なんだ、これは？」

「白い、唐揚げ、だど？」

新たに出された唐揚げは、醤油ベースの唐揚げとは違い、白いころもを纏っていた。

揚げ時間が短かったわけではない。これは、白い唐揚げなのだ。

「ありがとうございます。久しぶりだな……。いただきます」

それを口に頬張る霊。

次の瞬間、醤油ベースの唐揚げを食べたとき以上に、霊の顔はほころんだ。

「うん、やっぱり前に食べたときよりも美味しくなってる。塩味の唐揚げ」

「「塩味の唐揚げ？！」」

まったく同じタイミングで絶叫する、凱と昂。
しかしすぐさま我に返り、霊に詰め寄った。

「どういふことだ御神!!」

「なんで塩味がここで出てくんだ?!」

「ぼくがここに頼んで、作っておいでもらったんだよ」

この唐揚勝負が決まった直後、霊がここに頼んでおいたもの。
それは、塩味の唐揚を用意してもらった事だった。

なぜなら……。

「ぼく、塩味の方が好きだからさ」

と、いう訳である。

霊が閃羽を離れる前、こころは母親の手伝いではあったが料理をしていたことがある。

そして、はじめて霊に振る舞ったのが塩味の唐揚。

霊はそれを甚く気に入り、塩味の唐揚が大好物になったのだ。

「ふ……ふざけんなゴルァ!!」

「御神貴様ぁー!!」塩だとお?! 唐揚といったら醤油にレ

モンであろうに!!」

「いいや違うぜ!! 醤油オンリーに決まってるだろゴルァ!!
塩とかテメツ、ただしよっぱいだけの味付けとか、それでも人間か
ゴルァ!!」

まさに予想外の展開。

醤油オンリーでも、レモン汁付けでもなく、いきなり不意打ちで出て来た塩味に、すべてを掻っ攫われたのだ。
キレるな、という方が無理である。

「なに？　なんか文句あるの？　こころの作った唐揚、バカにするとか……」
【序列5位の力天使^{りよくてんし}】ふぜいが、調子にのるなよ……」

そして事は振り出しに戻ってしまう。

いや、霊が参戦したからもっと事態は大きくなってしまっただろう。

霊・昂・凱による三つ巴の睨みあい、まさに一触即発。

「はあ……まったく。好みなど人それぞれだろうに……」

「にやはは……やっぱり好みがモノを言うよね。でもなんというか、事態がさらにややこしくなるのは、さすが御神くんというか……」

さっきまで消沈気味だった槍姫と朗は、こんな結果になったことで呆れ、また深刻に悩むこともないかため息をついた。

どんなに狂っているようが、それ以外ではまったくもって子供。

ぐだぐだになった結末と、睨みあいを続ける3人を余所に、槍姫と朗はこころの唐揚げを残らず食し終えたのであった。

無論、後で男3人に文句を言われたのは言うまでもない。

第32話【やっぱり好みがモノを言うよね】（後書き）

- 御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛こころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戯陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー。
- 憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。
- 照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切に行っている。
- ダナン・デナン——心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

第33話【一万本の糸】

彼が、彼の祖父に連れられて、閃羽から出て行った。

それを見送ったのは、他ならぬ自分。

なのに翌日には、彼の姿を探している自分がいた。

10年は戻ってこない。

そう聞かされていたのに、もしかしたらひょっこり戻っているのではないか？

昨日の事は夢で、いつも通り隣の家に居て、いつも通り遊んでくれるのではないか？

そんな儚い希望は、脆くも崩れ去ったが。

昼間なのに、雨戸が閉め切られた彼の家が、彼の不在を物語る。

気付けば、彼の家の玄関に座り込み、泣いていた。

ずっとそこで泣いていた。

お昼ごはんの時間になって、親が呼びに来てそこから動こうとせず、1日中そこで泣いていた。

——これが夢なら……悪い夢なら……。

何度となく願ったことか。

願って、願って、願い続けて……10年が経った。

そして彼との再会を期に、悪夢は終わりを告げた……。

「……………っ。ゆ、め……?」

目が覚めたところ。

今さっきまで見ていたものが夢である、と認識するのに少しばかり時間を要した。

妙に現実味のある夢だったからだ。

それもそのはず。

実際にあった過去のことを、夢という形で追体験していたのだから。

過去、といってもそれは一ヶ月半ほど前まで。

彼……霊が戻って来る前までの話。

悪夢が終わったのは、極々最近になってのことだ。

「あ……今日は、霊くんは泊まっていかなかったんだ……——っ
!!」

唐突に、不安になる。

まだ悪夢は……続いているのではないか?

強い願望から、霊が帰ってきたという夢を見ていただけではないのか?

なぜ、そのような事を思ったのか……。

簡単な話だ。

昨日までは、ほとんど毎日と言っていいほど、霊は純愛家に泊まっていた。

両親もそうだったのだが、自分が霊を強引に引き止めたのだ。

少しでも早く、10年の空白期間を埋めるかのように、彼をそばに置いておきたかった。

そしてようやく昨日、想いが通じあった。

その翌日に、あの悪夢を見た。しかもそんな時に限って、霊が泊まりに来ていない。

「……昨日のことは夢じゃない、よね……？ 霊くんは、いるよね……？」

声に出してみたものの、自信がなかった。

夢ではない、と自分に言い聞かせているだけなのでは？ 本当は、

霊はまだ帰ってきていないのでは？

考え出すと、あふれ出る不安。

その不安を掻き消すために、こころはすぐに起き上がって身支度を整えた。

いつもより早い時間に家を出る。

行き先は心皇学園……ではなく、霊の住まう高層マンション。その最上階の部屋。

走ってきたので息が上がったまま。

ドアの前で呼吸を整えることも忘れ、インターホンを押す。

それだけ、早く霊に会いたかった。

「はーい」

返事と同時に、ドアが開いて霊が姿を見せる。

「あれ？　こころ？　こんな時間にどうしたの？」

Yシャツ姿の霊が、予期せぬ来客に疑問符を浮かべる。

「あ……よかった……居てくれた……」

「ん？　ここ……ろッ?!」

いきなり抱きつかれ、慌てて受け止める。

何事かあったのか、と聞こうとして、こころが耳元で囁くように……
：それでいて少し涙ぐんだ声を発してきた。

「ごめん、なさい……。急に不安になって……。霊くんが帰ってきたことや、昨日のこととか、夢じゃないかって、不安に……」

「こころ……」

昨日、唐揚対決が終わったあと、二言三言会話して別れた。

なにしろ、霊の【心器】である糸刀の、大幅な改良に目処が立った、とダナンから連絡が来たからだ。

それで霊は、先に帰るようこころに促し、珍しく純愛家に行かなかったという訳だ。

想いが通じ合った事実を、確認する暇がなかった。だから不安にな
っていたのだろう。

「……大丈夫だよ。これは現実で、ぼくは確かに、ここにいるよ」

ぽんぽん、ところどころの背中を叩き、安心させるように言う。

いや、相手を安心させるというよりは、自分が安心したいから言う
のかもしれない。

不安を抱いているのは、ここらだけでは無いのだから。

「それに、さ……不安なのは、ここらだけじゃないよ？」

「え？」

「その……昨日のこと、とか……。あれがぼくの妄想なんじゃない
かって、今でも不安」

少し体を離し、苦笑を見せる霊。

「いいのかな？ 昨日のこと、現実にあったことだって、思っても
……？」

目を逸らしつつ、照れたように問う。

それでも腕は、しっかりとところを抱いたまま。

お互いがお互いに気を使い過ぎていたことに、こころはようやく気
付いた。

なら、あとは素直になるだけ。

「はい……私は、靈くんが好きです……ずっと、帰りを待っていました……」

「うん……。ぼくも好きだよ。そして、ここに帰って来たいと、ずっと思っていたよ……」

そうして、再び抱きしめ合う。

登校時間ぎりぎりまで、2人はずっとそのままだった……。



唐揚対決から数日が過ぎた、5月も半ばに入った頃。

【心蝕獣】の群れ襲撃の影響で規制されていた、都市外への出向がようやく緩和され、都市内では採れない様々な資源の回収が盛んに行われ始めた。

とはいえ警戒は厳にということで、遠方への索敵に人員がかなり裂かれてしまっている。

これは都市の守りが手薄になるという、必要悪的な弊害となった。

そのため、心皇学園の生徒達にはより一層厳しい指導を、というところで教官たちの気合も入り、常時より厳しい訓練が課されていた。

基本的に学園の生徒たちが戦いに参加することは無いが、非常事態においてはそんな保障は無い。

都市外での迎撃戦に主眼を置いているとはいえ、都市内に侵入され

た場合も考えられている。その際は生徒の動員も、法律上定められている。

守りが薄い今、この前のような群れが万に一つでも再び襲ってきた場合、確実に動員されるであろうことは、心衛軍の誰もが感じていた。

そんな事情のなか、厳しくなった訓練に不満を持つ生徒は少ない。

嘆かわしいが、自分達が戦場に出るのは卒業後だと思っている生徒が多い事この上ない。閃羽にナイトクラスが5人もいることが、生徒たちの危機意識を低下させている要因だからだ。

そんな中、一際厳しい訓練を課されているのが……1年1組第7チームだった……。

「はあ、はあ、はあ、し、しむ……しんじゃう、よお……」

「——っ、——っ、——っ」

あじやらび ほがら
戯陽朗は息も絶え絶え、はりむら そうき
針村槍姫は言葉すら発せない様子。
2人とも訓練所の冷たい床に倒れ、必死に呼吸を繰り返していた。

「じゃあ5分休憩して、もう一度やるよ？」

「お、に……あ、くま……私、たち……御神くん、に、殺され、る……」

「——っ、——っ、——っ、——っ、——っ、——っ、——っ」

そんな2人の抗議もなんのその。

霊は訓練所の壁にある時計を確認し、5分後の時刻を確認。

それから2人に声をかけてやる。

「はいはい。【心蝕獣】に殺されるよりはマシでしょ？ 今死にそうになるほど訓練しておけば、後2週間くらいでルーククラスの実力は付くと思うから、頑張って」

「に、2週間も……しむう……絶対、しむう……」
「……………、……………、……………」

朗と檜姫の疲弊ぶりの原因は、霊が課した訓練によるもの。

その内容は、霊の操る【心力】の糸を巻き付けた球体状的を破壊する、というもの。

この的はダナン・デナンが作った特別製。

外部からの衝撃が一定以上蓄積したときに自壊するので、撃破判定がし易いという特徴がある。

自壊するときはパーツ毎に分解され、すぐに組み立てることができ、再利用しやすいように設計されている。

おまけに、霊の糸が巻き付いているおかげで防御力が増し、滅多にパーツが損傷しないのも有益だ。

無論、霊の糸が受けた衝撃を測定して自壊するので、霊の【心力】そのものを撃ち破る必要も無い。

この訓練用的(Training Target)こと通称トゥレイタ(TraiTa)を、ポーンアイズに見立て、一定以上のダメージを与えて自壊させるのだが……霊が糸で操るものだから、当然反撃してくる。

撒き付けた糸の一部がポーンアイズの触手のように伸び、2人に襲

いかかるのだ。

さすがに顔を狙うようなことはしないが、それ以外では容赦なく触手役となる糸が、鞭打つように打たれるので、当たったらタダでは済まない。

1機だけなら2人で対処できるが、霊は5機を用意し、同時に操って襲いかからせてくる。

ちょっとした気を抜こうものなら、たちまち滅多打ちにされるので、常に全力で動くことを余儀なくされていた。

ちなみに、霊の糸は糸刀から出力されたものを使っている。

1機のトゥレイタに対して6本の心力糸を巻きつけて覆い、その本数が同時に触手役となって攻撃。

無論、威力は加減しているので死ぬことは無い。精々、打撲か……悪くて骨折程度だ。

だが、そんな気遣いをされても、朗と槍姫はまったく有り難くもないわけだが。

「おい霊い。こいつらのペースじゃ2週間は無理だろ？ 死ぬ一手前まで追い詰めねえと、おまえの温ヌルいやり方じゃあ半年は掛かんじゃね？」

そんな訓練にダメ出しをしたのは、背の高い金髪イケメン。しかし口が最悪に悪い男……憤激ふんげき昂こうだった。

「もう、十分、一步手前……しむうよお……」

「……………、……………、……………」

「はあ？　まだ半殺しにも満たってねえよ。照討を見てしろよ」

言われ、2人は倒れたまま視線を遣ると……同じように倒れている
てらうち じゅん
照討準を発見。

ただし、全身ズタボロで出血しており、血だまりの中にいる、という違いがあった。

「……………」

「……………」

あまりの光景に絶句する、朗と槍姫。

これは訓練のはずなのに、なんでそんな大怪我を負っているのか。

答えは簡単だ。準の訓練相手は昂。

ナイトクラスを遥かに凌駕する、ロードクラスが相手だ。

そんな人間に実戦さながらの戦いを挑めば、こうなるのは当然。殺されないだけ上出来。

「おら照討。もう1分は休んだろうが。さっさと【心力】で活性させて治せ。そんで続きだ」

死の一步手前の状態から、1分で回復しろというのは無茶がある。しかし、昂はそれを望んでいる。

無論、霊もそうだ。

ロードクラスの実力を身につけるつもりなら、そのくらいのことを……【心力】による超活性で、すぐ戦闘できるようになってもらわなければ、話にならない。

「言つとくが、弱音吐くようならぶつ殺す。もちろん、孤児院とやらの連中をなっ」

「――っ!!」

「冗談じゃないぜえ？ この都市の連中が束になって掛かってきてもよお、皆殺しにするなんざ朝飯前だからなあ？」

ホラではないし、それをやるのに抵抗がないから性質が悪い。

「ハッ！ そうだそうだっ！ テメエはちゃんと使える駒になってもらわねえとよ、霊を連れ戻すのを我慢してる理由にならねえんだよ!!」

昂の挑発に、準の【心力】が増大する。再び交り合う、弾丸と拳。

ところで、膨大な【心力】による継戦能力の問題は、ある程度改善されていた。

【心器】に冷却機構を組み込み、オーバーヒートによって使えなくなるまでの時間が、大幅に伸びたのだ。

もちろん、まだまだ霊や昂のようなロードクラスの【心力】には耐えられないが。

それでも最大出力は上がった。

霊の見立てでは、際どいがジェネラルクラスの出力ならなんとか耐えられるとのこと。

無論、この冷却機構を糸刀に組み込むため、ダナンが頑張って研究している。早ければ今日中にでも試作品が出来る予定だ。

「さっ、照討くんも頑張ってるし、それに、こころだってずっと頑張ってるよ?」

「うう……っていうか、私たちの相手をしながら、こころちんの訓練もしてるって……」

「本当に、常識はずれなヤツめ……」

実は、こうしている間にも霊はこころの訓練も行っている。

今の霊は両手に糸刀を持つというスタイル。

片方は朗と槍姫の訓練に。

もう片方はこころの訓練に。

朗と槍姫、そして昂と準の4人で、訓練棟の半分を使用。もう半分のスペースをこころが使っていた。

「まだ2人は、トゥレイタを1機も撃破してないのに、こころは2機撃破してるんだよ？　もう少し頑張って」

そう言いながら、離れた所でビット型【心器】を操り、霊が糸で操るトゥレイタを迎撃している、こころに視線を向ける。

こころの訓練内容は、朗や槍姫と同じ。

16機のビットで5機のトゥレイタを相手取り、そろそろ1時間が経過しようとしていた。

先述したように、すでに2機のトゥレイタが撃破されている。しかも、自壊するための耐久設定は、2人が相手をしているトゥレイタの5倍。

いくら霊の意識の半分が、朗と槍姫の2人に割かれているとはいえ、優秀な成績だ。

ポーンアイズに見立てたトゥレイタを、こころのビットがエネルギー弾の弾膜を張って動きを制限。十字火砲線に追い詰め、一斉射。

「いい感じだね、こころ。でも——」

しかし、巧みな霊の操作でほとんどが躲かわされる。

当たりそうなエネルギー弾は、触手に見立てた糸で迎撃。そしてビットに素早く迫り、破壊。

「うっ——」

「これで6機目。残りは10機。ぼくの方は3機残ってる。今のところ、割合的には五分五分かな」

数的にはおおそ3倍の差があった。

互いに撃破した数も半分近い。

だが撃破された数は、こころの方が多い。技量の差が顕著に出ていた。

「戲陽さん、針村さん。魅入ってないで、そろそろ続きするよ？」

「うう……もう勘弁してえ……」

「もう少し、こころの相手に、専念していればいいものを……」

よろよろと立ちあがり、それぞれの【心器】を構える。

このあと、2人はなんとかトゥレイタを1機撃破する事が出来た。ただし、立ち上がれないほど消耗。

準は瀕死状態にまで追い詰められたが、【心力】で身体能力を活性

させたので重傷のレベルにまで抑えた。

これが【心力】のコントロールをマスターする第一歩なので、順調といえは順調だ。

しかし、もしこれが本当の戦いだったら……守れなかったということ。

瀕死状態に追い詰められるような実戦を何度も経験し、その都度、自分の弱さを認識させることで、ただでさえ狂的な心をさらに狂わせる。

そうなれば比例して【心力】も増大し、さらに強くなることができ
る。

荒療治ではあるが、これがもっとも効率的な訓練方法なのだ。霊たちにとっては。一般人がやったら死ぬが。

「よし、こころ。今日はここまでにしよう」

「は、はい」

こころの方は、トゥレイタをさらに1機撃破した。

が、残るビットは3機になっていた。後半で集中力が乱れ、立て続けに4機撃墜され、その後はずっと劣勢に立たされたのだ。

こころの【心力】は朗や槍姫の2人に比べて高く、少なくともビシヨップクラス相当の力はある。だから持久力が問題として、今後の課題になるだろう。

操るビットの数が増えれば、それだけ負担も増える。

だから今までは、16機のうち、12機を主力に。4機をシールド兼予備戦力として残す、というスタイルをとっていた。

だから霊は、敢えてそのスタイルでの訓練をさせず、フル稼働によるビットの操作をやらせる。これで持久力の問題を解決しようとしているのだ。

「おゝい、御神くゝん、改良型の【心器】が出来たんだなゝゝゝ」
「ダナン先輩？」

では解散、しようとしたところで、ダナンがやってきた。

【心器】調整用の機器を乗せた荷台を押し、霊たちのもとへ。

「今、大丈夫なんだなゝ？」

「ええ、ちょうど良いタイミングでした。それで、できましたか？」

「なんとか試作品が出来たんだなゝ。これが【糸刀Ver. 2.0】、なんだなゝ」

荷台に積まれていた箱から、刀身の無い柄だけの刀……糸刀を出す。

見た目は以前のものとあまり変わらない。

ただ、持ってみて思ったことは……。

「冷んやりしてますね」

「エネルギーに反応して冷却能力を発揮する【クーラル鉱石】を素材としたものなんだなゝ」。

御神くんの強過ぎる【心力】が【クーラル鉱石】の冷却能力を刺激し、【心経回路】の熱暴走を抑制するんだなゝ。

このおかげで【心経回路】の本数は1万本と、大幅な増設に成功したんだゝ」

【クーラル鉱石】。

何かしらのエネルギー（熱）を加えられると、温度が下がる特性を持つもの。

加工方法によっては常温でも零下100℃近い温度を維持する。

出力エネルギーが膨大になる霊たちロードクラスの【心力】は、本来は熱暴走を起こさない【心器】を容易に自壊させてしまう。

そこで考えたのが、先述したように【心器】に冷却機構を組み込むこと。

まず準の双銃型【心器】に組み込み、そこから得られたノウハウを糸刀に応用。

出来た試作品が【糸刀Ver. 2.0】である。

柄の内壁、および【CMPコア】と【心経回路】の周辺に、加工した【クーラル鉱石】を包み重ねるように設置。

発する熱に反応した【クーラル鉱石】が冷却機能を発揮。

温度上昇を抑え、自壊するまでの時間を引き延ばすことに成功した。

「なるほど……それはかなり、助かります」

「ただし、【心経回路】自体の強度は変わっていないから、1本の回路で賄える心力系は、2本までが限界なんだなあ」

回路の強化も検討しているが、現状ではまだ難しい。

オリジナルの糸刀は、回路1本で数百〜数千の心力系を賄えるので、まだまだ技術的な問題が山積していた。

「それで、回路1本あたりの出力が、どの程度まで耐えられるかの実験をしてみたいんだけど、明日にするかなあ？」

「いえ、今でも大丈夫ですよ？　すぐに出来ますか？」

「大丈夫なんだなあ」

ダナンが機器を操作し、リアルタイムで【糸刀Ver. 2.0】の測定ができるように準備する。

一方、霊はみんなから離れつつ、昂に話しかけた。

「昂、ちょっと実験に付き合って」

「いいぜ。1万本ってことは……やれんのか？」

「たぶんね」

曖昧なやり取りだが、2人には分かっている。

ダナンの準備が完了をしたの皮切りに、模擬戦開始。

初撃から1万本の糸を射出。

1本1本が複雑にうねり、昂に襲いかかる。

だが、それらは昂の拳から発せられる衝撃波によって散らされた。

いきなり1万本を出力したのは、単なる慣らし。今まで千本ちよつとの数だったため、感覚を確かめたのだ。

「すごっ……っていうか、何をやってるのか分かんないよ……」

「ああ……これでもまだ、御神の力のすべてが発揮できるわけではないんだろう？ とことん常識はずれだな……」

朗と槍姫がそれぞれに感想を述べている間にも、徐々に戦闘のペースが早くなる。

比例して、ダナンの計測機器に示される【心力】の数値も上がっていった。

「うんうん。回路1本あたりの出力、まえのバージョンよりも上がってるんだなあ」

満足そうに呟くダナン。

とりあえず、いきなりオーバーヒートするような事態は無さそうだが。もつとも、まだまだ霊は加減している状態なので、油断はできないが。

「昂、そろそろ次の攻撃……いくよ?」

「ハッ! きやがれ!!」

慣らしは終わり。そろそろ本格的に試す。

それが昂にも伝わったことを確認し、霊は接近戦を挑んだ。

糸刀の心力糸を操り、ある形態に束ねる。

その形態は丸みを帯びており、その状態で昂に振り下ろした。

それをガントレット型【殺神器】の拳で迎え撃つ。衝突の余波が嵐となって吹き荒れた。

「な、なにアレ?」

「たぶん、糸を収束して鈍器状に形作っただんだなあ。出力できる糸が増えたことで、ああいうことも出来るようになったんだなあ」

出力できる心力糸が増えた恩恵は、手数が増えるだけではない。

束ねる心力糸の本数が多くなれば、密度も多くなり、鈍器のような強度が求められる形状も作り出すことができた。

しかも、鈍器状に形作られた心力糸は、変幻自在にその形を変え、昂を巧みに攻めていた。

「鈍器だけでなく、刀や槍……それに今のは、ハサミ、か？ なんでもありだな……」

打ち下ろした鈍器が、衝突と同時に姿を、刀に変える。

かと思いきや、今度は槍に形を変えて突きを繰り出す。避ける昂。それでも突きが繰り返される。だからガントレットの甲で止める。

が、槍状に束ねられた心力糸が2つに分かれ、刃状に変化。挟撃する様は、まさにハサミだった。

「ハッハッハッ！ やっぱおまえは、そういうエグい戦い方をしてねえと詰まんねえよなあ！！」

跳び上がることで辛うじて回避。

危ういところであったのに、昂の表情は喜色に満ちていた。

「武器の形状を自在に変えるだけでなく、その形状のまま、数本の糸を解いて奇襲や追撃に使えるのか……」

さらに戦闘は続く。

武器状に束ねた心力糸が受け止められても、何気に数本の糸が解れ、次の瞬間には昂に襲いかかっていた。

無理に力押しすることはせず距離を取り、拳から【心力】による拳圧弾を放って牽制。

「つばぜり合いの時にやられたら、距離をとるとかしないと、あっという間に糸の餌食だね……」

「実際に憤激も、必要以上の近接戦闘は避けているようだからな」

そんな考察をしつつ、霊と昂の応酬を見届ける。

この模擬戦は1時間して幕を閉じた。

熱くなった昂に対処するため、徐々に【心力】の出力を上げた結果、ダナンからストップが掛かったためだ。

昂は随分と不満を口にしていたが、ダナンとして満足のいく結果が出たので、2人の表情は対照的だ。

今回のデータから改善点を洗い出し、さらなる強化を目指す。

冷却機構の見直し、【心経回路】の小型化・増設の検討、継戦能力の増加、等々……。

当初予定していた以外の出来事はあったが、霊と昂以外の全員がくたくたになっていたのは、予定通りだった。

第33話【二万本の糸】（後書き）

- 御神靈——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、膨大な【心力】を有する謎の少年。
- 純愛こころ——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。
- 針村槍姫——背の高いクールな少女。こころの親友。
- 戯陽朗——いつも元気で明るい少女。こころの親友。
- 輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー。
- 憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。
- 照討準——小柄で気弱な男子。孤児院の皆を何よりも大切に行っている。
- ダナン・デナン——心理工学科のぽっちゃり系3年生。【心器】に関する技術はなかなかのもの。

第34話【克服、強制改善、驚愕】（前書き）

お待たせしました。更新です。

なんというか、難産？

文字が打てなかった……精神的に。不調です。

だからかですかね……一回は書きあげた34話を消去し、お話を変えたら予想以上に遅くなってしまいました。

設定通りなんですけど、進めるためのお話が不満。部品交換を行った、といえば分かり易いでしょうか。

上手く説明できませんが、察してください＞（￣）＜

第34話【克服、強制改善、驚愕】

「よお霊い。待ってたぜ……」

時刻は夜。

場所は、都市全体覆う膜状エネルギーシールドを発生させる、巨大な時計塔。その屋上。

そこで彼……ふんげき憤激昂は待っていた。
みかみくしび戦友、御神霊が来るのを。

「一体どうしたの？　こんな時間にさ」
「なあに。ちょっと話がしたくてな……」

「照討くんのこと？」
「あいつのことも、だ。まあ、座って飲めや」

投げられた缶コーヒーを事も無げに受け取り、霊は昂の隣に腰を下ろす。

互いに制服姿。
夜の街並みを見下ろしながらも、しかし2人の心に思うところはない。ただの景色だ。

ところで、時計塔の屋上は、柵がない。なので部外者立ち入り禁止。柵がないので危険だし、高所でもあるため突風が吹けば、最悪地面にたたき落とされるかもしれない。

もっとも、人外なこの2人であれば無事に着地することができる。また、立ち入り禁止であろうとも、【心力】による身体能力強化で時計塔の階段を使わず、一つ跳びで来れるから意味を成さない。

「照討くんは、問題は無いはずだね」

「ああ。オレの打撃に、一々気絶しなくなったし、【心力】の質量、ともに問題ない。あとはコントロールをマスターすれば、より効率的に使えるだろうよ」

「針村さんと戲陽さんも、ポーンクラスに設定したトゥレイタを、短時間で壊せるようになってきた。そろそろルーククラスに設定しようかと思うんだ」

「その前に、実戦をやらせろよ。じゃねえと詰まるぞ？ ルークから先はな」

「そうだねえ……まあ、それは追々考えるよ。それで、ここらだね。上達が早いし、かなりビットの全力稼働に慣れて来たみたいだ。【心力】の持久力は確実に上がってる。ビットを都市の中から遠隔操作して、外を探索させようかなって考えてる。それでビシヨップクラスを倒せるようになれば、安心かな」

各自のこれからの事をつらつらと述べ、思考を整理していく。

やることは決まっているので、後はどうやって効率よく、霊の望む領域まで引き上げるか。あまり無茶をさせても怪我をするだけだし、そうなっては周りがうるさくなるだろう。

特に、第7チームの半数はFランク。少しの事件を、鬼の首を取ったように騒ぎ出す連中が出てくるのは、間違いないのだから。

だが、昂が話したかったこと……聞きたかったことは、それではなかった。

「おい霊い……嘘こいてんじゃねえよ。純愛じゅんないの【心力】……ありゃあ、本来のあいつの力じゃないだろ？」

昂が聞きたかったこと。それはこころの【心力】について。付け加えるなら、【封印されている心力】についてだ。

「あいつはもっと大きな【心力】を引き出せるはずだ。なのに出来てねえ。何故だ？ あいつに何らかの封印を施してるのは分かるが、なんでそんな面倒くせえこととしてやがんだ？」

霊たちを強襲したあの日。

どうしても気になったのは、こころの【心力】。彼女から感じる【心力】は、もっと大きなものはず。なのに、実際に使っている力はずっと小さい。

どうしてもそれが聞きたかった。
神を殺せる手駒を増やすために。

「聞いて、どうするつもり？」

だが、霊にその気は無い。

訓練させているのはあくまで、何らかの理由で自分が助力できなかった場合、最低限生き延びる力を付けさせるためだ。

「あの封印……解くわけにはいかねえのかよ」
「いかない」

即答。しかも短い。

これ以上の詮索はするなという意味の表れだが、それで納得できるはずもない。

「ざけんなよ？　せめて理由くらい説明しろや。まさかテメエの我儘ってわけじゃないだろうなゴルァ」

「あの封印は、おじいちゃんが掛けたもの。だから、一度解いたらもう二度と封印できない。補強することはできても、ね」

「封印している理由を教えろってんだよ。話はぐらかそうとしてんじゃねえぞゴルァ」

コーヒーを一口飲んでから、鋭い目つきで詰め寄る昂。

殺気が針のように撒き散らされているが、霊は動じていなかった。

「こころを、参加させるつもりはないよ」

「戦力は一人でも多い方がいいに決まってるだろうが。ここの連中を見てみるよ。ナイトクラスっていう雑魚い存在に安心しきってる、ヌル過ぎる連中だぜ？　腹ん中じゃあ、ランクを絶対として、現実を見ようとしないう連中の、なんと多い事か。そんな奴らじゃ、駒としての価値すらねえよ」

「……それはぼくも同意してる。けれど、こころはダメだ。なぜなら、封印している心の鍵を解けば……記憶が呼び起こされてしまう。そうなれば、戦うどころか、日常生活にも支障が出てしまうかもしれない」

「それは、つまり、正気を失うってことか？　それほどのトラウマがあったのかよ？」

「おじいちゃんはそう判断した。だから封印した。心を……それを刺激する記憶をね」

「……ちっ。じゃあ何か？ 純愛はヒビ割れた玉石ってか？ 砕けないよう、おまえが守ってるってことか」

昂は缶を傾け、最後まで飲みほし、空になった缶を握りつぶし、続ける。

「けどよ、そういうのって克服させるもんだろ？ 治させるもんだろ？ じゃねえと生きていけねえ。

わかってんだろ？ テメエの口ぶりだと、【熾天使】はここに現れる。そうになったら、この都市が残るって保障は無え。生かしてえんなら、そのトラウマを克服させるようにしろよ」

言い捨て、昂は時計塔から跳び下りた。音も無く着地した昂は、そのまま夜の街中へと消えていった。

そして、残された霊は、まだ口を付けていなかった缶コーヒーを開け、一口飲んでから呟いた。

「……例えヒビだらけでも、砕け散ってしまうよりは遥かにマシだよ」

封印が弱まっただけで、こころは取り乱した。完全に解けてしまったら、廃人になってしまうかもしれない。それは避けたい。

【あの時】に壊れてしまったのは、自分一人だけで十分なのだから。

「それにしても、苦い……」

昂からもらった、ブラック無糖のコーヒーの苦さが、やけに口の中に染みた。



自宅のマンションに帰ってきた霊は、玄関のドアの前で思いもよらぬ人物と遭遇した。

「……こころ？」

「あ……霊くん……」

その人物とは、こころ。

こんな夜遅くにどうしたのか、と聞くと、今日使った弁当箱を返してもらっていなかったたので、取りに来たとのこと。

冷却機構搭載型【心器】の調整に携わることになったので、前の糸刀のバージョン時と同じ、こころとは別行動することになった。その所為で、ここしばらくデフォルトになっていた、純愛家へ寄る、という行動が無くなり、本来下校する前に弁当箱を渡すはずが、忘れていたのだ。

「だったら、連絡してくれればいいのに……って、あ。そうか……ケータイ、置いてきちゃったんだ」

都市内限定で使える携帯電話。

霊も閃羽に帰って来たときに手に入れていたが、悲しいかな。あまり使う機会がない。

ぶっちゃけ、登録しているのは第7チームの面々以外に、きかどがい輝角凱、
ダナン・デナンのみ。

Fランクという事でクラスに馴染めない霊は、アドレスを交換する
ような友達がいらないのだ。

「学校では持っていましたよね？ どこかに行っていたんですか？」
「ちよっと、昂と話をするために出かけてたんだ」
「……その、どういう、話ですか？」

まさか、ここを出ていく話ではないか？
そう不安気に聞いてくるころに対し、霊は苦笑しながら、大丈
夫と応えた。

「そうじゃないよ。みんなの訓練に関すること。昂はあれでも、【
心蝕獣】との戦いに熱心だからね」

すべては、復讐のために。
そんな不要な言葉が頭に浮かんだが、不要なものとして飲み込ん
だ。

「それよりこころ。こんな夜遅い時間に、1人で来たの？」
「あ、はい。ケータイが繋がらなかったから、心配になって……」
「……はあ。不携帯ケータイにしていたばくも悪いけど、危ないから1人で
来ちゃだめだ」

少しばかりキツく叱ろうか、と思った霊だが、何だかんだでここ
ろに甘いため、軽めの注意で済みます。自分にも非がある、というこ
とをさり気無く混ぜるあたり、彼女だけを悪者にしないための配慮
が垣間見える。

が、これは典型的な甘やかすタイプの言だったりする。溺愛していると言っても、過言ではないだろう。

「ちょっと待ってて。すぐに持ってくるから。それから送るよ」

「あ、霊くん。夕御飯は、もう食べましたか？」

「いや、まだだけど？」

「なら、今から私が作ります。上がってもいいですか？」

「いいけど……作るっていつでも、何もないよ？」

「？ 材料がないなら、今から買いに行きましようか？」

「いや、そうじゃなくて。作るための器具が無いんだよ」

「え……あの、フライパンとか、お鍋とか、ですか？」

そこで、はたと思い至る。

霊は、基本的に生で食す。生肉だろうが生野菜だろうが、調理せずに食べてしまう。しかも最近まで、純愛家の夕飯にお世話になりっぱなしだった所為で、調理器具をまったく用意していないのだ。

それでも、休日の朝・昼御飯は自分で用意していたはずだが……どうやら、夕飯以外はまったく調理せず、の食生活を送っていたらしい。

そこまで考えると、こころが不穏な気配を発し始めた。

「ふ……ふふふっ……うふふふふっ……」

「え？ あの……こころ、さん？」

その気配があまりにも禍々しくて、霊はここから一步、後退した。

「あれだけ、あれだけ料理しなさいって言ったのに、まさか器具すら用意してないなんて思いませんでした……」

「ううっ……あの、その、忙しかったし、お弁当や夕飯とか、用意してもらいっぱなしだったし……必要なかったというか……」

「休みの日とかあ、どうしてたんですかあ？」

「……………そのまま、いただいてました」

申し訳なさそうに言う霊。だが、まったく反省の色が見られないその言動に、ついにこころがキレてしまった。

「……………っ!! 霊くんっ!!!!」

「はっ、はいいいいいいっ!!」

こころの雷に打たれ、反省を、心の底からの反省を余儀なくされ、ただひたすらに小さくなっていく霊だった。



こころの心の籠った説教のあと、霊は彼女と一緒に、近くの雑貨店に来ていた。

調理器具一式を買い揃えるためだ。

もう夜も遅いのだし……という霊の言葉は聞き入れられなかった。一刻も早く、霊の食生活を改善させるため、こころが強引に霊を連れて来たのである。

「フライパンと、お鍋と、ヤカン……あと包丁に、まな板……それから――」

次から次へと、器具をカートに放り込むところ。

ここに来る前に、霊の部屋の台所を見せてもらったのだが、何もなかった。本当に、ただ水道が通っているだけの場所。しかも使った形跡すらないのだから驚きだ。

飲食その他すべて、加工食品およびペットボトルor直飲みで済ませていた証拠であり、使用済みのものはすべてゴミ袋行きという生活をしていたのだ。

「……ごめんね、こころ。手間を掛けさせて」

霊自身、本当に反省はしている。

反省するくらいなら、最初からこころの言う通り、器具一式を形だけでも揃えればいいという話になるが。

形だけとはいえ、あれば使うようになるのだから。

だが、霊は食物の摂取に調理を必要としない。それもまったく。獣が獲物を食すのに調理などしないのと同じ。

彼は、【心力】の体内活性で有害物を除去・駆逐できる。そのため生肉に火を通す必要はないし、生水だって飲める。

調理が無意味、とまではいえないが、それに限りなく近い行為でもあるため、わざわざやろうと思わないのだ。

これで体調を崩すことがない……とはいえ、あまりに常軌を逸し

た生活であることは、誰の目にも明らかだ。ただでさえFランクと
いうことで蔑まれているのに、自らそれを増長させるようなことを
している。

しかも、それをまったく本人が気にしていないのだから性質が悪
い。

彼のランクを、こころは気にしない。しかし悪く言われるのは我
慢ならない。だから上辺だけでも、評価を得られるところはしっか
り得ないといけない。得させなければいけない。

だから、こころは一生懸命だった。

「気にしないでください。私が好きでやってることですから」
「……うん。ありがとう」

ちなみに、費用はすべて霊が出す。

これだけのモノを一度に揃えようとすると、高校生という身分で
は難しいが、生憎と彼は普通の高校生ではない。

そもそも、彼は高校生でいる必要など無い。こころが高校生だか
ら……【心兵】を育成する教育機関に通っているから、だから彼女
をそばで守るために、心皇学園に通っているだけ。

費用の捻出など、閃羽との契約を祖父の代から【死天使】として
受け継いでいる彼には雑作も無い。

おまけに、【心蝕獣】の群れを殲滅してもいる。公に出せないた
め秘密裏にされているが、莫大な報奨金も裏から得ているのだ。

彼が天涯孤独であつてもそれなりの暮らしをしていけるのは、そ
のためだった。

「んん？ おお！ 御神とその嫁ではないか！！」

そうやって買い物をしていると、大きな声が霊たちに掛けられた。振り返って声の主を探すと、見知った顔……輝角凱きかくが手を振っていた。いつもの姿……黒いジャージ姿で赤髪の、野性的な先輩。

「凱先輩……」

「こんなところで出会うとは、奇遇だな。む？ 随分と買い込んでおるな。同棲の準備でもしおるのか？ はっはっはっ」

霊が押すカートの中身を見て、そんな推理を大声で言う凱。

周りの視線が気になって、しかも発言内容が内容なだけに、顔を真っ赤にして、こころが否定する。

「ちちち、違いますっ！ 霊くんの部屋に調理器具一切が無いので、買い揃えに來ただけですっ！！」

「ほおほお、なるほど。つまり通い妻という奴か。よかったな御神。これで貴様も少しは、人間的な食生活を送らされるなっ」

そう言ってまた、豪快に笑いだす凱。

何気にまだ、醤油味＋レモン汁の唐揚げを選ばなかったことを、根に持っているのである。

しかしその嫌みが、攻撃目標にまったく効いていないのは、霊の所為か。それとも凱の所為か。ただ一つ言えるのは、その嫌みは誰かを追い詰めるものではなかった、ということだろう。

「か、通い妻……——いいかも」

最後はボソリ、と誰にも聞こえない程度だった。

追い詰めはしないが、後押しすることになっている。が、嫌みを言った本人も、言われた本人も気付いていなかったりする。

「料理しないことが人間的じゃないとは思わないんですけど……。ところで先輩。今日はどうしてここに？」

「ああ。実は俺様が愛用していたマグカップが割れてしまってた。新しいのを、連れと一緒に買いに来たのだ」

「連れ？　先輩も誰かと一緒に――」

霊の問いかけは、途中で掻き消された。

凱の背後から、女性が声をかけてきたのだ。

「ちょっと凱！　いきなり居なくなっただろうよ！！」

カートを押しながらやってくる、黒いパーカーを羽織っている若い女性。

肩口で切りそろえた、少し赤味のある髪。猫を連想させる切れ長の目。それでいて、どこか活動的な印象を受ける口調。年の頃は……凱と同じくらいだろうか。

「おお、すまんすまん！　後輩を見かけたのでつい、な」

呼ばれた凱は、その女性に向き直り、手を上げながら謝罪する。女性が近くまでくると、霊たちに向き直り、紹介を始めた。

「紹介しよう。探索部の後輩で有望株の、御神霊とその嫁、こころだ」

「えっと、凱先輩には、いつもお世話になってます。あと、凱先輩。こころはまだ嫁じゃありませんから」

「む……？ ふっ、そういえばそうだったな。すまんすまん。という訳で、だ。『まだ』嫁じゃない、純愛じゅんないころだ」

何か含んだ言い方だが、特に指摘することもなく紹介が続けられる。というか、補足される。

そんないい加減な紹介をされ、女性は多分に呆れの籠った視線を凱にむけた。

「まったく。アナタはいつも、そうやって後輩をからかうんだから……。ごめんなさいね。この人、自分が感じた直感とか疑いもせずに、ズバズバ言っちゃう人だから」

「は、はあ……ええっと……」

「あ、私は輝角真輝まきっていうの。よろしくね」

自己紹介する女性……輝角真輝。

霊とところ、2人に手を差し出し、握手を求める。その握手に応えながらも、2人は少し戸惑う様子を見せていた。

「あ、あの、お二人は、御兄妹……という訳ではないですよ、ね？」

こころが遠慮がちに聞いたのも、無理はない。

苗字が同じだけの間柄、ということもあるだろうし、何より2人は似ていない。

そもそも、なぜ似ていないのに兄妹なのかと聞いたか、というところ……真輝という女性のお腹が原因だ。そう……その膨らみ方は、妊娠しているのだと、一目でわかるもの。

だから、戸惑っていた。

「ああ、このお腹の所為でよく勘違いされるんだけど、私の苗字が凱と一緒になのは――」

「俺様の妻だからだ」

真輝の言葉に被せるように、凱が、自信満々に、発言した。
無論、爆弾発言を、だ。

「ちなみに凱と同じ年よ。18歳で、心皇学園に通う学生。つまり、学生婚っていうやつね。籍は入れてるから」

「え……えええええっ!?!」

その爆弾の被害を、さらに拡大させるような真輝の発言に、こころが驚きの声をあげる。

彼女のリアクションが面白過ぎて、真輝も凱も、悪戯が成功した子供のようにならった。

無論、そんな大声を上げたところは、周りから注目される羽目になるのだが、この時はそれに気付く余裕がなかったのであった……。

第34話【克服、強制改善、驚愕】（後書き）

●御神霊——主人公。Fランクの落ち零れとされているが、

膨大な【心力】を有する謎の少年。

●純愛——霊の美少女幼馴染。数少ない【感応者】。

●憤激昂——霊を連れ戻しにやってきた男。イケメンだが口が悪い。

●輝角凱——戦闘学科の3年生。野生児的でトラブルメーカー
1。

●輝角真輝——戦闘学科の3年生にして、凱の妻。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3481t/>

ココロストライク

2011年11月30日06時47分発行